# 九州横断自動車道関係
# 埋蔵文化財調査報告
## —18—

朝倉郡朝倉町所在上の原遺跡の調査　Ⅰ

1990

福岡県教育委員会

# 九州横断自動車道関係
# 埋蔵文化財調査報告

## —18—

朝倉郡朝倉町所在上の原遺跡の調査　I

# 序

本書は，福岡県教育委員会が日本道路公団から委託を受けて，昭和54年度から実施している九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の記録であります。

今回の報告書は，昭和60年度に調査した朝倉郡朝倉町上の原遺跡の第１冊目で，今後もその調査結果を順次報告していく予定であります。

発掘調査の報告としては，満足のいくものではありませんが，本書を通して地域の文化財ならびに歴史に対する認識と理解を深める一助になれば幸いです。

なお，発掘調査にあたり数々の御指導・御協力を頂いた地元の方々をはじめ，関係各位に対して心から感謝申し上げます。

平成２年３月31日

福岡県教育委員会

教育長　御手洗　康

# 例　言

1．本書は，昭和60年度に福岡県教育委員会が，日本道路公団から委託を受けて，九州横断自動車道建設に伴い破壊される遺跡の発掘調査を実施した上の原遺跡の第１冊目の報告書で，九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書の第18冊目にあたる。

2．遺構の実測は，井上裕弘・木村幾多郎が主にあたり，高田一弘・平嶋文博・田中康信・中村光恵・渡辺輝子・後藤カミヨ・矢野静子・牟田サエ子・萩原瑞江氏の協力を得た。写真撮影は井上と木村が行った。

3．出土遺物の整理は，岩瀬正信氏の指導のもとに九州歴史資料館と文化課甘木発掘調査事務所で行った。また，鉄器の処理は九州歴史資料館の横田義章氏が行った。

4．出土遺物の写真撮影は，九州歴史資料館石丸洋・矢野明美・須原悦子氏が行った。実測は井上・木村の他に，文化課甘木発掘調査事務所の松嶋邦子・原田和枝・高瀬照美・渡辺輝子氏の多大な協力を得た。

5．製図は井上・木村の他に,文化課甘木調査事務所の塩足里美氏の協力を得た。

6．貯蔵穴番号については，報告時に変更したため，調査時の番号との対照は表１～４に示した。

7．本書の執筆は，井上と木村が分担し，それぞれ文末に記した。

8．本書の編集は，井上が行った。

# 本　文　目　次

上の原遺跡の貯蔵穴群の調査

Ⅰ　調査の経過 …… (井上) …… 1

Ⅱ　位置と環境 …… (井上) …… 6

Ⅲ　貯蔵穴と出土遺物 …… (井上・木村) …… 9

Ⅳ　おわりに …… 162

1．貯蔵穴について …… (木村) ……162

2．貯蔵穴出土の土器群について …… (井上) ……169

3．円盤状土器片について …… (木村) ……171

4．イイダコ壺形土製品 …… (木村) ……173

# 図　版　目　次

本文対照頁


図　版　1　(1)　上の原遺跡周辺航空写真……1
　　(2)　上の原遺跡貯蔵穴群全景気球写真……9
図　版　2　(1)　1～6号貯蔵穴群全景（北西から）……9
　　(2)　1号貯蔵穴（右）・土壙（北から）……9
図　版　3　(1)　3号貯蔵穴（南西から）……13
　　(2)　4号貯蔵穴（南西から）……17
図　版　4　(1)　5号貯蔵穴（南西から）……17
　　(2)　6号貯蔵穴（南西から）……17
図　版　5　(1)　8～24号貯蔵穴群全景（北から）……21
　　(2)　13～20号貯蔵穴群（北から）……24
図　版　6　(1)　13号貯蔵穴（北から）……24
　　(2)　14号貯蔵穴（北から）……26
図　版　7　(1)　17号貯蔵穴（東から）……26
　　(2)　14～20号貯蔵穴群（北から）……26
図　版　8　(1)　19号貯蔵穴（東から）……28
　　(2)　20～24号貯蔵穴群（北東から）……29
図　版　9　(1)　21号貯蔵穴（西から）……29
　　(2)　22～24号貯蔵穴群（北から）……29
図　版　10　(1)　26号貯蔵穴（北から）……32
　　(2)　27号貯蔵穴（北から）……36
図　版　11　(1)　28号貯蔵穴（南東から）……39
　　(2)　28号貯蔵穴内土器出土状態（北から）……39
図　版　12　(1)　29号貯蔵穴（北から）……42
　　(2)　30号貯蔵穴（南から）……45
図　版　13　(1)　31・32号貯蔵穴（北から）……45
　　(2)　33号貯蔵穴（北から）……47
図　版　14　(1)　35号貯蔵穴（南から）……50
　　(2)　36号貯蔵穴（北から）……53
図　版　15　(1)　37号貯蔵穴（東から）……53
　　(2)　40号貯蔵穴（北東から）……56

図　版　16　(1)　42～55号貯蔵穴群（北東から）……57
(2)　42～44号貯蔵穴群（北から）……57
図　版　17　(1)　44号貯蔵穴（北東から）……59
(2)　44～55号貯蔵穴群（北東から）……59
図　版　18　(1)　46号貯蔵穴（東から）……63
(2)　47号貯蔵穴（東から）……63
図　版　19　(1)　49・50号貯蔵穴（北東から）……66
(2)　51・52・54号貯蔵穴群（北東から）……66
図　版　20　(1)　51・52号貯蔵穴（北から）……66
(2)　49～51・54・55号貯蔵穴群（北から）……66
図　版　21　(1)　54号貯蔵穴（北から）……68
(2)　50～57号貯蔵穴群（北から）……70
図　版　22　(1)　56・57号貯蔵穴（北東から）……70
(2)　62号貯蔵穴（東から）……75
図　版　23　(1)　63号貯蔵穴（東から）……78
(2)　65号貯蔵穴（北から）……79
図　版　24　(1)　66・67号貯蔵穴（東から）……79
(2)　68・69号貯蔵穴と６・16号竪穴（西から）……81
図　版　25　(1)　70号貯蔵穴（北から）……84
(2)　71号貯蔵穴（北から）……84
図　版　26　(1)　72号貯蔵穴（北東から）……84
(2)　72号貯蔵穴内土器出土状態（西から）……84
図　版　27　(1)　73号貯蔵穴（北から）……85
(2)　74～77号貯蔵穴群（北から）……87
図　版　28　(1)　78～80号貯蔵穴群（北東から）……93
(2)　81号貯蔵穴（北東から）……98
図　版　29　(1)　84号貯蔵穴（東から）……101
(2)　84号貯蔵穴内土器出土状態（北から）……101
図　版　30　(1)　85号貯蔵穴（北西から）……101
(2)　88・89号貯蔵穴と15号土壙（南から）……104
図　版　31　(1)　90号貯蔵穴（東から）……104
(2)　91号貯蔵穴（東から）……104
図　版　32　(1)　93号貯蔵穴（東から）……106

(2) 94・95号貯蔵穴（北から）……106
図 版 33 (1) 96号貯蔵穴（北から）……109
(2) 97・98号貯蔵穴（北から）……112
図 版 34 (1) 99号貯蔵穴（北から）……112
(2) 100号貯蔵穴（東から）……112
図 版 35 (1) 101～104号貯蔵穴群（東から）……115
(2) 101号貯蔵穴（南から）……115
図 版 36 (1) 106号貯蔵穴（北東から）……119
(2) 107号貯蔵穴（北東から）……121
図 版 37 (1) 108号貯蔵穴（北から）……122
(2) 113号貯蔵穴（北から）……124
図 版 38 110～133号貯蔵穴群全景（北西から）……124
図 版 39 (1) 123～125号貯蔵穴群と190号住居跡（東から）……138
(2) 128～132号貯蔵穴群（北東から）……148
図 版 40 (1) 138号貯蔵穴（南から）……157
(2) 139号貯蔵穴（北から）……157
図 版 41 貯蔵穴出土土器 1……11
図 版 42 貯蔵穴出土土器 2……64
図 版 43 貯蔵穴出土土器 3……88
図 版 44 貯蔵穴出土土器 4……100
図 版 45 貯蔵穴出土土器 5……113
図 版 46 貯蔵穴出土土器 6……129
図 版 47 貯蔵穴出土土器 7……139
図 版 48 (1) 貯蔵穴出土土器 8……156
(2) 貯蔵穴出土軽石……53
図 版 49 (1) 貯蔵穴出土石器 1……20
(2) 貯蔵穴出土石器 2……40
図 版 50 (1) 貯蔵穴出土土製品 1……52
(2) 貯蔵穴出土土器 9……52
図 版 51 (1) 貯蔵穴出土土製品 2……35
(2) 貯蔵穴出土土製品 3……35
図 版 52 (1) 貯蔵穴出土土製品 4……15
(2) 貯蔵穴出土土製品 5……16

図　版　53　(1)　貯蔵穴出土鉄器……78
(2)　縄文土器……25

# 挿　図　目　次

第 1 図　九州横断自動車道路線図……2
第 2 図　上の原遺跡とその周辺地形図（1/10,000）……3
第 3 図　上の原遺跡とその周辺遺跡分布図（1/50,000）……6
第 4 図　上の原遺跡調査地区と付近地形図（1/3,000）……7
第 5 図　貯蔵穴配置図（1/300）……9
第 6 図　1～3号貯蔵穴実測図（1/40）……10
第 7 図　1・2号貯蔵穴出土土器実測図（1/4）……11
第 8 図　3号貯蔵穴出土土器実測図（1/4）……12
第 9 図　3・4号貯蔵穴出土土器実測図（1/4）……14
第 10 図　貯蔵穴出土土製品実測図1（1/2）……15
第 11 図　貯蔵穴出土土製品実測図2（1/2）……16
第 12 図　4～8号貯蔵穴実測図（1/40）……18
第 13 図　5～9号貯蔵穴出土土器実測図（1/4）……19
第 14 図　貯蔵穴出土石器実測図1（1/2）……20
第 15 図　9～13号貯蔵穴実測図（1/40）……22
第 16 図　10～15・17～19号貯蔵穴出土土器実測図（1/4）……23
第 17 図　貯蔵穴出土縄文土器実測図（1/2・1/3）……25
第 18 図　14～18号貯蔵穴実測図（1/40）……27
第 19 図　19～21号貯蔵穴実測図（1/40）……28
第 20 図　22～25号貯蔵穴実測図（1/40）……30
第 21 図　21・23～25号貯蔵穴出土土器実測図（1/4）……31
第 22 図　26～28号貯蔵穴実測図（1/40）……33
第 23 図　26号貯蔵穴出土土器実測図（1/4）……34
第 24 図　貯蔵穴出土土製品実測図3（1/2）……35
第 25 図　27号貯蔵穴出土土器実測図1（1/4）……37
第 26 図　27号貯蔵穴出土土器実測図2（1/4）……38

第 27 図　貯蔵穴出土石器実測図２（1/3）……40
第 28 図　28号貯蔵穴出土土器実測図１（1/4）……41
第 29 図　28号貯蔵穴出土土器実測図２（1/4）……42
第 30 図　29～32号貯蔵穴実測図（1/40）……43
第 31 図　29･30号貯蔵穴出土土器実測図（1/4）……44
第 32 図　32号貯蔵穴出土土器実測図（1/4）……46
第 33 図　32～34号貯蔵穴出土土器実測図（1/4）……48
第 34 図　33～36号貯蔵穴実測図（1/40）……49
第 35 図　35～37号貯蔵穴出土土器実測図（1/4）……51
第 36 図　貯蔵穴出土土製品実測図４（1/2・1/3）……52
第 37 図　37～40号貯蔵穴実測図（1/40）……54
第 38 図　38～43号貯蔵穴出土土器実測図（1/4）……55
第 39 図　41～44号貯蔵穴実測図（1/40）……58
第 40 図　44号貯蔵穴出土土器実測図（1/4）……60
第 41 図　45･46号貯蔵穴実測図（1/40）……61
第 42 図　45号貯蔵穴出土土器実測図（1/4）……62
第 43 図　46･47･49･51･52号貯蔵穴出土土器実測図（1/4）……64
第 44 図　47～50号貯蔵穴実測図（1/40）……65
第 45 図　51～55号貯蔵穴実測図（1/40）……67
第 46 図　54号貯蔵穴出土土器実測図（1/4）……69
第 47 図　55～57号貯蔵穴出土土器実測図（1/4）……71
第 48 図　56～59号貯蔵穴実測図（1/40）……72
第 49 図　58号貯蔵穴出土土器実測図（1/4）……74
第 50 図　59～65号貯蔵穴出土土器実測図（1/4）……76
第 51 図　60～63号貯蔵穴実測図（1/40）……77
第 52 図　貯蔵穴出土鉄器実測図（1/2）……78
第 53 図　64～68号貯蔵穴実測図（1/40）……80
第 54 図　66～71号貯蔵穴出土土器実測図（1/4）……82
第 55 図　69～71号貯蔵穴実測図（1/40）……83
第 56 図　72･73号貯蔵穴実測図（1/40）……86
第 57 図　72号貯蔵穴出土土器実測図（1/4）……87
第 58 図　73号貯蔵穴出土土器実測図（1/4）……88
第 59 図　74～77号貯蔵穴実測図（1/40）……90

第 60 図　74号貯蔵穴出土土器実測図（1/4）……91
第 61 図　75～77号貯蔵穴出土土器実測図（1/4）……92
第 62 図　78～81号貯蔵穴実測図（1/40）……95
第 63 図　78号貯蔵穴出土土器実測図（1/4）……96
第 64 図　79・80号貯蔵穴出土土器実測図（1/4）……97
第 65 図　82～84号貯蔵穴実測図（1/40）……99
第 66 図　81・83・84号貯蔵穴出土土器実測図（1/4）……100
第 67 図　85～89号貯蔵穴実測図（1/40）……102
第 68 図　85号貯蔵穴出土土器実測図（1/4）……103
第 69 図　88～90号貯蔵穴出土土器実測図（1/4）……105
第 70 図　90～93号貯蔵穴実測図（1/40）……107
第 71 図　91～93号貯蔵穴出土土器実測図（1/4）……108
第 72 図　94～98号貯蔵穴実測図（1/40）……110
第 73 図　94・95号貯蔵穴出土土器実測図（1/4）……111
第 74 図　96～100号貯蔵穴出土土器実測図（1/4）……113
第 75 図　99～101号貯蔵穴実測図（1/40）……114
第 76 図　101号貯蔵穴出土土器実測図（1/4）……116
第 77 図　101～105号貯蔵穴出土土器実測図（1/4）……117
第 78 図　102～105号貯蔵穴実測図（1/40）……118
第 79 図　106～109号貯蔵穴実測図（1/40）……120
第 80 図　106・107号貯蔵穴出土土器実測図（1/4）……121
第 81 図　108・110号貯蔵穴出土土器実測図（1/4）……123
第 82 図　110～113号貯蔵穴実測図（1/40）……125
第 83 図　112・113号貯蔵穴出土土器実測図（1/4）……126
第 84 図　114～119号貯蔵穴実測図（1/40）……128
第 85 図　114号貯蔵穴出土土器実測図（1/4）……129
第 86 図　114～117号貯蔵穴出土土器実測図（1/4）……130
第 87 図　118号貯蔵穴出土土器実測図（1/4）……132
第 88 図　119号貯蔵穴出土土器実測図（1/4）……134
第 89 図　119・120号貯蔵穴出土土器実測図（1/4）……135
第 90 図　120～123号貯蔵穴実測図（1/40）……137
第 91 図　121号貯蔵穴出土土器実測図（1/4）……139
第 92 図　122・123号貯蔵穴出土土器実測図（1/4）……140

第 93 図　124～127号貯蔵穴実測図（1/40）……142
第 94 図　124号貯蔵穴出土土器実測図（1/4）……143
第 95 図　125号貯蔵穴出土土器実測図（1/4）……145
第 96 図　126号貯蔵穴出土土器実測図（1/4）……146
第 97 図　127号貯蔵穴出土土器実測図（1/4）……147
第 98 図　128～131号貯蔵穴実測図（1/40）……149
第 99 図　128・129号貯蔵穴出土土器実測図（1/4）……150
第 100 図　130～132号貯蔵穴出土土器実測図（1/4）……151
第 101 図　132～135号貯蔵穴実測図（1/40）……153
第 102 図　133号貯蔵穴出土土器実測図（1/4）……155
第 103 図　135号貯蔵穴出土土器実測図（1/4）……156
第 104 図　136～140号貯蔵穴実測図（1/40）……158
第 105 図　137・138号貯蔵穴出土土器実測図（1/4）……159
第 106 図　139号貯蔵穴出土土器実測図（1/4）……160
第 107 図　工事に追われた発掘調査……161
第 108 図　時期別貯蔵穴深度度数表……167
第 109 図　貯蔵穴の時期別分布図（1/400）……167
第 110 図　貯蔵穴出土の弥生土器変遷図（1/12）……169
第 111 図　円盤状土器片重量度数……172
付　図　　上の原遺跡遺構配置図（1/200）

# 表　目　次

表　1　貯蔵穴一覧表①……163
表　2　貯蔵穴一覧表②……164
表　3　貯蔵穴一覧表③……165
表　4　貯蔵穴一覧表④……166
表　5　円盤状土器片計測表……171

# Ⅰ 調査の経過

上の原遺跡は，当初，九州横断自動車道関係の第21地点（ＳＴＡ159＋60～168＋40）として登録されていた地点で，昭和58年度の試掘調査の結果，Ａ～Ｄに区分されたＤ地区（ＳＴＡ166＋20～168＋50）にあたる。試掘調査の結果は，弥生時代の住居跡や甕棺をはじめ，古墳時代の住居跡など多数存在することが予想された。

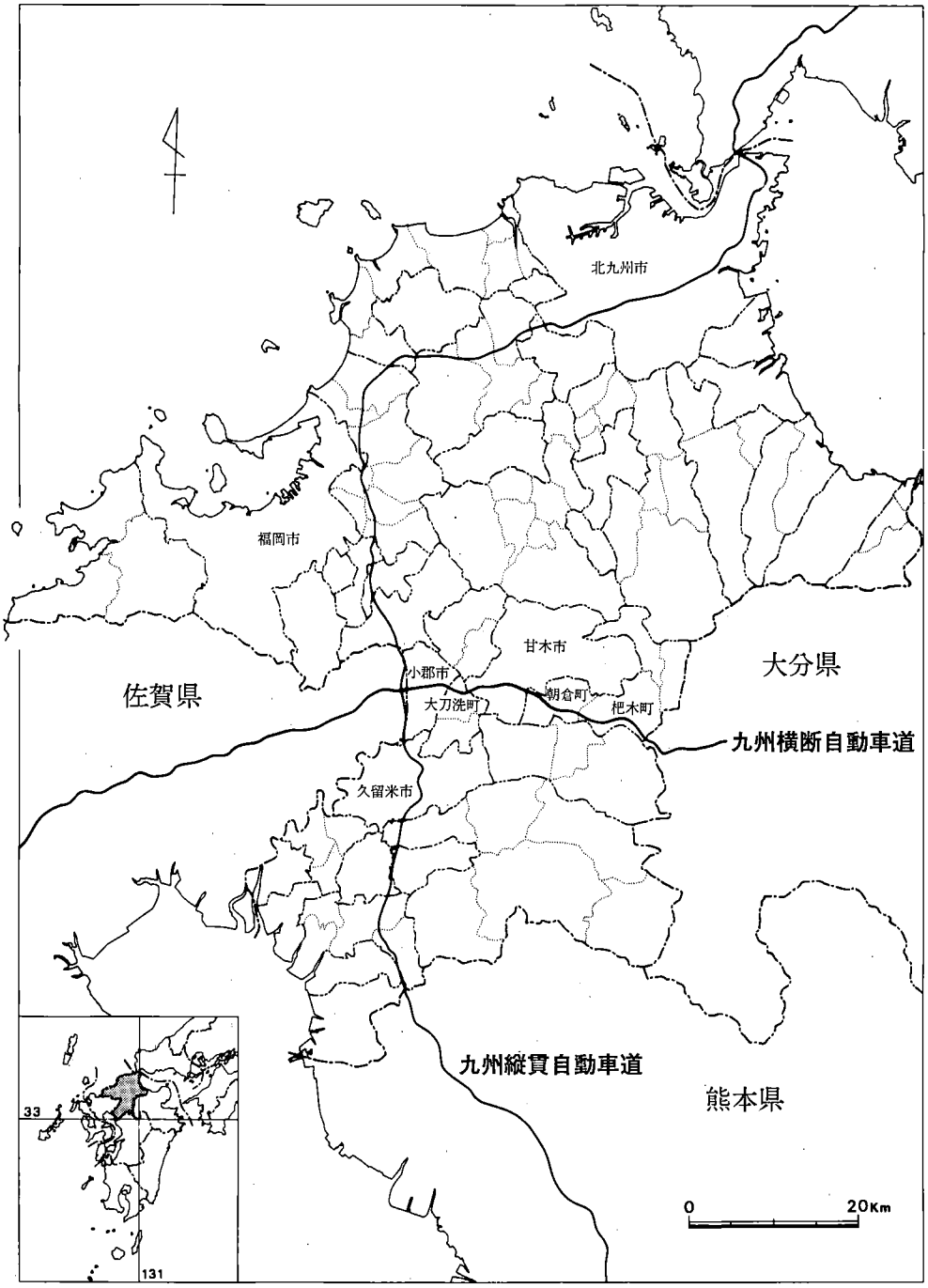
調査は，昭和60年10月14日から開始し，調査が終了したのは年度末の昭和61年３月19日であった。調査面積は12,300㎡となった。昭和62年３月の小郡～朝倉間供用開始に向けて，各工区とも本格的に工事が発注され，調査と工事が錯綜する状況を呈していた。上の原遺跡の調査も，二つのボックス工事を控えていたことと，供用開始というリミットを背負った調査であったため，調査の進行と工事工程が錯綜し，まさに戦場の様相を呈した。調査方法としては，望ましいことではないが，工程に合わせた分割調査をせざるをえなかった。

調査の結果は，遺跡東端部付近から140基にも及ぶ弥生時代前期から中期の貯蔵穴群が密集して検出され，その西側からは弥生中期の円形・楕円形・方形の竪穴住居跡73軒以上と多数の土壙などからなる弥生時代の大集落跡が発見された。また，集落の一角には甕棺墓27基と木棺墓４基からなる墓地も検出された。その他にも竪穴住居跡141軒，掘立柱建物跡11棟や多数の土壙などからなる奈良時代の大集落跡も発見されるなど，朝倉町内では最も密度の高い遺跡となった。遺構は用地外にさらに拡大する広大な遺跡であり，出土遺物も莫大な量にのぼった。

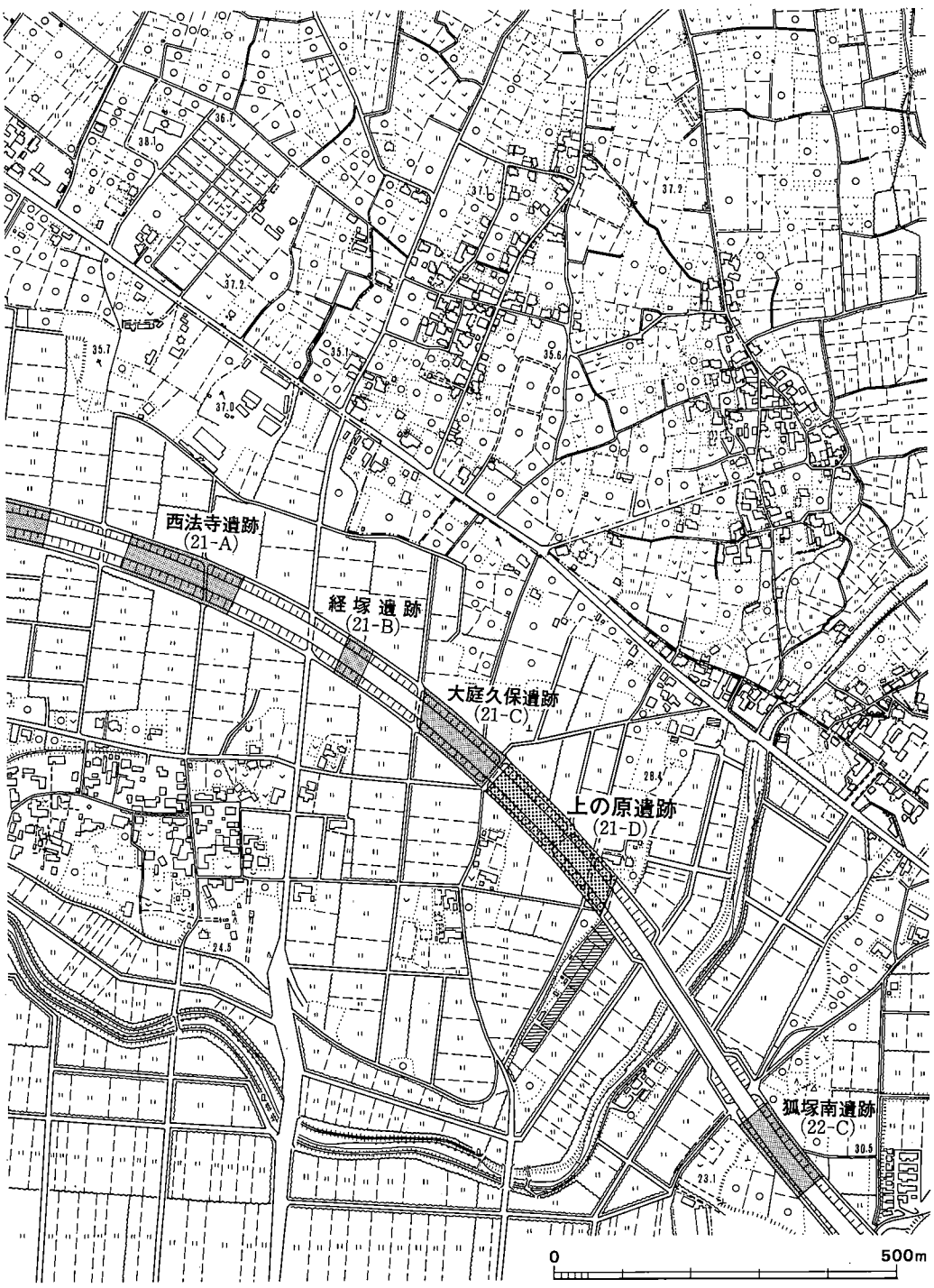
今回の報告は，遺跡東端部付近から密集して検出された弥生時代前期から中期にわたる140基の貯蔵穴群の報告で，上の原遺跡調査報告書の第１冊目にあたる。

調査はボックス工事工程との関係で，遺跡東端部から開始した。東端部付近は地盤が礫層で，かつ遺構の重複が著しいため遺構検出や発掘に手間取った。また，分割調査の弊害による工程の上で最後の調査となった東南端の一部が未調査部分を残す結果になってしまったことは惜しまれてならない。貯蔵穴群の調査が，いみじくも，上の原遺跡の調査の開始と最後を締めくくる調査となった。小郡～朝倉間供用開始というタイムリミットに追われた苦しい調査であった。年度末の３月19日に全ての調査が完了できたことは，工事に追われた調査員の苦悩と努力はもとより，それに精一杯，手助けしてくれた補助員をはじめとする作業員の方々の努力によるものである。心より感謝いたします。

調査関係者は次の通りである。




**第 1 図**　九州横断自動車道路線図




**第 2 図**　上の原遺跡とその周辺地形図(1/10,000)

日本道路公団福岡建設局

| | | |
|---|---|---|
| 局　　長 | 今村　浩二 | |
| 総務部長 | 菱刈　庄二(前任) | 安元　富次 |
| 管理課長 | 森　　宏之 | |
| 管理課長代理 | 佐伯　　豊 | |

日本道路公団福岡建設局甘木工事事務所

| | | |
|---|---|---|
| 所　　長 | 乗松　紀三 | |
| 副 所 長 | 西田　　功 | |
| 副所長(技術担当) | 中村　義治 | |
| 庶務課長 | 徳永　　登 | |
| 用地課長 | 岩下　　剛 | |
| 工務課長 | 後藤二郎彦 | |
| 小郡工事区工事長 | 友田　義則 | |
| 甘木工事区工事長 | 猪狩　宗雄 | |
| 朝倉工事区工事長 | 平沢　　正(前任) | 小手川良和 |
| 杷木工事区工事長 | 山中　　茂 | |

福岡県教育委員会

総　括

| | |
|---|---|
| 教 育 長 | 友野　　隆 |
| 教育次長 | 安部　　徹 |
| 管理部長 | 大鶴　英雄 |
| 文化課長 | 前田　栄一 |
| 文化課長補佐 | 平　　聖峰 |
| 文化課技術課長補佐 | 宮小路賀宏 |
| 文化課参事補佐 | 栗原　和彦 |

庶　務

| | |
|---|---|
| 文化課庶務係長 | 平　　聖峰(兼任) |
| 文化課事務主査 | 長谷川伸弘 |

調　査

| | |
|---|---|
| 文化課調査第二係長 | 宮小路賀宏(兼任) |
| 同　　技術主査 | 井上　裕弘 |
| 同　　主任技師 | 高橋　　章(現京築教育事務所技術主査) |
| 同　　主任技師 | 佐々木隆彦(現南筑後教育事務所技術主査) |

同　技　師　伊崎　俊秋
同　技　師　小田　和利
同　文化財専門員　木村幾多郎
同　臨時職員　日高　正幸(現文化財専門員)
同　調査補助員　高田　一弘　平嶋　文博　田中　康信

発掘調査作業員

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 古賀　藤夫 | 浦塚　義則 | 石松又次郎 | 仲山　進 | 篠原　清彦 |
| 目　憲一 | 緒方　仁造 | 大熊　勝造 | 国武　昌治 | 上野チエ子 |
| 上野ミツ子 | 古賀シズエ | 古賀　チヅ | 森　君子 | 井上シズエ |
| 大盛アサ子 | 武内タツ子 | 福山　法子 | 吉松キヨ子 | 一の宮通子 |
| 仲山シズカ | 大熊ミユキ | 石松アサカ | 本園セツ子 | 徳永タカヨ |
| 大田ミヨ子 | 井上キヨノ | 田中サツキ | 関屋エミ子 | 目　広子 |
| 木下千寿子 | 大熊　ツマ | 大熊キクエ | 大熊カズエ | 大熊ナミエ |
| 緒方　邦江 | 藤田マスミ | 柳原　礼子 | 佐藤　道子 | 丸山　静子 |
| 丸山フミ子 | 丸山ハル子 | 丸山　久子 | 浦　ナルミ | 浦　和子 |
| 浦　文子 | 手島　芳子 | 安岡よし子 | 半田　エツ | 高瀬セツ子 |
| 高瀬シズエ | 後藤カミヨ | 中西ハル子 | 永田トヨノ | 永田エツ子 |
| 矢野トラエ | 矢野　静子 | 原島ミチヨ | 柴山ミネ子 | 柴山ハツエ |
| 本石セツ子 | 中村　光恵 | 窪山ヨシエ | 窪山ヨネ子 | 森　キヨ子 |
| 牟田ヒロミ | 牟田シズ子 | 牟田ヨリエ | 牟田テル子 | 池田カオル |
| 釜堀　玉来 | 釜堀エミ子 | 釜堀ヒサシ | 釜堀シズエ | 釜堀ミサヲ |
| 荻野サカエ | 渡辺　輝子 | 芹田恵美子 | 石井キヨミ | 後藤　昭香 |
| 宮田　倪子 | 宮田　芳子 | 鬼塚　孝子 | 佐野チヅ子 | 梅田　加代 |
| 釜堀　ツマ | 釜堀セツ子 | 大楠　房枝 | 萩原　瑞江 | 牟田サエ子 |
| 谷村　京子 | 野田美知子 | | | |

遺物整理作業員

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 九州歴史資料館 | 有馬　信子 | 鬼木美知子 | 植山　洋子 | 若松　和子 |
| 奥村千恵子 | 桑本　亜子 | 友清　光子 | 平石　史子 | 古賀　陽子 |
| 高畑美智子 | 砥上トシ子 | 武藤　睦子 | | |
| 甘木調査事務所 | 中塩屋リツ子 | 西　斉子 | 小島佐枝子 | 石井紀美子 |
| 尾花　道子 | 藤井カオル | 塩足　里美 | 松嶋　邦子 | 原田　和枝 |
| 高瀬　照美 | 渡辺　輝子 | | | |

(井上)

# Ⅱ 位置と環境

上の原遺跡は，福岡県朝倉郡朝倉町大字大庭字上の原に所在する。

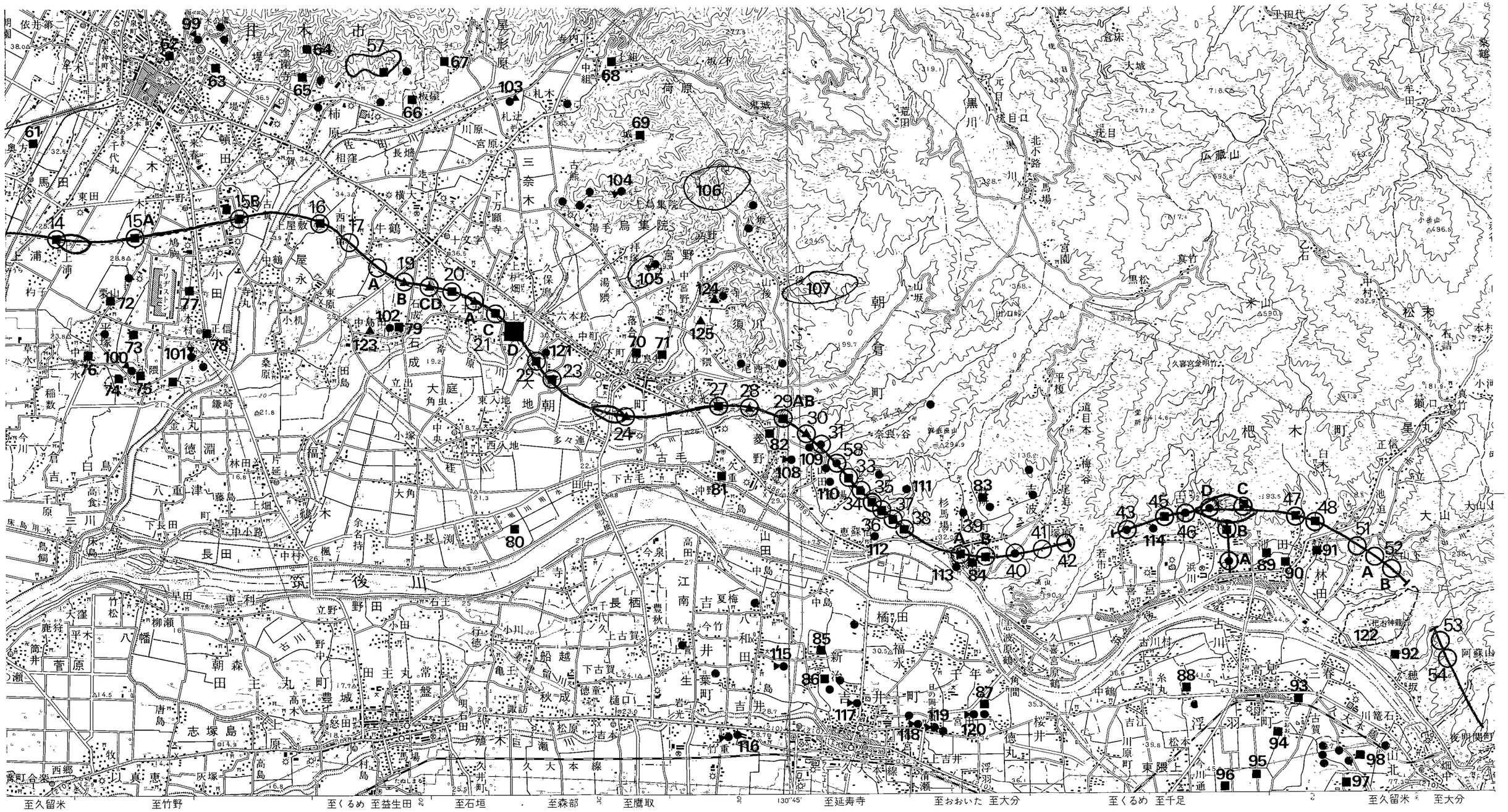
遺跡は，馬見山の南に連なる十石山・籾岳・白石山・鳥屋山といった朝倉低山地に源を発する佐田川と荷原(いないばる)川により形成された広範な扇状台地上にある。当遺跡は，その扇状台地の東南端に形成された弥生時代と奈良時代を中心とした広大な集落遺跡である。この三奈木―十文字―中島田にわたる台地上には，縄文・弥生・古墳・奈良時代といった時期の集落跡や墓地群等が多数，形成されている。特に，近年の九州横断自動車道建設に伴う事前の発掘調査により，この台地上一帯に弥生時代と奈良時代を中心とした大規模な集落遺跡が濃密に分布していることが明らかになった。

その中でも，この上の原遺跡が広大かつ濃密な遺跡で，弥生時代の遺構としては弥生前期から中期の貯蔵穴140基，中期から後期の竪穴住居跡73軒，甕棺墓27基と木棺墓４基からなる墓地，奈良時代の遺構は，竪穴住居跡141軒，掘立柱建物跡11棟以上という多数の遺構と夥しい量の遺物が検出された。

上の原遺跡の西側には，弥生中期から後期の墓地群と奈良時代の集落跡が発見された大庭久保遺跡をはじめ，弥生中期後半の25軒の竪穴住居跡群，奈良時代の竪穴住居跡34軒と掘立柱建物跡22棟からなる集落跡が検出された中道遺跡，奈良時代の大集落である西法寺遺跡や塔ノ上遺跡などがある。

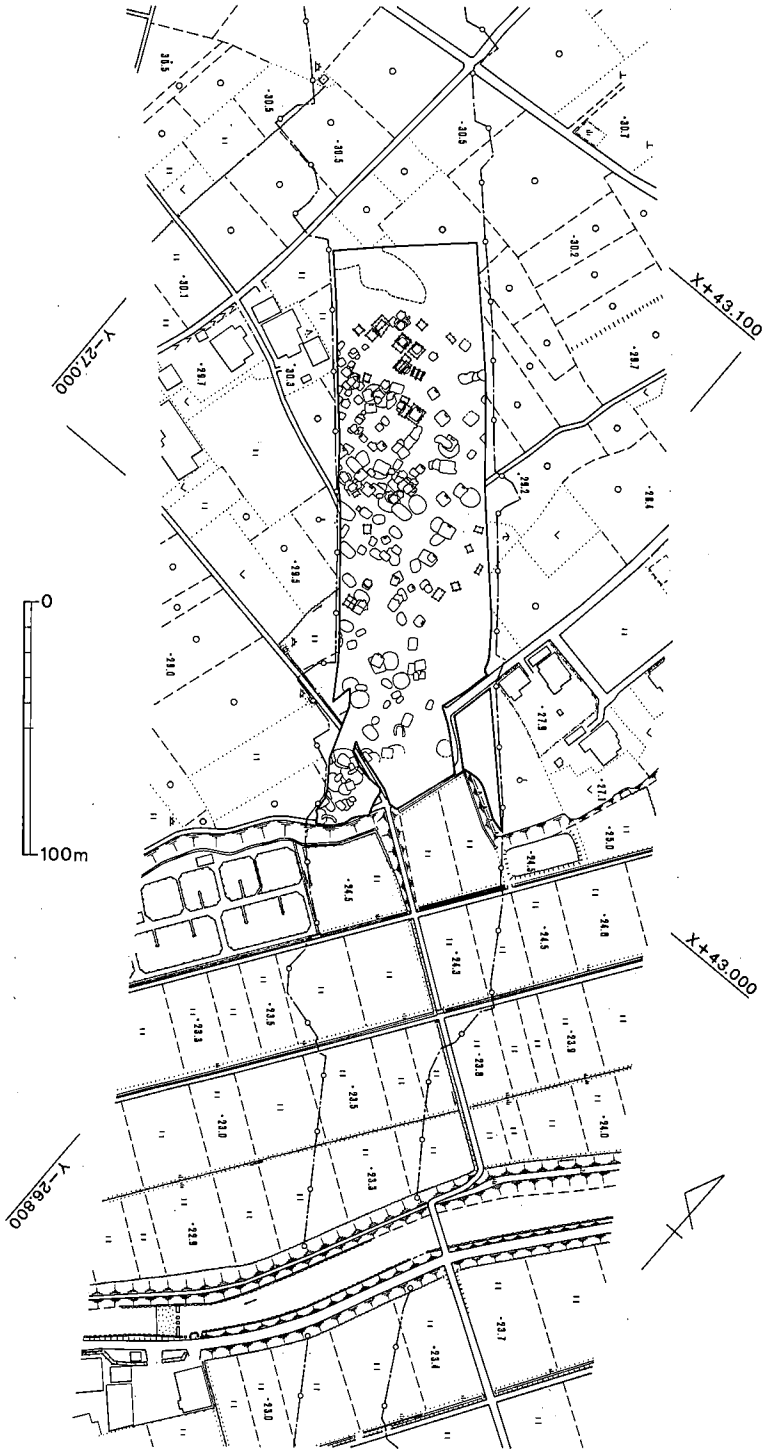
また，荷原川を挟んだ対岸の台地上には，線刻壁画で知られる県指定の狐塚古墳があり，その北東の丘陵上には烏集院(うすのいん)１号墳・宮地獄古墳といった前方後円墳をはじめ，甘木・朝倉地方で最大の前方後円墳といわれる剣塚(つるぎづか)古墳（全長70.6ｍ）などがある。烏集院から山後，麻底良山へと続く低位な山丘上や山麓には，烏集院古墳群をはじめ，北八坂古墳群，山後古墳群，妙見古墳群，山田古墳群，金場古墳群，上ノ宿古墳群，恵蘇八幡宮古墳群といった後期の群集墳が群在している。

さらに，これら山麓からは旧石器から縄文・弥生・古墳・奈良時代といった各時代にわたる多数の複合遺跡が，横断道関係の発掘調査で新たに発見されている。弥生時代後期の墓地と奈良時代の大集落跡が検出された長島遺跡をはじめ，旧石器から奈良時代と連綿と続く大規模な複合遺跡であった原の東遺跡，弥生前期の集落跡が検出された鎌塚遺跡や長田遺跡，中期から後期の甕棺墓・木棺墓・石棺墓からなる総数66基の墓地である上ノ宿遺跡などが発見された。小規模ではあるが，金場遺跡・大迫遺跡・外之隈遺跡・杷木宮原遺跡・中町裏遺跡でも弥生中期の集落跡が検出されている。また，杷木町大字池田の畑田遺跡からは，縄文晩期から弥生前




14　上々浦遺跡（弥生・古墳集落）
15A　下原遺跡（弥生集落）
15B　西原遺跡（縄文・弥生・古墳集落）
16　高原遺跡（縄文・弥生・奈良集落）
17　口ノ坪遺跡
19A　塔ノ上遺跡（旧石器・奈良集落）
19B　大環端遺跡（古墳集落・奈良墓地）
19CD　石成久保遺跡（縄文・奈良集落）
20　中道遺跡（縄文・弥生・奈良集落）
21A　西法寺遺跡（奈良集落・中世）
21C　大庭久保遺跡（弥生墓地・奈良集落）
21D　上の原遺跡(弥生墓地・集落、奈良集落）
22C　狐塚遺跡（縄文・弥生集落、弥生墓地、奈良・中世集落）
22AB　治部ノ上遺跡(縄文・弥生・古墳集落）
23　座禅寺遺跡（弥生集落、古墳）
24　才田遺跡（奈良・中世集落）
27　長島遺跡（縄文・弥生・古墳・奈良集落、弥生墓地）
28　中妙見遺跡（奈良集落）
29A　原の東遺跡（旧石器・縄文・弥生・奈良集落、古墳）
29B　妙見古墳群（古墳）
30　鎌塚遺跡（縄文・弥生・奈良集落）
31　山の神遺跡（縄文集落、古墳）
33　長田遺跡（縄文・弥生・古墳・奈良集落）
34　金場遺跡(旧石器・縄文・弥生・奈良集落、古墳）
35A　上ノ宿遺跡（旧石器、弥生墓地、古墳）
35B　恵蘇山遺跡（奈良集落）
36　稗畑遺跡（縄文・奈良集落）
37　大迫遺跡（弥生・古墳集落、奈良・平安墓地）
38　外之隈遺跡（縄文・弥生・古墳・奈良集落、古墳）
39A　杷木宮原遺跡（弥生・古墳集落、弥生墓地）
39B　中町裏遺跡（弥生集落・墓地、古墳）
40　志波桑ノ本遺跡（縄文・弥生・古墳集落、古墳、中世墓地）
41　志波岡本遺跡（縄文・弥生）
42　江栗遺跡（平安・中世）
43　大谷遺跡（縄文集落、古墳）
45　笹隈遺跡（縄文集落、弥生墓地、古墳）
46　夕月・天国遺跡（縄文集落、古墳、中世墓地）
47　上池田遺跡（縄文・弥生集落、中世墓地）
48　畑田遺跡（縄文・弥生・中世集落）
51　楠田遺跡（縄文集落）
52A　小黄原遺跡（縄文集落）
52B　二十谷遺跡（縄文・中世集落）
53　陣内遺跡（中世）
54　上野原遺跡（中世墓地）
57　柿原古墳群（古墳、縄文・弥生集落）
58　山田古墳群（古墳、中世墓）
杷木IC-A　鞍掛遺跡（古墳集落）
杷木IC-B　前田遺跡（弥生集落）
杷木IC-C　西ノ迫遺跡（弥生高地性集落、古墳）
杷木IC-D　クリナラ遺跡（縄文・古墳集落）
61　上川原遺跡（弥生墓地）
62　甘木七日町遺跡（弥生墓地）
63　宗原遺跡（弥生墓地）
64　大岩東部遺跡（弥生散布地）
65　大岩南部遺跡（弥生墓地）
66　板屋高野堂遺跡（弥生墓地）
67　板屋田中原遺跡（縄文・弥生散布地）
68　荷原池辺遺跡（弥生散布地）
69　鬼ケ城遺跡（弥生散布地）
70　下町遺跡（弥生・古墳墓地）
71　八並遺跡（縄文・弥生・奈良集落）
72　栗山遺跡（弥生墓地）
73　小田道遺跡（弥生・古墳集落）
74　小隈出口遺跡（弥生集落・墓地）
75　小隈松山遺跡（弥生・古墳・奈良集落）
76　中寒水屋敷遺跡（中国式銅剣）
77　小田遺跡（弥生集落・墓地）
78　南出口遺跡（弥生墓地）
79　石成遺跡（弥生墓地）
80　長渕南方遺跡（弥生墓地）
81　古毛遺跡（弥生〔中広銅戈１〕）
82　原菱野遺跡（弥生墓地）
83　政所遺跡（縄文・弥生散布地）
84　千代島遺跡（弥生散布地）
85　弥生散布地
86　弥生散布地
87　弥生散布地（クリス形銅剣出土）
88　田島北遺跡（弥生集落・墓地）
89　長光寺遺跡（弥生墓地）
90　立聞遺跡（弥生墓地）
91　辻の堂遺跡（弥生墓地）
92　陳内遺跡（弥生墓地）
93　原口天満宮遺跡（弥生散布地）
94　高土居遺跡（弥生墓地）
95　沖出遺跡（弥生・古墳集落）
96　日永遺跡（弥生集落）
97　北原遺跡（弥生集落）
98　元大春中学校庭遺跡（弥生散布地）
99　鬼の枕古墳（前方後円墳）
100　神蔵古墳（前方後円墳）
101　小田茶臼塚古墳（前方後円墳）
102　石成古墳（円墳）
103　ヤツエ塚古墳（前方後円墳）
104　鳥集院１号墳（前方後円墳）
105　宮地獄古墳（前方後円墳）
106　北八坂古墳群
107　山後山古墳群
108　剣塚古墳（前方後円墳）
109　鎌塚古墳（円墳）
110　長田１号墳（円墳）
111　本陣古墳（円墳）
112　恵蘇八幡宮古墳群
113　宝満宮古墳
114　揚天満宮古墳
115　女塚古墳（前方後円墳）
116　富永古墳（円墳）
117　小塚古墳（前方後円墳）
118　月の岡古墳（前方後円墳）
119　日の岡古墳（前方後円墳・装飾古墳）
120　塚の堂古墳（前方後円墳）
121　狐塚古墳（円墳）
122　杷木神籠石
123　中島田遺跡（奈良集落）
124　長安寺廃寺（奈良寺院）
125　伝朝倉宮跡

第 3 図　上の原遺跡とその周辺遺跡分布図(1/50,000)




**第 4 図**　上の原遺跡調査地区と付近地形図(1/3,000)

期にわたる竪穴住居跡84軒といった大集落と，この地域では珍しい支石墓4基，石棺墓2基が発見された。特に，稲作農耕開始期の大集落の発見は，内陸部という地理的位置もさることながら，今後，重要な遺跡として注目されるだろう。

一方，眼を転じてみると，古処山・馬見山に源を発する小石原川が形成した「一ツ木―小田」の扇状台地にも，多数の遺跡が密集している。前漢鏡や鉄戈・貝輪等が出土した大甕棺墓地として知られる栗山遺跡があり，その南には弥生後期から古墳時代前期の一大集落跡である小田道遺跡がある。北側には，弥生前期から後期まで続く大集落遺跡である小田遺跡や，弥生中期前葉の集落である下原遺跡や西原遺跡などが分布している。台地南端には，中国式銅剣が出土した中寒水屋敷遺跡があり，この地域一帯は弥生時代遺跡が密集した地域となっている。

また，この台地上には三角縁神獣鏡が副葬されていた発生期の前方後円墳として著名な神蔵古墳や，かつて三角縁神獣鏡が出土したといわれる大願寺方形周溝墓，古式の横穴式石室をもち，武具・馬具など多数の副葬品が出土した小田茶臼塚前方後円墳など，この地方を支配した首長墓が築造されている。

さらに，北側の大平山山麓付近も遺跡が集中して形成された地域である。弥生中期の甕棺墓や後期の石棺墓・石蓋土壙墓が出土した宗原遺跡をはじめ，青銅器の埋納遺跡として知られる板屋田中原遺跡（銅戈）や荷原池辺遺跡（銅戈）などがある。また，宗原遺跡の北側には，三段築成で葺石をもった前方後円墳である鬼枕古墳（全長56m）や，その東側の丘陵上には陶質土器や鉄器が多量に副葬された古寺・池の上墳墓群がある。一方，大平山南麓には，後期の群集墳である柿原古墳群や大岩東部・南部・西部といった古墳群が形成されている。

この地域における重要な遺跡の一つである斉明七年（661）に百済救援のため，斉明天皇の行宮として建設されたという有名な朝倉橘広庭宮推定地は，朝倉町須川にある。また，この朝倉宮の造営と関連する軍事的要塞とも考えられる杷木神籠石（国指定）は，大分県との県境である杷木町林田に所在している。（井上）

**参考文献**

柳田康雄　「第二編　原始」『甘木市史』上巻　甘木市史編さん委員会　1982
柳田康雄・馬田弘稔他「甘木市史資料」考古編　甘木市史編さん委員会　1984
高山明「第二編　考古」『朝倉町史』朝倉町史刊行委員会　1986
新野正憲「第三編　古代」『朝倉町史』朝倉町史刊行委員会　1986
井手瀧次郎「第二編　歴史」『杷木町史』杷木町史刊行委員会　1981

第 5 図　貯蔵穴配置図(1/300)

# Ⅲ　貯蔵穴と出土遺物

幅60ｍの路線内225ｍにわたって遺構が検出され，東南側は，比高差５ｍの低地（河川）となっている。遺物は，縄文時代早期押型文土器から奈良時代まで，各時代の物が出土しているが，遺構としては，弥生時代貯蔵穴140基，竪穴住居跡79軒，竪穴遺構30基，土壙121基（木棺墓も含む）甕棺墓27基，奈良時代遺構として竪穴住居跡141軒，掘立柱建物30棟（貯蔵穴以外はいずれも概数で，Ⅱ以降で変更される可能性がある）検出されている。そのうち，今回報告する貯蔵穴は，遺跡東南部に偏って群集している。貯蔵穴は，分布状況よりすると，調査地西側にさらに拡がっていると思われる。

## １号貯蔵穴（図版２－２，第６図）

遺跡東北部にあり，１号から６号までの一群をなす。貯蔵穴上部は削平され，23cmの深さを残すのみである。底部平面形は，やや隅丸方形に近い円形をなし，155×140cmである。遺物は，甕形土器が数点出土している。

出土遺物（第７図）

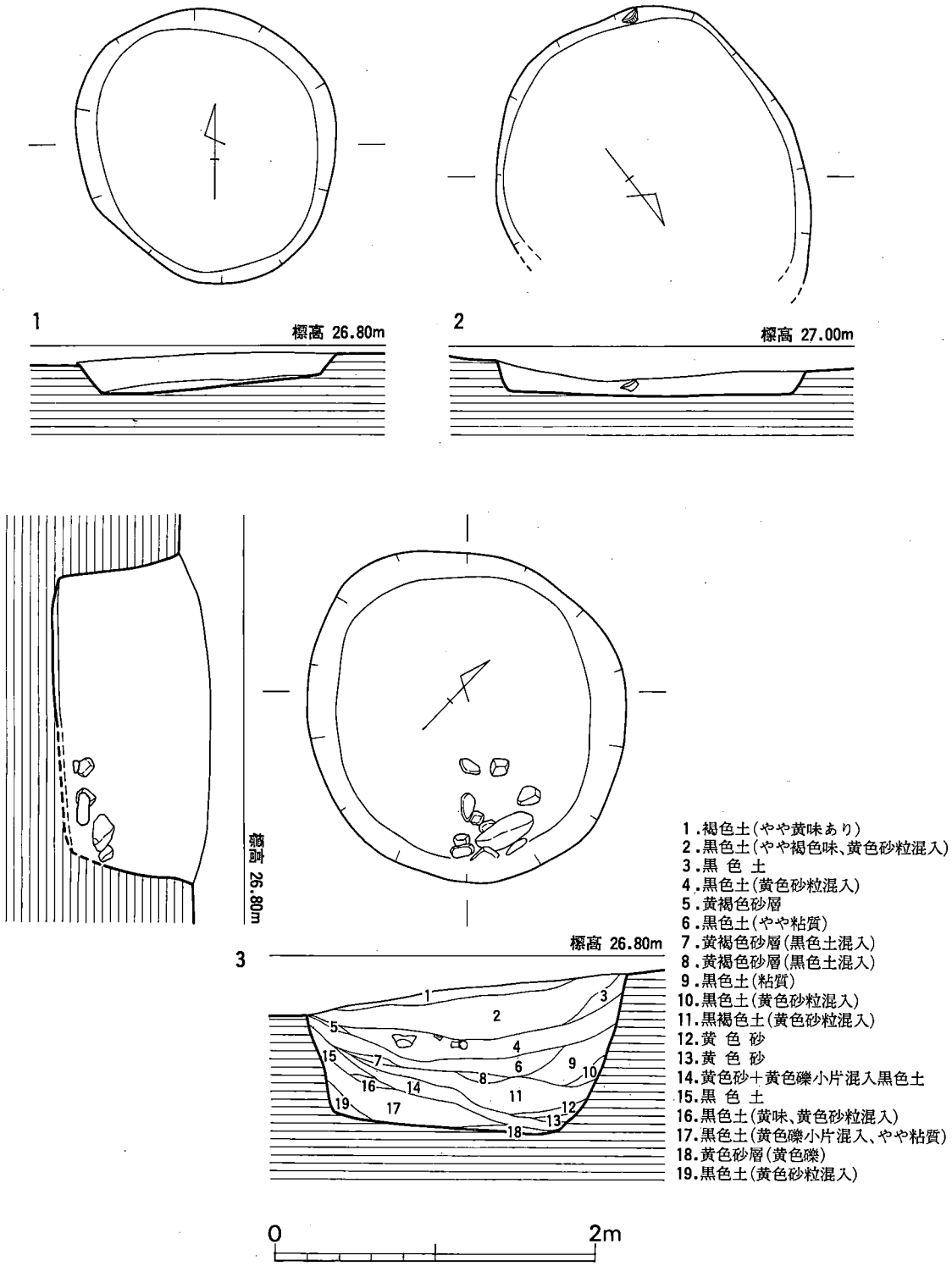
**甕**（１～４）　１～４はいずれも，口縁部片である。１は口縁端外面に粘土帯を貼付し，逆Ｌ字状に近い口縁をなし，頸部以下は刷毛目がナデ消されている。復原口縁内径23.3cmを測る。２は，ややＴ字状口縁に近く，口縁端面は外傾する。刷毛目痕は残らず，工具によるナデ調整が見られる。３は小形の甕の口縁，４は小形の甕または鉢の頸部片である。

## ２号貯蔵穴（図版２－１，第６図）

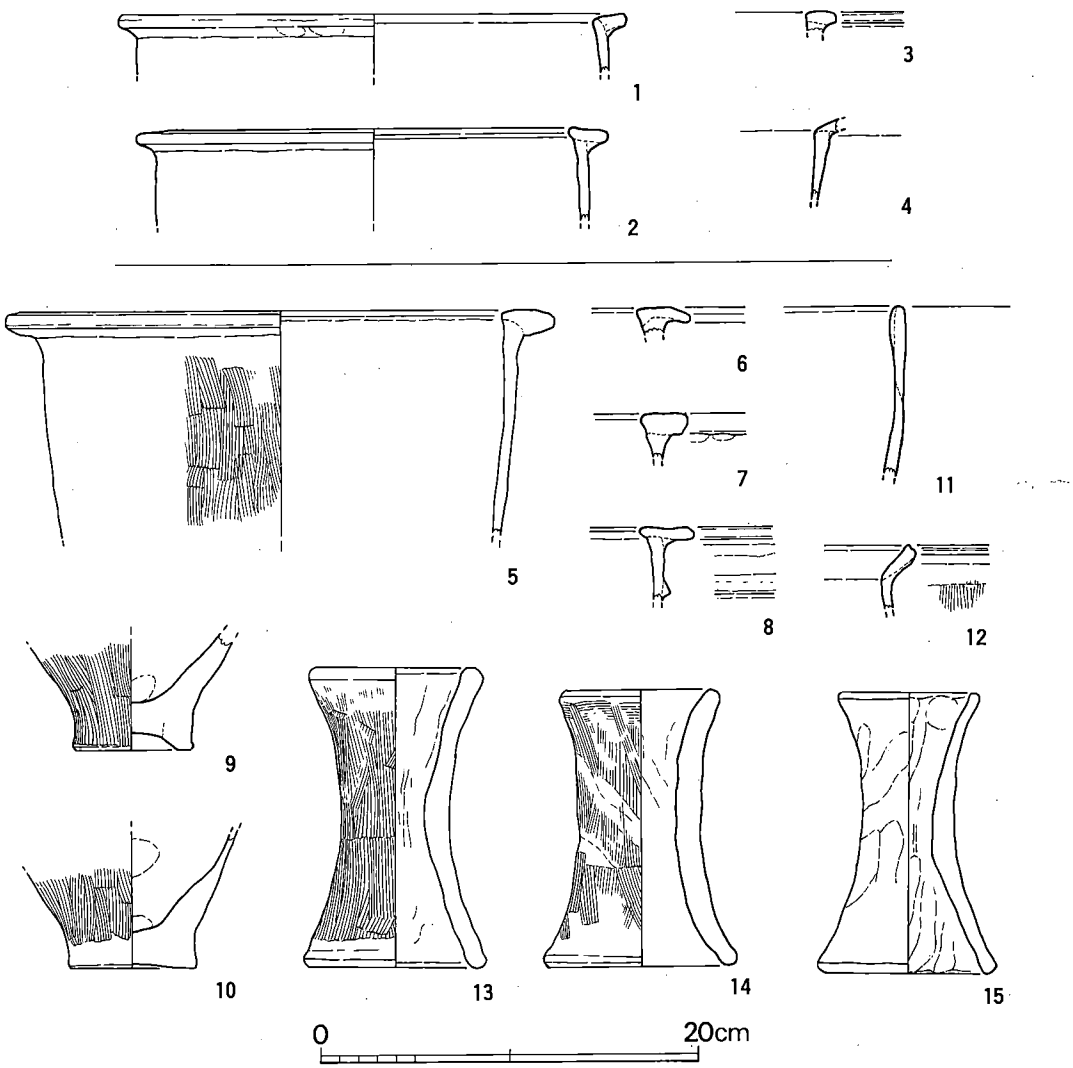
上面が削平されており，深さ約20cmの壁を残すのみである。北側は，他の遺構により切られているが，底部は平坦で，底部平面形は楕円形で約200×175cmになると思われる。土器片と不明土製品が出土している。

出土遺物（図版41，第７図）

**甕**（５～10・12）　５～７は，口縁部で，逆Ｌ字状をなす。５は復原口縁内径23.4cm，残存高11.8cmで，頸部は刷毛目をナデ消すが，以下は刷毛目（工具幅12mm）調整痕が残る。８は，Ｔ字形に近い口縁をなし，口縁下3.5cmに粘土貼付の断面三角形の刻目のない凸帯が一条めぐる。９・10は底部片で，９はやや上底になる。10は，平面図に示されている土器で，底部はやや凹む程度である。いずれも外面刷毛目調整痕が残る。口縁部は「く」字に外反し，端部が跳ね上る。時期的には下り，おそらく混入品と思われる。




**第 6 図** 1～3号貯蔵穴実測図(1/40)

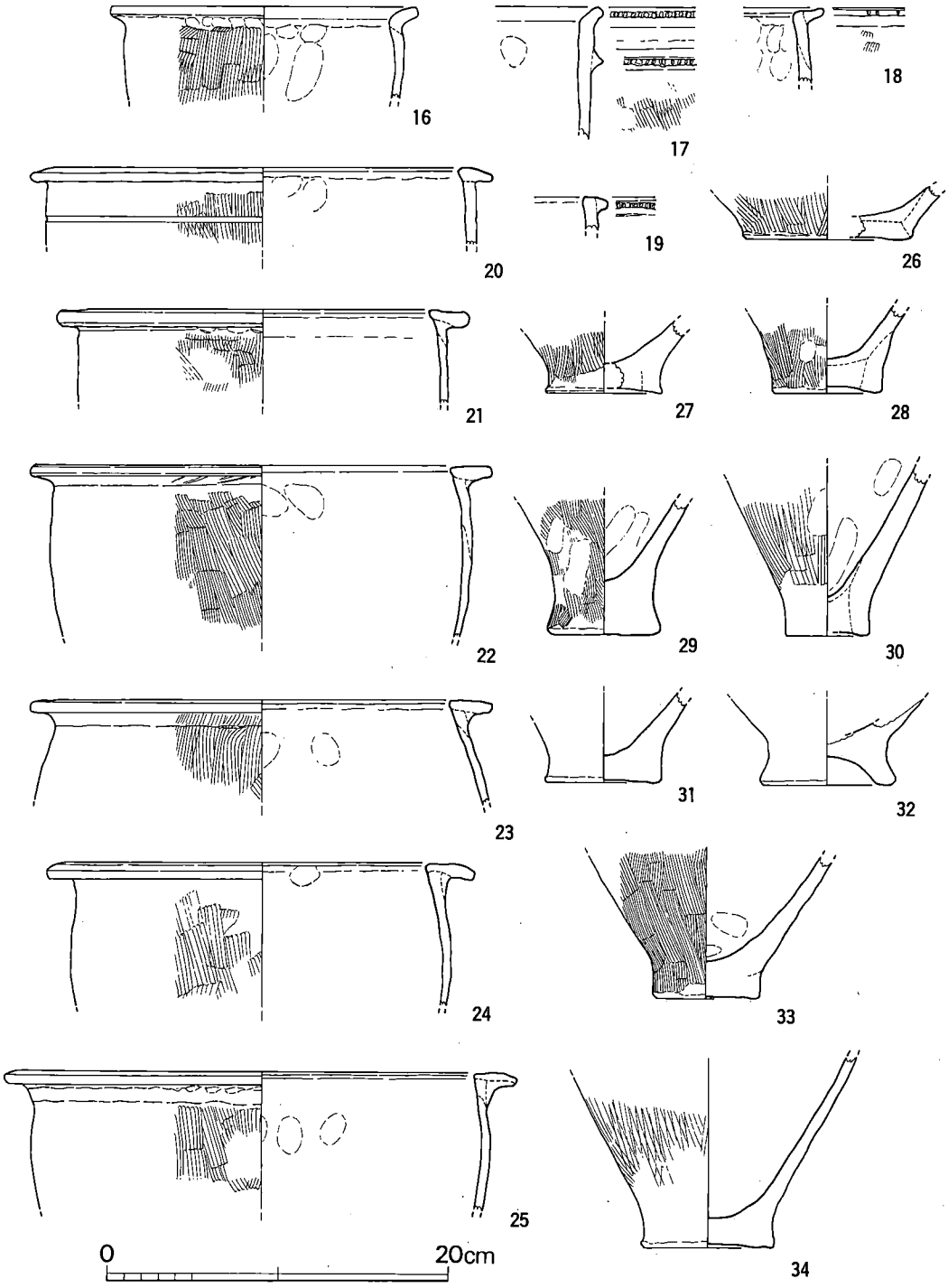



**第 7 図** 1･2号貯蔵穴出土土器実測図(1/4)

**鉢** (11)　直口の口縁をなし，端部は丸まる。内外面ともヘラ磨きがなされる。

**器台** (13～15)　いずれも完形で，器高は13が15.6cm，14が14.4cm，15が14.6cmで，13・14は外面刷毛目調整痕が残り，15は，指ナデにより調整されている。

**不明土製品** (第10図29)　残存部5.7×3.5cmの楕円形で，厚さ2.6cmを測る粘土塊である。丁度手で握った程の粘土塊であるが，両面に不規則な浅い沈線が残り，周縁端部には，粘土塊を擦った痕がある。胎土は，土器を作る粘土と同じであり，土器作りの時余った粘土をまるめたものが，焼かれて残ったものか，本来この形態に意味があったのか判断できない。重量は，40.4ｇである。




第 8 図　3号貯蔵穴出土土器実測図(1/4)

## 3号貯蔵穴（図版３－１，第６図）

底部平面形はやや隅丸方形気味の円形で，底径175×160cmを測る。壁は，底部よりややふくらみながら外に向かって開き，上面は削平されているが，深さ約96cmで，残存口径は200×206cmである。埋土はスリ鉢状に堆積し，土器の包含量が多い。底面近くに東側より投げ込まれたと思われる大形の礫が堆積している。出土遺物は，大量に投げ込まれた土器と，円板状の土製蓋，焼成された粘土塊が出土している。

出土遺物（図版50，第８・９・11・36図）

**甕**（16～34）　16～25は，口縁部片であるが，17～19の如意形口縁及び，刻目の凸帯を持つものと，口縁が逆Ｌ字状になる20～25がある。17は如意形口縁端部下位に刻目をつけ，口縁端から３cm下位に断面三角形の刻み目のある粘土帯がめぐる。刷毛目調整痕は，口縁端と凸帯間と，凸帯下1.5cmの間がヨコナデにより消えている。18・19は，直口する口縁端外面に粘土帯を貼付したもので，刻目が施されている。20～25は，口縁が逆Ｌ字状をなす。20は，口縁下2.5cmに浅い沈線が，刷毛目調整の後，１本引かれている。復原口縁内径23cm。21～25は口縁端は水平または外に下り，胴部がややふくらむ。頸部は，指圧痕またはヨコナデで刷毛目は消えるが，以下は縦位の刷毛目調整痕が残る。復原口縁内径は，21が19.4cm，22が22.0cm，23が22.0cm，24が19.4cm，25が25.0cmである。26～34は底部で，やや凹むものもあるが平底に近く，底部がやや薄いもの（26・27・28・33・34）と，底部が厚く高いもの（29・30），高台風に底部が高いもの（32）がある。

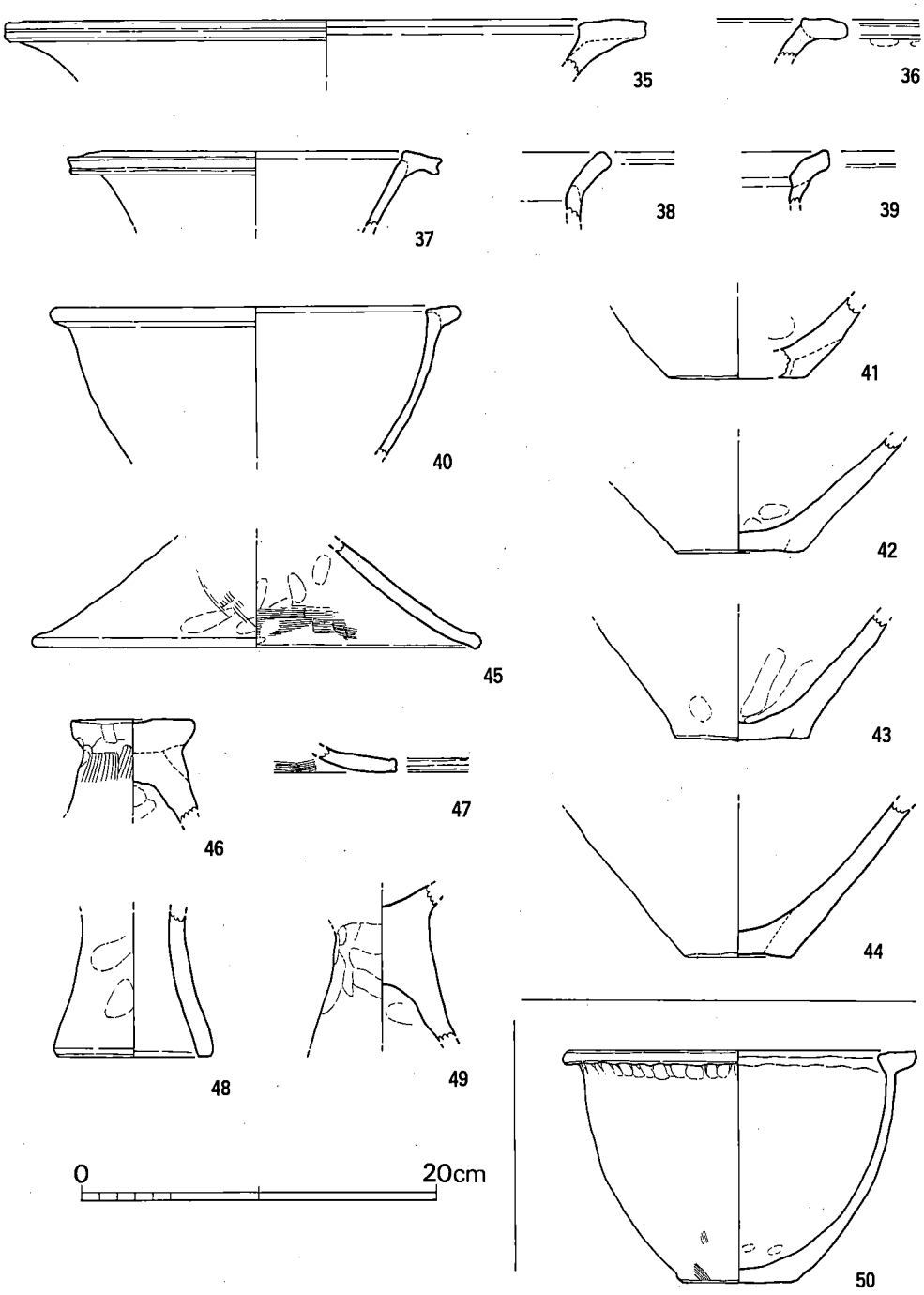
**壺**（35～39・41～44）　35～39は，口縁部片であり，38を除いて鋤先状口縁をなす。いずれも内外面とも，丁寧に研磨される。38は，頸部が内傾し，口縁部で折れて外反する壺の口縁小片と思われる。復原口縁内径は35が28.4cm，37が16.6cmである。41～44は底部片で，やや高台風に底部を縁取りしたもの（42・44）があるが，平底である。底部付近まで，ヘラ研磨の施されたもの（44）もあるが，多くは底部付近は工具ナデによる調整である。

**高杯**（40・49）　40は，杯部片で，内外面ともヘラ研磨が施される。復原口縁内径は，19.2cmで，杯部の深さは約8.5cmが残存する。49は，脚部片で，杯部は「ハ」の字状に立ち上る。脚部はやや開き気味で，外面はヘラナデが施される。

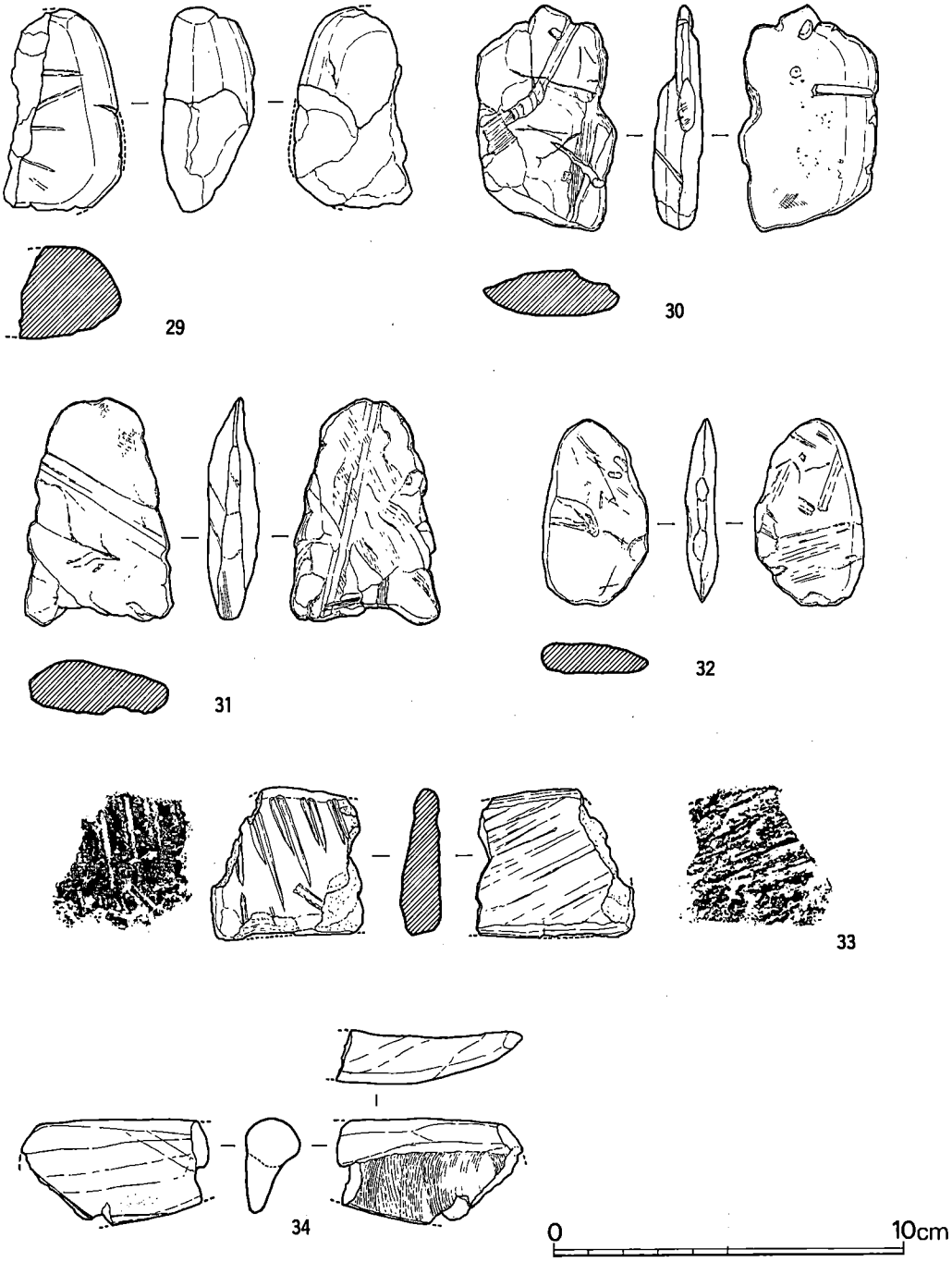
**蓋**（45～47）　46は，ツマミ部片で，頂部がくびれ，外面に刷毛目痕が残る。45・47は裾部片である。裾部端内面は，４cmまで横位刷毛目が残る。外面は，ケズリに近い工具ナデ調整が行われている。

**器台**（48）　器面は，ナデ調整が行われる。復原底径は９cmで，残存高は8.1cmである。

**蓋形土製品**（第36図９・10）　９は復原径12cm，厚さ1.2cmで，平坦な円盤状をなす。10のように両端部に穿孔されていたかは不明。10は，復原径17cmで，中心に向かって高くなる。端




**第 9 図**　3･4号貯蔵穴出土土器実測図(1/4)




第 10 図　貯蔵穴出土土製品実測図1 (1/2)

第 11 図　貯蔵穴出土土製品実測図2 (1/2)

部（おそらく両端）に，上から外に向かって斜位に穿孔されている。内・外面とも丁寧にヘラ研磨が施される。

**不明土製品**（第11図35～37）　いずれも定形を持たない焼成された粘土塊であるが，整形痕のある面が，巻き込んだり，他の粘土に覆われるなどしており，土器整形時に削り取られた粘土片が固められ，焼けたものである可能性が高い。

## 4号貯蔵穴（図版３－２，第12図）

上部は削平され，壁は17cm程残存するが，底面に伏せた状態で完形の鉢が出土している。底面は，87×86cmの不整円形をなす。

出土遺物（図版41，第９図）

**鉢**（50）　完形品で，口縁は逆Ｌ字状に近いが，口縁内面に粘土が張り出している。口縁端部平坦面には，刷毛目調整痕が残る。胴部は，ふくらみを持ちながらすぼまり平底の底部へつづく。器面は，ケズリ状の調整痕が残るが，全体的にナデ調整が行われている。口径19.6cm，器高13cmである。

## 5号貯蔵穴（図版４－１，第12図）

平面形は，ほぼ円形をなし，底径は93×91cmである。南に傾斜した斜面のため北側壁の残りが良く48cmである。埋土は，スリ鉢状に堆積している。甕と壺の小片が出土している。

出土遺物（第13図）

**甕**（51・52）　51は，如意形口縁で，口縁端部下半に刻目が施される。頸部はヨコナデにより刷毛目調整痕は残らない。52は底部小片であるが，上げ底で部厚い底部になる。

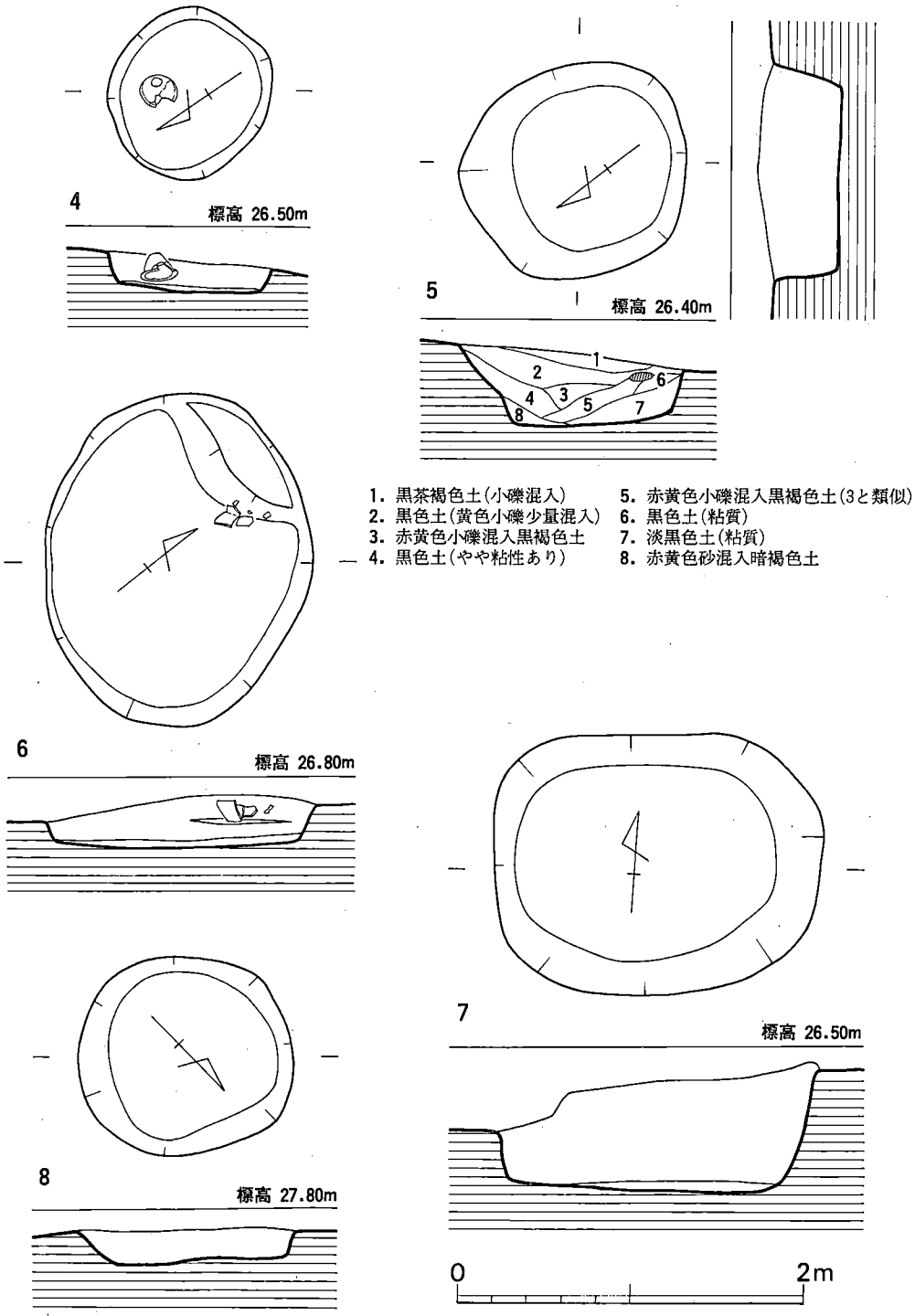
**壺**（53・54）　いずれも，肩部破片で，53は球形に近い胴部を持ち，頸部に近い部分に２本の平行沈線が残り，肩部に３本単位の沈線が弧線を描く。外面は斜位のヘラ研磨，内面は上部までヘラ研磨が及ぶ。54はやや胴が張る壺で，頸部付近に２本の沈線をめぐらし，肩部に２本単位沈線の弧線を描く。内外面ともヘラ研磨がなされている。

## 6号貯蔵穴（図版４－２，第12図）

平面楕円形をなし，北側に低い段がつく。底部平面径は175×138cmで，上面削平のため壁は開き気味に立ち上り30cm残すのみである。遺物は底面近くにまとまって出土した土器（甕・壺）破片のみである。

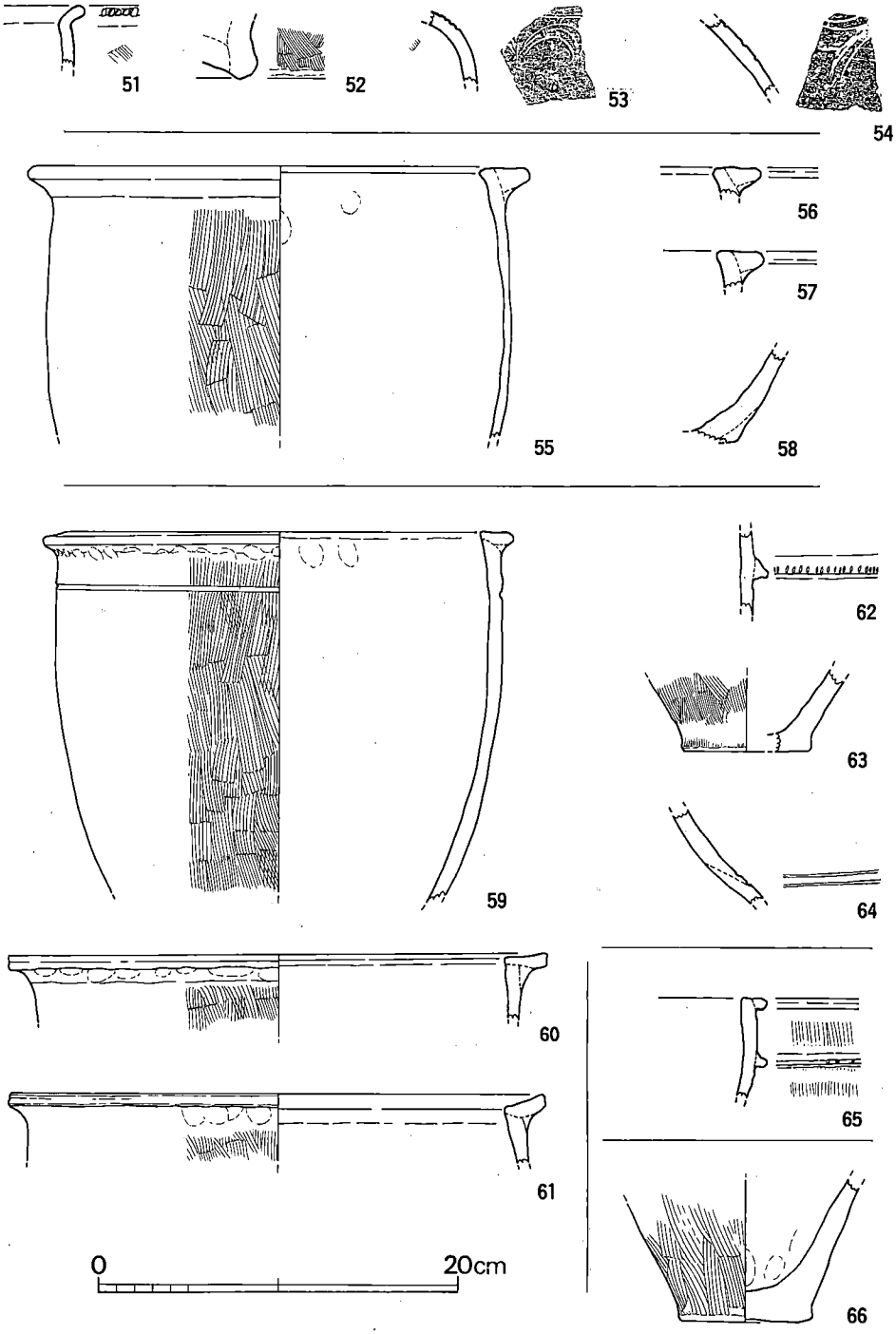
出土遺物（第13図）

**甕**（55～57）　いずれも，逆Ｌ字形の口縁をなし，口縁はやや内傾する。口縁外側張り出し部の下は，補強のための粘土が断面三角状に充填され，その部分は内外面とも，ナデまたは指




1. 黒茶褐色土(小礫混入)
2. 黒色土(黄色小礫少量混入)
3. 赤黄色小礫混入黒褐色土
4. 黒色土(やや粘性あり)
5. 赤黄色小礫混入黒褐色土(3と類似)
6. 黒色土(粘質)
7. 淡黒色土(粘質)
8. 赤黄色砂混入暗褐色土

**第 12 図** 4～8号貯蔵穴実測図(1/40)




**第 13 図**　5～9号貯蔵穴出土土器実測図(1/4)

押圧が行われる。外面の刷毛目調整痕はその部分以下に残る。

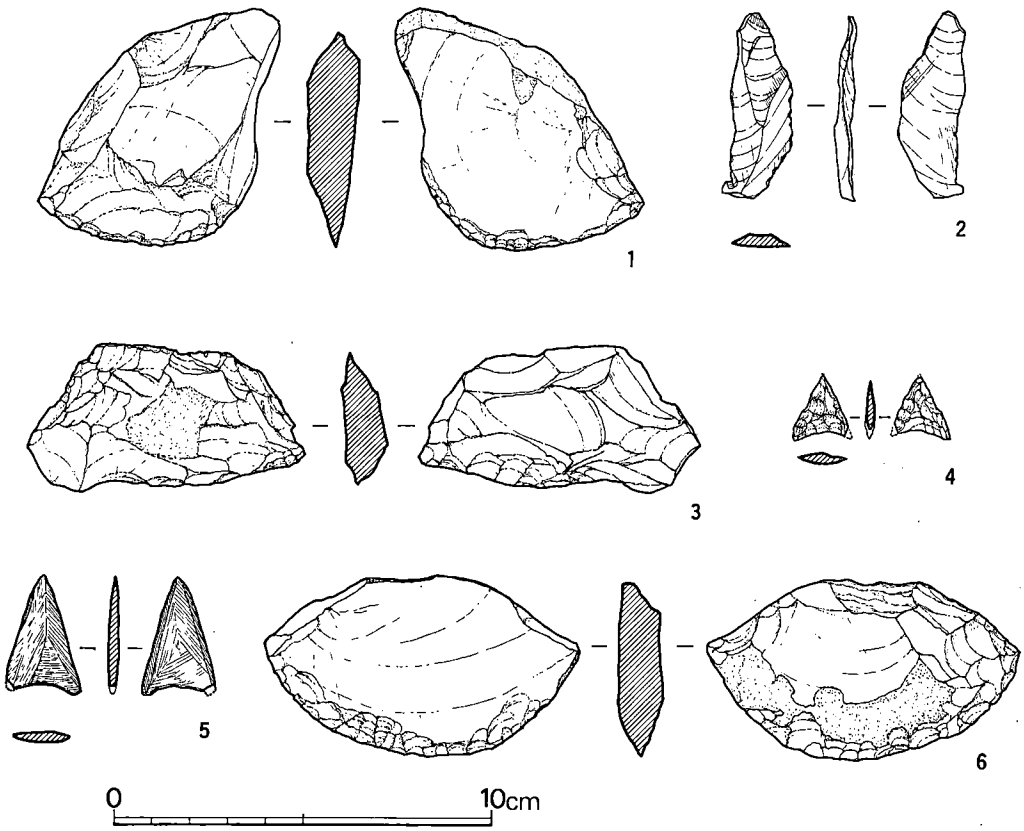
**壺**（58）　底部の小破片であるが，丸底風に底部を形成したためと，粘土を輪状に貼り付け平底に整形した痕跡が明瞭に残る。外面は，ヘラ研磨が行われ，内面には指頭痕が残る。（木村）

## 7号貯蔵穴（第12図）

調査区の北半部にあり，1号住居跡の下層から検出された胴張り隅丸長方形プランの竪穴で，断面は逆台形状を呈す。長径150cm，短径114cm，深さ東壁で70cmを測る。出土遺物として壺・甕等の破片が少量とスクレイパー1点が出土している。

出土遺物（図版49，第13図）

**甕**（59～63）　口縁部の形状により2タイプあり，口縁端部に三角凸帯を付したもの（59）と逆L字状口縁のもの（60・61）がある。59の口縁下には1条の沈線，62のように三角凸帯を




**第 14 図**　貯蔵穴出土石器実測図1（1/2）

めぐらすものもある。調整は62が内外ともヨコヘラ磨きで仕上げている他は，外面刷毛，内面ナデ，口縁部内外はヨコナデ調整である。また，口縁部成形時の指頭圧痕をいづれも口縁下に良く残している。復原口径は59が26.2cm，60が29.7cm，61が29.6cmを測る。色調はほゞ燈色である。63は底部の破片資料で，復原底径7.2cmの平底である。調整は外面刷毛，内面ナデで仕上げている。

**壺**（64）　肩部に２条の沈線がめぐる頸部付近の破片資料で，内外ともヘラ磨きで仕上げた作りの良い土器である。色調はやゝ淡い燈色である。

**スクレイパー**（第14図１）　サヌカイト製のスクレイパーで，刃部長5.7cmを測る。

## ８号貯蔵穴（第12図）

発掘区東端の中央付近から検出された不整円形プランの小竪穴で，長径96cm，短径95cm，深さ20cmを測る。出土遺物は甕小片が若干出土しただけである。

出土遺物（第13図）

**甕**（65）　口縁端部と口縁下に凸帯をめぐらした甕の小破片で，口縁下の凸帯には刻目が施されている。外面刷毛，内面ナデ調整で，色調は赤味のある肌色を呈す。

## ９号貯蔵穴（第15図）

８号貯蔵穴の南側から検出された不整円形プランの小竪穴で，長径125cm，短径120cm，深さ25cmと浅い。

出土遺物（第13図）

**甕**（66）　底径7.4cmを測る平底の資料で，外面は刷毛，内面はナデ調整，内底部には指頭圧痕を残している。色調は暗茶褐色で，焼成良好である。

## 10号貯蔵穴（第15図）

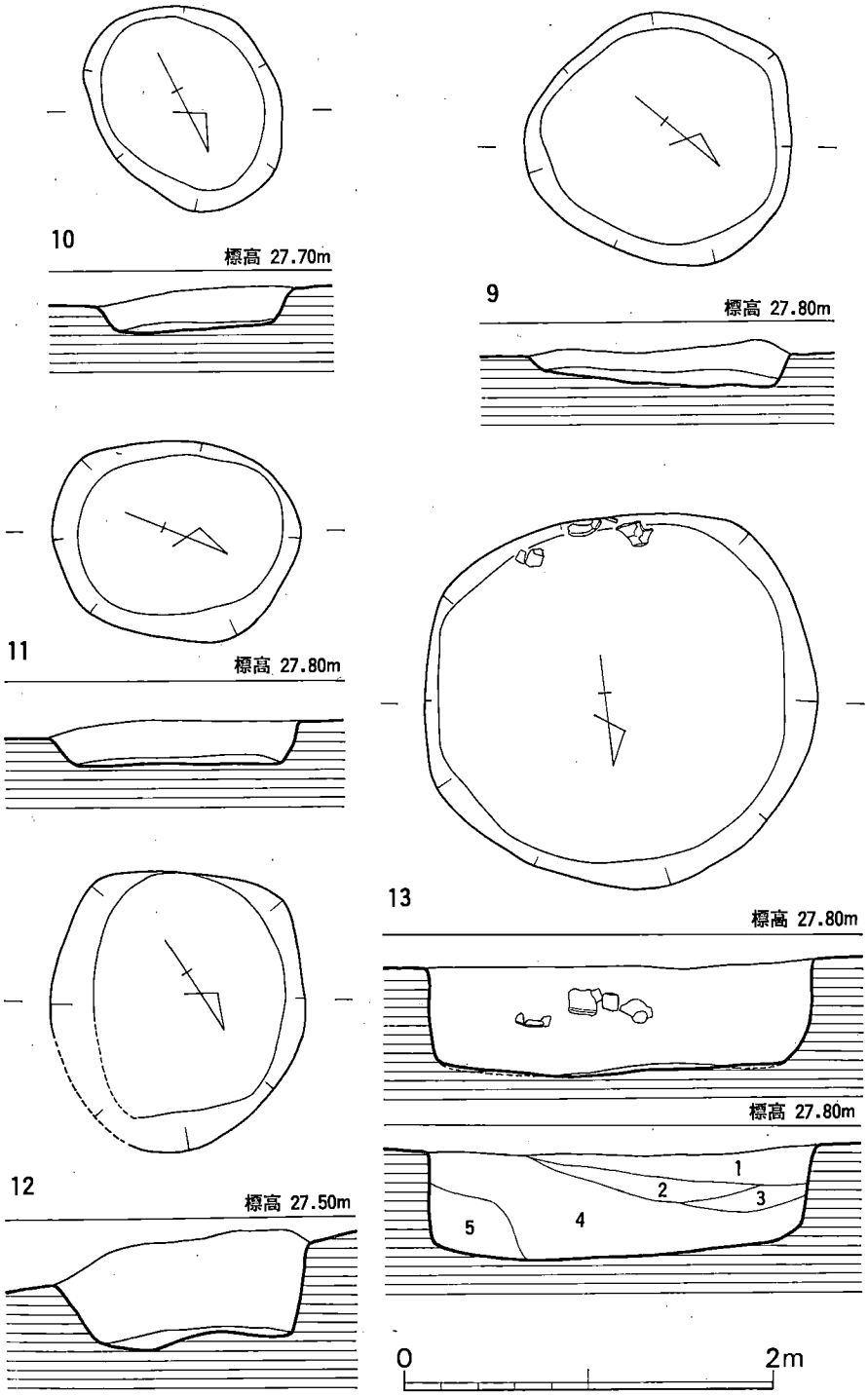
９号貯蔵穴の東側から検出された楕円形プランの小竪穴である。規模は，長径102cm，短径82cm，深さ23cmを測り，上面の削平が著しい竪穴である。

出土遺物（第16図）

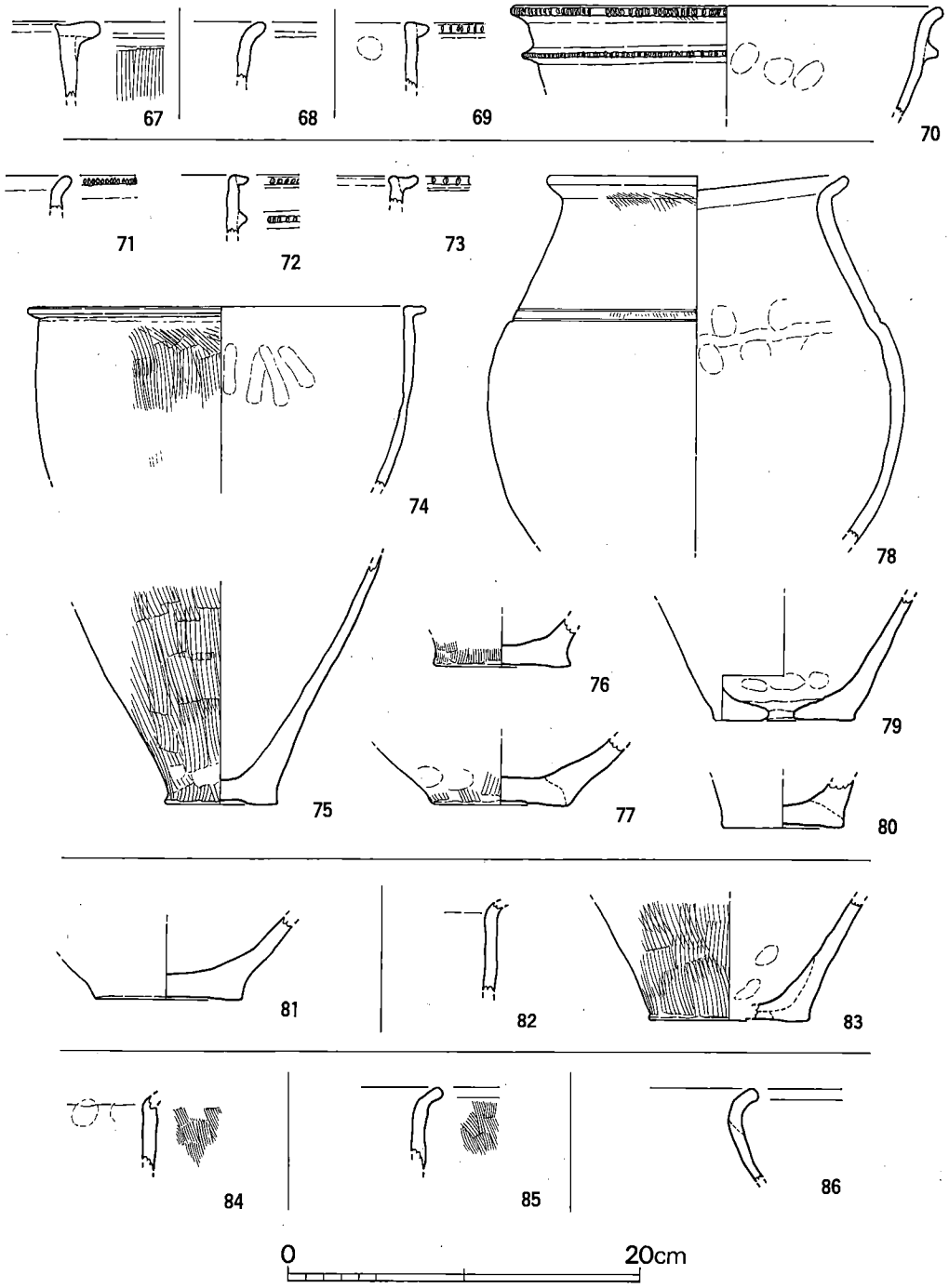
**甕**（67）　原初的なＴ字状口縁の小破片で，口縁部内面のつまみ出しがまだ小さいものである。外面は刷毛，内面はナデ，口縁部内外はヨコナデで仕上げている。色調は肌色を呈す。

## 11号貯蔵穴（第15図）

10号貯蔵穴の南側から検出された小竪穴で，底面のプランは楕円形を呈す。規模は，長径111cm，短径85cm，深さ24cmを測る。断面の形状は逆台形状をなす。出土遺物は土器小片が若




**第 15 図** 9～13号貯蔵穴実測図(1/40)




**第 16 図**　10～15･17～19号貯蔵穴出土土器実測図(1/4)

干出土しただけである。

出土遺物（第16図）

**甕**（68）　口縁部の外反が弱い如意形口縁の甕の小破片である。内外とも板状工具によるナデ，口縁端部内外はヨコナデ調整である。色調は肌色を呈す。

## 12号貯蔵穴（第15図）

11号貯蔵穴の東側から検出された長径130cm，短径104cm，深さ56cmを測る底面プランが不整楕円形を呈す小竪穴である。出土遺物として甕小片が若干とサヌカイト片１点が出土しているだけである。

出土遺物（第16図）

**甕**（69）　口縁端部に三角凸帯を付した甕の小破片である。凸帯外面には刻目が施され，外面全体に煤の付着がみられる。

**鉢**（70）　復原口径24.5cmを測る如意形口縁の鉢で，口縁下には１条の凸帯がめぐる。口縁端部と凸帯には刻目が施されている。外面は器面が剝離しているため調整は不明だが，内面はヨコヘラ磨きで仕上げている。色調は暗茶褐色を呈し，焼成は良好である。

## 13号貯蔵穴（図版６－１，第15図）

11号貯蔵穴の南西から検出された円形プランの竪穴である。長径185cm，短径180cm，深さ55cmを測り，壁面は直立気味である。埋土中からは壺・甕等の破片資料がかなり出土した。また，縄文時代早期の押型文土器小片も出土している。

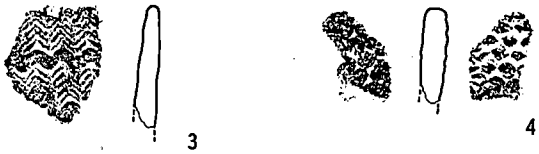
出土遺物（図版53－２，第16図）

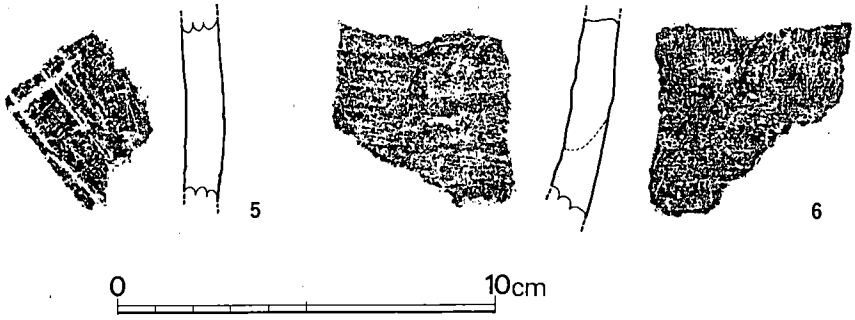
**甕**（74～77・80）　74は口縁端部に細身の三角凸帯を付した甕である。調整は外面刷毛，内面ナデ，口縁部内外はヨコナデで仕上げている。75は胴部下半，76・77・80は底部の資料で，いづれも平底である。底径は75が6.5cm，76が7.9cm，77が7.7cm，80が７cmを測り，75・77の外底部はわずかに凹み底となる。いづれも調整は外面刷毛，内面ナデ調整である。

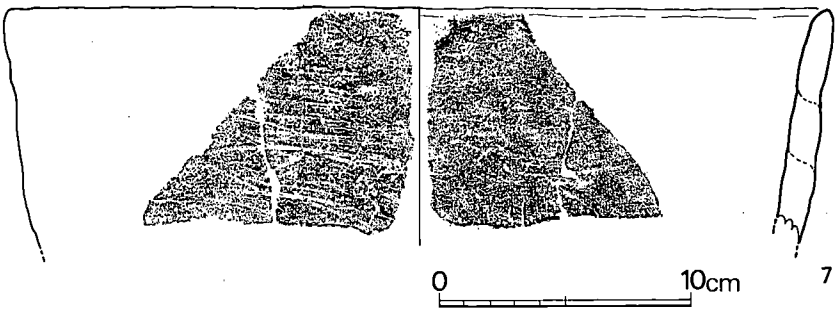
**甑**（79）　焼成後に穿孔した甑の底部付近の資料で，底径８cmを測る。調整は外面ヘラ磨き，内面ナデで仕上げ，内底部には指頭圧痕を残している。底部の一部に黒班がある。

**壺**（78）　球形の胴部に太い口頸部がつく壺で，肩部には２条のヘラ描き沈線がめぐっている。復原口径17.1cm，胴部最大径23.5cm，現存器高20.7cmを測る。外面は刷毛調整のあと，丁寧なヘラ磨き，内面はナデて仕上げた作りの良い焼成良好な土器である。色調は燈色を呈す。

**押型文土器**（第17図１）　外面に山形文を施した胴部の破片資料で，一部を磨消している。色調は明褐色を呈す。




**第 17 図**　貯蔵穴出土縄文土器実測図(1/2・1/3)

## 14号貯蔵穴（図版６－２，第18図）

発掘区東端中央にあり，13号貯蔵穴の南側から検出された円形プランの小竪穴で，長径125cm，短径124cm，深さ25cmを測る。

出土遺物（第16図）

**壺**（81）　壺の底部付近の資料で，外底部を除き，内外ともヘラ磨きで仕上げている。底部外面には擦過痕がみられるが工具は不明である。色調は黒褐色を呈し，底径は8.3cmを測る。

## 15号貯蔵穴（図版７－２，第18図）

14号貯蔵穴の東側にあり，西壁側を16号貯蔵穴に切られた円形プランの竪穴である。規模は長径130cm，推定短径120cm，深さ57cmを測る。

出土遺物（第16図）

**甕**（82・83）　82は如意形口縁の口縁部付近，83は底部付近の破片資料である。82は内外ともナデ，83は外面刷毛，内面ナデて仕上げている。色調は82が暗燈色，83は暗茶褐色を呈す。

## 16号貯蔵穴（図版７－２，第18図）

14号貯蔵穴の南側に近接し，15号貯蔵穴の一部を切って造られた典型的な袋状竪穴である。底面のプランは胴張り隅丸長方形で，長径130cm，短径115cm，深さ67cmを測る。出土遺物は何等出土しなかった。

## 17号貯蔵穴（図版７－１，第18図）

16号貯蔵穴の南側から検出された底面形が楕円形を呈す竪穴で，断面は袋状をなす。規模は，長径155cm，短径130cm，深さ63cmを測る。

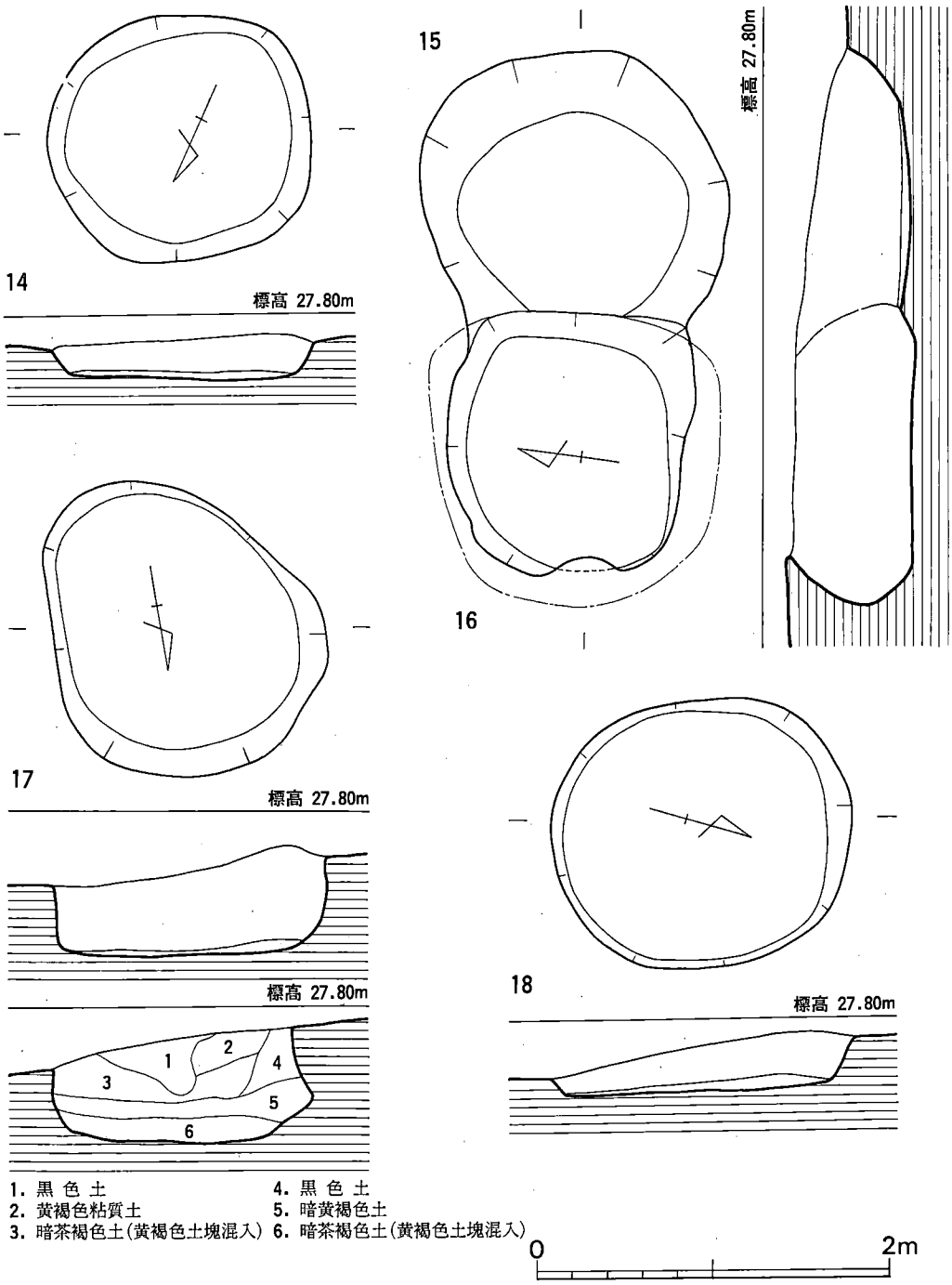
出土遺物（図版53－２，第16図）

**甕**（84）　口縁部は欠失するが如意形口縁の甕の小破片と思われる。外面は細かい刷毛，内面はナデて仕上げている。色調は暗茶褐色を呈し，一部に煤の付着がみられる。

**押型文土器**（第17図２）　口縁部付近破片で，表裏に楕円押型文が施される。内面は，約６mmの空白部をあけ２段横位に施文する。原体の長さは1.5cm以上。外面は横位に全面施文するが，部分的にナデ消される。

## 18号貯蔵穴（図版７－２，第18図）

17号貯蔵穴の南側に近接し，19号貯蔵穴の一部を切っている。底面形は円形で，長径150cm，短径140cm，深さは残りの良い北壁で33cmを測る。出土遺物は甕などの小片が若干出土したの




**第 18 図**　14～18号貯蔵穴実測図(1/40)

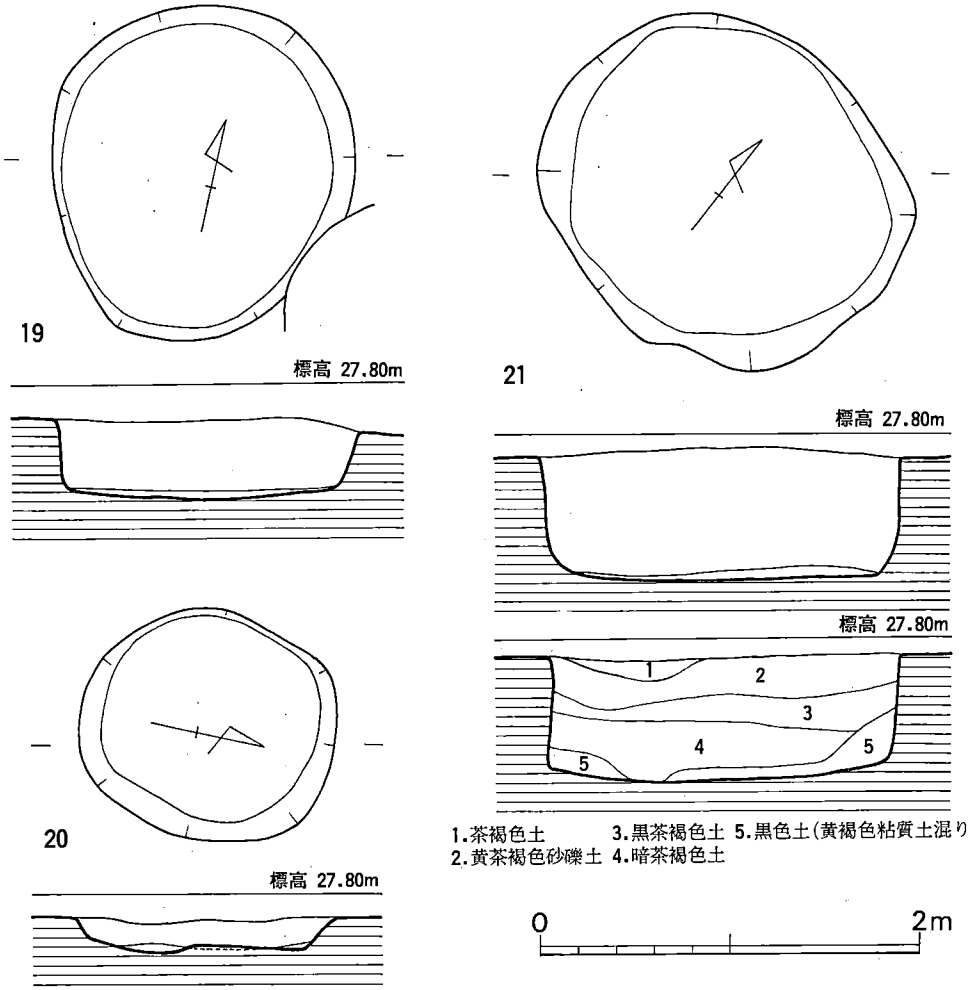
みである。

出土遺物（第16図）

**甕**（85）　緩やかに外反した如意形口縁の甕の小破片である。外面は細い刷毛，口縁部内外はヨコナデ調整で，外面には煤の付着がみられる。色調は外面が黒褐色，内面は淡い燈色を呈し，焼成も良好である。

## 19号貯蔵穴（図版８－１，第19図）

17号貯蔵穴の南側にあり，東壁の一部を18号貯蔵穴に切られた状態で検出された。底面形は楕円形プランで，規模は長径160cm，短径143cm，深さ42cmを測る。遺物は若干の土器小片が出土しただけである。




**第 19 図**　19～21号貯蔵穴実測図(1/40)

出土遺物（第16図）

**壺**（86）　口頸部付近の小破片で，内外ともヘラ磨きで仕上げた作りの良い土器である。色調は茶褐色で，焼成も良好である。

## 20号貯蔵穴（図版８－２，第19図）

17号貯蔵穴の西側から検出された，長径112cm，短径102cm，深さ15cmと浅い小竪穴である。底面形は楕円形を呈す。遺物は何等出土しなかった。

## 21号貯蔵穴（図版９－１，第19図）

発掘区東端中央部にあって，14号貯蔵穴の西側から検出された楕円形プランの袋状竪穴である。規模は，長径172cm，短径153cm，深さ82cmを測る。埋土中からほぼ完形の甑が出土している。

出土遺物（図版41，第21図）

**甕**（88・89）　88は逆Ｌ字状口縁，89は如意形口縁の甕の小破片である。89の外面には多量の煤が付着している。

**甑**（87）　口縁部は如意形で，口縁下に２条の沈線がめぐるが，下の沈線は浅く部分的に途切れている。口縁端部には刻目が施され，底部は焼成後に穿孔されている。外面は器面の剝落が著しいが，調整は外面は刷毛，内面はナデて仕上げている。色調は暗茶褐色を呈す。口径20.2cm，器高22.5cm，底径7.2cmを測る。

## 22号貯蔵穴（図版９－２，第20図）

21号貯蔵穴の南側から検出された楕円形プランの小竪穴である。規模は長径130cm，短径120cm，深さ14cmを測る。

## 23号貯蔵穴（図版９－２，第20図）

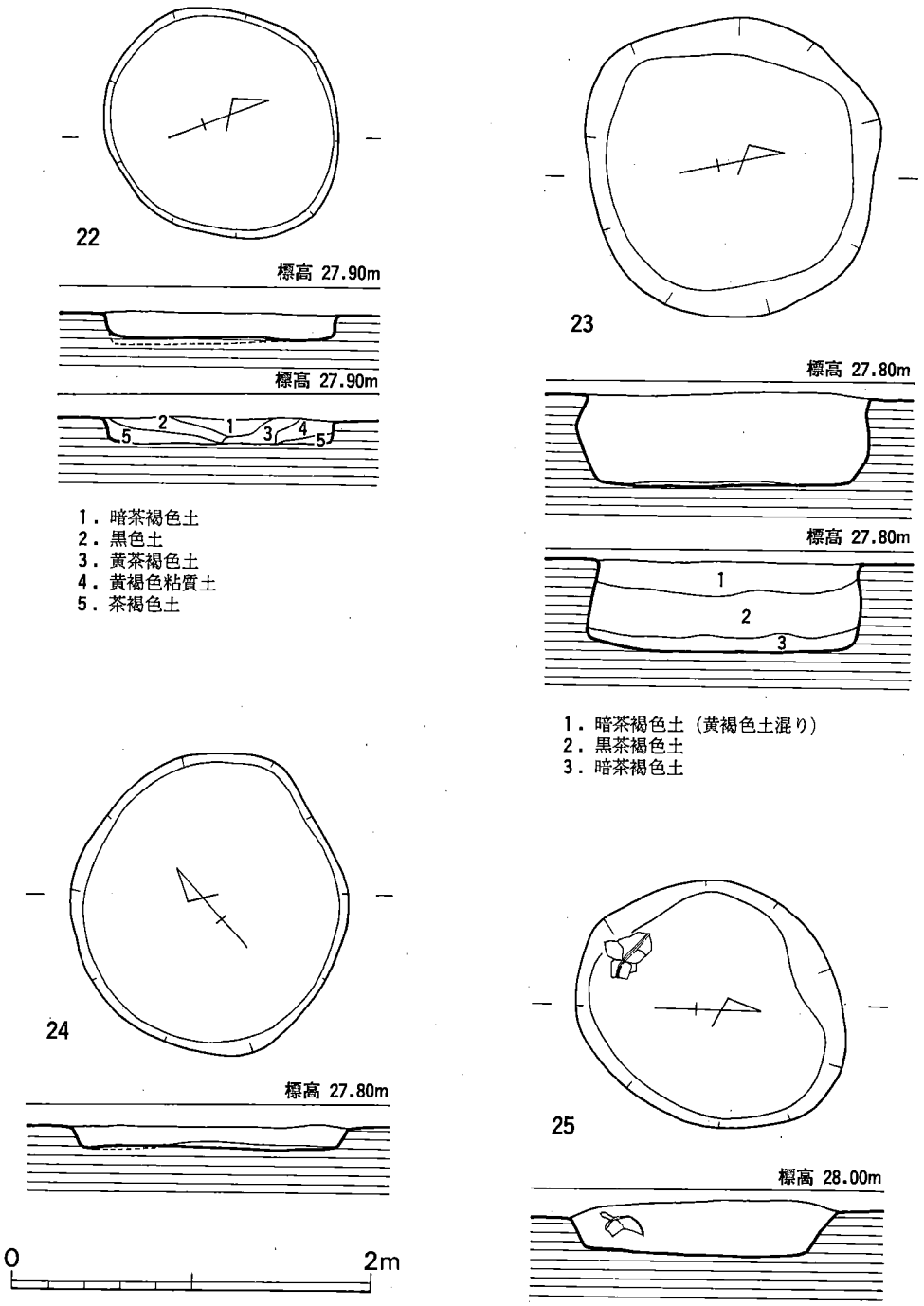
22号貯蔵穴の南側に近接した袋状竪穴で，底面形は胴張り隅丸方形を呈す。規模は長径135cm，短径131cm，深さ52cmを測る。出土遺物は，弥生土器小片と黒曜石・サヌカイト片が若干である。

出土遺物（第21図）

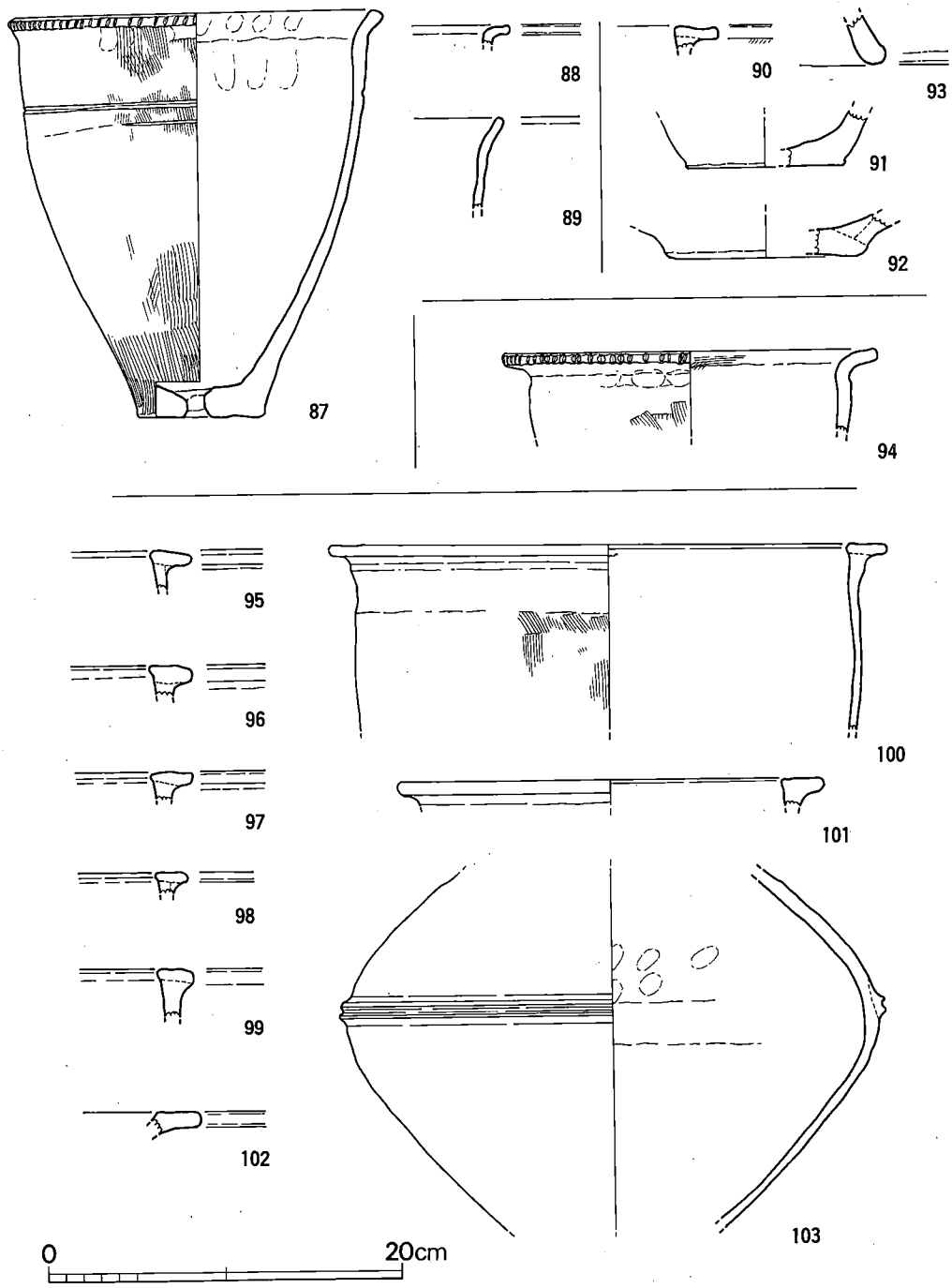
**甕**（90）　逆Ｌ字状口縁甕の口縁部小片である。色調は燈色で，焼成も良好である。

**壺**（91・92）　底部付近の破片資料で，復原底径は91が９cm，92が11cmを測る。92の内外はヘラ磨きで仕上げていて，壺には珍しいが外面には厚く煤が付着している。

**器台**（93）　裾部の小破片で，色調は肌色で焼成も良い。




**第 20 図**　22～25号貯蔵穴実測図(1/40)




第 21 図　21･23～25号貯蔵穴出土土器実測図(1/4)

## 24号貯蔵穴（図版９－２，第20図）

23号貯蔵穴の南側から検出された底面形が円形プランの浅い竪穴である。規模は長径156cm，短径143cm，深さ11cmを測る。

出土遺物（第21図）

**甕**（94）　小形の如意形口縁の甕で，復原口径21cmを測る。胴部外面を刷毛，内面はナデ，口縁部内外はヨコナデ調整し，口縁端部には刻目を施している。色調は暗茶褐色を呈し，外面には煤の付着がみられる。

## 25号貯蔵穴（第20図）

発掘区東端中央にあって，24号貯蔵穴の南側から検出された竪穴で，底面形は不整楕円形を呈す。底面より若干浮いた状態で壺・甕等の破片が少量出土した。規模は，長径140cm，短径115cm，深さ30cmを測る。

出土遺物（第21図）

**甕**（95～101）　いづれもＴ字状口縁の甕で，98・99は原初的なＴ字状口縁である。100は復原口径31.4cm，101は24cmを測る。

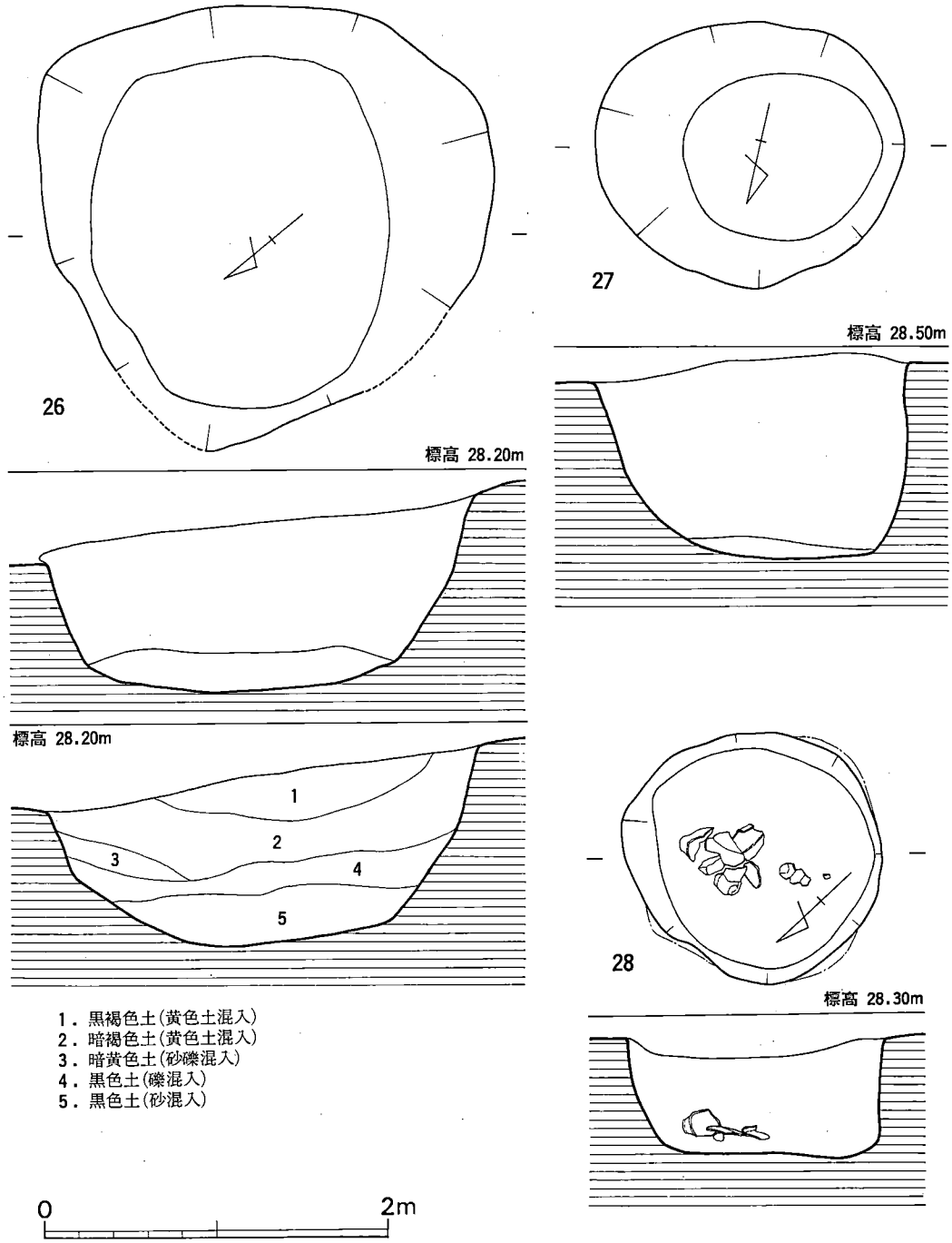
**壺**（102・103）　102は鋤先状口縁の小破片，103は扁球形の胴部資料で，外面にはＭ字状凸帯が付されている。胴部内面はナデ，内面の上方の一部と外面はヘラ磨きで仕上げている。色調は暗茶褐色を呈し，焼成も良好である。胴部最大径は30cmを測る。　（井上）

## 26号貯蔵穴（図版10－１，第22図）

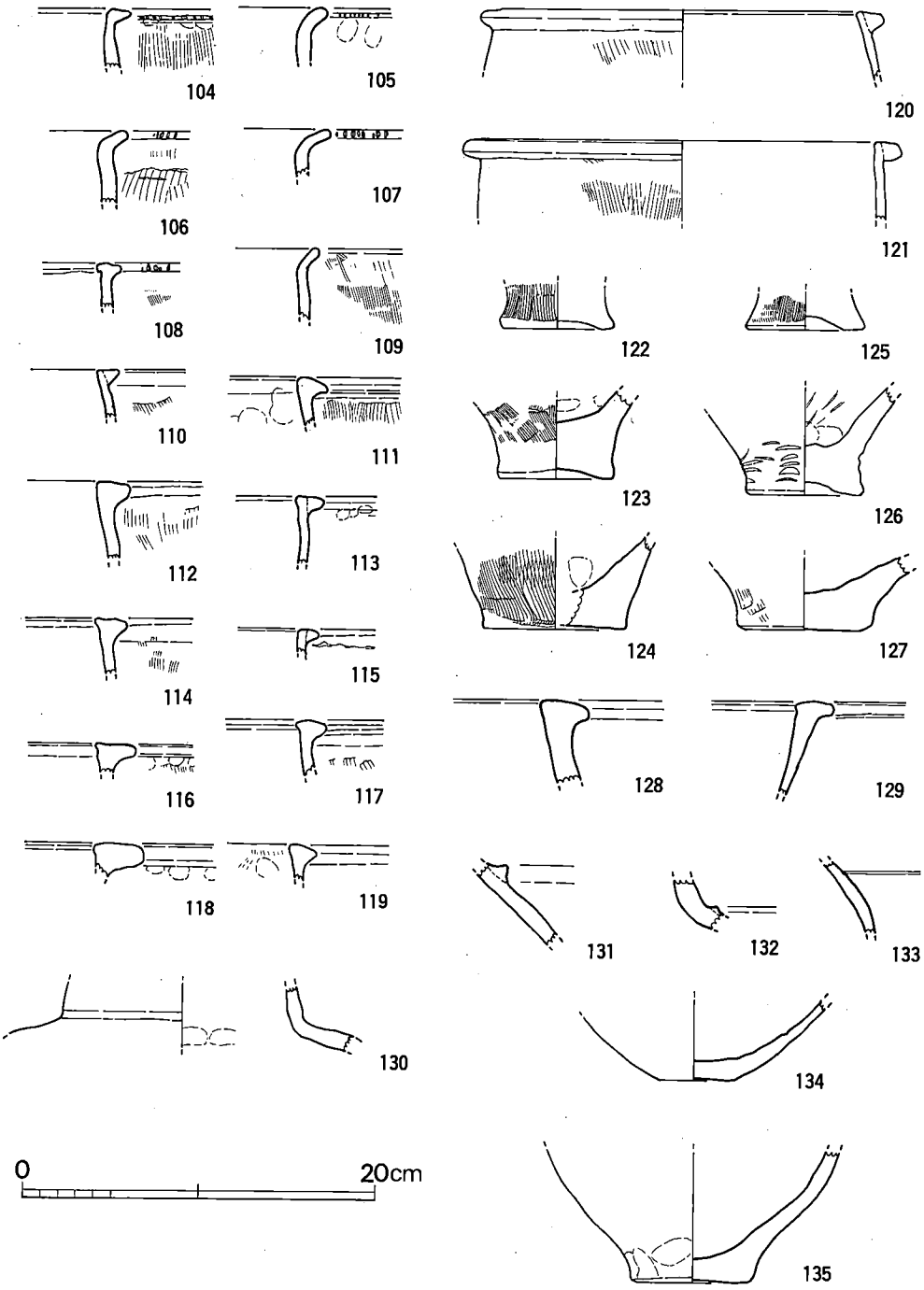
貯蔵穴群の北東側に位置し，26～28号と一群をなす。上面は一部崩落のため不整形をなすが，底部平面形は径205×173cmの胴張り隅丸長方形をなす。壁はやや膨らみながら外に開き約110cm残存する。埋土は，底面近くは水平に近く堆積し，上部になるとスリ鉢状に近い堆積を示す。遺物は土器・円盤状土器片・サヌカイト剝片が出土している。

出土遺物（図版51，第23・24図）

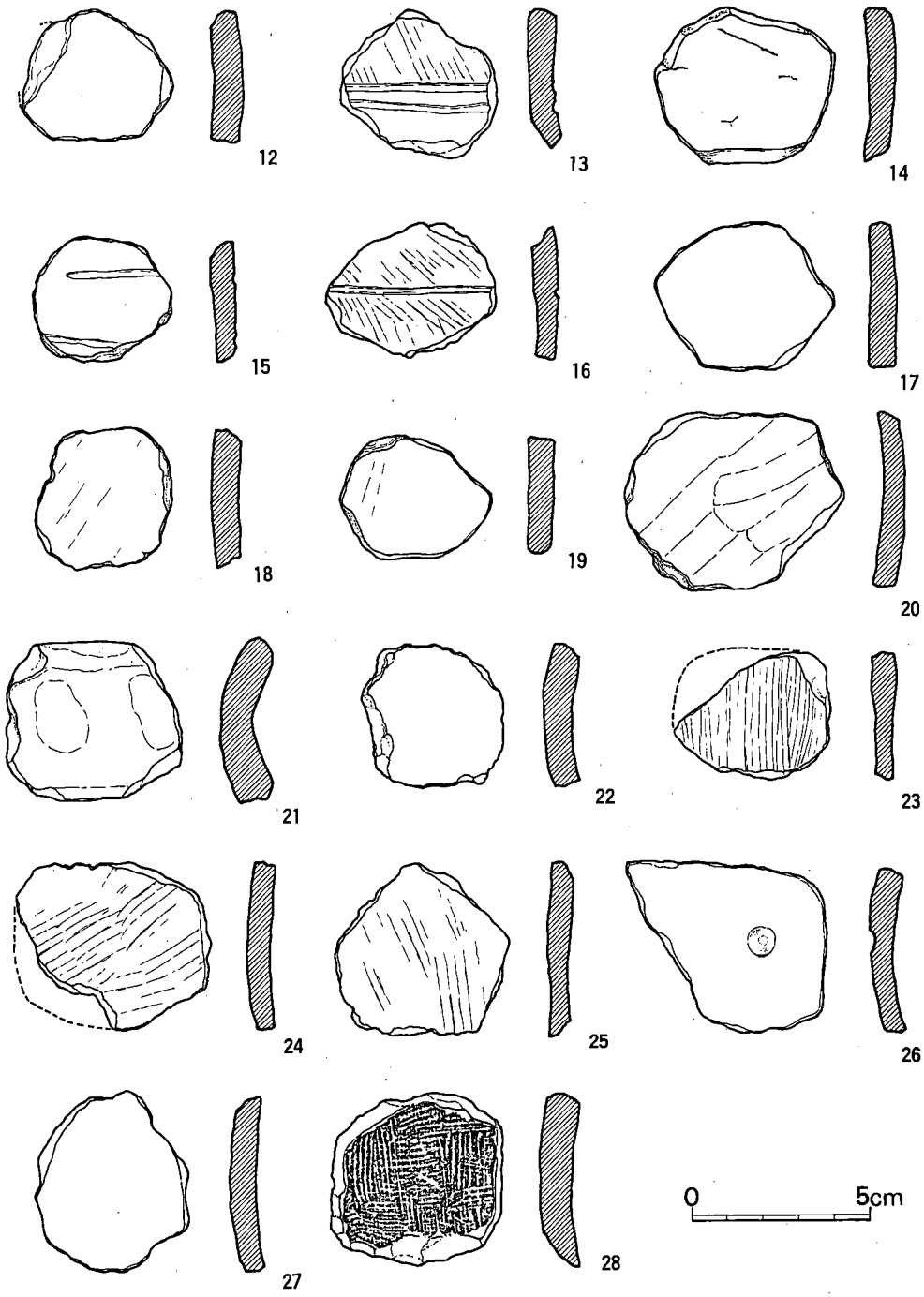
**甕**（104～127）　如意形口縁をなし，刻目を持つもの（105～107），口縁端に断面三角形の粘土帯をめぐらし，刻目を施すもの（104・108），刻目を施さないもの（110～117・119～121）がある。104～108は，小片のため下位にもう１条の凸帯が貼付されるのかは明らかでない。口唇部刻目は，105が下端に，106・107は端部全面に施されている。120・121は口縁部粘土帯は断面台形に近くなっている。復原口縁内径は，120が19.6cm，121が21.6cmである。122～127は底部で，平底をなすもの（124），上げ底になり厚みをもつもの（122・123）がある。いずれも外面に刷毛目調整痕が残る。




**第 22 図**　26～28号貯蔵穴実測図(1/40)




**第 23 図**　26号貯蔵穴出土土器実測図(1/4)




**第 24 図**　貯蔵穴出土土製品実測図3 (1/2)

**鉢**（129）　口唇部外面に粘土帯を貼り，逆Ｌ字状の口縁にし，口唇部内面は，ヘラナデにより，若干突出させる。内外面とも口縁下3.5～3.0cmまで横位ヘラ研磨が施され，以下はナデ調整が行われる。高杯の杯部の可能性もある。

**壺**（128・130～135）　128は口縁部片で，口唇部に断面三角形に近い粘土帯を貼付する。内外面とも丁寧にヘラ研磨が施される。130～133は，頸部から肩部にかけての破片である。131・132は頸部に断面三角形の凸帯を持ち，133は肩部に一本沈線が引かれる。134・135は底部片である。130は，おそらく混入品であろう。

**円盤状土器片**（第24図12）　甕形土器胴部破片を打欠きにより楕円形に成形する。周縁磨滅のため明瞭でないが，短辺部に紐かけ用の抉りのような部分が残る。一部欠損するが，重量は13.95ｇである。

**サヌカイト剝片**　２点検出されており，１点は，1.5×2.2cmの小片であり，他は3.1×5.0cmの縦長の剝片である。

## 27号貯蔵穴（図版10－２，第22図）

26号の西側にある。底部平面形は116×97cmの楕円形をなす。壁は，一部袋状をなすが，他は崩落のためか，スリ鉢状に外に開く。残存の深さは116cmである。上面形は180×155cmの楕円形をなす。遺物は，下層と上層に分けて取り上げた土器と，砥石・円盤状土器片がある。

出土遺物（図版49，第24～27図）

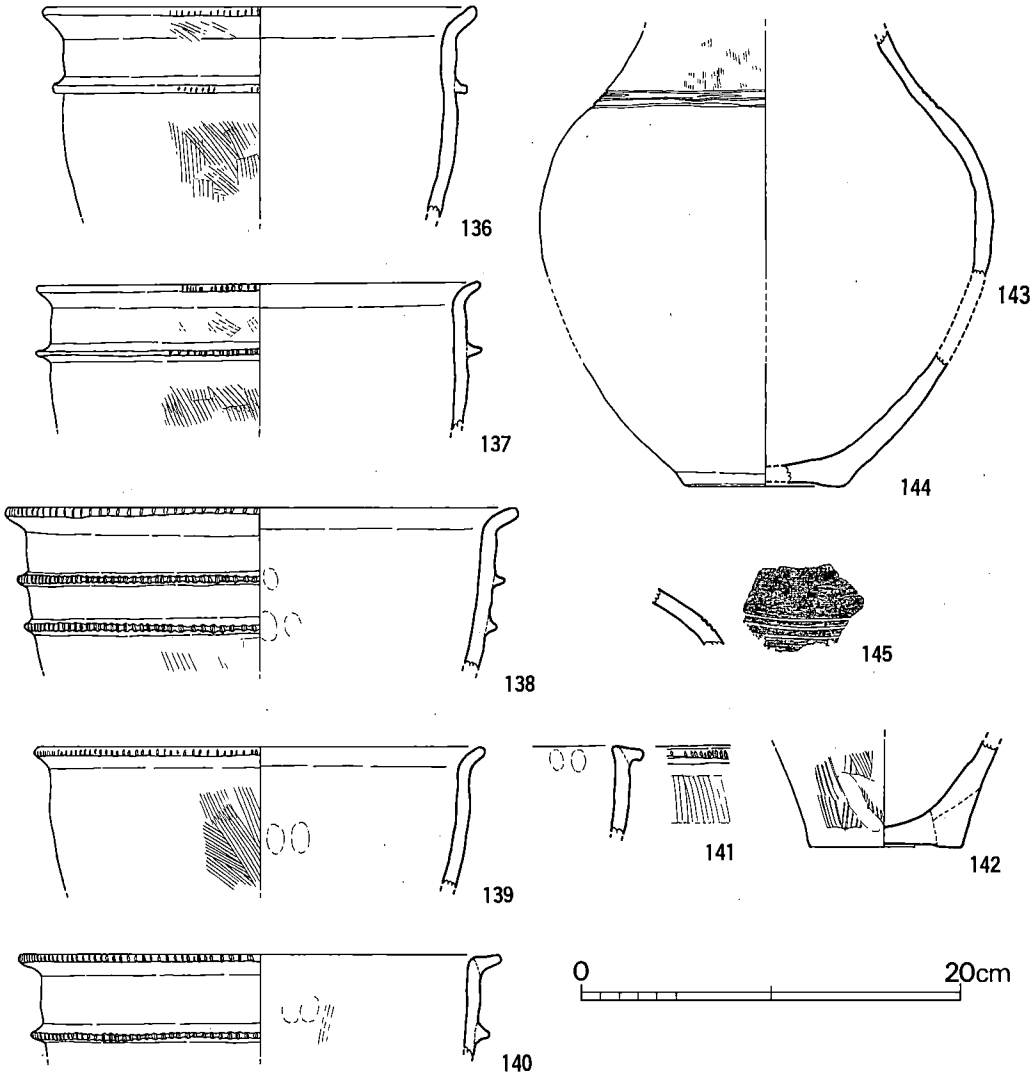
下層出土土器（第25図）

**甕**（136～142）　136～141は，口縁部片であるが，如意形口縁（136～139），如意形に近いが粘土を貼付したもの（140），粘土を貼付し，逆Ｌ字状口縁をなすもの（141）がある。いずれも口唇部に刻目を施すが，139のみ口唇部下端に施され，136・137・138・140・141は，端部に施される。136は，口縁下4.5cmに，やや垂れ下がった刻目を施した粘土凸帯をめぐらす。復原口径23cm。137に１条，138には２条，140に１条の断面三角形の刻目を持った凸帯をめぐらす。復原口径は，137が23.5cm，138が27.0cm，139が23.9cm，140が25.4cmである。142は，平底で薄手の底部で，136～141までの甕の底部としておかしくないものである。外面は刷毛目調整の後，一部ヘラナデが施される。

**壺**（143～145）　143と144は，接続部分はないが同一個体と思われるものである。頸部に３条の浅い沈線を施し，外面はヘラ研磨を施す。頸部に一部刷毛目調整痕が残る。底部は平底であるが中心部を若干凹ませている。145は，肩部破片で３条の沈線が残る。外面は，刷毛目調整のあと縦位のヘラ研磨が施されている。

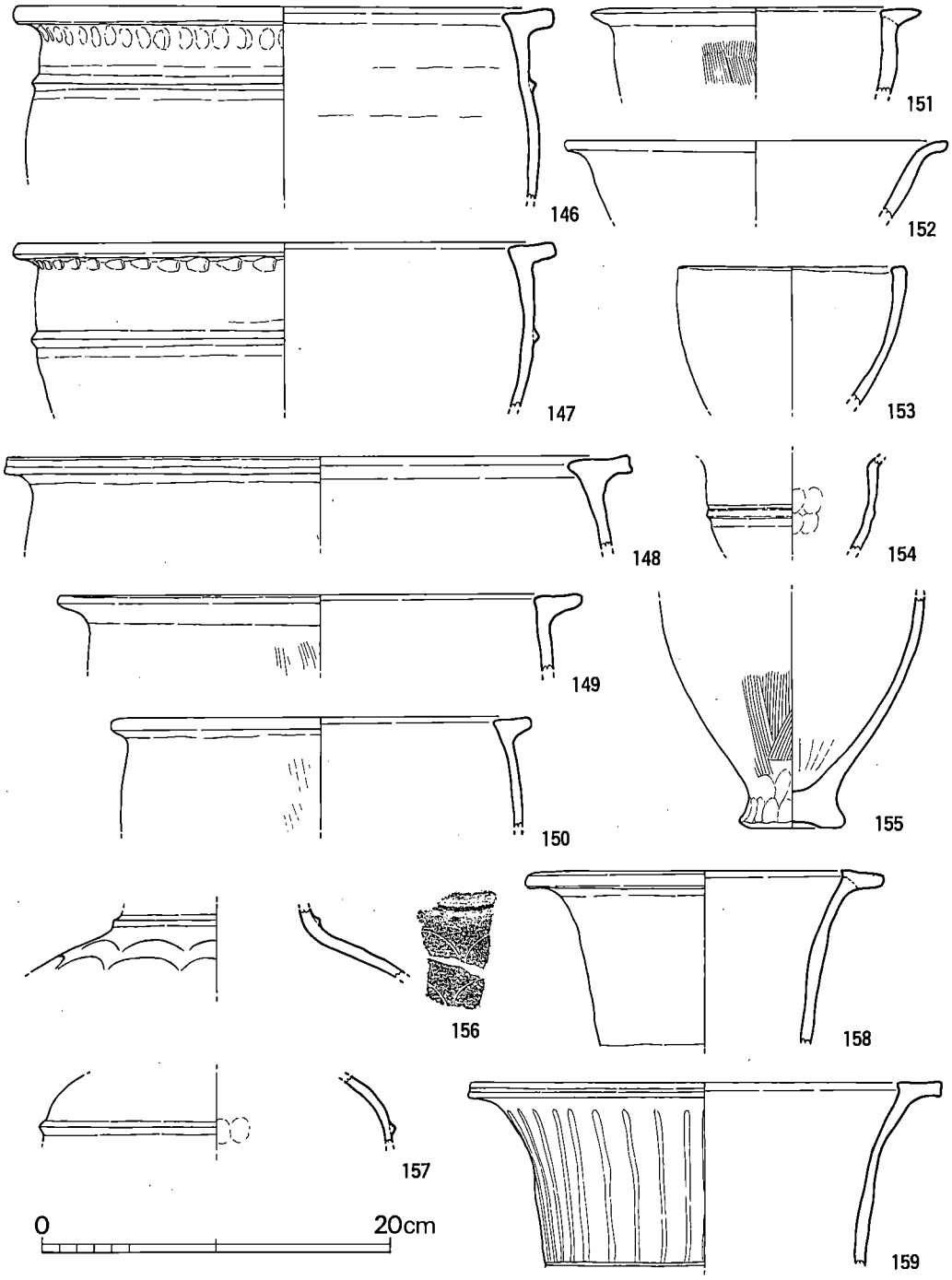
上層出土土器（第26図）

**甕**（146～151・155）　いずれも，口縁端外面に粘土帯を貼付し逆Ｌ字形の口縁とする。146・




**第 25 図**　27号貯蔵穴出土土器実測図1 (1/4)

147は，口縁下約 4 cmと 5 cmの位置に，断面三角形の粘土帯を 1 条貼付する。口縁外面粘土帯接合部には工具による押圧の痕が明瞭に残る。復原口縁内径は，146は25cm，147は25.4cmである。148は，口縁外面端に明瞭な面をつくり，粘土接合部には工具痕が残る。内外面とも横位のヘラ研磨が施される。復原口縁内径28.5cm，149・150は口縁外面端部は丸味をおびる。外面は刷毛目調整が施されるが，多くはナデ消されている。復原口縁内径は，149が24.5cm，150が19.7cmである。151は小形の甕で，口縁部上面は丸味を帯び，外端部は幾分尖り気味になる。




**第 26 図**　27号貯蔵穴出土土器実測図2 (1/4)

口縁下２㎝以下に刷毛目調整痕が残る。復原口縁内径は14㎝である。155は胴部から底部にかけての破片で，底部は括れ，指頭押圧痕が残る。内面底部はヘラでまわしながら削ったような痕が残る。外面は刷毛目の多くはナデ消されている。残存高13㎝。

**鉢**（152～154）　152は，外に開き口縁部でゆるやかに外反する浅鉢で，内面は丁寧に横位のヘラ研磨が施される。外面は口縁部が横位，頸部以下が縦位にナデ調整される。復原口径21.8㎝。153は，口縁が直口し，口縁端部は平坦である。外面は，口縁直下９㎜は，凹線状にナデが施され，以下3.2㎝までは横位，それ以下を縦位のヘラ研磨をする。復原口径13㎝。154は，口縁が外反する小形の鉢で，胴部に断面台形の粘土帯がめぐる。口縁端を欠くが復原口径は11.2㎝ほどになる。

**壺**（156～159）　156・157は頸部から肩部の破片で，156は頸部に断面三角形の凸帯がめぐり，肩部に約３㎝程の間を置いて連弧沈線文を２列施す。外面は凸帯部分以外はヘラ研磨，内面は頸部までヘラ研磨，以下をナデ調整をする。157は，球形胴部をなす壺の肩部に断面三角の粘土帯をめぐらす。外面は，横位ヘラ研磨が行われている。158・159は，口頸部破片で，鋤先状に近い口縁をなす。いずれも，頸部と胴部の接点に１条の沈線が引かれている。159は，外面に縦位の暗文が施され，内面は横位のヘラ研磨が行われている。復原口縁内径は，158が15.8㎝，159が22㎝である。

**砥石**（第27図10）　上層より出土しており，断面長方形をなし，４面を使用している。いずれの面も平坦でなく，ゆるやかに凹む。一面に金属によると思われるキズが数条はしる。一方が欠損し，残存長４㎝，厚さ2.7×1.8㎝程である。

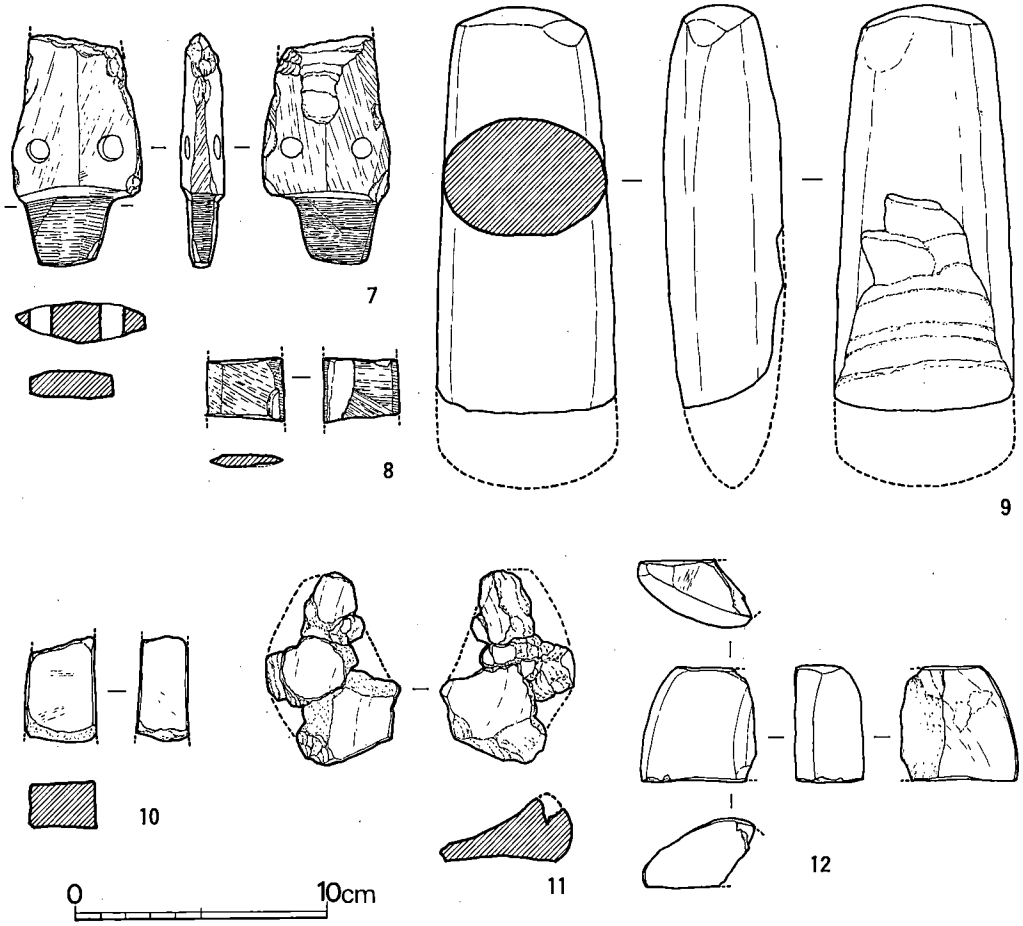
**円盤状土器片**（第24図13）　壺の頸部沈線部分の破片を利用したもので，打欠きは両面より行われ，周囲角部は磨滅する。特別に紐かけを意図した打欠き，切り込みはない。14.55ｇ。

## 28号貯蔵穴（図版11－１・２，第22図）

27号の南側にあり，底部平面形は132×123㎝の不整円形をなす。壁は一部袋状に脹らむが，崩落のため外に開く。上面形は148×142㎝の不整円形をなす。遺物は，底面近くに壺・甕などがまとまって出土した。

出土遺物（図版41，第28・29図）

**甕**（160～173）　如意形口縁をなすもの（160～164・166）と，口縁外面に粘土帯を貼り，逆Ｌ字状口縁をなすもの（165・167～169）がある。160・162は，口縁端に刻目を施し，口縁下4.5㎝と，3.5㎝に粘土帯をめぐらし，刻目を施す。復原口径は160が28.3㎝，162が24.1㎝である。161・166は，口唇部下端に刻目，163・164は刻目を持たず，口縁下の凸帯もない。161は外に開き，内面にヘラ研磨が施されるなど鉢に近い。復原口径22.9㎝。残存高11.5㎝。163・164は，直口する口縁に粘土帯を貼り如意形に近い口縁をつくり出している。接合部外面には，

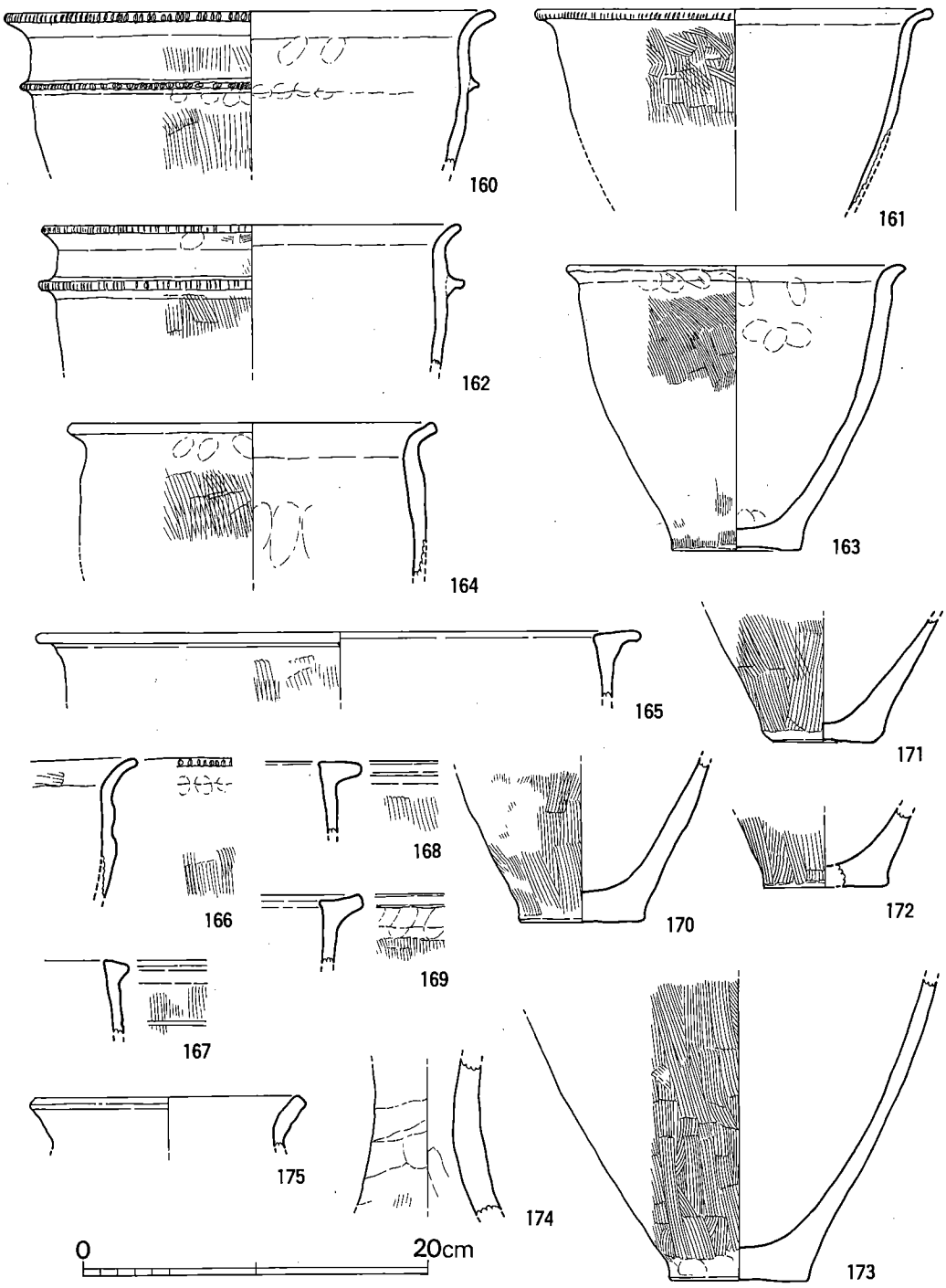



**第 27 図**　貯蔵穴出土石器実測図2 (1/3)

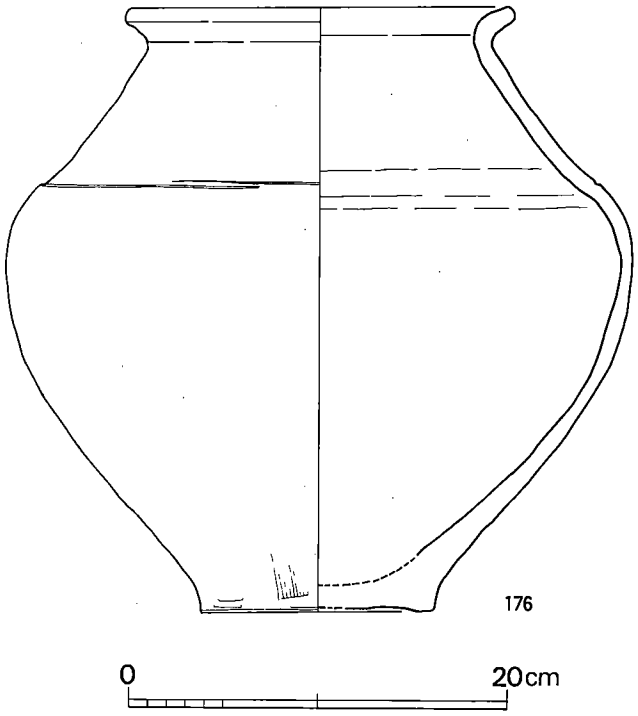
押圧痕が残る。163が復原口径19.5cm，器高16.3cm，164が復原口径21.2cmである。167は，丸味をおびた断面三角形に近い粘土帯をめぐらし，口縁下3.5cmに1条の沈線をめぐらす。165は，復原口縁内径29.4cmで，口縁端はやや垂れ気味である。170～173は，いずれも平底の底部で，160～162の底部として時期的に合うものである。

**壺** (175・176)　175は，口縁が外反し，やや肥厚する。復原口径16cm。176は，口縁が短く外反し，頸部が，末広がりに肩部に至り，1条の沈線をめぐらし，胴部につづき平底の底部に至る。外面は頸部以下，横位のヘラ研磨が施され，内面は，口縁・頸部に横位にヘラ研磨，胴部一部にヘラ研磨らしい痕跡が残る。口径20.4cm，胴部最大径32.8cm，底径12.2cm，器高31.9cm。

**器台** (174)　胴部破片で，外面は刷毛目痕が残るが殆どがナデ消される。残存高9cm。




**第 28 図**　28号貯蔵穴出土土器実測図1 (1/4)




**第 29 図**　28号貯蔵穴出土土器実測図2 (1/4)

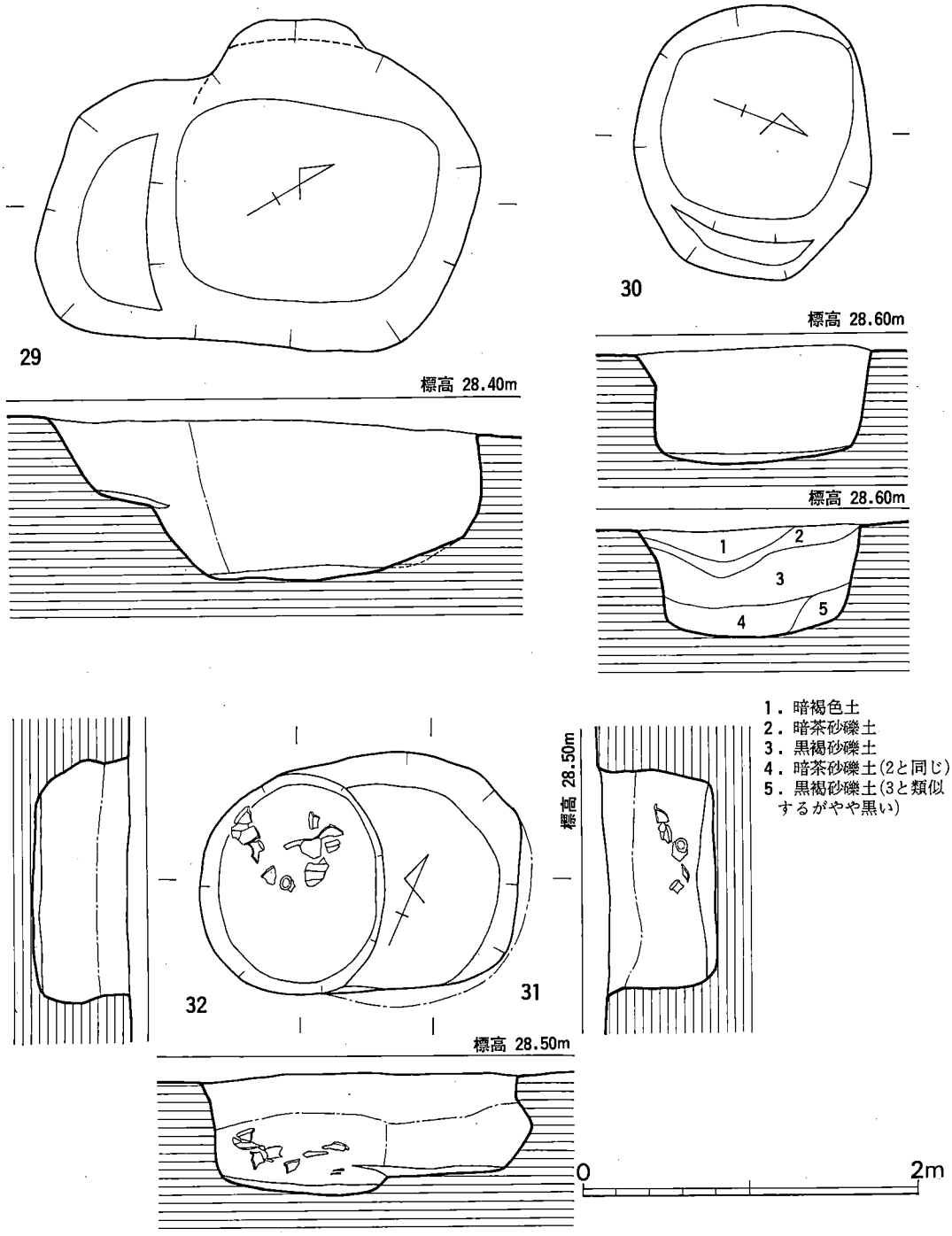
## 29号貯蔵穴（図版12－1，第30図）

本貯蔵穴には，153×135cmの平面形隅丸長方形をなす底面より45cm上南側に，半月状をなすテラスが認められるが，切り合い関係は発掘時に確認されていない。おそらく，二つの貯蔵穴が切り合っているものと思われ，深い方を29－a，浅い方を29－bとする。aは壁の一部はやや袋状をなすが外に開き，深さ85cmである。bの底面は半月状で最大長105cm，残存幅42cmで，壁はスリ鉢状に開き，深さ50cmである。出土遺物は土器のみである。

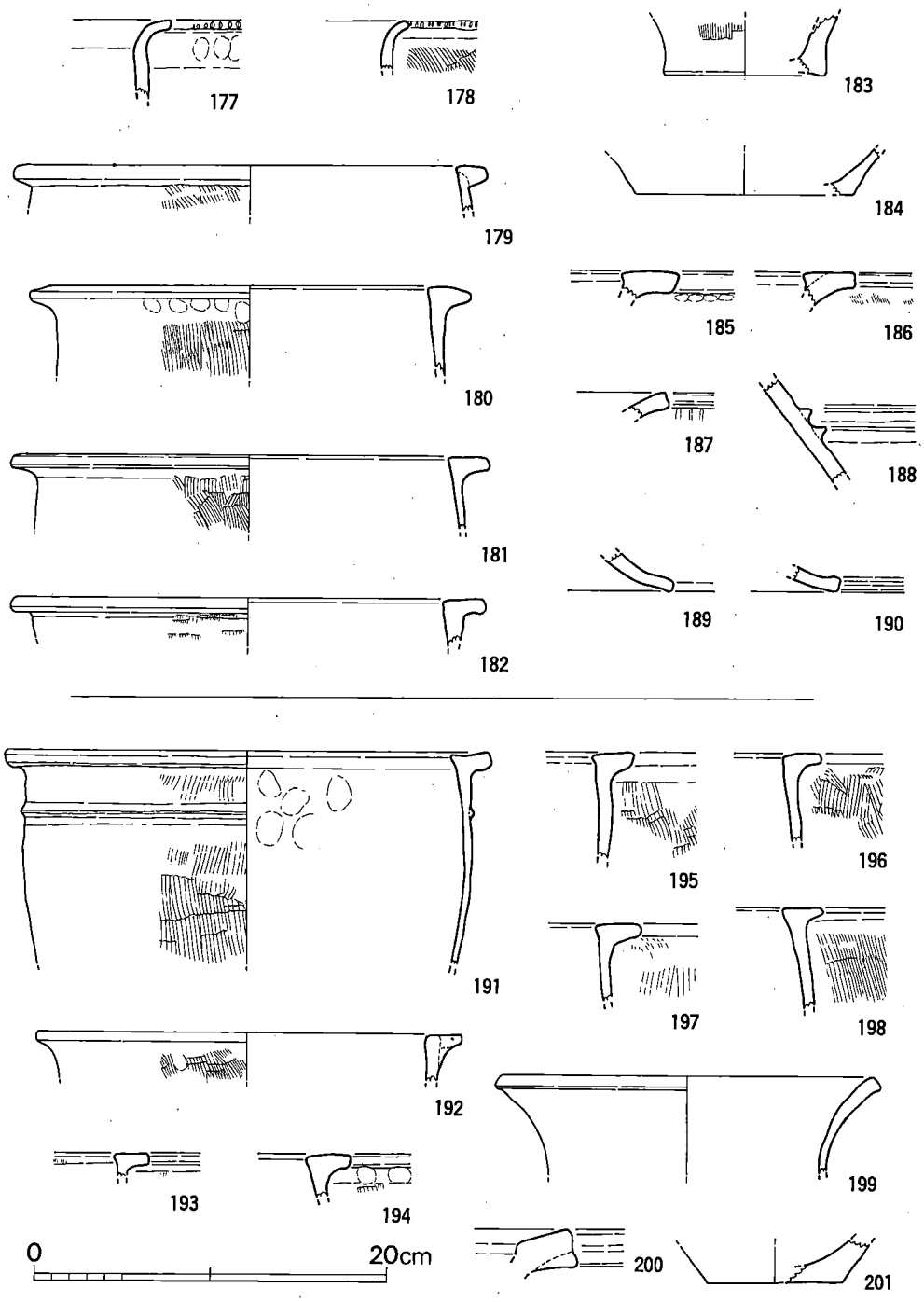
出土遺物（第31図）

**甕**（177～183）　口縁部が，如意形をなし口唇部に刻目を持つもの（177・178）と，逆L字状をなすもの（179～182）がある。178は，内面に横位の荒いヘラ研磨が見られる。179は，口縁部に貼付した粘土帯を断面台形状に成しており，粘土貼付下に刷毛目調整痕が残る。復原口縁内径は，179が23.3cm，180が20cm，181が22.6cm，182が22.0cmである。183は底部片で平底となる。

**壺**（184～188）　185・186は，鋤先状に近い口縁で186は，口縁内部に粘土帯を貼付して成形している。剥離痕が明瞭である。184は，底部片で，丸底状に成形された底部に鉢巻状に貼




**第 30 図**　29～32号貯蔵穴実測図(1/40)




第 31 図　29･30号貯蔵穴出土土器実測図(1/4)

付された粘土部分の剝離部である。188は，肩部片で断面三角形の粘土帯が２条M字状に貼付されている。

**蓋**（189・190）　端部片で，いずれも小片である。

## 30号貯蔵穴（図版12－２，第30図）

28号貯蔵穴の南側にあるが，32号貯蔵穴などと一群をなす。底部平面形は，112×110cmの隅丸方形をなし底面はやや凹む。壁は，脹らみを持ちながら外に開く。東側に一部テラス状のものがある。深さ69cm。出土遺物は，土器片と軽石が出土している。

出土遺物（第31図）

**甕**（191～198）　いずれも口縁部破片で，口縁外に粘土帯を貼付し逆Ｌ字状に成形する。191は，口縁下3.5cmに断面三角形の凸帯をめぐらす。外面には，刷毛目調整痕が残る。復原口縁内径は，191が22.9cm，192が20cm。

**壺**（199～201）　199は，頸部から湾曲しながら外反する口縁で，端部は平坦面をなす。復原口径21.8cm。200は，大形壺の口縁端の剝離部分である。口縁上面は，丁寧に研磨される。201は，底部片である。

**石製品**　素材は軽石で不整形である。一部面が曲線をおび，研磨の痕跡がある。定形はなく，用途は不明であるが，何かを擦るのに使用されたものか。54.95ｇ。

## 31号貯蔵穴（図版13－１，第30図）

32号貯蔵穴に，西側⅓が切られている。残された底部平面形よりすると，120×（120？）cmの円形になると思われる。壁は，袋状をなし，口縁付近で直になる。深さは58cm。出土遺物はない。

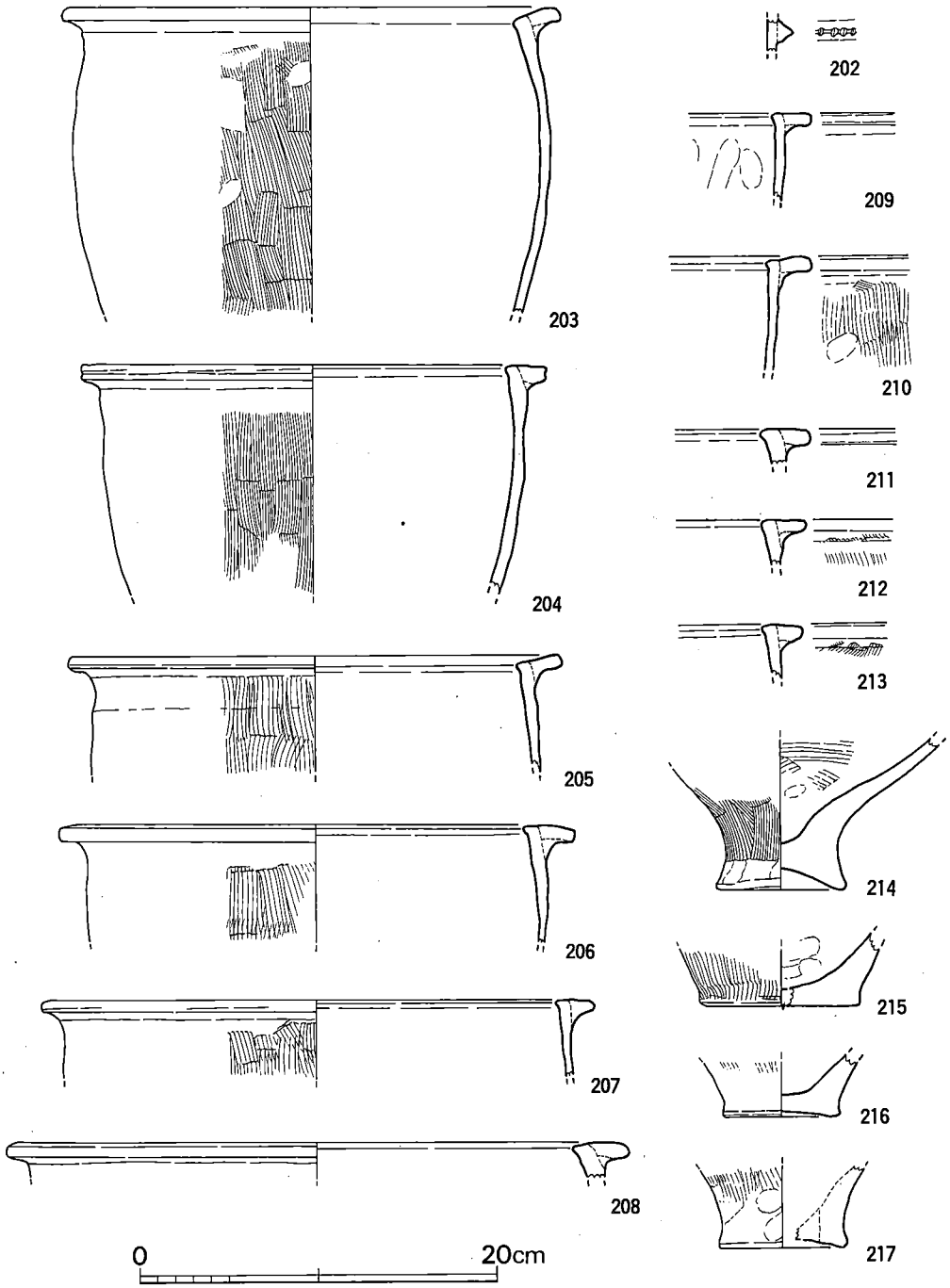
## 32号貯蔵穴（図版13－１，第30図）

31号貯蔵穴を切っている。底部平面形は，120×95cmの楕円形をなし，底部はやや凹む。壁面は袋状になり，口縁付近で外反する。深さ70cm。出土遺物は，土器のみである。

出土遺物（図版41，第32・33図）

**甕**（202～217）　202は，口縁下断面三角形凸帯部片で，刻目が施される。203～213は，口縁外面に粘土帯を貼付し，逆Ｌ字状口縁にする。口縁はやや内傾し，胴部は脹らむ。口縁接合部は，指圧痕または，ナデによって補強され，その部分は刷毛目がナデ消される。以下は縦位の刷毛目調整痕が残る。214～217は底部片であり，215～217は平底に近い。外面には，刷毛目が残る。

**鉢**（218・219）　218は口縁外面に粘土帯を貼付し，口縁上面は，平坦をなす。口縁部は内




**第 32 図**　32号貯蔵穴出土土器実測図(1/4)

湾し，湾曲しながら底へ向う。外面は，工具による擦過調整痕が明瞭である。219は，口縁が若干外反するが，逆ハの字状に開く。復原口径は，218が26.8cm，219が28cmである。

**壺**（220～226）　220・221は，頸部から湾曲しながら外反する口縁部片で，外面に縦位の暗文(？)がある。222・224は，口縁外に粘土帯を貼付し，鋤先状に近い口縁にする。224は，上面，内面ともヘラ研磨がなされる。224の復原口縁内径は，32.2cm。225は頸部から肩部の破片で，接合部に断面三角の粘土帯がまかれる。頸部は，内面横位ヘラ研磨，外面は横位ナデの後，縦位に6.3cmの間隔で，3本単位の暗文がある。肩部外面は横位ヘラ研磨。223は球形に近い壺の肩部片で，2本の浅い沈線がめぐる。226は平底底部片である。

**蓋**（227）　端部破片で，内面に横位刷毛目調整が認められる。

**器台**（228）　底径9cm。残存高5.3cm。外面刷毛目調整が行われる。

## 33号貯蔵穴（図版13－2，第34図）

32号貯蔵穴の南西にあり，35号貯蔵穴に接するが，切合関係にはない。底部平面形は，120×112cmの隅丸方形をなし，壁は一部袋状に立ち上る。残存深さ72cm。上部平面形は，崩落のため不整形をなす。出土遺物は，土器片と，不明土製品である。

出土遺物（第10・33図）

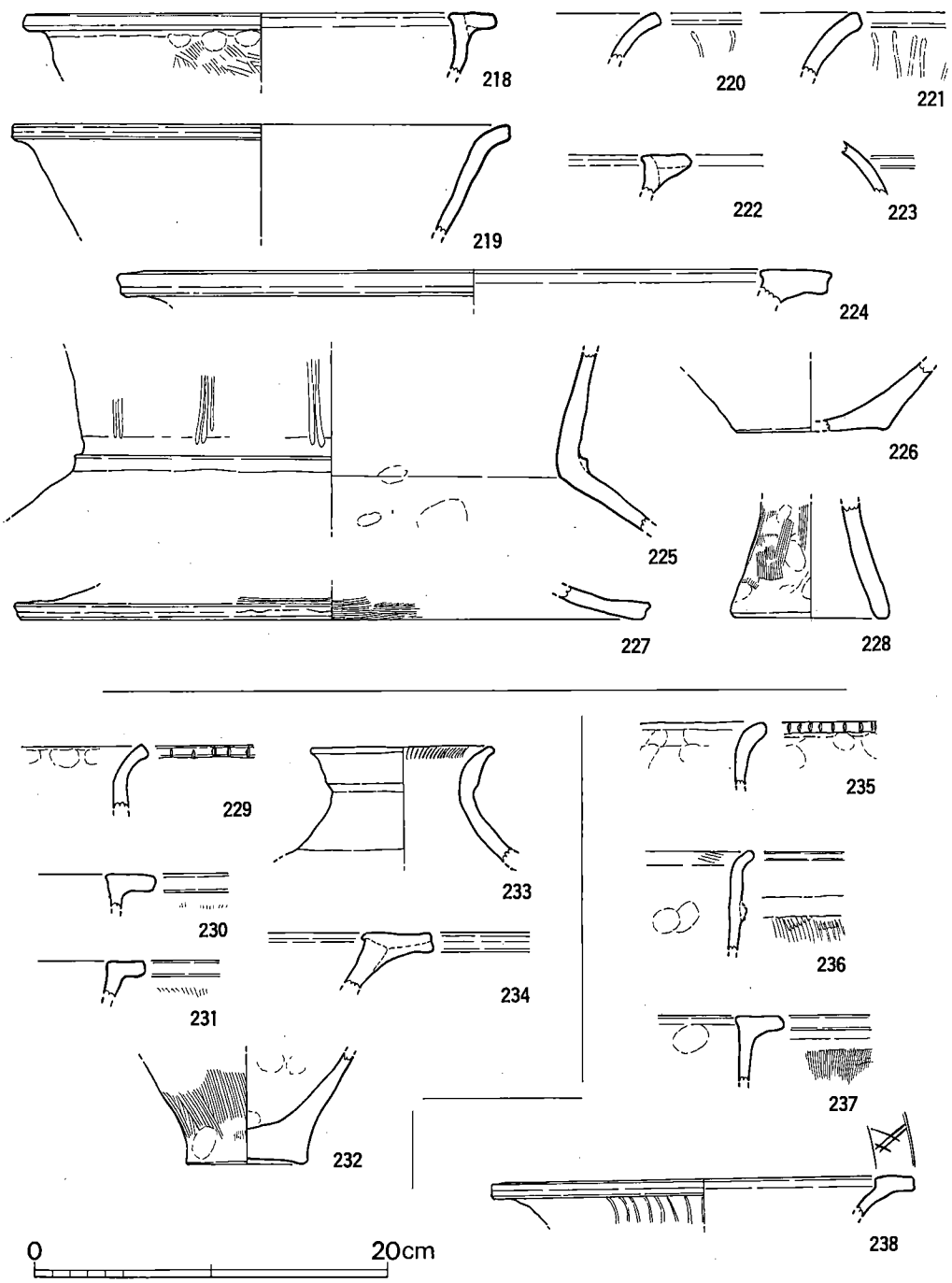
**甕**（229～232）　229は，如意形の口縁をなし，口唇端は面をなし，荒い刻目を施す。230・231は，口縁外に粘土帯を貼付し，逆L字状の口縁とする。粘土接合部以下に，刷毛目痕が残る。232は，底部片で，平底をなす。成形時，内面底部に円盤状の粘土を押え込み，底を厚くしている。底径6.9cm。

**壺**（233・234）　233は，口径10.4cmの小形壺口縁部破片で，口縁部は肥厚する。口唇端から1.2cmまでの内面に縦位に赤色顔料による線文が密に引かれている彩文土器である。頸部から肩部へは，少し盛り上がる。234は，大形壺の口縁部片で，鋤先状の断面をなす。

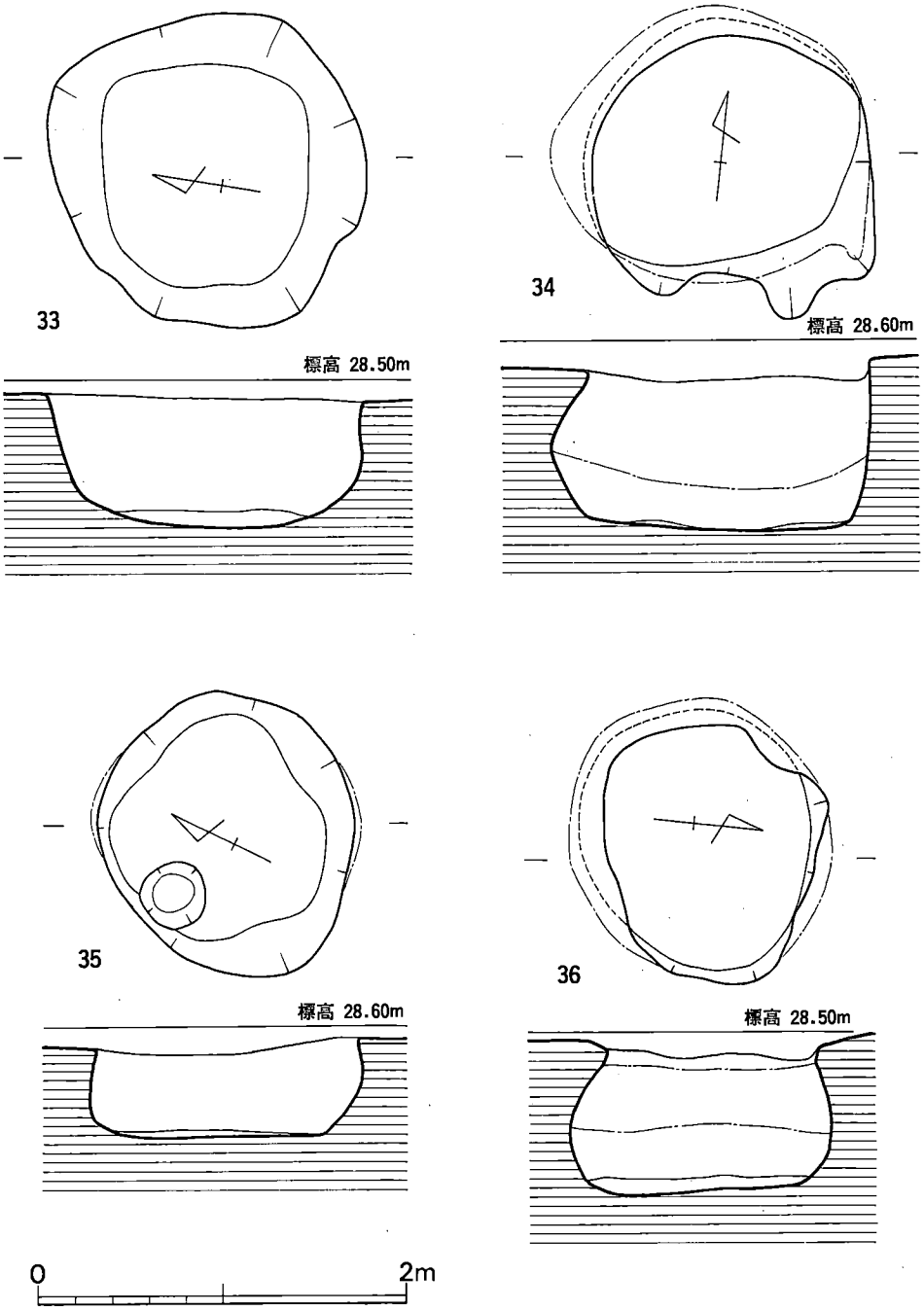
**不明土製品**（第10図30）　不整長方形に近い，扁平な粘土塊で，胎土は精良な粘土である。板状，棒状，植物茎風なもの，刷毛目工具のようなものなどの擦過痕があり，その上に重なるように粘土が押しつけられるなどしている。形状に意味があるのか不明であるが，土器成形時の削り滓の粘土をかためたものである可能性がある。

## 34号貯蔵穴（第34図）

33号貯蔵穴の東側にあり，底部平面形は，147×137cmの楕円形をなす。壁は，袋状に立ち上る。上面形は崩落のため一部不整形をなすが，楕円形に近い（径150×127cm）。残存深さ91cm。出土遺物は，土器片少量である。




**第 33 図**　32～34号貯蔵穴出土土器実測図(1/4)




**第 34 図**　33～36号貯蔵穴実測図(1/40)

出土遺物（第33図）

**甕**（235～237）　235・236は如意形口縁をなし，235は口唇部に荒い刻目を施すが，残存部には刷毛目調整痕は残っていない。236は口唇部に刻目はないが，口唇下３㎝に刻目凸帯の剝離痕がある。凸帯以下に刷毛目痕がある。237は，逆Ｌ字状に口縁外に粘土帯をめぐらす。接合部ナデ以下に刷毛目痕が残る。

**壺**（238）　外反する口縁端部内面に粘土帯を貼付し鋤先状になる。内面・口縁上面は丁寧に研磨され，口縁上面に，井桁状に浅い沈線が引かれている。外面は，ヨコナデ調整のあと，６～９㎜の間隔で，縦位に暗文が施される。復原口径23.8㎝。

## 35号貯蔵穴（図版14－１，第34図）

33号の南西側に接する。底部平面形は，118×108㎝で隅丸方形に近いが不整形である。壁は袋状に立ち上るが，上平面は崩落のため不整楕円形をなす。残存深さ53㎝。底面西側に径35㎝，深さ10㎝程のピットが認められる。出土遺物は，土器・管状土錘・サヌカイト剝片がある。

出土遺物（図版50，第35図）

**甕**（239～243）　239は，如意形の口縁をなし，口唇部下端に刻目が施される。通常刻目凸帯の付く位置まで（口縁下４㎝まで）肥厚させ，段のついた部分を刻目風に，指押圧を加える。肥厚部は横位に刷毛目調整がなされるが，その殆どは横位ナデ調整で消される。以下も横ナデ調整痕が残る。復原口径25.3㎝。240・242は，粘土帯を口縁外に貼付し，逆Ｌ字状にしたものであるが，240は，その位置が若干下り，口縁上面が凹む。復原口縁内径18.0㎝。241は，くの字に近く口縁が外反し，口唇端は幅広になり面をつくる。

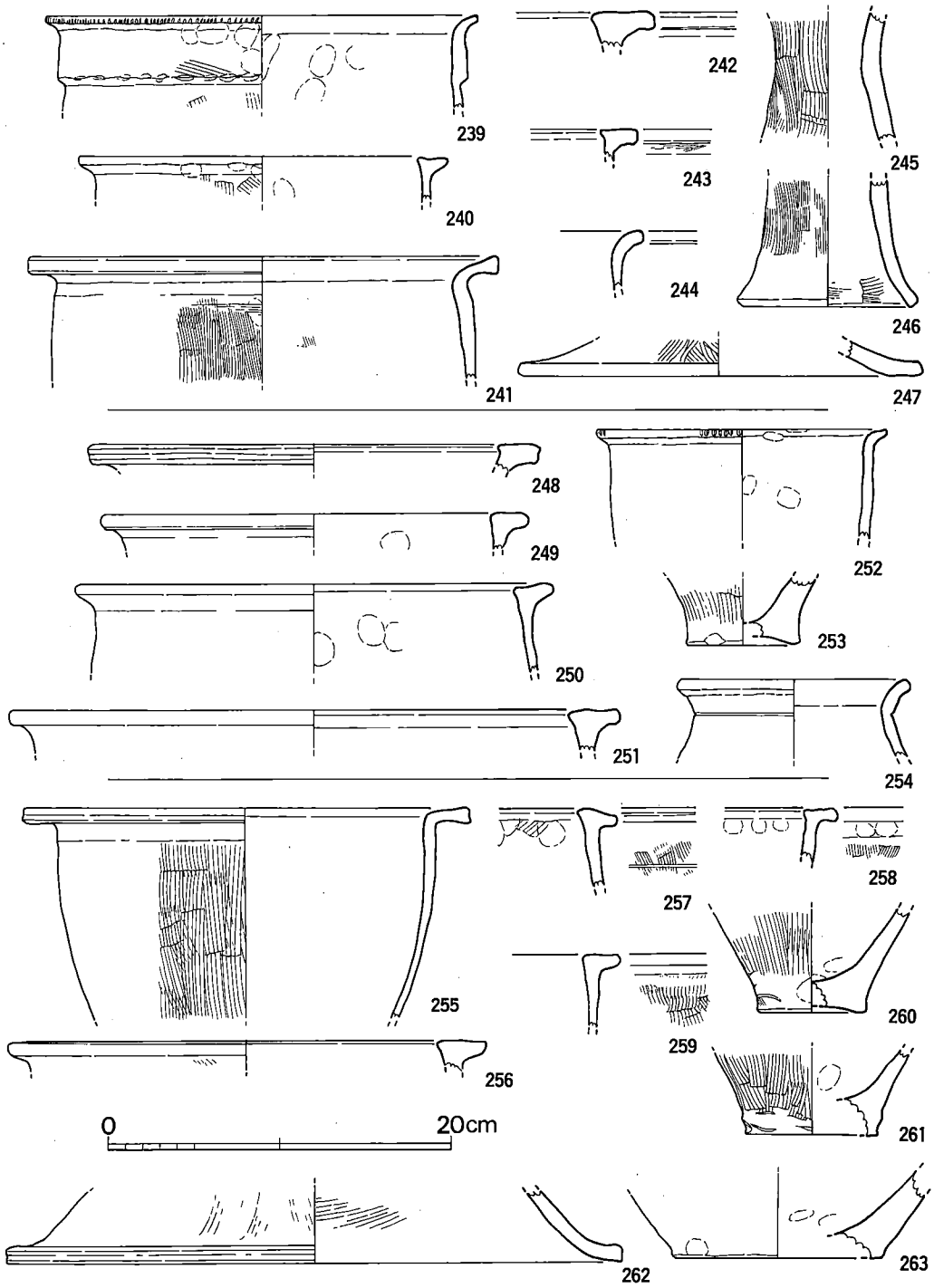
**壺**（244）　強く丸まって外反する口縁部片であるが，胎土が軟質で磨滅のため調整は不明。

**器台**（245～246）　いずれも外面，荒い刷毛目調整痕が残る。246は，下端内面に，横位の刷毛目調整痕が残る。残存高は，245が7.5㎝，246が7.2㎝である。

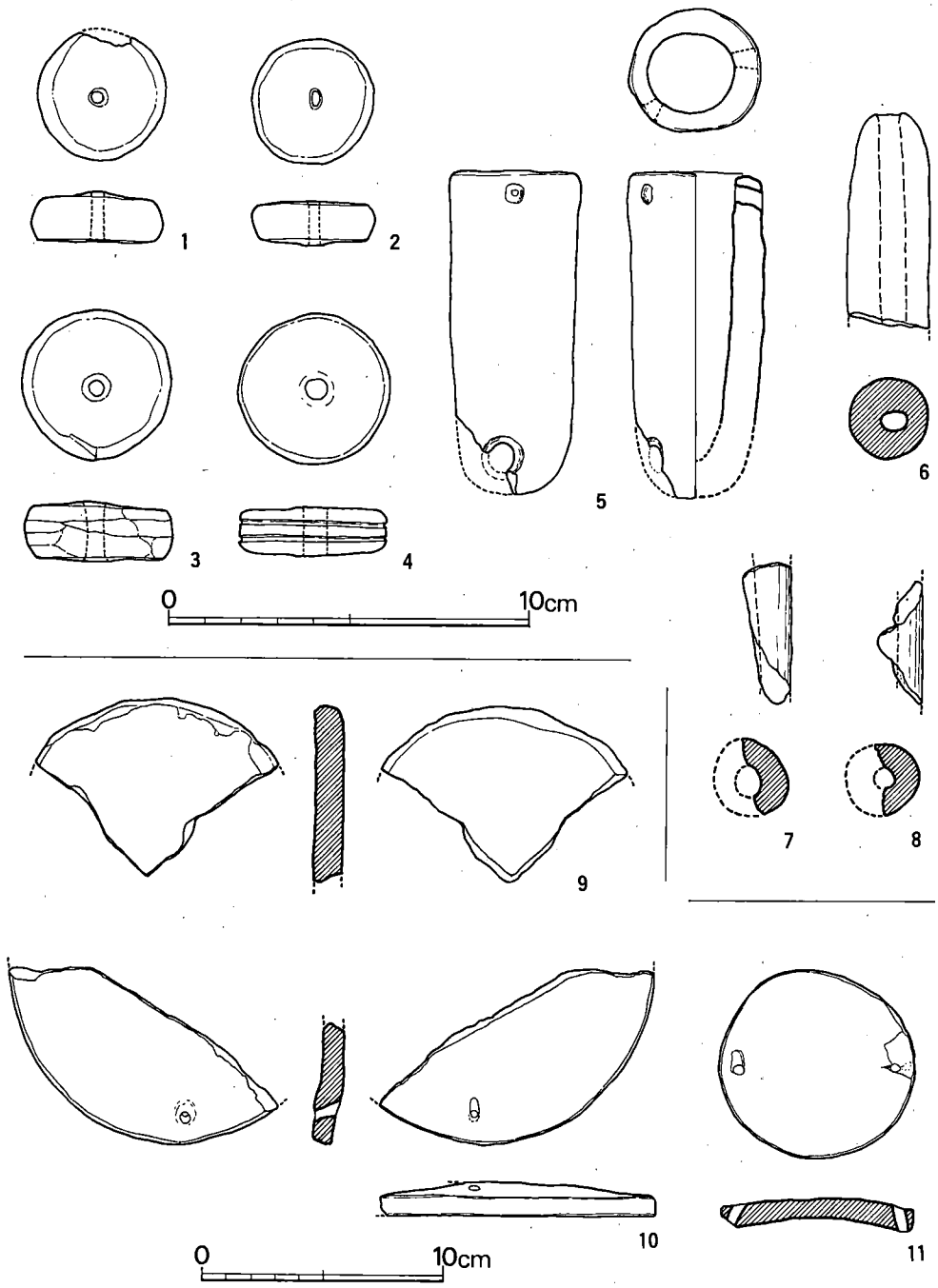
**蓋**（247）　裾部破片で，外面は荒い刷毛目痕が縦位に残る。内面は，裾部端より1.7㎝までは，ナデ調整が行われる。復原裾部径23.5㎝。

**管状土錘**（第36図６）　直径６㎜の，棒に粘土を巻きつけて径2.2㎝の円管状に成形したもので，指圧の凹みがみられる。残存長6.1㎝で一部欠損する。32.65ｇ。

**サヌカイト剝片**　２点あり，一点は，3.3×2.4㎝，厚さ５㎜の方に近い横剝ぎの剝片で，一辺に加工痕がある（刃部長さ２㎝）。未完成加工品である。もう一点は，一部表皮が残るが，４×1.5㎝で，石器の素材をつくる時に剝離された剝片。




**第 35 図**　35～37号貯蔵穴出土土器実測図(1/4)




**第 36 図**　貯蔵穴出土土製品実測図4 (1/2·1/3)

## 36号貯蔵穴（図版14－２，第34図）

35号貯蔵穴の西側に接し，37号の北西にある。底部平面形は，144×129cmの楕円形をなし，壁は袋状に立ち上る。胴部最大径は，152×142cmで，上面は崩落のため不整形をなすが，140×110cmの隅丸長方形をなす。残存深さ76cm。遺物は，土器・円盤状土器片が出土している。

出土遺物（第35図）

**甕**（249～253）　252は，如意形に口縁が外反し，端部に刻目がある。内外面ともナデ調整痕が残る。復原口径16.9cm。249～251は，いずれも逆Ｌ字状になる口縁部破片である。復原口縁内径は，249が20.5cm，250が23.2cm，251が29.6cmである。253は，上底気味の底部である。

**壺**（248・254）　248は，鋤先状に近い口縁部片で，表面にスリップがかけられる。復原口径26.4cm。254は，丸く外反する口縁部を持つ小形壺の破片である。口縁は肥厚しないが，頸部との接点に沈線が１条引かれる。復原口径13.6cm。

## 37号貯蔵穴（図版15－１，第37図）

５号住居跡の南西部隅に切られ，土壙29が少しずれて上にのる。底部平面形は，132×111cmの胴張り隅丸長方形に近い。壁は外に開いて立ち上り，残存深さは35cmである。底部南端に，径45×38cm，深さ40cmのピットがある。遺物は，土器と軽石が出土している。

出土遺物（図版48，第35図）

**甕**（255～261）　257の口縁上面は下り気味で，口縁下3.5cmに，刷毛目調整のあと１条の沈線を引く。255の口縁は，丸みを帯びながら逆Ｌ字状に屈曲し，端部は幅広な面をなす。胴部はやゝ脹らみ，全面に縦位の刷毛目調整痕が残る。復原口縁内径20.8cm。260・261は底部片で，260は上底気味で，261は平底となる。

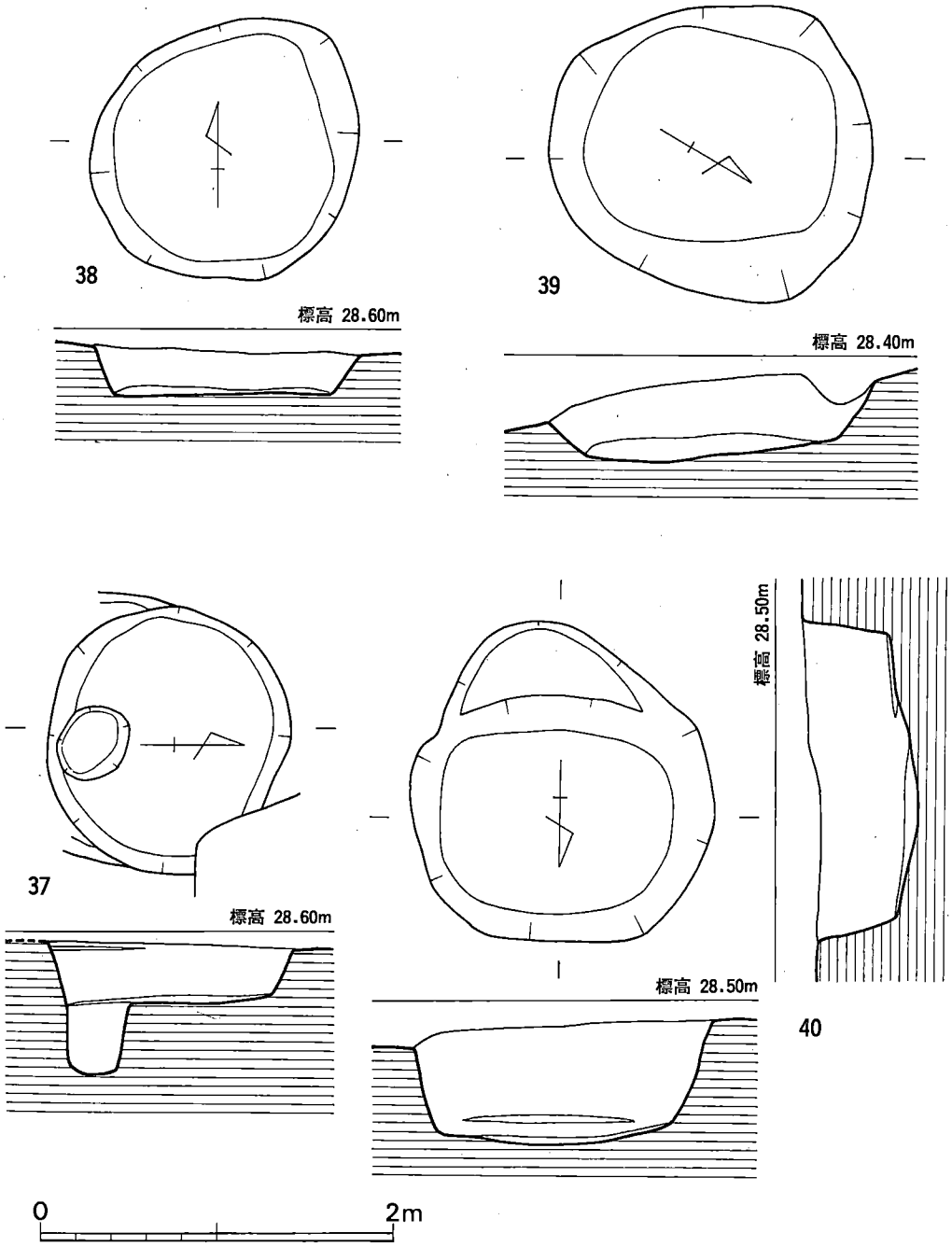
**蓋**（262）　裾部が若干厚くなり端部は面をなす。内面に刷毛目調整痕が残る。外面は，浅く刷毛目状のもので調整する。復原裾部径36.0cm。

**壺**（263）　大形壺の底部片である。横位の荒いヘラ研磨が残る。

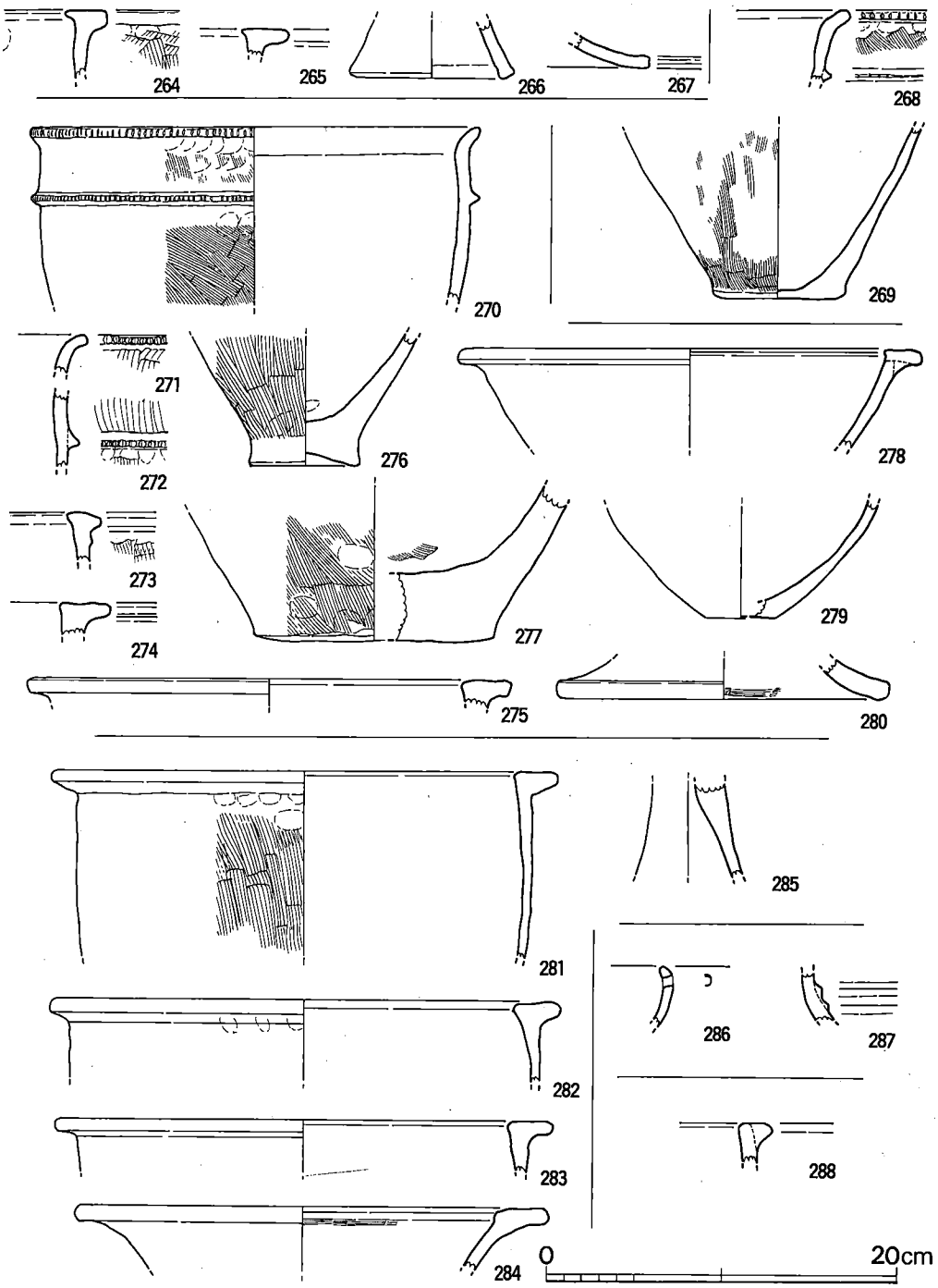
**軽石**（図版48－２－②）　平面8.5×3.8cmの紡錘形をなし，厚さ3.5cmで，特別の加工痕は認められない。側縁部が若干磨滅する。29ｇ。

## 38号貯蔵穴（第37図）

36号貯蔵穴の南側にあり，土壙14が一部重なるようにしてのる。底部平面形は，125×122cmの不整円形をなす。残存状態は悪く，壁は30cm残るにすぎない。遺物は，土器と軽石が出土している。




第 37 図　37～40号貯蔵穴実測図(1/40)




**第 38 図**　38～43号貯蔵穴出土土器実測図(1/4)

出土遺物（図版48，第38図）

**甕**（264・265）　いずれも，口縁外側に粘土帯を貼り，逆Ｌ字状にする。264は，内側にも貼付し，断面三角形に突出させている。外面に刷毛目調整痕が残る。

**器台**（266）　復原底部径９㎝，残存高３㎝で，端部がやゝ肥厚する。内面はヨコナデ調整される。

**蓋**（267）　裾部破片で，外面端部より1.5㎝はヨコナデ，それ以上は縦位，斜位のナデ調整が行われる。

**軽石**（図版48－２－③・④）　２個出土し，一面だけ11×6.5㎝の不整楕円形に近い平坦面を持つが，特別の磨滅痕等はない。高さ６㎝程で長軸にそって両側から，つまみ状に抉れる。70.35ｇ。もう一点は，7.5×7.5㎝の隅丸方形に近い平坦面を持つが，特別な加工痕はない。高さ4.5㎝の角錐状をなし，頂部より５本の凹みが走り，一本は，幅2.5㎝ほどの断面ゆるやかな半円をなし，何かの擦過によって出来た溝のようにもみえる。40.75ｇ。

## 39号貯蔵穴（第37図）

40号貯蔵穴の東側に接する。底部平面形は，143×120㎝の不整隅丸長方形をなす。壁は，外に開き，深さ43㎝が残存する。遺物は，土器が出土しているのみである。

出土遺物（第38図）

**甕**（268・269）　268は，如意形口縁をなし，口唇端に刻目を持つ。口縁下3.5㎝に断面三角形の刻目ある凸帯がめぐる。269は，平底をなす底部で，おそらく268と同一個体と思われる。

## 40号貯蔵穴（図版15－２，第37図）

39号貯蔵穴西側に接する。底面南側に半円状のテラスがあり，おそらく２個の貯蔵穴が切合っているものと思われる。底部平面形隅丸長方形のものを40－Ａ，半円形のものを40－Ｂとする。40－Ａは底面径132×105㎝で，壁は脹みを持って外に開き，深さ70㎝を測る。40－Ｂは，残存底面径103×37㎝で，40－Ａより15㎝ほど床面が高い。壁は，外に開き50㎝残存する。遺物は，土器・紡錘車・円盤状土器片が出土している。

出土遺物（図版50－１，第11・36・38図）

**甕**（270～277）　270・271は，如意形口縁をなし，270は，口唇部下端に刻目を施し，口縁下４㎝に断面三角形の刻目ある凸帯をめぐらす。271は，口唇端部に刻目があり，同一個体と思われる272は，口縁下の断面三角形の刻目ある凸帯である。273・274は，口縁外面に粘土帯を貼付し，逆Ｌ字状に近い口縁とする。276は上底気味，277は平底で，やや大形甕の底部片である。

**高杯**（278・280）　杯部破片で外に開く口縁端に粘土帯を貼付し，鋤先状に近い口縁とする。

内外面とも横位ヘラ研磨が施される。復原口縁内径22.2cm。280は，脚端部片で，外面は縦位ヘラ磨き，内面は端部から2.5cmまで横位刷毛目が残る。復原底径19.2cm。

**壺**（279）　底部片で，底面やや凹む。外面は，胴部最大径付近は横位，以下は縦位の丁寧なヘラ磨き，内面は横位のヘラ磨きが認められる。底部復原径3.6cm。他に，内面に赤色顔料，外面に赤色顔料と，縦位暗文（1cm間隔）を施した口縁部小片が出土している。

**紡錘車**（第36図1・2）　1は，径3.64cm，厚さ1.3cmの土製円板に一方向より，径4×4mmの小孔を穿つ。20.85g。2は，径3.4cm，厚さ1.1cmの土製円板に一方向より4×2.5mmの小孔を穿つ。16.8g。

**不明土製品**（第11図38・39）　38は，3.4×1.5×0.8cmの粘土塊を絞ったような形をなす。39は，2.4×2.3×1.6cmの粘土塊で，粘土小片を合せ，多面体をなす。精良な粘土である。

（木村）

## 41号貯蔵穴（第39図）

40号貯蔵穴の南側から検出された竪穴で，底面形は不整円形をなす。規模は，長径165cm，短径160cm，深さ87cmを測り，断面はU字状で，他の竪穴と若干異なっている。出土遺物は壺・甕・高杯等の破片がある。

出土遺物（第38図）

**甕**（281～283）　いづれもT字状口縁の甕で，復原口径は281が29.2cm，282が29.4cm，283が28.6cmを測る。いづれも器面の風化が著しいため，調整手法は不明な点が多いが，281の胴部外面は刷毛調整で，内面ナデ，口縁部内外はヨコナデと思われる。281と282の口縁下には口縁部成形時の指頭圧痕がみられる。

**壺**（284）　鋤先状口縁の破片資料で，復原口径は28.2cmである。口縁部内面はナデ調整のあとヘラ磨きし，外面はナデて仕上げている。色調は淡燈色を呈し，焼成良好である。

**高杯**（285）　柱状部の破片資料で，外面タテヘラ磨き，内面ナデて仕上げている。（井上）

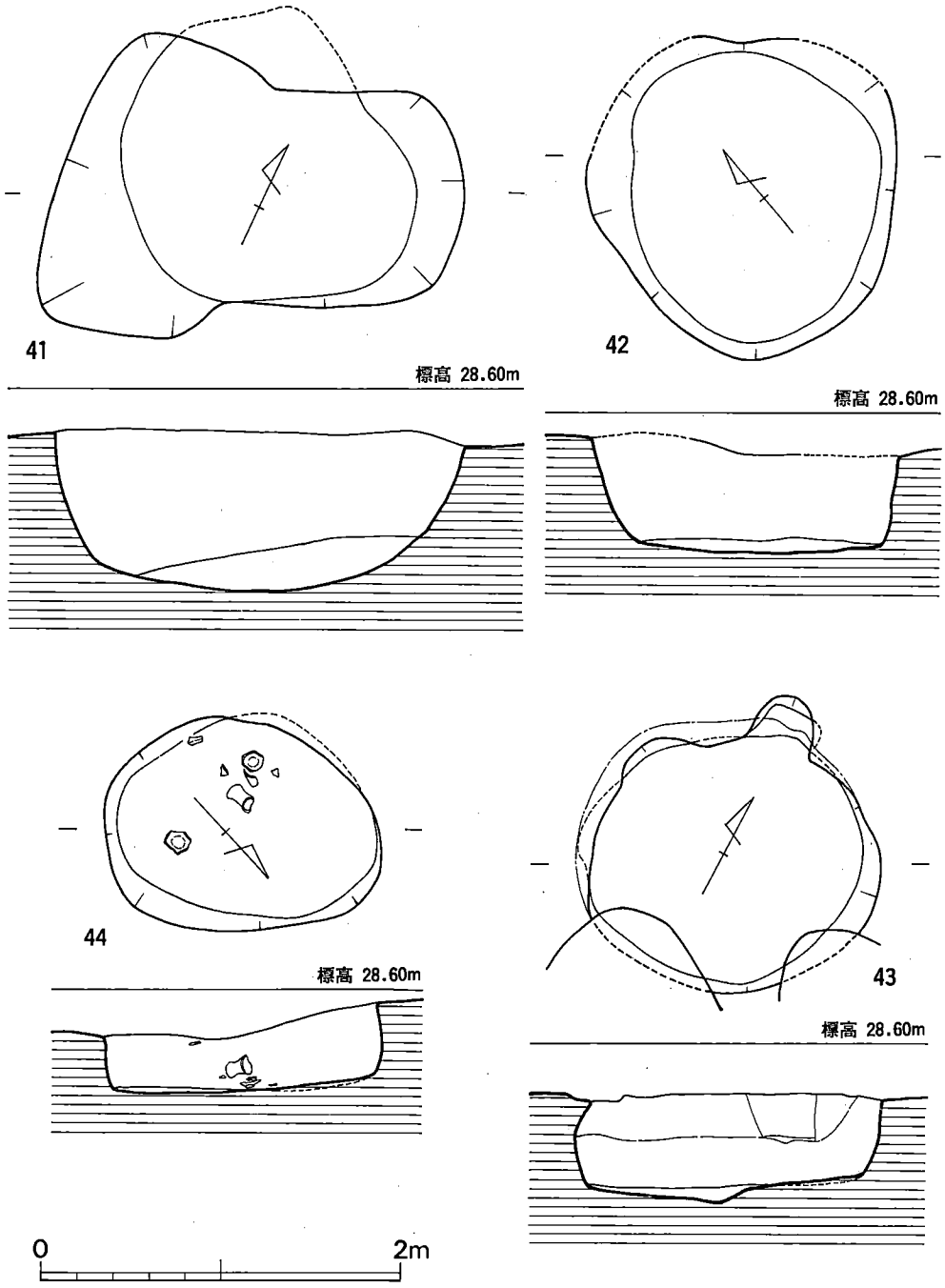
## 42号貯蔵穴（図版16－2，第39図）

40号貯蔵穴の西側，43号貯蔵穴の東側に接する。底部平面形は，160×138cmの不整楕円形をなす。壁はやや外開きに立ち上り，65cm残る。遺物は，土器が少量出土している。

出土遺物（第38図）

**鉢**（286）　口縁は丸味を帯びて内湾し，端部は丸まる。口縁下7mmに焼成前の径4mmの小孔が穿たれている。外面は丁寧な横位ヘラ磨き，内面は横位ナデ調整が残る。

**壺**（287）　頸部から肩部への接点で断面M字状の凸帯がめぐる。内外面とも，横位ヘラ磨きがなされる。




**第 39 図**　41～44号貯蔵穴実測図(1/40)

## 43号貯蔵穴（図版16－２，第39図）

42号貯蔵穴の西側に接し，44号貯蔵穴に切られる。底部平面形は，145×144cmの円形をなし，壁は，袋状に立ち上り，深さ52cm残存する。上面形は崩落により不整形をなす。遺物は，土器少量と，円盤状土器片が出土している。

出土遺物（図版51，第24・38図）

**甕**（288）　口縁外面に粘土帯を貼り，断面は丸まった三角形をなす。

**円盤状土器片**（第24図15）　壺肩部破片を3.9×3.5cmの円盤状に加工する。10.05ｇ。

## 44号貯蔵穴（図版16－２，第39図）

35・45号貯蔵穴を切る。底部平面形は144×112cmの楕円形をなす。壁は，やや脹みを持つも直に立上がる。深さ47cm。遺物は，土器・石戈・サヌカイト剝片が出土している。

出土遺物（図版49，第27・40図）

**甕**（289～299）　289～292は，逆Ｌ字状の口縁，293～295は，くの字に外反する口縁を持つ。295は端部がやや厚くなり面をなす。296・297は平底，298・299は，やや上底の底部片である。

**壺**（300～303）　301～303は，鋤先状の口縁部片，300は復原底径10.3cmの底部片である。

**石戈**（第27図７）　残存長９cm。茎部幅3.6cm，厚さ1.2cm，断面脹みを持った長方形に整形。身基部両端に直径８mmの孔が，ほぼ円筒状に穿たれる。基部付近の両刃部は，刃はつくられず幅５mmほどの面をなす。身残存長は6.2cmで中央に鎬が走る。

**サヌカイト剝片**　6.5×3.5cmの横剝ぎの剝片。特別の加工痕はない。

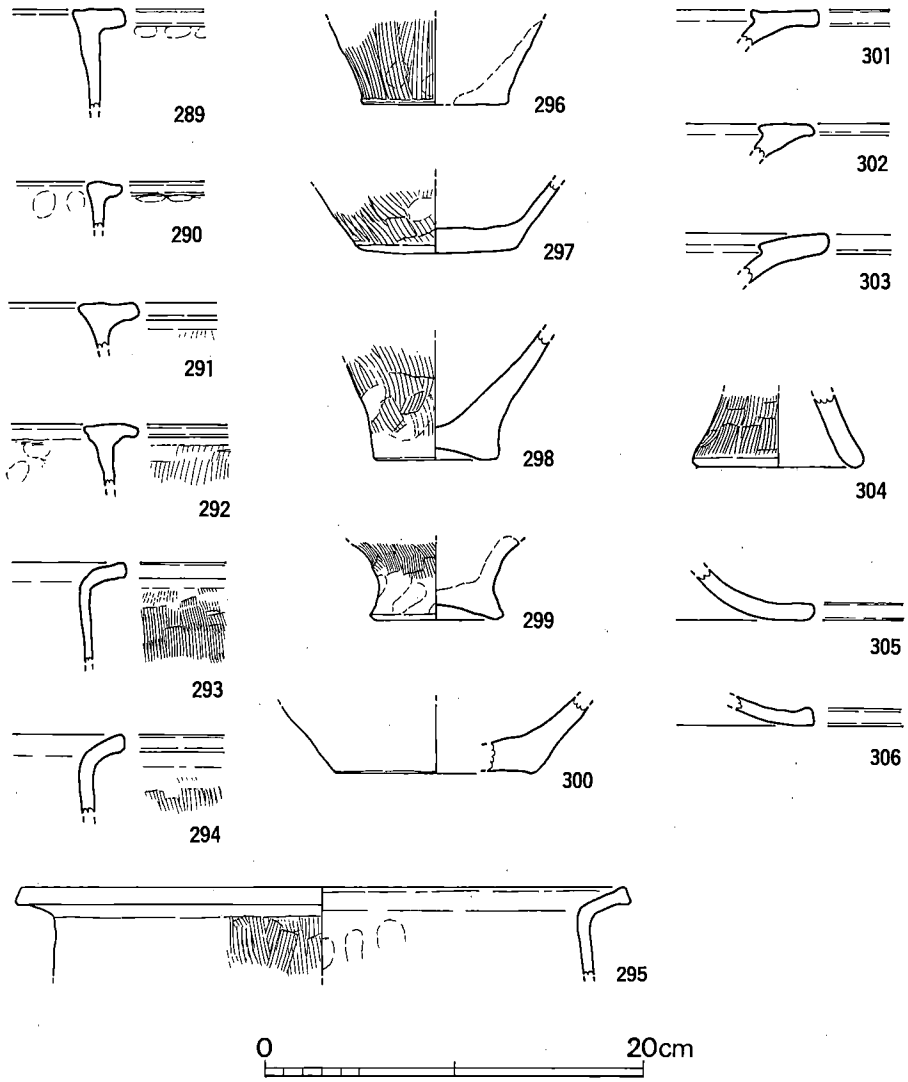
## 45号貯蔵穴（第41図）

44号貯蔵穴に切られる。底部平面形は（165＋α）×161cmの不整円形で，壁は袋状をなし，最大径204×？となる。上面付近では直に立ち上り，上面径は，160×（160？）cmとなる。残存の深さは85cmである。遺物は土器・円盤状土器片・不明土製品２個・黒曜石縦長剝片・軽石４個が出土している。

出土遺物（図版51，第10・11・14・24・42図）

**甕**（307～318）　口縁が如意形をなし，口唇端部に刻目，口縁に１条の凸帯を持つもの（307・308），口縁部は不明であるが，口縁下に２条の沈線を持つもの（310）がある。307は，復原口径25.3cm。311～314は，口縁やや内傾し，逆Ｌ字に近い口縁をなす。復原口縁内径は，311が22.4cm，312が21.2cm，313が，19.2cm，314が22.4cm。315～318は底部片で，315・316は外面に刷毛目調整痕が残り，やや上底気味である。

**壺**（319～324）　319は，肩部に３本単位の連弧文を，下に接して２本の平行沈線を描く。

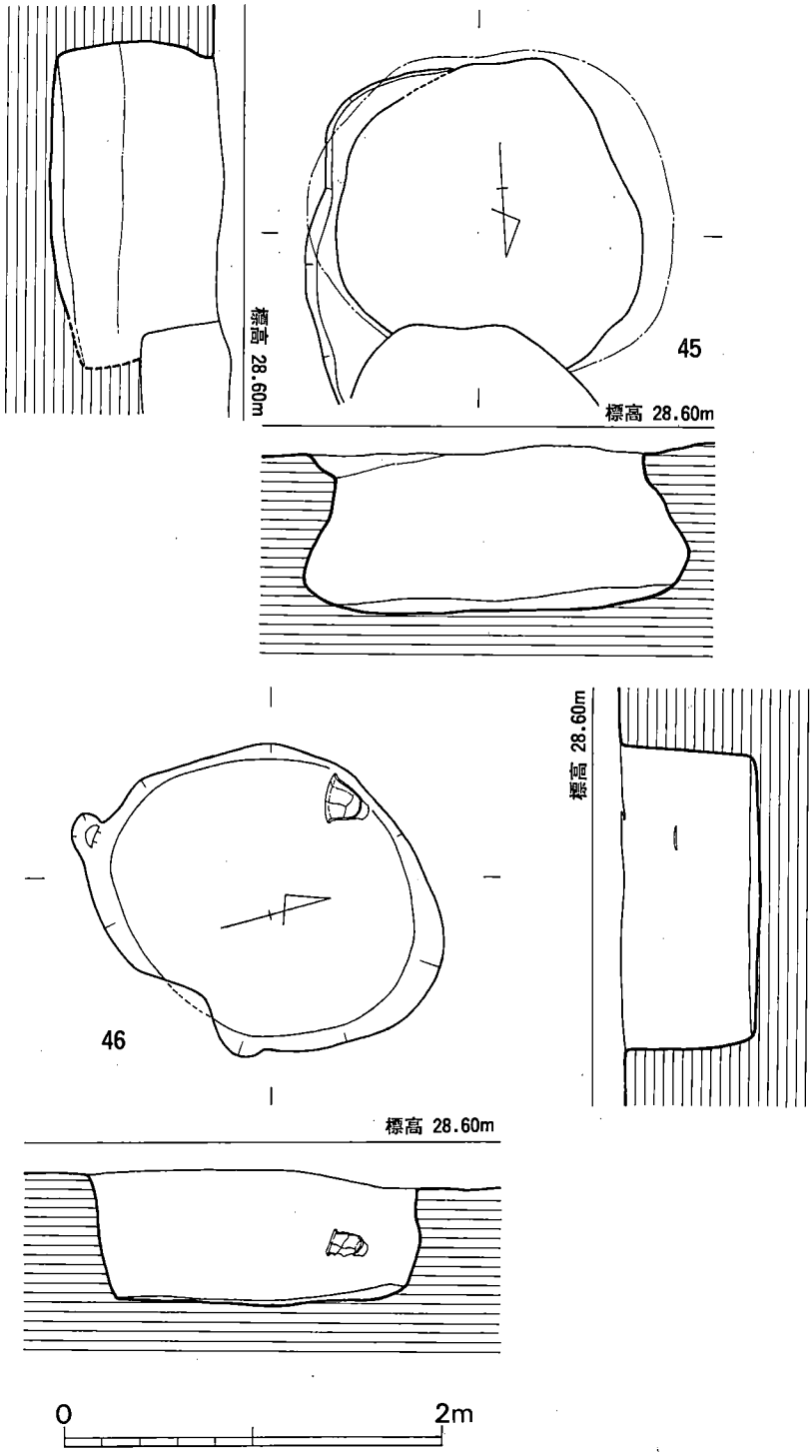



**第 40 図**　44号貯蔵穴出土土器実測図(1/4)

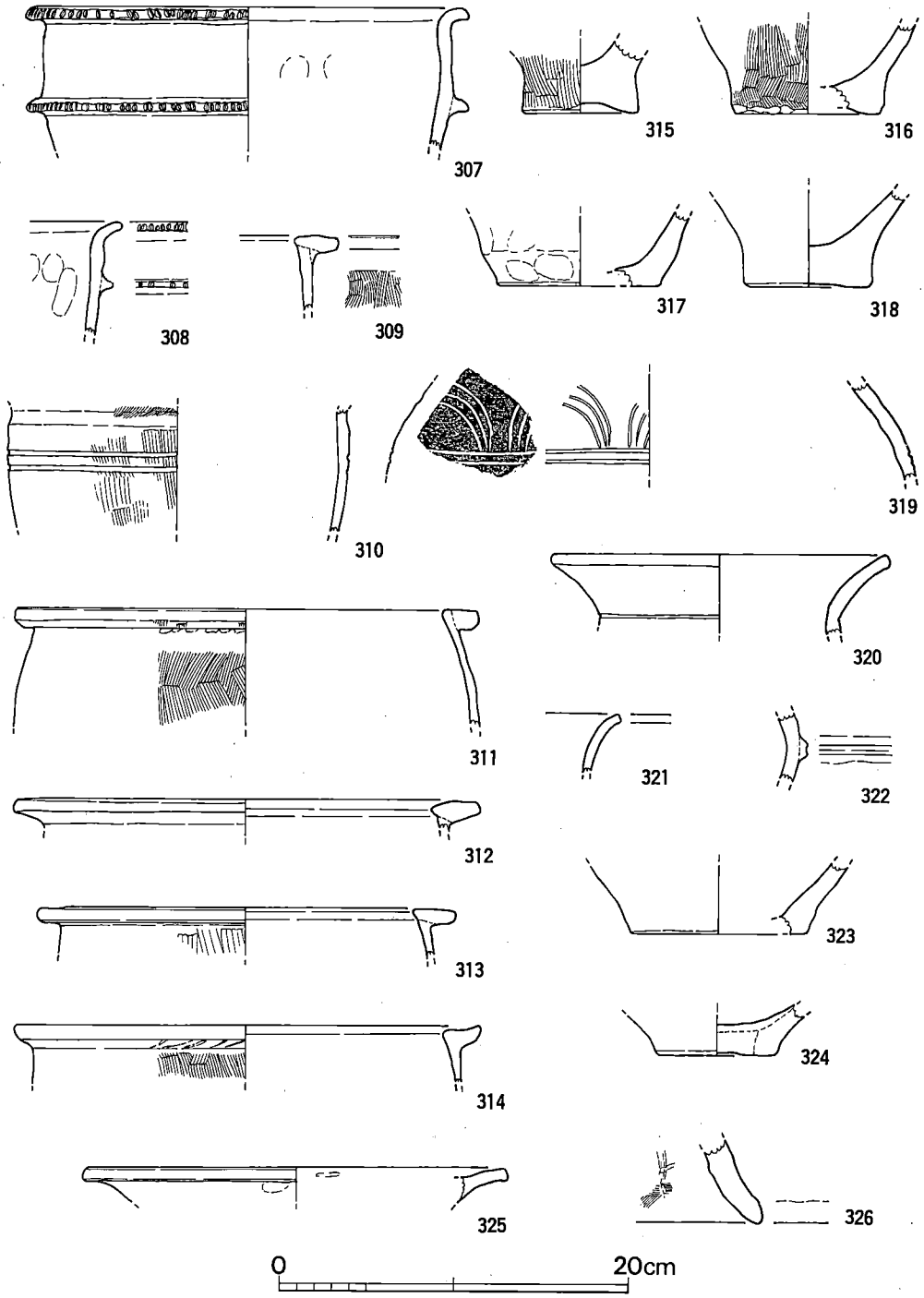
内外面とも，丁寧にヘラ研磨が行われる。320は，口縁部片で，口縁は肥厚しないが，それに相当する部分下位に1本沈線がめぐる。復原口径19.4cm。321は，外反する口縁片で，外面に縦位の暗文がある。322は，胴部にM字状の粘土帯をめぐらす。323・324は，底部片である。

**鉢**（325）　おそらく鋤先状口縁をなすと思われ，口縁内面は，研磨される。高杯杯部の可能性もある。復原口径24.4cm。

**器台**（326）　裾部片で，粘土は精良であるが，焼きは軟かい。内面に絞り痕がある。




**第 41 図**　45･46号貯蔵穴実測図(1/40)




**第 42 図**　45号貯蔵穴出土土器実測図(1/4)

本遺構出土の土器のなかに，遺構が埋没後に，重なって造られた遺構（竪穴状をなす）の遺物が混入していたと思われ，311～314・322・325・326が，その可能性がある。

**円盤状土器片**（第24図16）　甕胴部の沈線部分を長軸に4.7×3.6cmの楕円形をなす。周縁は，やや磨滅する。13.6ｇ。

**不明土製品**（第10図31，第11図40）　31は，6×4.2cm，厚さ1.5cmの，先端の丸まった矢尻状をなす。表面には，ナデの痕，径３mmの棒を押し付けた痕，ヘラ状のもので擦った痕，指ナデの痕などが残っているが，いずれも，目的を持ったものとは思われない。粘土のつなぎ目も多くみられ，全体の形が両手掌で押し潰したようにみられる事から，土器整形時の残余粘土をかためたものかとも思われる。34.35ｇ。40は，長さ３cm，径1.3cmの紡錘状に近く一端を欠く。少なくとも，粘土紐２本を撚り合わせた状態であるが，用途は不明。31と同じく，残余の粘土を撚り合わせた可能性がある。

**黒曜石製縦長剥片**（第14図2）　長さ4.9cm，幅1.6cmの黒曜石の縦剥ぎの剥片で，両端に自然面が残る。両側縁に，細かな剥離が認められ使用によるものと思われる。凸縁部は，ほぼ全縁，凹縁部は，凹部のみに認められる。

**軽石**　５個の細片に割れている。原形は不明。一部に擦れた面が残るものがある。合計8.7ｇ。

## 46号貯蔵穴（図版18－1，第41図）

41号貯蔵穴の南側に接する。底部平面形は，167×143cmの楕円形をなし，壁は一部袋状に立ち上る。残存深さ72cm。壁際に，甕形土器が出土している。遺物は，土器以外に不明土製品が出土している。

出土遺物（図版42・52，第11・43図）

**甕**（327～329）　327・328は，口縁外部に粘土を貼付して逆Ｌ字形の口縁とし，端部に刻目を施す。327は，口径21.4cm，器高19cmで，底部に焼成後の穿孔がある。328の復原口径は，23cmである。

**壺**（330）　外反する口縁部小片で，内面は横位，外面は斜位に，ヘラ磨きが行われる。

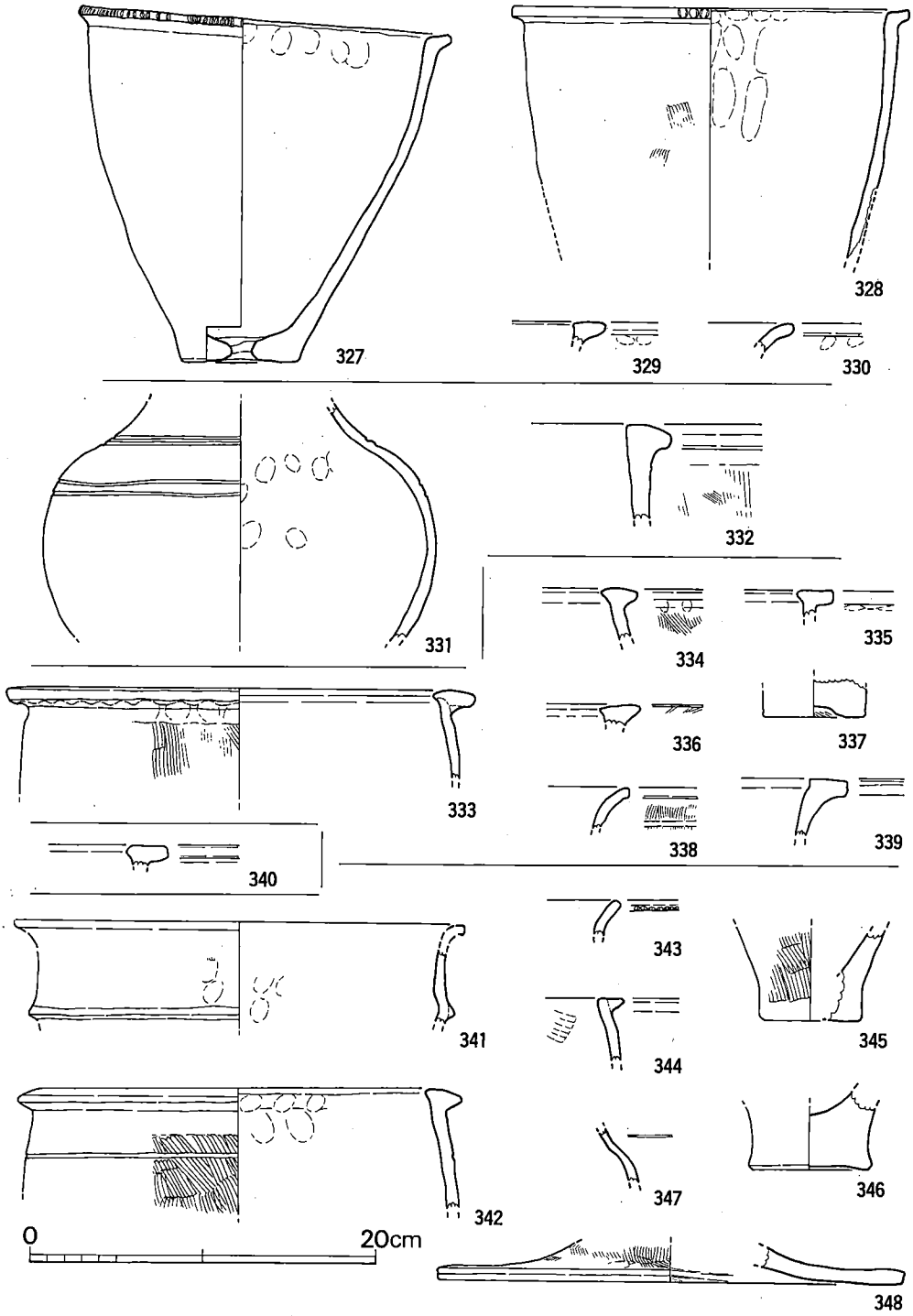
**不明土製品**（第11図41）　3×2.1×1.5cmの粘土塊で，良質粘土である。定形はなさず，おそらく，土器製作時の残余の粘土を固めたものと思われる。

## 47号貯蔵穴（図版18－２，第44図）

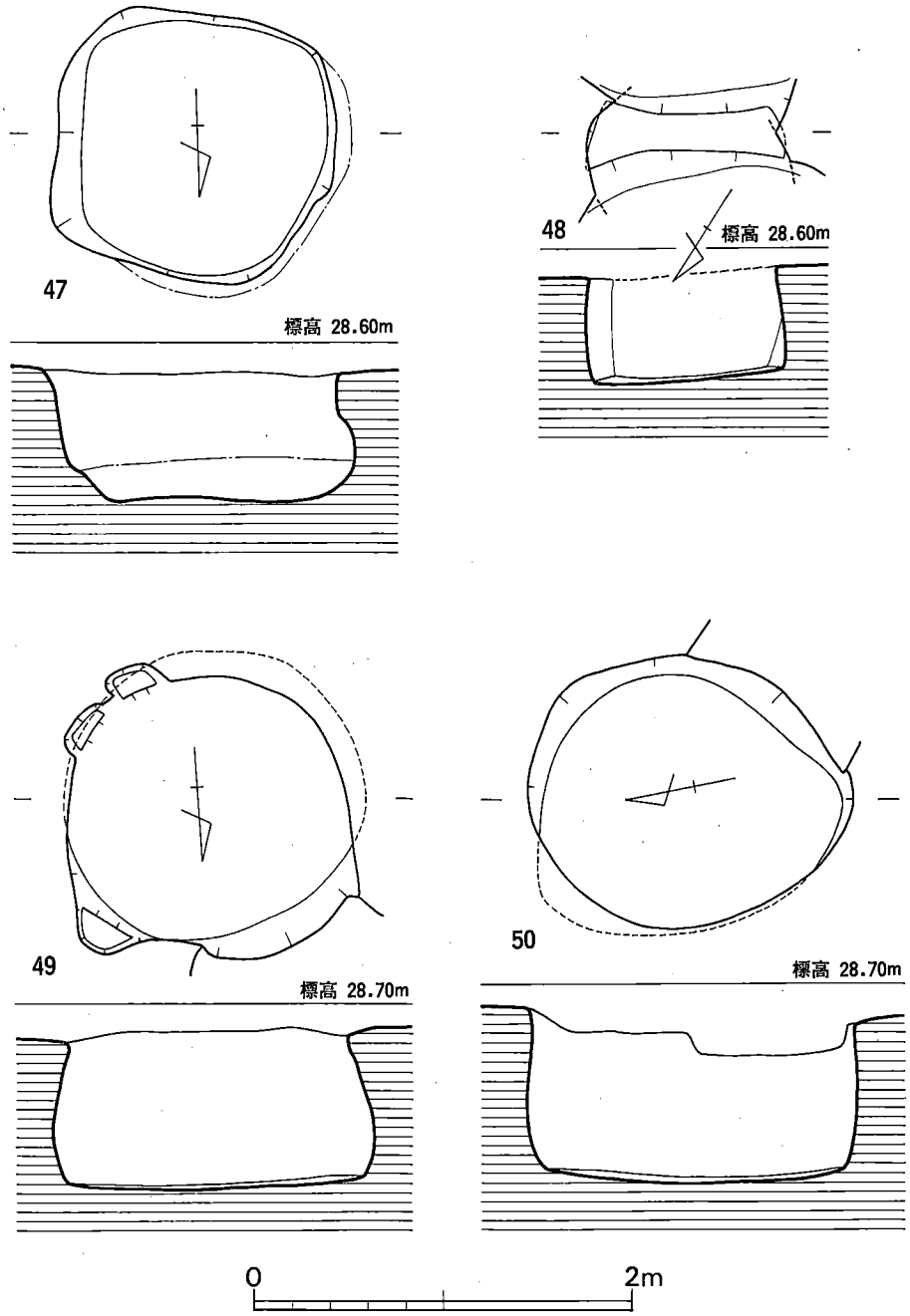
45・50・49号貯蔵穴に取り囲まれるように存在する。底部平面形は，135×130cmの，胴張り隅丸方形をなし，壁は袋状に立ち上る。深さ68cm。遺物は土器と砥石が出土している。

出土遺物（図版49，第27・43図）

**甕**（332）　口縁外に粘土帯を貼付する。口縁上面から外面にかけて横位研磨がなされるが，




**第 43 図**　46・47・49・51・52号貯蔵穴出土土器実測図(1/4)




**第 44 図**　47～50号貯蔵穴実測図(1/40)

一部刷毛目調整痕が残る。内面は，ナデ調整が行われる。

**壺**（331）　頸部に２本，肩部に２本の沈線がめぐり，球形に近い胴部をなす。外面胴部は，横位ヘラ磨きがされる。

**砥石**（第27図11）　破片のため原形は不明であるが，7.5×5.5cmの不整方形をなし，両面に使用面があり凹む。アプライト製。（木村）

## 48号貯蔵穴（第44図）

49・50号貯蔵穴に切られ，その大半を欠失した袋状竪穴で，残存する東西径105cm，深さ57cmを測る小竪穴である。遺物は何等出土しなかった。

## 49号貯蔵穴（図版19－１，第44図）

47号貯蔵穴に西接し，48号貯蔵穴を切っている。底面形は円形の典型的な袋状竪穴である。規模は，長径160cm，短径150cm，深さ85cmを測る。

出土遺物（第11・43図）

**甕**（333～338）　いわゆるＴ字状口縁のもの（333～336）と如意形口縁のもの（338）がある。Ｔ字状口縁のもののうち，334・336は原初的なタイプである。337は底部資料で，外底部中央が凹底である。

**壺**（339）　鋤先状口縁の小破片で，口縁部内面はヨコヘラ磨き，外面はヨコナデで仕上げている。色調は燈色を呈し，焼成良好である。

**不明土製品**（第11図42）　3.5×2.2cm，厚さ1.1cmの楕円形の粘土塊である。一側面は欠けるが，他は指ナデで仕上げている。

## 50号貯蔵穴（図版19－１，第44図）

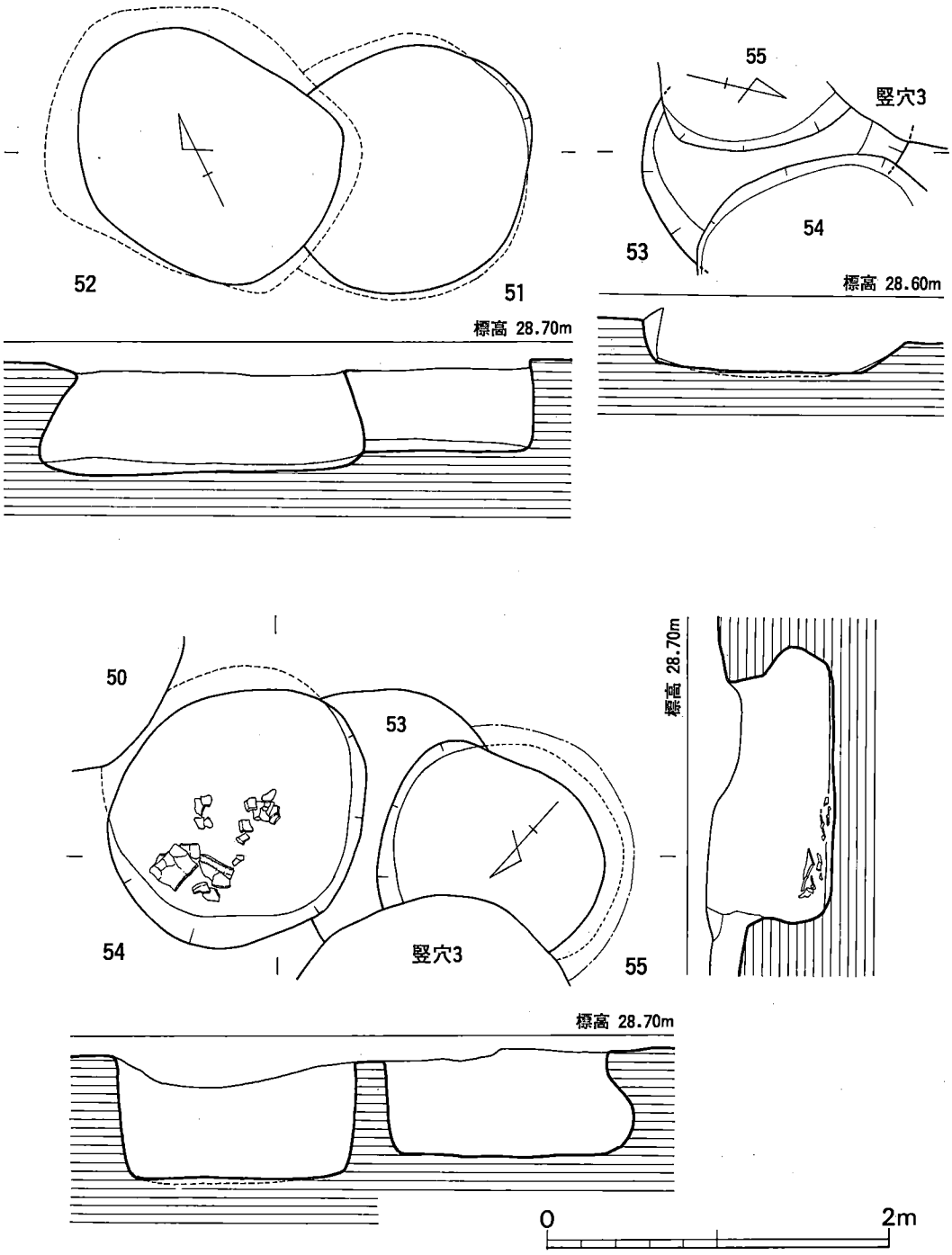
47号貯蔵穴の西側にある竪穴で，底面形は不整楕円形を呈す。断面は典型ではないが弱い袋状をなしている。規模は，長径160cm，短径150cm，深さ90cmを測り，他の貯蔵穴に較べ残りが良い竪穴である。

## 51号貯蔵穴（図版20－１，第45図）

45号貯蔵穴の西側にあり，西壁側を52号貯蔵穴で切られた竪穴である。規模は，南北径157cm，深さ49cmを測る。断面の形状は，弱いものの袋状を呈す。

出土遺物（第43図）

**甕**（340）　幅の狭いＴ字状口縁の小破片で，色調は肌色で焼成も良好である。




**第 45 図**　51～55号貯蔵穴実測図(1/40)

## 52号貯蔵穴（図版20－１，第45図）

51号貯蔵穴を切った典型的な袋状竪穴で，長径184cm，短径150cm，深さ60cmを測る。底部平面形は胴張り隅丸長方形を呈す。遺物は壺・甕・蓋等の破片が少量出土した。

出土遺物（第43図）

**甕**（341～346）　341～344は口縁部付近，345・346は底部付近の破片資料である。口縁部の形状には，如意形のもの（343）と端部に三角凸帯を付したもの（342・344）があり，口縁下に１条の三角凸帯をもつもの（341），１条の沈線がめぐるもの（342）がある。調整は胴部外面刷毛目，内面ナデ，口縁部内外はヨコナデで仕上げたものが多い。342の口縁部上面は刷毛目調整している。342の復原口径は25cmを測る。色調は暗茶灰色ないしは暗茶褐色を呈す。345・346とも底部の器肉が厚い平底である。

**壺**（347）　肩部に１条の沈線がめぐる小形壺の小破片で，内外ともヘラ磨きで仕上げた暗茶褐色を呈す焼成良好な土器である。

**蓋**（348）　裾部付近の破片資料で，復原口径27cmを測る。外面を刷毛のあと，部分的にナデ調整し，内面はナデ，裾部内外はヨコナデで仕上げている。色調は燈色を呈し，焼成も良い。

（井上）

## 53号貯蔵穴（第45図）

54号・55号貯蔵穴に，東西の両側を切られ，さらに北側は竪穴３に切られており，54・55号貯蔵穴の間に，わずかに残存するだげである。残存する部分よりすると，底面径128cmの円形に近い形態をなすと思われる。壁は，丸みをおびて外に開き40cm残存する。出土遺物はない。

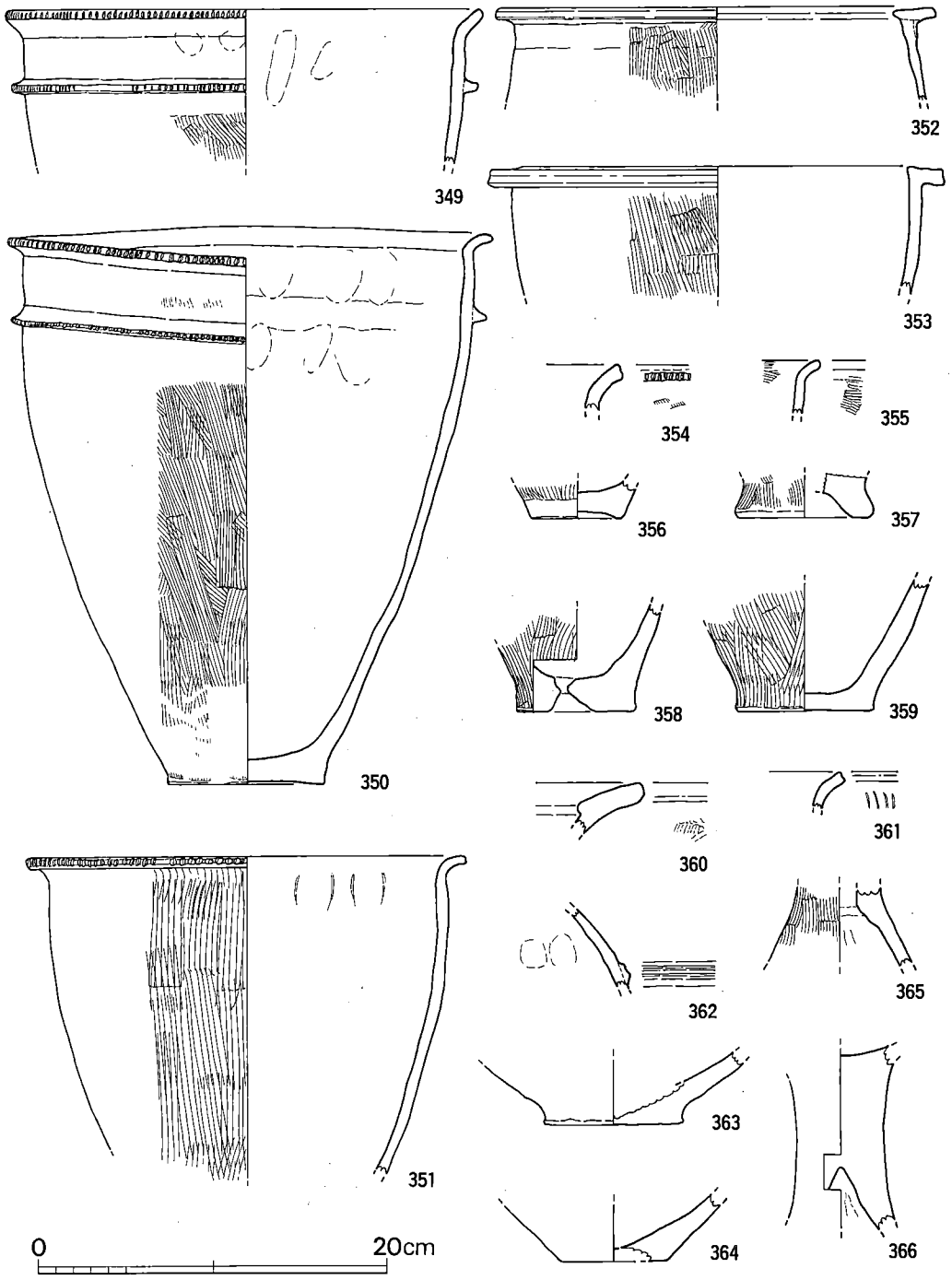
## 54号貯蔵穴（図版20－２，21－１，第45図）

50号貯蔵穴の西側に接し，53号貯蔵穴を切る。底部平面形は，145×145cmの円形をなし，壁は袋状に立ち上り，深さ73cmである。土器は，ほぼ床面に接してまとまって出土している（350・351など）。

出土遺物（図版42，第46図）

**甕**（349～359）　349～351・354・355は，如意形口縁を持つ。いずれも口唇端部に刻目を持ち，349・350は１条の刻目凸帯を持つ。350は，口径27.5cm，器高31.9cmで平底である。349の復原口径27cm，351は24.65cmである。352・353は，逆Ｌ字状に近い口縁をなす。復原口縁内径は，352が20.4cm，353が21.8cmである。356～359は底部片で，358・359は平底で，349～351などの底部として良いものである。356・357は上底となる。

**壺**（360～364）　360・361は，外反する口縁で，360は，内面が肥厚する。361は，外面に縦




**第 46 図**　54号貯蔵穴出土土器実測図(1/4)

位暗文がある。362は，胴部片で，断面M字状の凸帯がめぐる。363・364は，底部片で，外面ヘラ磨きされる。

**蓋**（365）　握り部付近の破片である。外面は刷毛目調整がなされる。

**高杯**（366）　脚部片で，杯部下は，実のある円筒状をなし，外面はヘラ磨きされる。残存高10cm。

## 55号貯蔵穴（図版20－1，第45図）

53号貯蔵穴を切り，竪穴3に切られる。底部平面形は，135×135cmの円形をなし，壁は袋状に立ち上る。深さ63cmである。遺物は，土器と円盤状土器片が出土している。

出土遺物（図版42・51，第24・47図）

**甕**（367～372）　367～371は，いずれも逆L字状に近い口縁をなす。367は，復原口縁内径22cmで，口縁は内傾する。口縁外面粘土接合部には，指押圧痕が良く残る。372は底部片で，やや上げ底気味である。

**壺**（373）　ゆるやかに外反する口縁部片で，内面から口縁端上面は，ヘラ磨き，外面はナデのあと，1cm間隔の暗文が縦位に施される。頸部には1本の沈線が引かれる。復原口径23.5cm。

**蓋**（374）　裾端部破片で，端部やや肥厚する。復原径19.6cm。

**器台**（375）　底部片で，端部やや肥厚する。外面は刷毛目調整痕が残る。底径10.7cm，残存高5.5cm。

**円盤状土器片**（第24図17・18）　17は，4.1×4.1cmの不整方形で周囲一面より打欠く。16g。18は，3.7×3.6cmの方形で，紐かけ用の抉りが2ヶ所認められる。13.2g。いずれも甕胴部破片を利用する。

## 56号貯蔵穴（図版22－1，第48図）

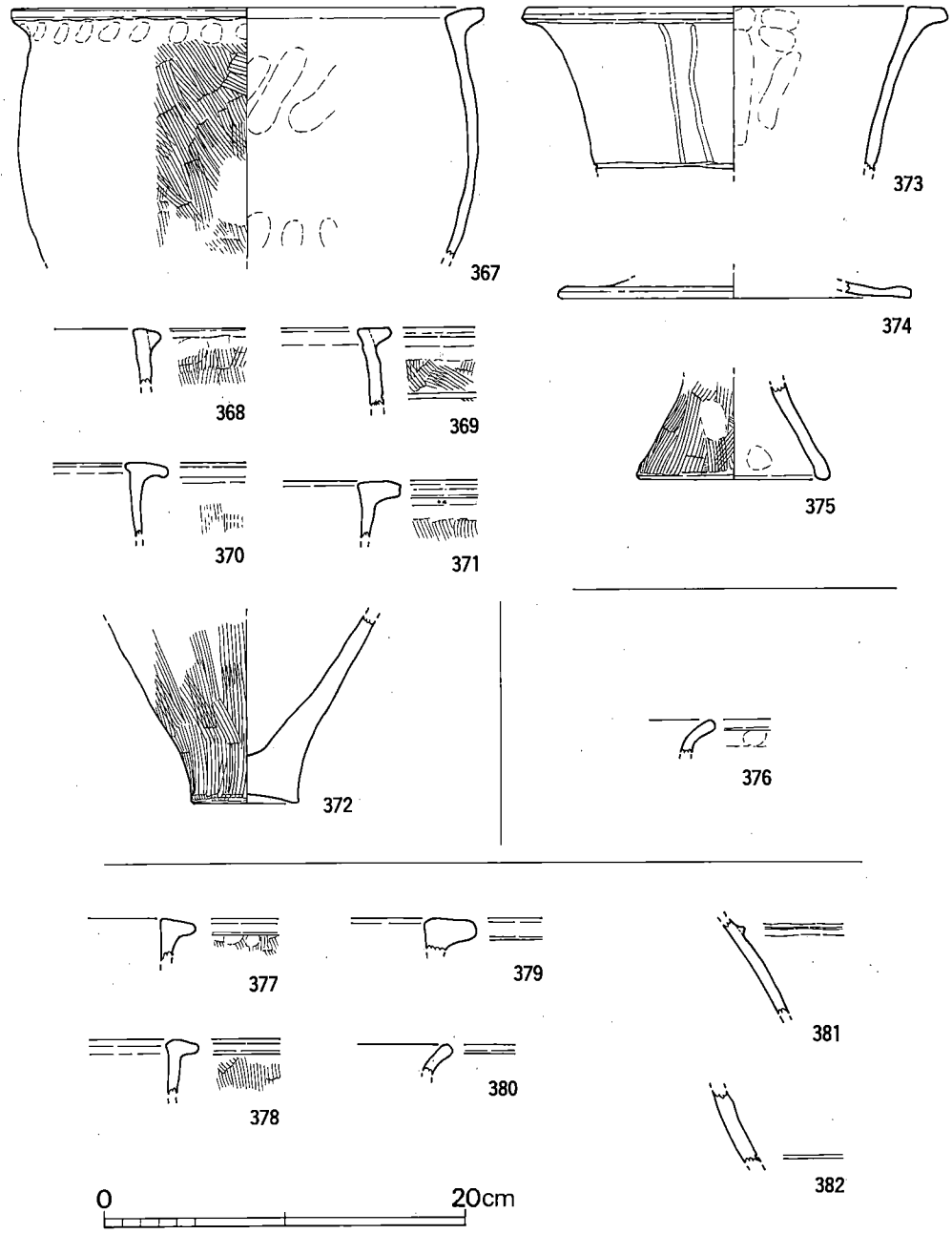
57号貯蔵穴に切られる。底部平面形は，150×132cmの不整楕円形をなす。壁は，外に開き壁高66cmとなる。遺物は，少量の土器片が出土している。

出土遺物（第47図）

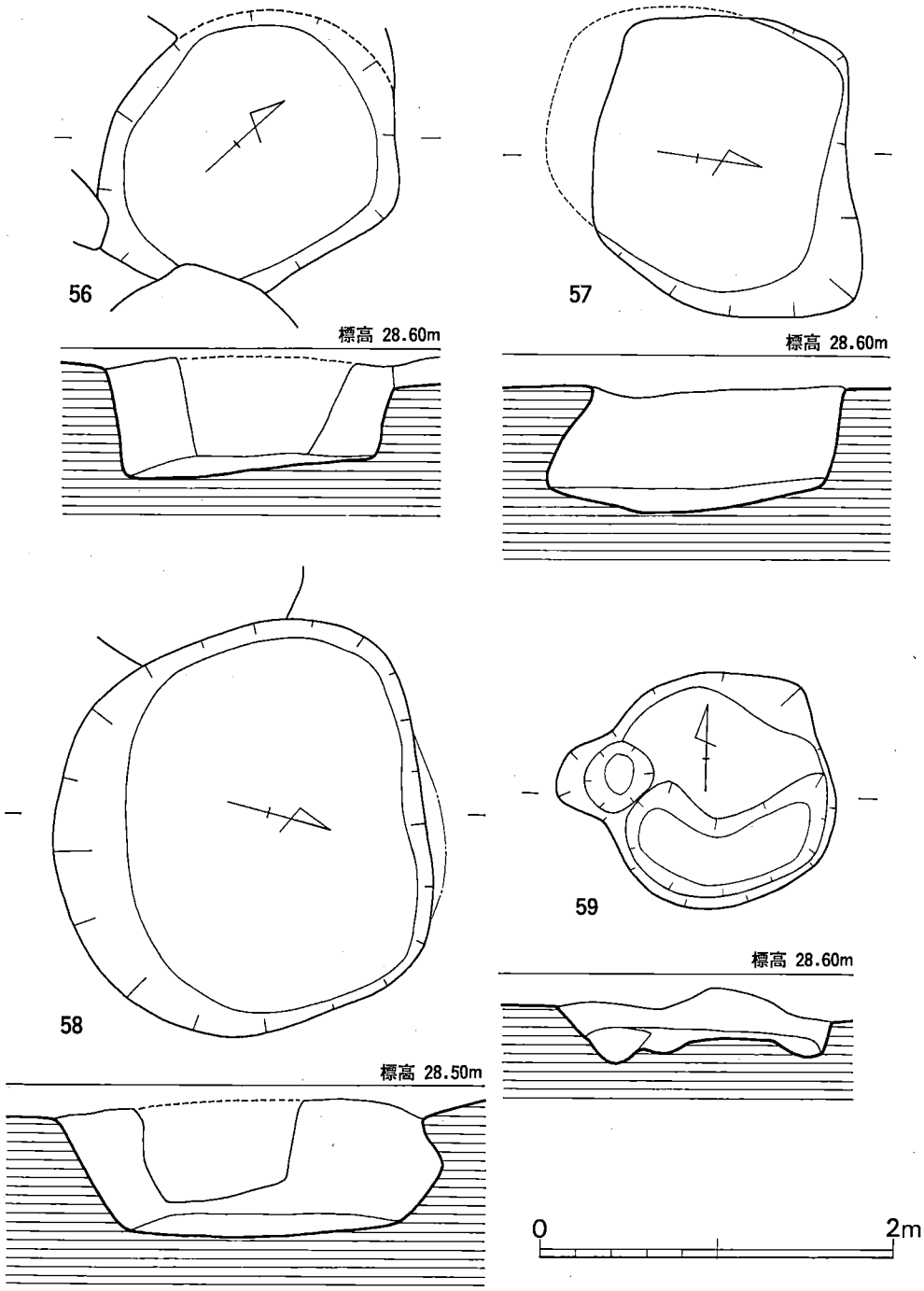
**甕**（376）　外反する口縁部小片。端部は丸まり内外ともナデ調整が行われる。　（木村）

## 57号貯蔵穴（図版22－1，第48図）

56号貯蔵穴の南壁の一部を切って作られた竪穴で，断面は南壁が強い袋状をなすのに対し，北壁は直立気味に外反している。底面形は胴張り隅丸方形で，規模は長径158cm，短径153cm，深さ72cmを測る。遺物は弥生土器小片が若干出土しただけである。




**第 47 図**　55～57号貯蔵穴出土土器実測図(1/4)




**第 48 図**　56～59号貯蔵穴実測図(1/40)

出土遺物（第47図）

**甕**（377～380）　377～379は逆Ｌ字状口縁，380は如意形口縁の甕である。胴部外面は刷毛，内面ナデ，口縁部内外はヨコナデしている。377の口縁下には成形時の指頭圧痕が残っている。

**壺**（381・382）　肩部付近の小破片で，381は1条の三角凸帯，382は１条の沈線がめぐっている。外面の調整は，381がナデ，382がヘラ磨き，内面は381がナデのあと部分的にヘラ磨き，382はナデ仕上げである。色調はいずれも暗茶灰褐色を呈し，焼成も良好である。

## 58号貯蔵穴（第48図）

西壁の一部を57号貯蔵穴に切られた竪穴で，底面形は胴張り隅丸長方形を呈す。規模は，長径210cm，短径160cm，深さ74cmを測る。出土遺物は壺・甕・鉢・蓋・器台等の弥生土器が多数出土した。

出土遺物（第11・49図）

**甕**（383～392）　如意形口縁のもの（383・387・388）と逆Ｌ字状口縁のもの（384～386）があり，384・385は逆Ｌ字状口縁でも口縁部の幅が狭いタイプである。383の口縁下には１条の三角凸帯が付されている。383・384・387の口縁端部と凸帯には刻目が施されている。調整は，胴部外面は刷毛，内面ナデ，口縁部内外はヨコナデで仕上げている。383の胴部内面と385の口縁下には指頭圧痕がみられる。復原口径は383が25cm，384が24.6cm，385が29cm，386が34.4cmを測る。389～392は底部付近の資料で，391・392が底部の器肉が厚いタイプで，391の外底部は凹み底である。調整は外面刷毛，内面ナデで，391・392の内底部には指頭圧痕を残している。底径は389が7.3cm，390が8.6cm，391が8.4cm，392が6.5cmを測る。

**鉢**（395）　復原口径29.2cmを測る逆Ｌ字状口縁の鉢である。胴部外面は指ナデのあとヘラ磨き，内面はナデ，口縁部内外はヨコナデで仕上げている。色調は肌色で，焼成は良好である。

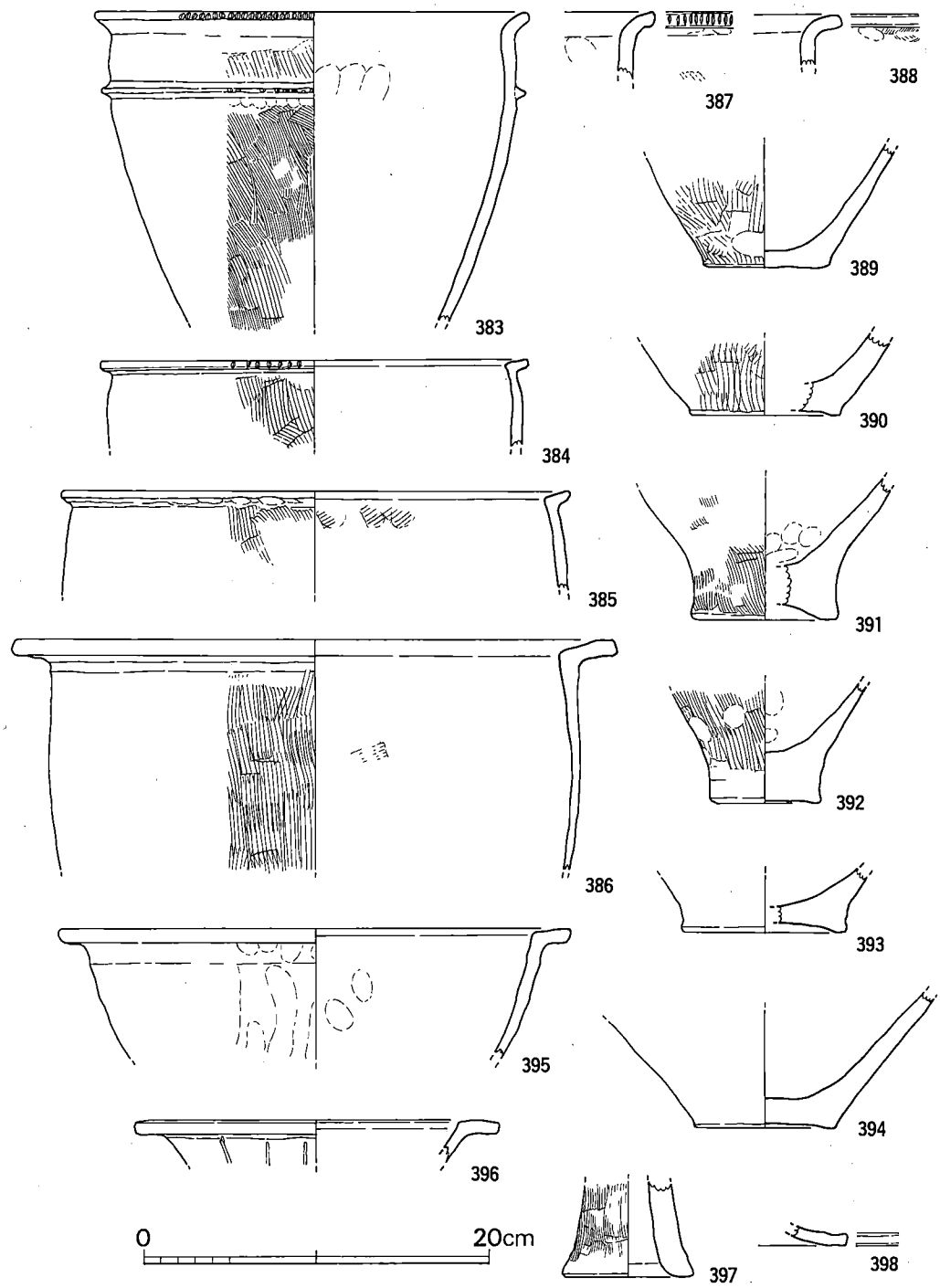
**壺**（393・394・396）　393・394は底部付近，396は口縁部の資料である。396は鋤先状口縁の小形の壺で，復原口径21cmを測る。口縁部内面は丁寧なヨコヘラ磨き，頸部外面はナデのあと暗文を施している。色調は暗橙色で，焼成も良好である。

**蓋**（398）　裾部の小破片で，外面ナデ，裾部から内面はヨコナデしている。色調は橙色を呈し，焼成も良好である。

**器台**（397）　下半部の資料で，復原裾部径は7.6cmを測る。外面の調整は刷毛，内面はナデて仕上げた器肉の厚い土器である。

**不明土製品**（第11図43）　棒状の粘土紐で，下端は欠損している。指ナデ痕が全体に残る。

以上が58号貯蔵穴から出土した土器とされているものの，この貯蔵穴を切って作られた57号貯蔵穴出土の土器群に比べ，明らかに型式的に新しい土器群（386・391・392・395～398）が混在している。このことは，上層にあった新しい時期の遺構である３号竪穴住居跡に基本的に




**第 49 図**　58号貯蔵穴出土土器実測図(1/4)

帰属する土器群の可能性が高いとすべきであろう。

### 59号貯蔵穴（第48図）

57号貯蔵穴の南側にある小竪穴で，61号貯蔵穴の一部を切っている。底面形は不整円形を呈し，底にはピット２個が穿たれている。規模は長径120cm，短径115cm，深さ28cmを測る。

出土遺物（図版53－２，第７・50図）

**甕**（399）　底部の破片資料で，復原底径７cmを測る。器面は風化が著しく調整は不明である。

**縄文土器**（第７図６）　粗製深鉢形土器の胴部片で，内面に板状工具による削り痕が残る。胎土には角閃石を混入する。

### 60号貯蔵穴（第51図）

59号貯蔵穴の北東に隣接し，61号貯蔵穴の北壁の一部を切っている袋状竪穴である。底面形は不整円形を呈す。規模は長径140cm，短径118cm，深さ83cmを測る。

出土遺物（図版51，第24・50図）

**甕**（400・401）　如意形口縁の甕で，400の口縁端部には刻目を施している。401は復原口径28.8cmを測り，色調は明褐色を呈す。

**壺**（402）　肩部に２条の沈線がめぐる壺の胴部小片である。調整は外面ヘラ磨き，内面上半はヘラ磨き，下半には指頭圧痕がみられる。

**円盤状土器片**（第24図19）　側面を粗く打ち欠いた不整楕円形を呈す。4.2×3.5cm，厚さ7mm，重さ11.35ｇを測る。

### 61号貯蔵穴（第51図）

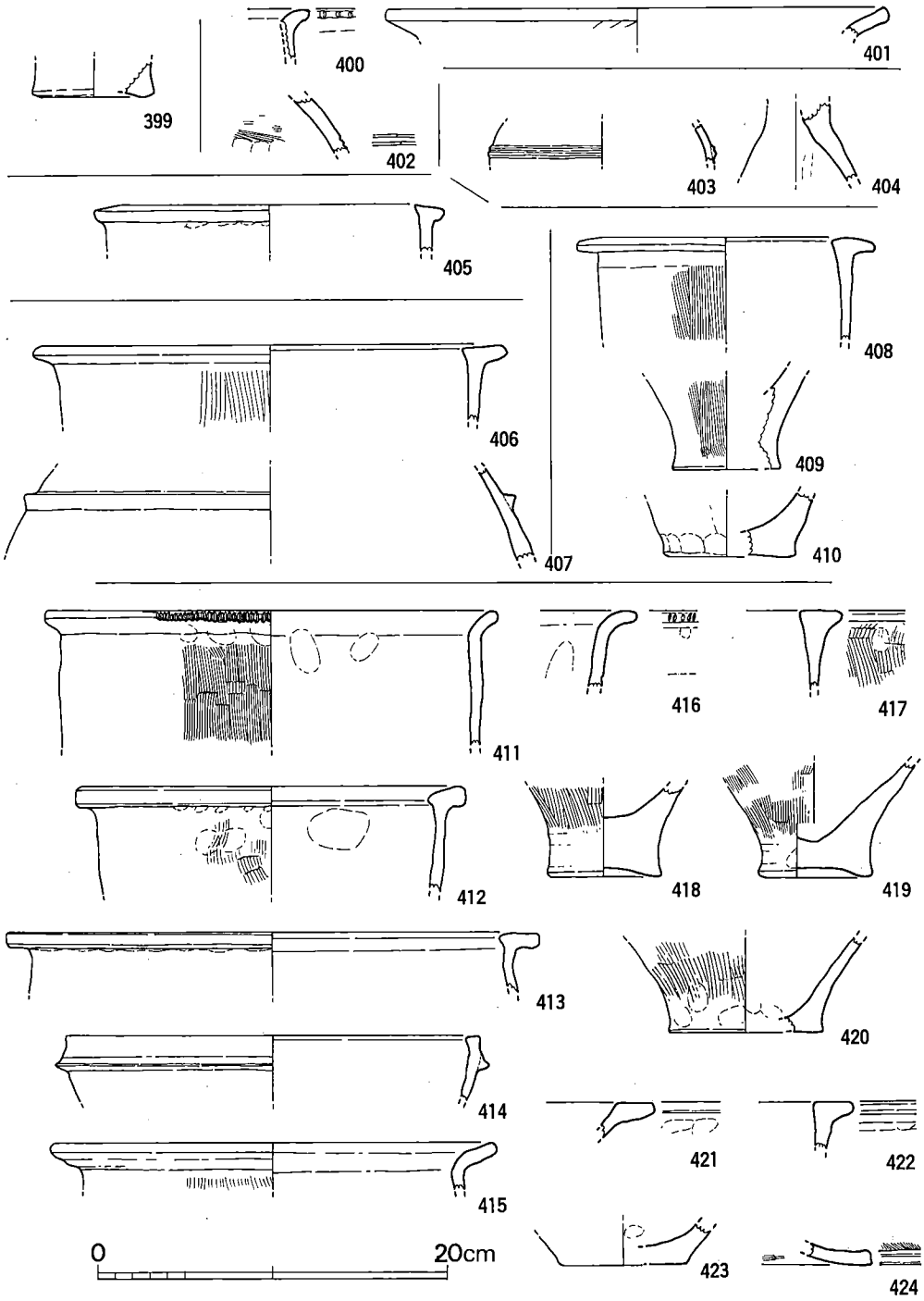
西壁を59号，北壁を60号，東壁を62号貯蔵穴に切られた竪穴で，底面形は円形を呈す。規模は長径140cm，短径130cm，深さ45cmを測り，断面は逆台形をなしている。

出土遺物（図版51，第24・50図）

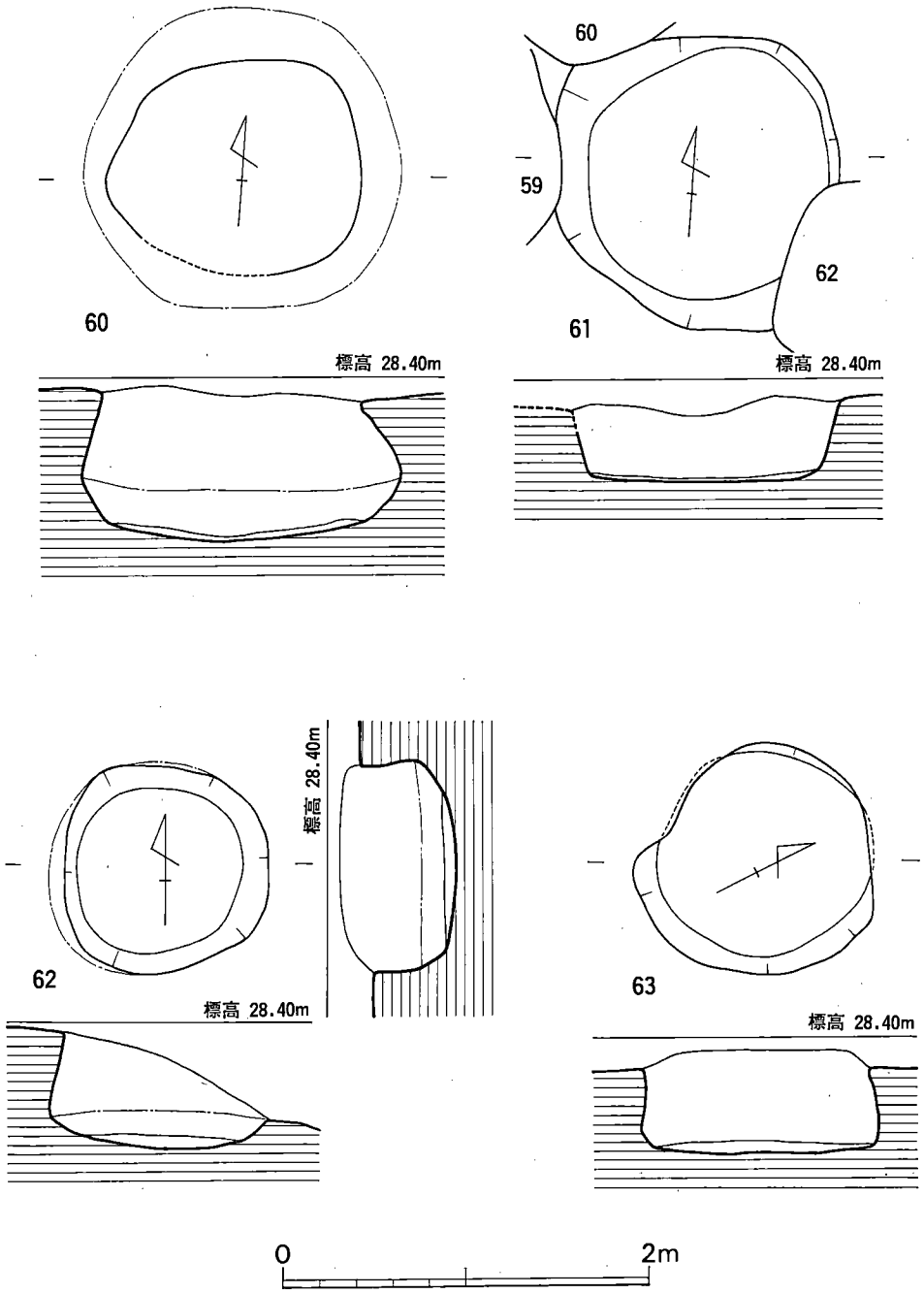
**壺**（403）　胴部の破片資料で，胴部外面には１条のＭ字状凸帯が付された小形壺である。外面は，ヘラ磨き，内面はナデて仕上げた黒褐色を呈す焼成良好な土器である。復原胴部最大径は12.8cmを測る。

**高杯**（404）　脚部の破片資料で，調整は外面をタテヘラ磨き，内面はヘラ状工具によりナデている。

**円盤状土器片**（第24図20）　土器片を加工したもので，6.1×4.8cm，厚さ6mm，重さ23.6ｇを測る。




**第 50 図**　59～65号貯蔵穴出土土器実測図(1/4)




**第 51 図**　60～63号貯蔵穴実測図(1/40)

## 62号貯蔵穴（図版22－2，第51図）

61号貯蔵穴の東壁を切った小形の袋状竪穴で，底面形は円形である。規模は長径90cm，短径88cm，深さ64cmを測る。遺物としては弥生土器小片若干と鉄鏃片１点が出土している。鉄鏃はその型式からみて，新しい時期の混入品と思われる。

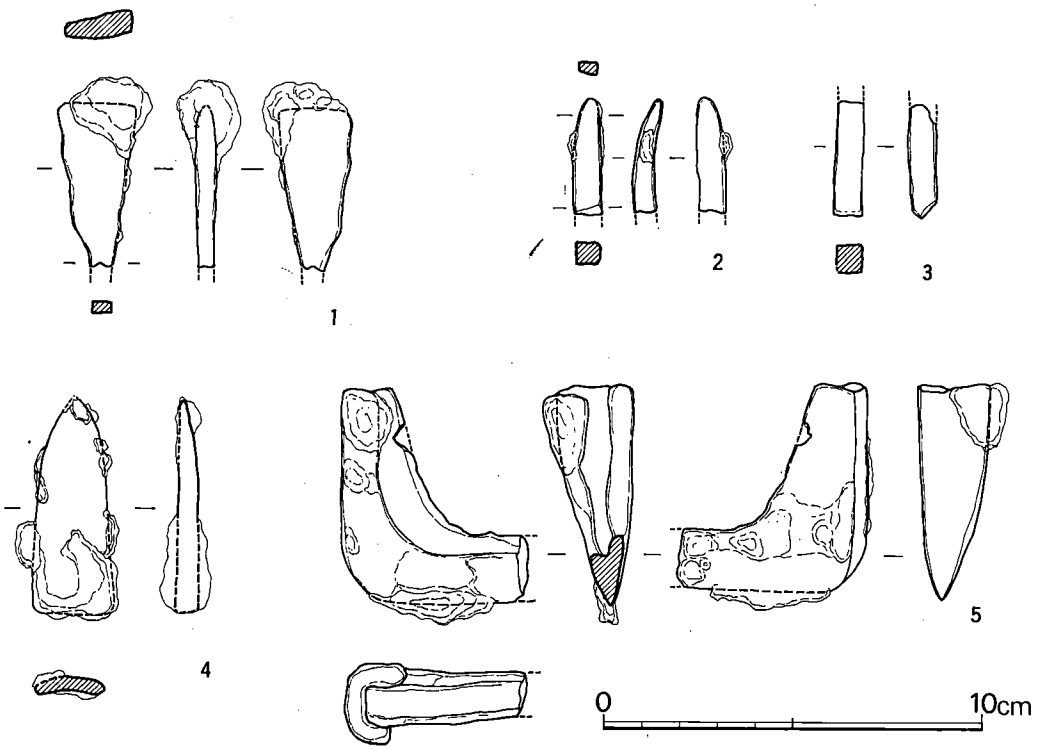
出土遺物（図版53－１，第50・52図）

**甕**（405）　口縁端部に三角凸帯を付した甕で，復原口径は20cmを測る。色調は明褐色を呈す。

**鉄鏃**（第52図１）　方頭細根斧箭式の鏃で，基部を欠失している。頭部幅2.1cm，長さ3.5cm，中央部の厚さ0.6cmを測る。

## 63号貯蔵穴（図版23－１，第51図）

62号貯蔵穴の北側に近接して検出された小竪穴で，底面形は円形プランを呈す。断面は弱いものの袋状をなしている。規模は長径114cm，短径110cm，深さ58cmを測る。




**第 52 図**　貯蔵穴出土鉄器実測図(1/2)

出土遺物（第10・50図）

**甕**（406）　T字状口縁の甕で，胴部外面を粗い刷毛，内面ナデ，口縁部内外はヨコナデで仕上げている。

**壺**（407）　肩部に1条の三角凸帯を付した壺の胴部破片で，色調は赤褐色で，胎土・焼成とも良好な土器である。

**不明土製品**（第10図34）　口縁端部に粘土紐を貼付したような粘土塊で，甕製作途中の失敗作のように思われる。

## 64号貯蔵穴（第53図）

55号貯蔵穴の西側から検出された袋状竪穴で，規模は長径158cm，短径127cm，深さ65cmを測る。底面形は胴張り隅丸長方形を呈す。

出土遺物（第50図）

**甕**（408～410）　408は逆L字状口縁の小形の甕で，復原口径17cmを測る。胴部外面は粗い刷毛，内面はナデ，口縁部内外はヨコナデ調整である。409・410は底部付近の資料で，外面の調整は409が刷毛，410はナデ，内面はいずれもナデて仕上げている。色調は408が赤褐色，409が明褐色，410が茶褐色である。

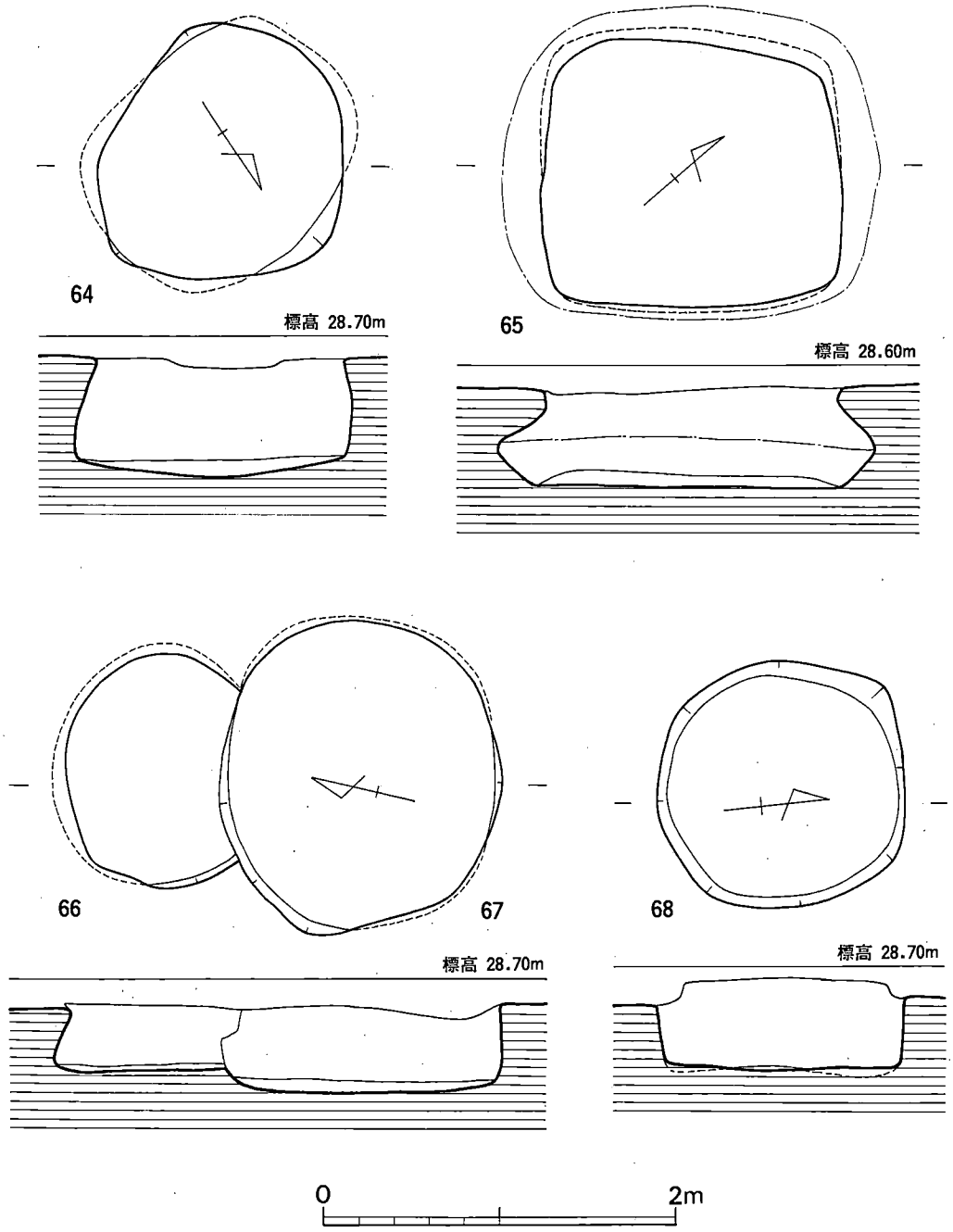
## 65号貯蔵穴（図版23－2，第53図）

64号貯蔵穴の南西から検出された袋状竪穴で，底面形は隅丸長方形を呈す。壁面のオーバーハングは東壁が弱い他は，強い袋状をなしている。規模は長径172cm，短径160cm，深さ55cmを測る。遺物は壺・甕・蓋等の破片多数が出土した。

出土遺物（第50図）

**甕**（411～420）　口縁部の形状により3タイプに分かれる。如意形口縁のもの（411・415・416），T字状口縁のもの（412・413・417），口縁端部より少し下がった位置に三角凸帯が付く内外面とも丹塗りの珍しい甕（414）などがある。417はT字状口縁の原初的タイプといえる。411・416の口縁端部には刻目が施されていて，416の口縁下には凸帯の剝離痕がみられる。調整は，胴部外面を411が刷毛，412が刷毛のあと部分的にナデ，内面は両方ともナデで，口縁部内外はヨコナデで仕上げている。411・412とも口縁下に成形時の指頭圧痕を残している。復原口径は411が25.2cm，412が21.6cm，413が30.6cm，414が23.4cm，415が24.8cmを測る。418～420は底部付近の資料で，418は底面の器肉が厚いタイプである。調整は外面刷毛，内面ナデで仕上げていて，底部下半はさらにヨコナデしている。底径は418が6.5cm，419が6.4cm，420は8.7cmを測る。

**壺**（421～423）　421・422は鋤先状口縁の壺の口縁部小片で，422の口頸部は直立気味のタ




**第 53 図**　64～68号貯蔵穴実測図(1/40)

イプである。色調はどちらも暗茶灰色で，焼成も良好である。423の底部の破片資料で，外面ヘラ磨き，内面刷毛のあとナデて仕上げている。色調は黒褐色を呈す。復原底径は6.8cmを測る。

蓋（424）　裾部の小破片で，体部内外は刷毛，裾部内外はヨコナデで仕上げている。

## 66号貯蔵穴（図版24－1，第53図）

65号貯蔵穴の南側に近接し，南壁側を67号貯蔵穴に切られた小形の袋状竪穴である。底面形は円形で，規模は長径135cm，復原短径130cm，深さ36cmを測る。

出土遺物（第54図）

甕（425）　如意形口縁の小破片で，口縁下に1条の沈線がめぐる。胴部外面は刷毛，内面は刷毛のあとナデている。色調は暗茶灰色を呈し，焼成も良好である。

## 67号貯蔵穴（図版24－1，第53図）

66号貯蔵穴の南壁を切って作られた底面形が円形プランの袋状竪穴である。規模は長径178cm，短径152cm，深さ50cmを測る大形の竪穴である。

出土遺物（第54図）

甕（426）　底部破片で，底径8.6cmを測る。外面刷毛，内面と外底部はナデ仕上げである。色調は橙色を呈し，焼成は良好である。

壺（427～429）　427は広口の単口縁の壺，428はく字状に緩やかに外反する単口縁の壺の小片で，428の内外ともヘラ磨き，427は外面がヘラ磨き，内面はヨコナデで仕上げている。429は小形壺の頸部付近の破片資料で，肩部には2条の沈線がめぐっている。調整は内外ともナデ仕上げで，色調は暗茶灰褐色を呈す。（井上）

## 68号貯蔵穴（図版24－2，第53図）

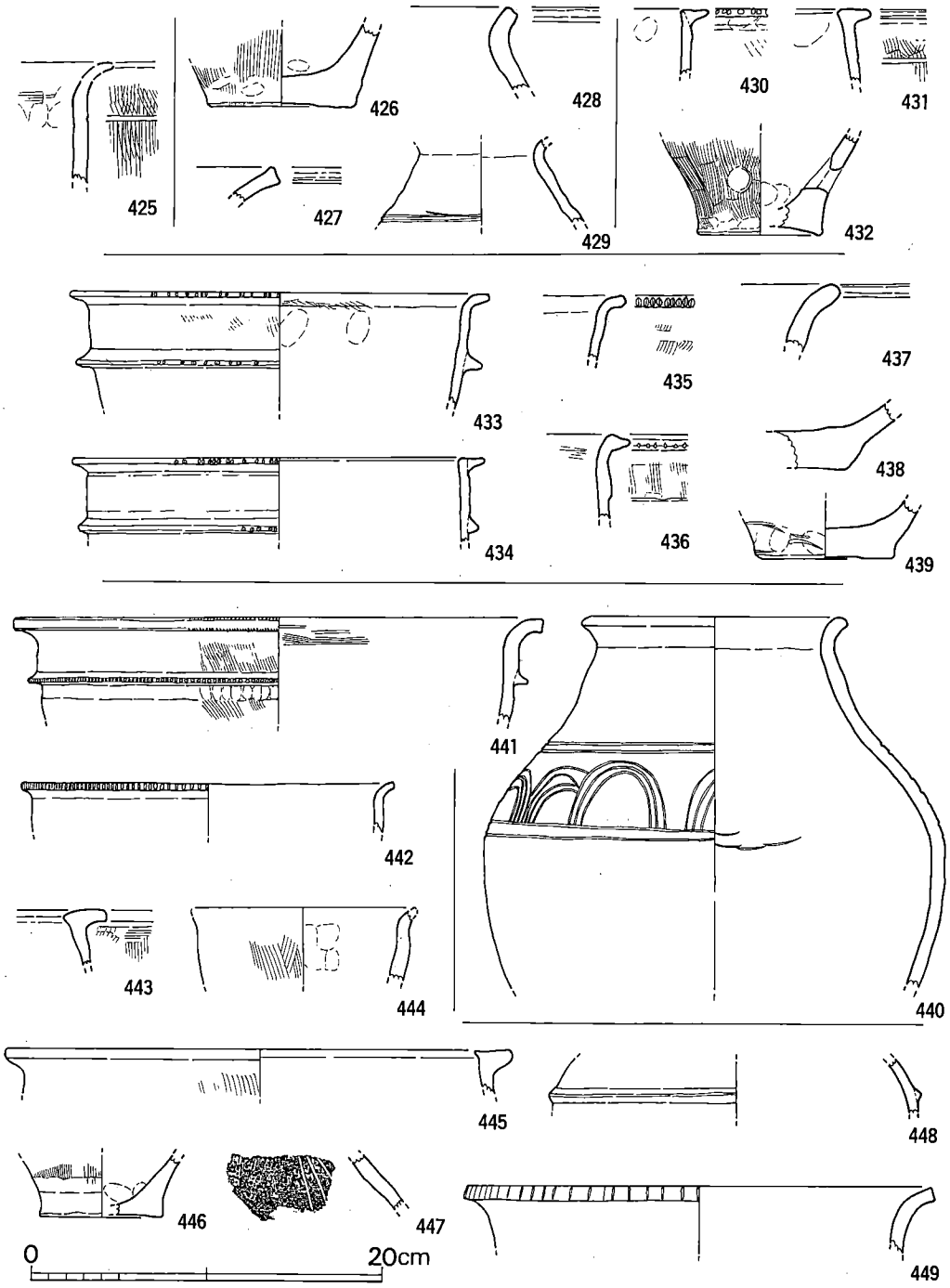
69号貯蔵穴の西側にあり，竪穴6が上面を削平する。底部平面形は，132×125cmの円形で，壁はほぼ直に立ち上る。残存深さ55cm。遺物は，土器が少量出土している。

出土遺物（第54図）

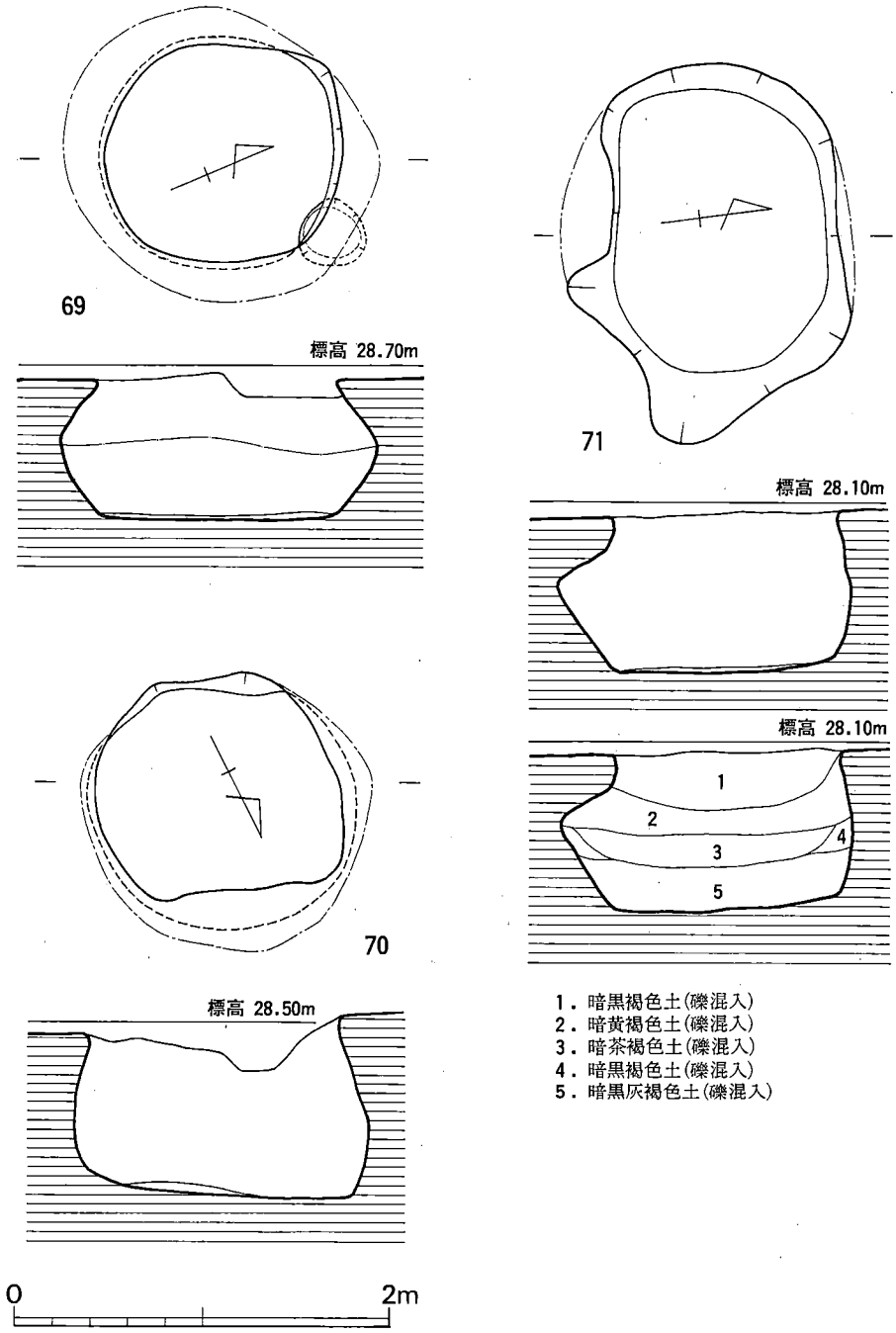
甕（430～432）　430は，口縁端部に刻目，431は，口縁下3cmに1条の沈線がある。432は，底部片で平底をなす。

## 69号貯蔵穴（図版24－2，第55図）

68号貯蔵穴の東側にあり，竪穴6に切られる。底部平面形は，125×125cmの円形をなす。壁は，袋状に立ち上り，胴部最大径167cm，上面径は，118×126cmで円形をなす。深さ78cm。底面北東部に径35cmの穴がある。遺物は，土器と円盤状土器片が出土している。




**第 54 図**　66～71号貯蔵穴出土土器実測図(1/4)




**第 55 図**　69～71号貯蔵穴実測図(1/40)

出土遺物（図版51，第24・54図）

**甕**（433～436）　433・435は，如意形口縁をなし，口唇部端に刻目を施し，433は口縁下4cmに刻目凸帯をめぐらす。復原口径23.8cm。434・436は，口縁外に粘土帯を貼付し，その先端に刻目を施す。434は，口縁下4cmに刻目凸帯をめぐらす。436は，口縁下外面に，通常刻目凸帯の貼付される付近まで粘土を貼り肥厚させる。434は復原口径23.4cm。

**壺**（437～439）　437は，外反する口縁部片。438・439は底部片である。

**円盤状土器片**（第24図21）　外反し，外に肥厚する口縁部を利用し両面より打欠き，4.8×4.4cmの長方形に加工する。磨滅痕はない。32.8ｇ。

## 70号貯蔵穴（図版25－１，第55図）

36号貯蔵穴の西側にあり，竪穴15に切られる。底部平面形は，145×128cmの円形をなし，壁は袋状に立ち上り，最大径は，156×140cmとなる。上部平面形は，崩落によりゆがんでいる。深さ98cm。遺物は，土器だけである。

出土遺物（図版42，第54図）

**壺**（440）　口縁から胴下半部までの破片で，口縁は外反し，頸部から肩部は殆ど屈曲せずに続く。肩部には，頸部・胴部との境に２本単位の沈線をめぐらし，その間を，３本単位の連弧状沈線を施す。復原口径13.8cm，残存高21cmである。

## 71号貯蔵穴（図版25－２，第55図）

70号貯蔵穴の西側にある。底部平面形は，150×110cmの，胴張り隅丸長方形をなし，壁は袋状に立ち上る。上部平面形は，崩落のため不整形をなす。深さ83cm。遺物は，土器と鉄製品が出土している。

出土遺物（図版53－１，第17・52・54図）

**甕**（441・443・445・446・449）　441は，口縁下3.5cmにやや垂れ下がった刻目凸帯をめぐらすが，そこより外反する口縁端まで肥厚させ，口縁端部は面をなし，その上・下端部に細い刻目を施す。復原口径30cm。449も，外反する口縁を持つが，端部は平坦な面をなし，沈線風の刻目を入れる。復原口径26.8cm。接合しないが，同一個体と思われる破片が，33号貯蔵穴より出土している（229）。442は，如意形に外反する口縁で端部に刻目がある。復原口径21.1cm。443・445は，逆Ｌ字状の口縁，446は底部片である。446の復原口縁内径24.5cm。

**鉢**（444）　口縁端部を欠くが，外反する口縁を持つ。復原口径12.7cm。

**壺**（447・448）　447は，肩部片で３本単位の沈線を引く。448は，断面Ｍ字状の凸帯を胴部最大径部に持つ。

**鉄製品**（第52図２・３）　２個は接合しないが同一個体と思われる。鉄鏃の茎部片とも考え

られるが，用途不明である。

**縄文土器**（第17図５）　深鉢胴部片で，ヘラ状工具の整形痕がつく。金雲母が混入している。混入品である。

## 72号貯蔵穴（図版26－１・２，第56図）

71号貯蔵穴の西側にあり，南側は竪穴14に切られている。底部平面形は，195×180cmの円形をなし，壁は袋状をなし，最大径は220×191cmとなる。上部平面形は，177×146cmの楕円形になる。深さ103cm。甕が堆積土上位で潰れた状態で出土しており，この時期までにかなり埋没していたと思われる。

出土遺物（図版42，第57図）

**甕**（450～455）　450は，口縁外に粘土帯を貼付し，外方へ断面三角形にのばす。口縁下4.8cmに，断面三角形の凸帯をめぐらす。いずれの凸帯にも，刻目はない。口縁上面は，刷毛目調整により平坦面をなす。復原口径24.6cm。451・452は，逆Ｌ字状口縁をなすが，452は口縁下3.5cmに１条の沈線が引かれる。復原口縁内径は，451が16.8cm，452が20cm。453～455は底部片。

**鉢**（456）　口縁が外反し，胴が若干脹らむ小形の鉢である。

**壺**（457・458）　457は，頸部から若干外反しながらのび，端部でさらに外反する。復原口径13.2cm。

**器台**（459）　下端部片で，外面に刷毛目調整痕が残る。

**蓋**（460）　裾部片で，外面に刷毛目が残り，端部は，やや凹んだ面をなす。

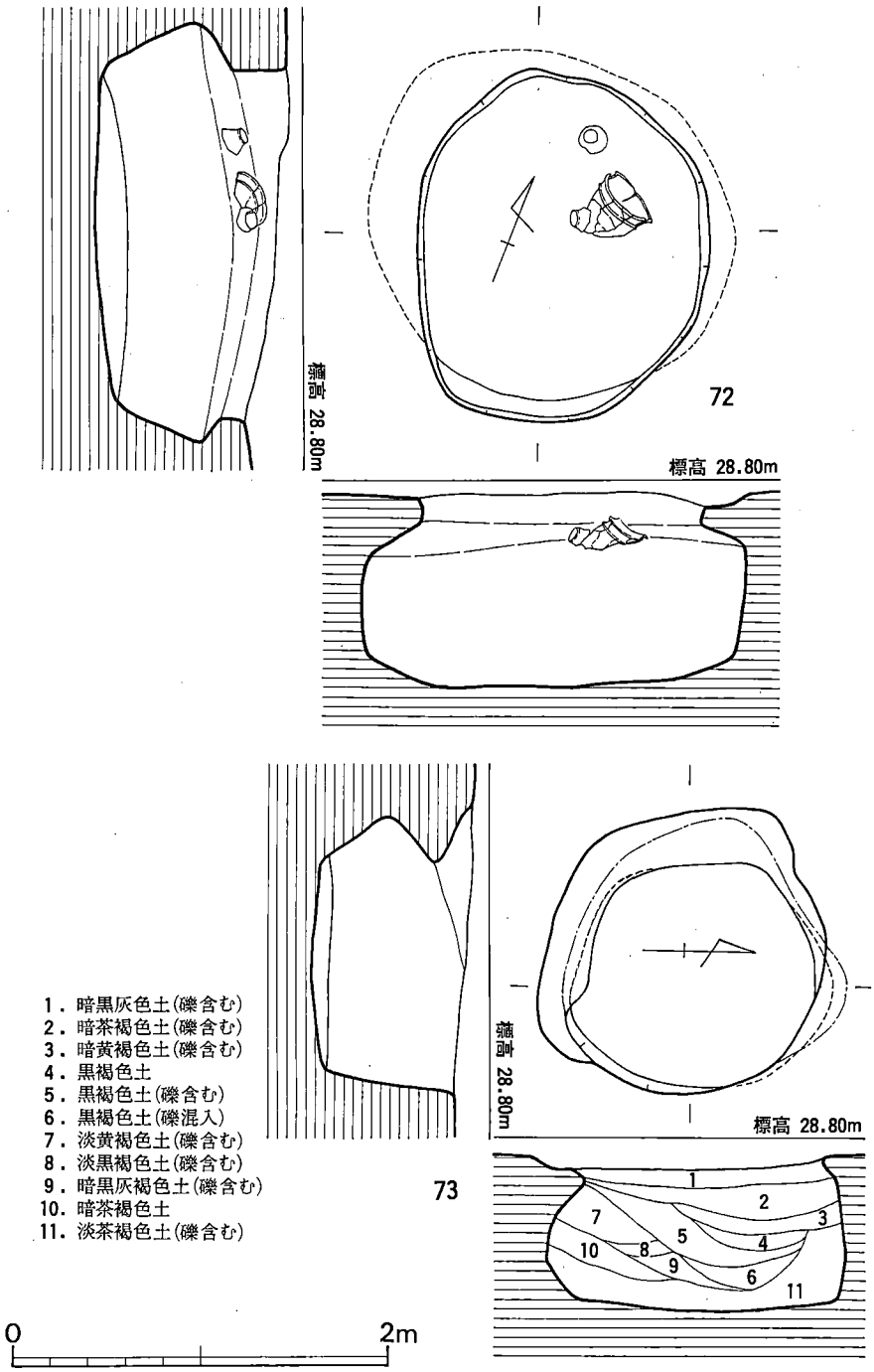
## 73号貯蔵穴（図版27－１，第56図）

72号貯蔵穴の南にある。底部平面形は，135×120cmの不整円形なし，壁は袋状に立ち上る。深さは83cmである。埋土は，ほぼスリ鉢状に堆積する。遺物は，土器とサヌカイト剝片が出土している。

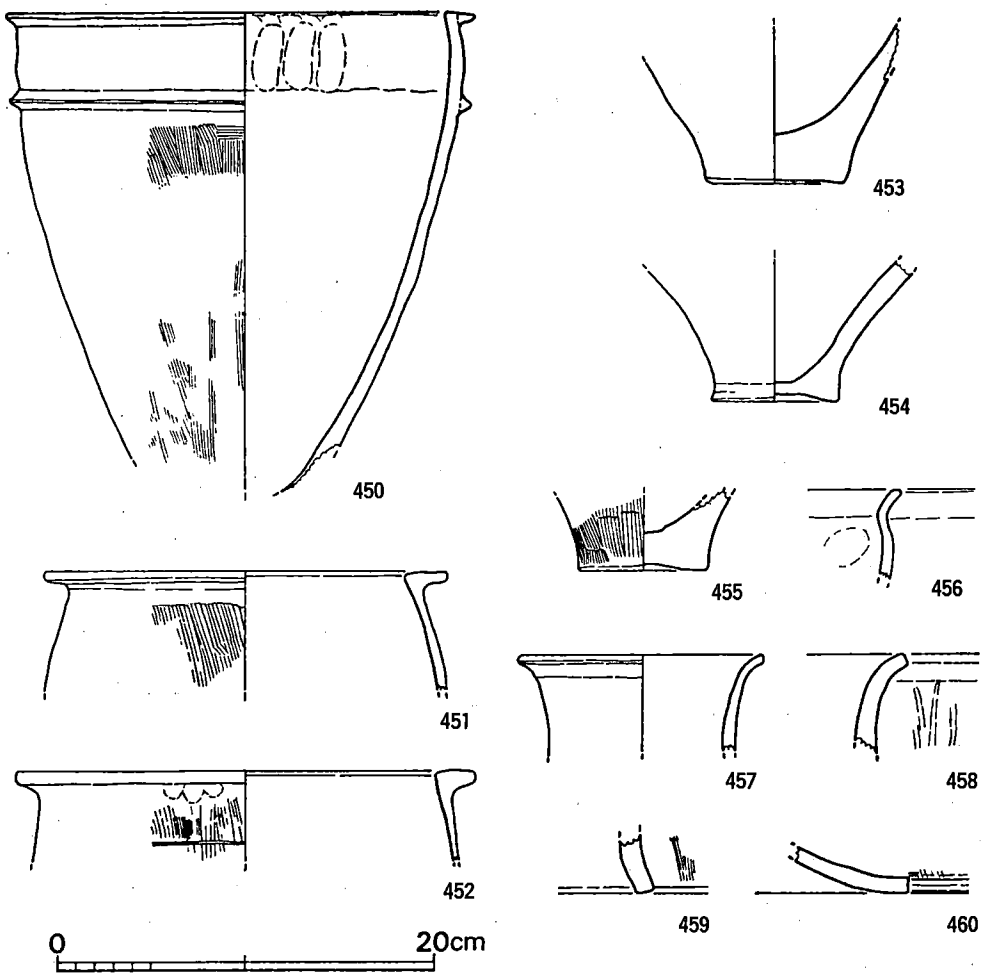
出土遺物（図版43，第58図）

**甕**（461～467）　如意形口縁をなすもの（461～463），口縁外縁に断面台形に近い粘土帯を貼付したもの（464）がある。461は，如意形を意図するも，「く」字に外反する。口唇端に刻目，口縁下に，刻目凸帯をめぐらす。胴はやや脹らむ。復原口径21.8cm。462は，口縁は強く丸まって外反する。口唇部に刻目を施す。底部は，焼成後穿孔されている。口径25.9cm，器高25.2cm。463は，口唇端部は，平坦面をなし，押圧風の刻目がある。464も同じような刻目である。復原口径は，463は30cm，464は22cmである。465～467は，底部片。

**鉢**（468・469）　468は，外反する口縁。469は，やや内湾気味の口縁であるが，口縁外面には，粘土帯の剝離痕が残る。復原口径は，468が，18cm，469は15.9＋２cmである。




**第 56 図**　72･73号貯蔵穴実測図(1/40)



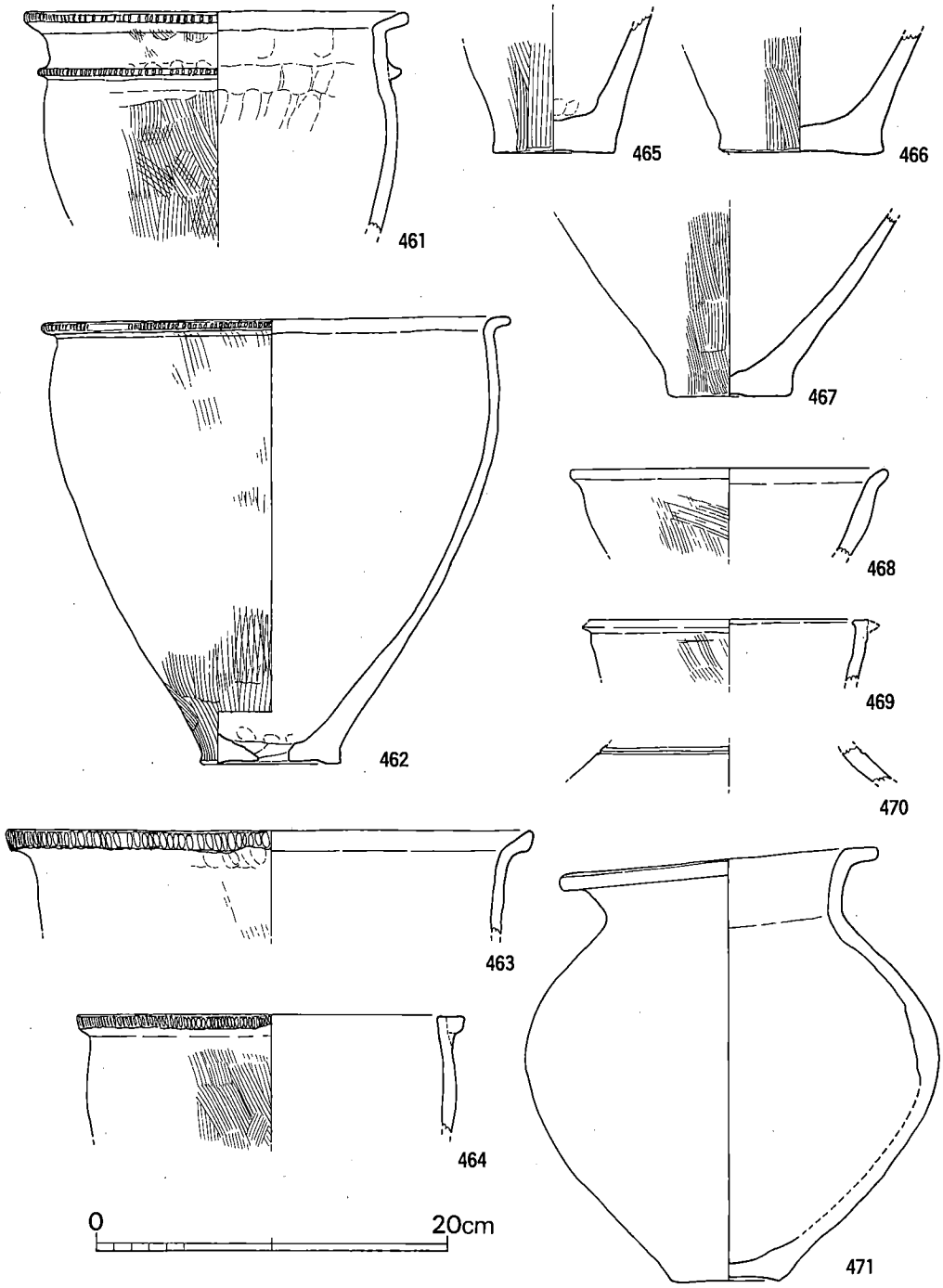

**第 57 図**　72号貯蔵穴出土土器実測図(1/4)

**壺**（470・471）　470は，頸部に２条の沈線をめぐらす。471の口縁は，逆Ｌ字状に屈曲し、上面は平坦になる。頸部はややすぼまり，胴部はやや丸みをおびて脹み，底部へ続く。口径18cm，器高24cm。

**サヌカイト剝片**　２点出土しており，１点は４×2.5cmの横剝離片，もう１点は3.5×2cmの長方形で，周囲が剝離されている。いずれも，定形化していない。　（木村）

## 74号貯蔵穴（図版27－２，第59図）

38号貯蔵穴の南西から検出された袋状竪穴で，75号貯蔵穴を切っている。底面形は胴張り隅丸方形。規模は長径143cm，短径142cm，深さ64cmを測る。遺物は壺・甕など多数の弥生土器が出土した。




**第 58 図**　73号貯蔵穴出土土器実測図(1/4)

出土遺物（図版43・49，第27・60図）

**甕**（472～481）　口縁部の形状により３つのタイプに分かれる。如意形のもの（472・473・476），口縁端部に三角凸帯が付くもの（474），逆Ｌ字状口縁のもの（475・477・478）などである。473～475の口縁下には１条の三角凸帯がめぐっている。調整は，胴部外面が刷毛，内面はナデ仕上げで，内面に指頭圧痕を顕著に残すもの（472～474）もある。いずれも口縁部内外はヨコナデ仕上げである。472はほぼ完形品で，口径20.2cm，器高20.8cm，底径8.9cmを測る。479～481は底部付近の資料で，胴部外面の調整は刷毛のもの（479・481）とナデのもの（480）があり，内面はいずれもナデ調整である。

**壺**（482）　緩やかに外反する単口縁の壺で，内外ともヘラ磨きした茶褐色を呈す焼成良好な土器である。復原口径は25.6cmを測る。

**石剣**（第27図８）　剣身の小片で，最大幅2.1cm，厚さ3.5mmを測る。粘板岩製。

## 75号貯蔵穴（図版27－２，第59図）

東壁側を74号貯蔵穴に切られた竪穴で，底面形は円形である。断面は逆台形状を呈し，規模は南北径153cm，復原東西径140cm，深さ54cmを測る。遺物は壺・甕・高杯・器台等の土器破片が少量出土した。

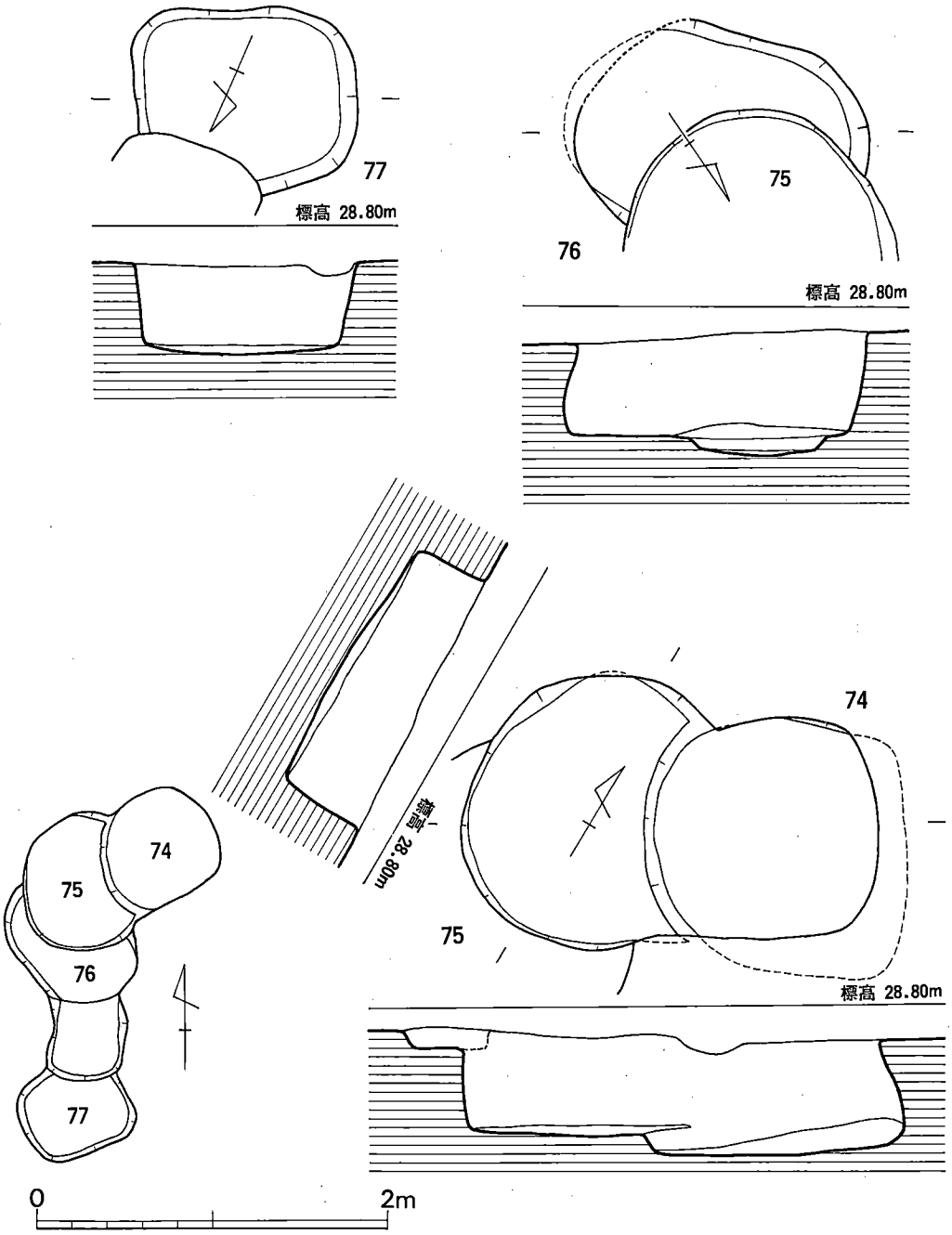
出土遺物（第61図）

**甕**（483～486）　如意形口縁のもの（483・484）とＴ字状口縁のもの（485・486）があり，前者の甕の口縁端部には刻目が施されていて，483の口縁下には刻目をもつ１条の凸帯がめぐっている。いずれも破片資料で，復原口径は483が28.8cm，484が19.8cm，485が31cmを測る。調整は器面風化のため不明なものが多いが，486は胴部外面刷毛，内面ナデ，口縁部内外はヨコナデで仕上げている。483・484の胴部内面はナデ仕上げで，指頭圧痕も残している。484の外面には煤の付着がみられる。色調は483が暗茶褐色，484が暗灰褐色，485が肌色，486が淡茶色である。

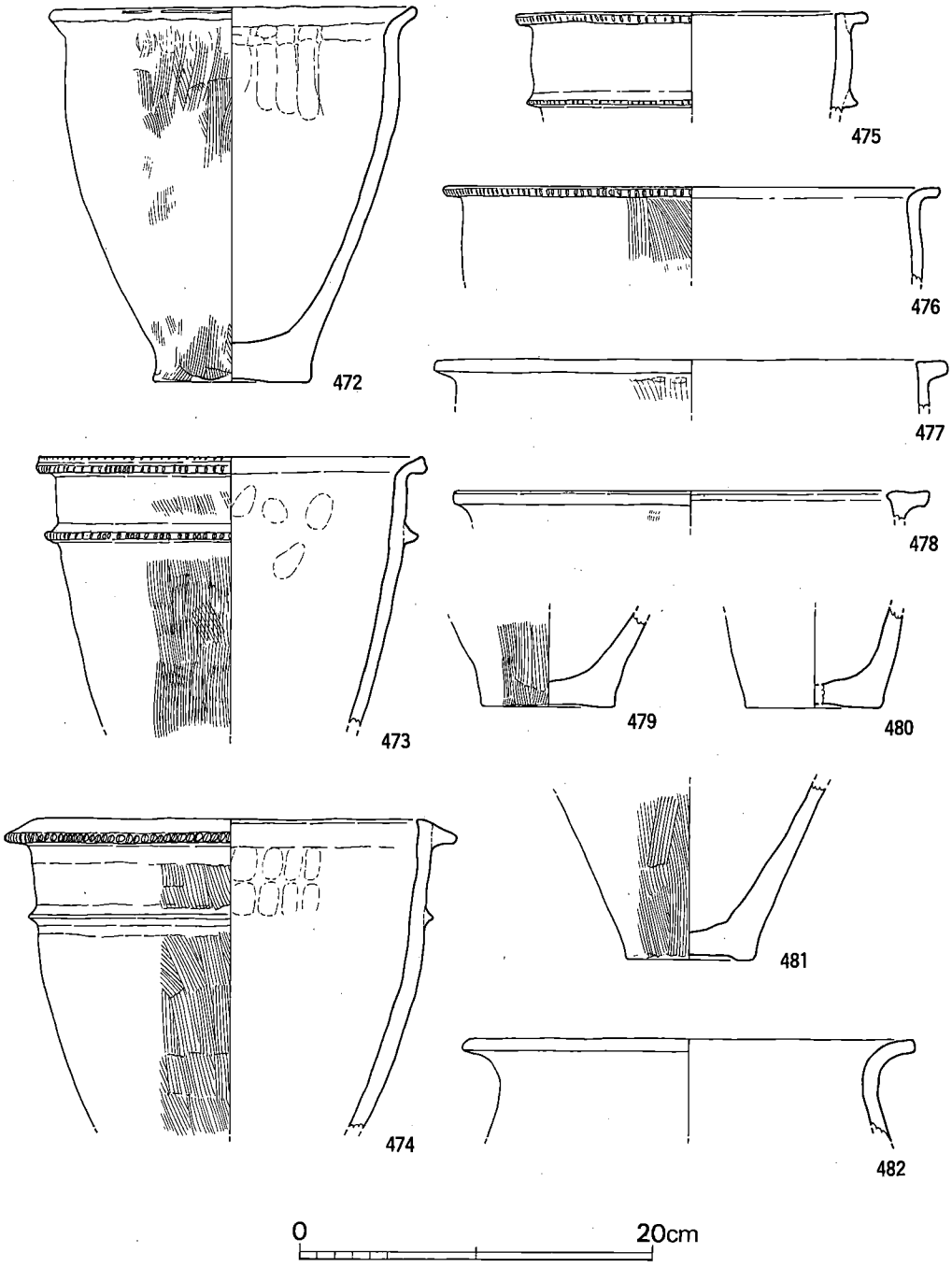
**壺**（489・490）　489は底部，490は頸部から胴部上半の破片資料である。489は復原底径11.2cmを測り，調整は器面の風化が著しく不明である。490は球形の胴部に内傾気味に立ち上がる頸部がつき，口縁部がく字状に外反する壺で，肩部には1条の沈線がめぐる。

**高杯**（488）　鋤先状口縁の杯部の破片で，復原口径は25.2cmを測る。調整は体部内外ともナデ，口縁部内外はヨコナデで仕上げている。色調は暗灰茶色を呈す。

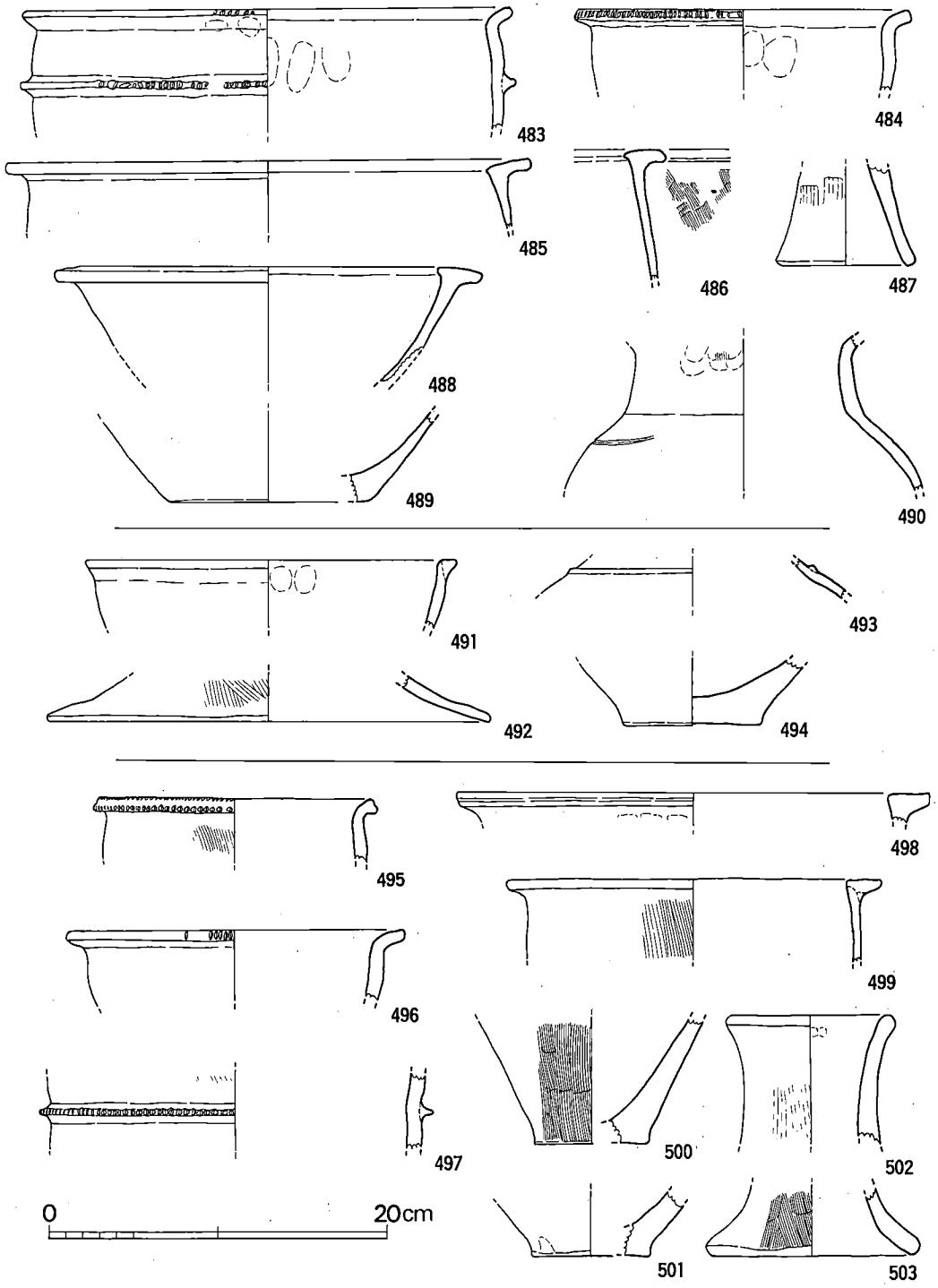
**器台**（487）　下半部の破片で，裾部径は8.2cmを測る。調整は体部外面刷毛，内面はナデ，裾部内外はヨコナデしている。色調は肌色を呈し，焼成も良好である。




第 59 図　74～77号貯蔵穴実測図(1/40)




**第 60 図**　74号貯蔵穴出土土器実測図(1/4)




**第 61 図**　75～77号貯蔵穴出土土器実測図(1/4)

## 76号貯蔵穴（図版27－２，第59図）

75号にその大半を切られた袋状竪穴で，底面形は楕円形を呈す。規模は復原長径170cm，短径107cm，深さ56cmを測る。遺物は壺・甕・蓋等の破片少量とスクレイパー１点が出土している。

出土遺物（図版49－１，第14・61図）

**鉢**（491）　口縁端部に三角凸帯が付く，復原口径22cmを測る鉢である。胴部外面は風化のため調整は不明，内面はナデて仕上げている。色調は暗褐色を呈す。

**壺**（493・494）　肩部に１条の低い三角凸帯がめぐる小形壺の小破片である。内外ともヘラ磨きで仕上げた淡灰褐色を呈す焼成良好な土器である。494は底部資料で，外面ヘラ磨き，内面ナデで仕上げている。底径は8.1cmを測る。

**蓋**（492）　裾部付近の破片で，復原裾部径は26.2cmを測る。調整は体部外面刷毛，内面ナデ仕上げで，色調は赤褐色である。

**スクレーパー**（第14図３）　背面に一部自然面を残すが，両面より剝離され，全体が台形状をなす。上辺と底辺に相当する部分に加工がされ，刃部がつくられるが，底辺の方が主要な刃部となる。刃部長6.7cm，高さ3.6cm，厚さ５mmの不定形のスクレーパーである。サヌカイト製。

## 77号貯蔵穴（図版27－２，第59図）

76号貯蔵穴の南にあって，北東隅を土壙に切られた小竪穴である。底面形は胴張り隅丸長方形で，規模は長径111cm，短径92cm，深さ56cmを測る。断面は逆台形状を呈す。遺物は甕・鉢・器台等の破片が少量出土した。

出土遺物（図版51，第24・61図）

**甕**（495～501）　如意形口縁のもの（495・496）と逆Ｌ字状口縁のもの（498・499）がある。497は口縁下に１条の三角凸帯が付く甕で，端部には刻目が施されている。いずれも破片資料で，復原口径は495が16.9cm，496が20.1cm，498が28cm，499が22.2cmを測る。調整は胴部外面を495が刷毛のあとナデ，497・499は刷毛，胴部内面はいずれもナデ，口縁部内外はヨコナデで仕上げている。495・496ともに口縁端部に刻目を施すものの，495は上下に施している。496の外面には煤の付着がみられる。500・501は底部付近の破片資料で，復原底径は500が6.8cm，501が７cmを測る。胴部外面の調整は500が刷毛，501はナデ，内面は両者ともナデ仕上げである。

**器台**（502・503）　筒形の器台で，502は器受部付近，503は裾部付近の破片資料である。体部外面の調整は502が刷毛のあとナデ，503は細かい刷毛，内面はいずれもナデ仕上げで，502の器受部内外はヨコナデしている。色調は502が明褐色，503は赤褐色を呈す。

**円盤状土器片**（第24図22）　４×４cm，厚さ0.8cm，重さ16.4ｇのほぼ円形に土器片を加工する。

（井上）

## 78号貯蔵穴（図版28－1，第62図）

78～80号貯蔵穴は一群をなし，78・80号貯蔵穴は，79号貯蔵穴を切る。底部平面形は，155×143cmの不整円形をなし，壁は袋状をなして立ち上る。図面上の最大径は200×175cmになるが，上下堆積層に挟まれた礫層が崩落した結果の可能性がある。上部平面形は，152×143cmの不整方形をなす。深さ64cm。壁際に甕形土器がまとまって出土している。

出土遺物（図版43，第63図）

**甕**（504～513）　504・505は，口縁外に粘土帯を貼付し，端部に刻目をつける。外面は，刷毛目調整。復原口径は，504が20.4cm，505が23.9cm。508・507は，口縁外粘土帯を貼付し，口縁上面を平坦にするが，508の粘土帯断面はカマボコ形に近い。復原口縁内径は，507が15.8cm，508が28cmである。509～513は，底部片で，511は上底，以外は平底であるが，端部が若干張り出す。

**壺**（514）　頸部と肩部の接点に断面M字形の凸帯をめぐらす。頸部には，2cm間隔で縦位の暗文がある。頸部径30cm。

**器台**（515）　下半部片で，外面は刷毛目調整痕がナデ消されている。

## 79号貯蔵穴（図版28－1，第62図）

東側を78号，南側を80号貯蔵穴に切られる。底部平面形は，176×145cmの楕円形をなし，壁は袋状に立ち上る。壁高123cm。遺物は，土器が少量出土している。

出土遺物（第64図）

**甕**（516～519）　519は口縁外の粘土帯が剝離し，口縁下に断面三角形の凸帯をめぐらす。516は，口縁外に断面カマボコ形の粘土帯を貼付する。復原口縁内径18.4cm。517・518は，平底の底部片である。

**壺**（521）　肩部片で，3条の沈線が引かれる。

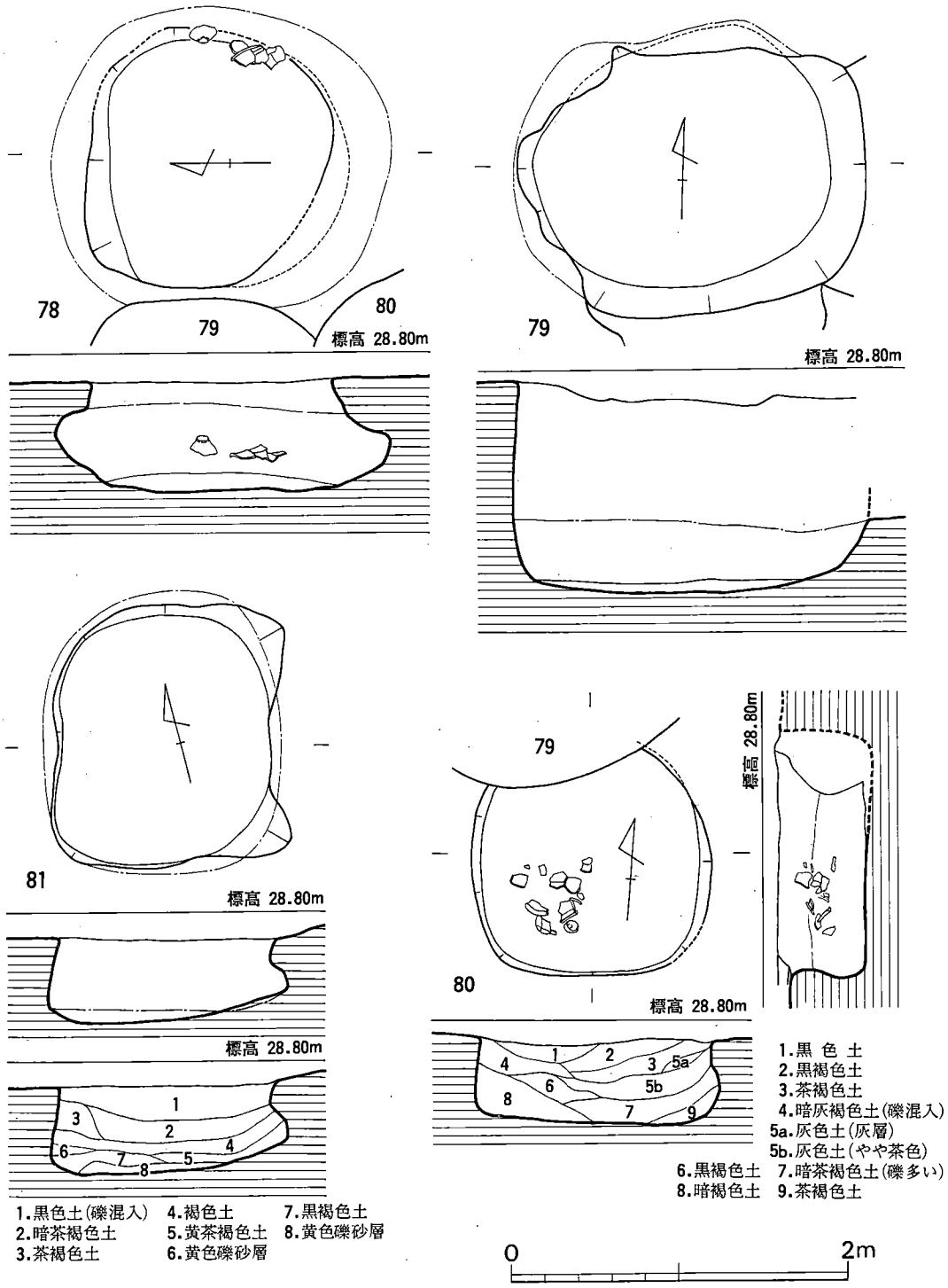
**蓋**（520）　裾部片で，端部は丸まる。内外面に刷毛目痕が残る。

## 80号貯蔵穴（図版28－1，第62図）

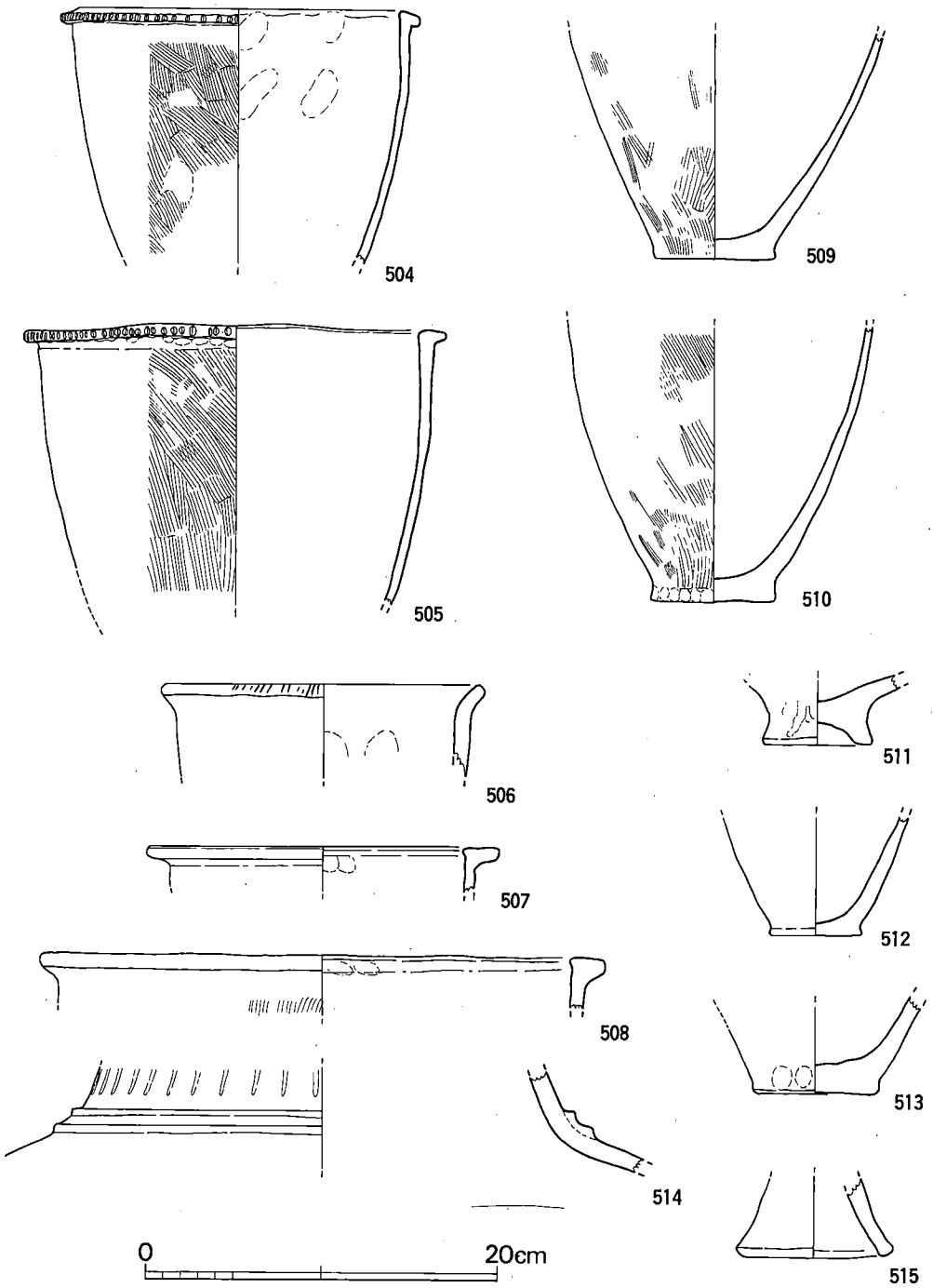
79号貯蔵穴を切り，竪穴4に切られる。底部平面形は，140×130cmの隅丸方形をなし，壁は袋状に立ち上る。深さ50cm。埋土は，スリ鉢状に堆積し，土器は中程より上位にまとまって出土している。遺物は，土器以外に砥石が出土している。

出土遺物（図版43・49，第27・64図）

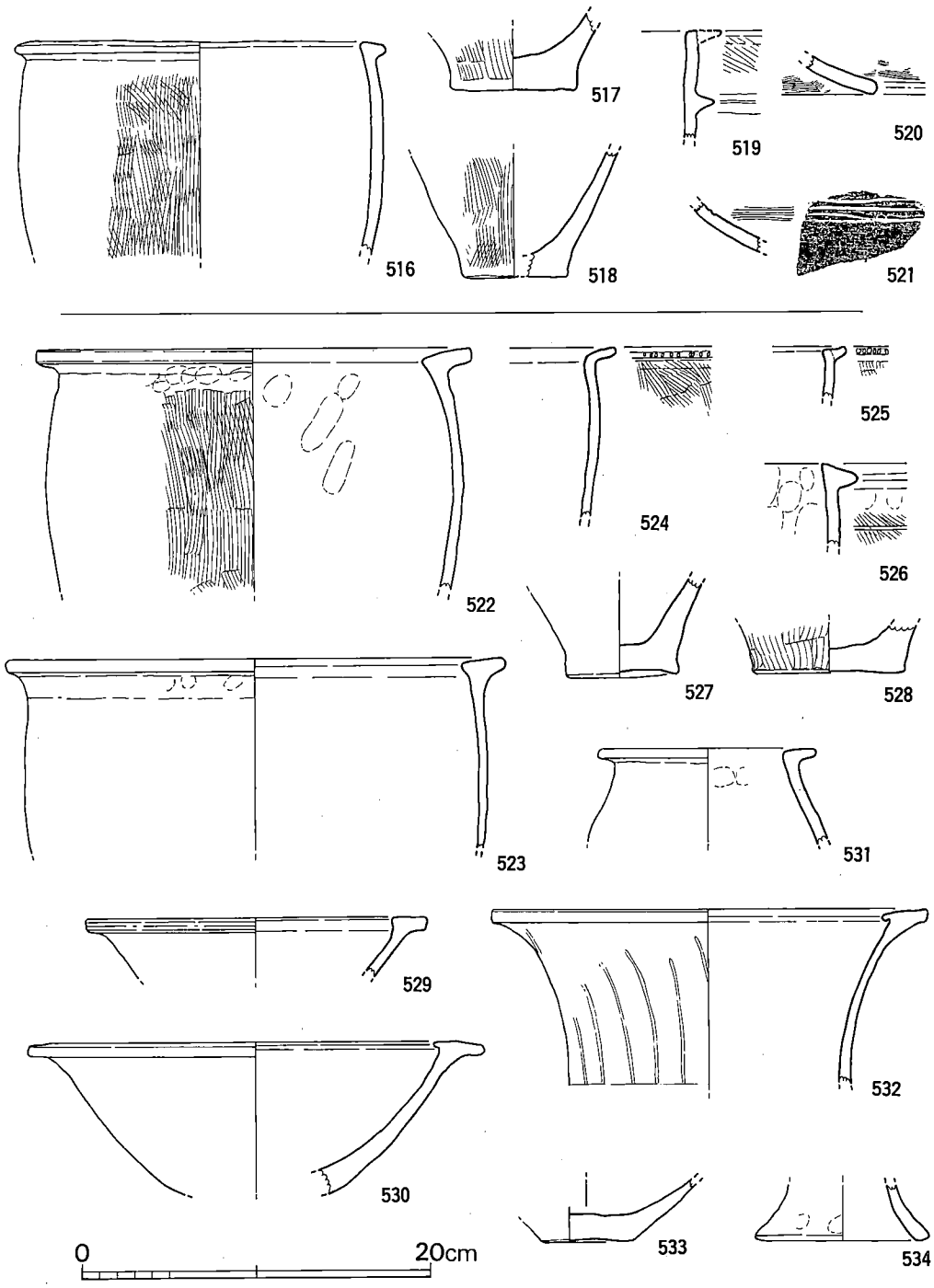
**甕**（522～528）　524は，如意形に口縁を外反させ，口唇下端部に刻目が施される。525は，口縁外に粘土帯を貼付し端部に刻目をつける。526は，口縁外に断面三角形の粘土帯をつけ口




**第 62 図** 78～81号貯蔵穴実測図(1/40)




**第 63 図**　78号貯蔵穴出土土器実測図(1/4)




**第 64 図**　79･80号貯蔵穴出土土器実測図(1/4)

縁上面を外下りの平面にする。口縁下に1条の沈線を引く。522・523は，口縁やや内傾し逆L字の口縁をなす。復原口縁内径は，522が19.4cm，523が23.6cm。527・528は底部片で，528は平底をなす。

**高杯**（529・530）　高杯杯部片と思われ，鋤先状に近い口縁をなし，内外面とも丁寧なヘラ磨きがなされる。復原口縁内径は，529が15.6cm，530が20.5cmとなる。529は，鉢の可能性がある。

**壺**（531～533）　531の口縁は，強く屈曲し外反する。頸部外面には横位のヘラ磨きがみられる。532は，口縁が鋤先状をなし端部上面をつくる。頸部はゆるやかに外反し，肩部との接点に1条の沈線がひかれる。頸部外面には，2cm間隔で縦位の暗文がある。復原口径は，531が12.5cm，532が25cmをなす。

**器台**（534）　下半部片で，復原底径10cm。

**砥石**（図版49，第27図12）　半欠品であるが，3.5cmの幅に切られた，高さ2.7cmのカマボコ形をなす。底面，両側面は使用によって凹む。各面とも平滑である。

## 81号貯蔵穴（図版28－2，第62図）

79号貯蔵穴の西側にあり，竪穴10に一部上面を削られる。底部平面形145×125cmの楕円形をなし，壁は袋状に立ち上る。埋土は，やや水平に近く堆積する。深さ51cm。遺物は，土器が少量出土している。

出土遺物（第66図）

**甕**（535～538）　538は，口縁が如意形に外反し，端部に刻目を施し，口縁下に刻目凸帯をめぐらす。外面，部分的に刷毛目調整痕が残る。復原口径17.5cm。535～537は，口縁外に粘土帯を貼付したもので，535は断面台形に近く端部に刻みがある。536・537は，端部は丸味をおびる。

## 82号貯蔵穴（第65図）

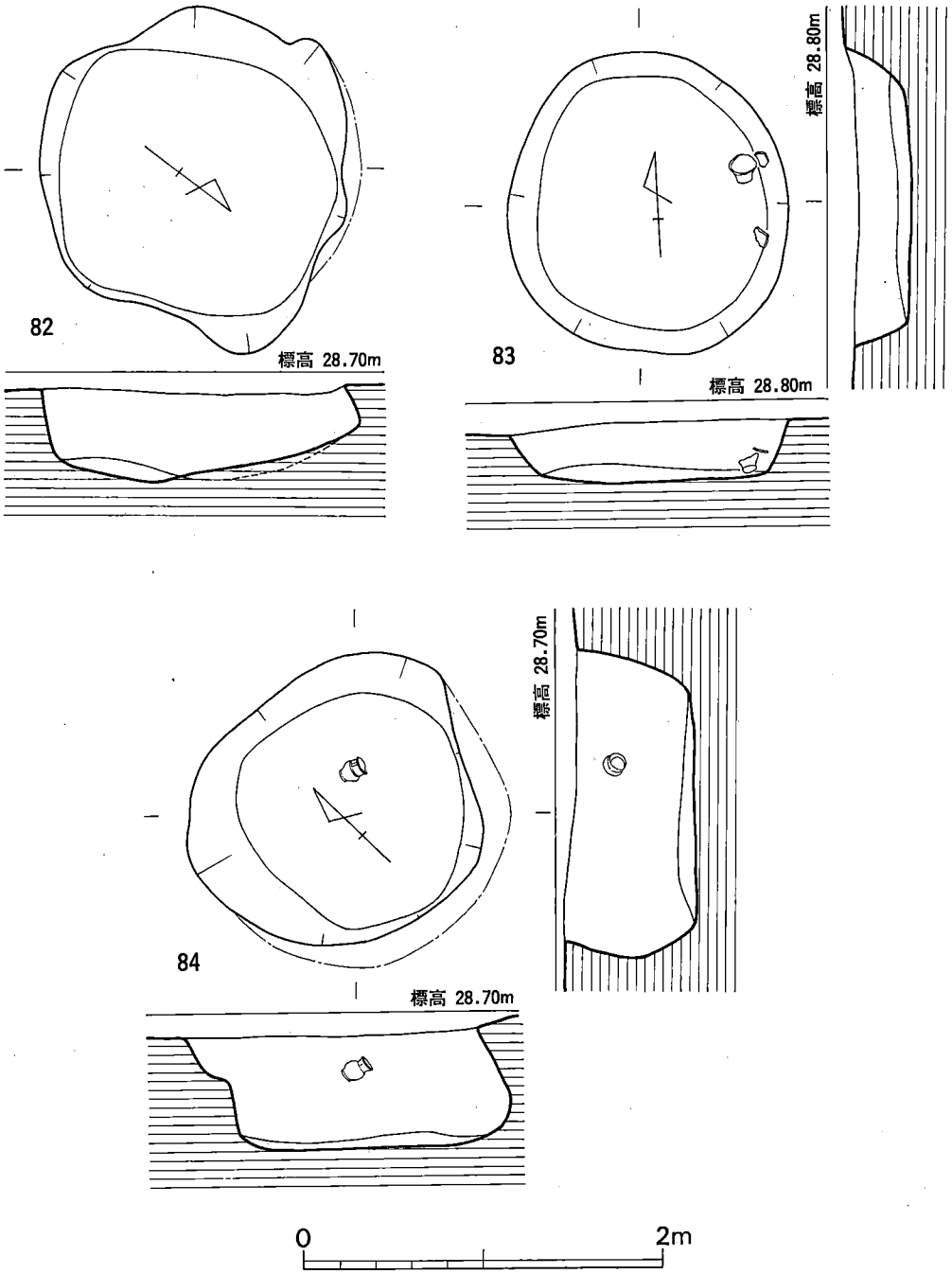
81号貯蔵穴の南にあり，上面は竪穴10により削平される。底部平面形は，155×140cmの胴張り隅丸長方形をなし，壁はやや袋状に立ち上る。残存深さ50cm。出土遺物はない。

## 83号貯蔵穴（第65図）

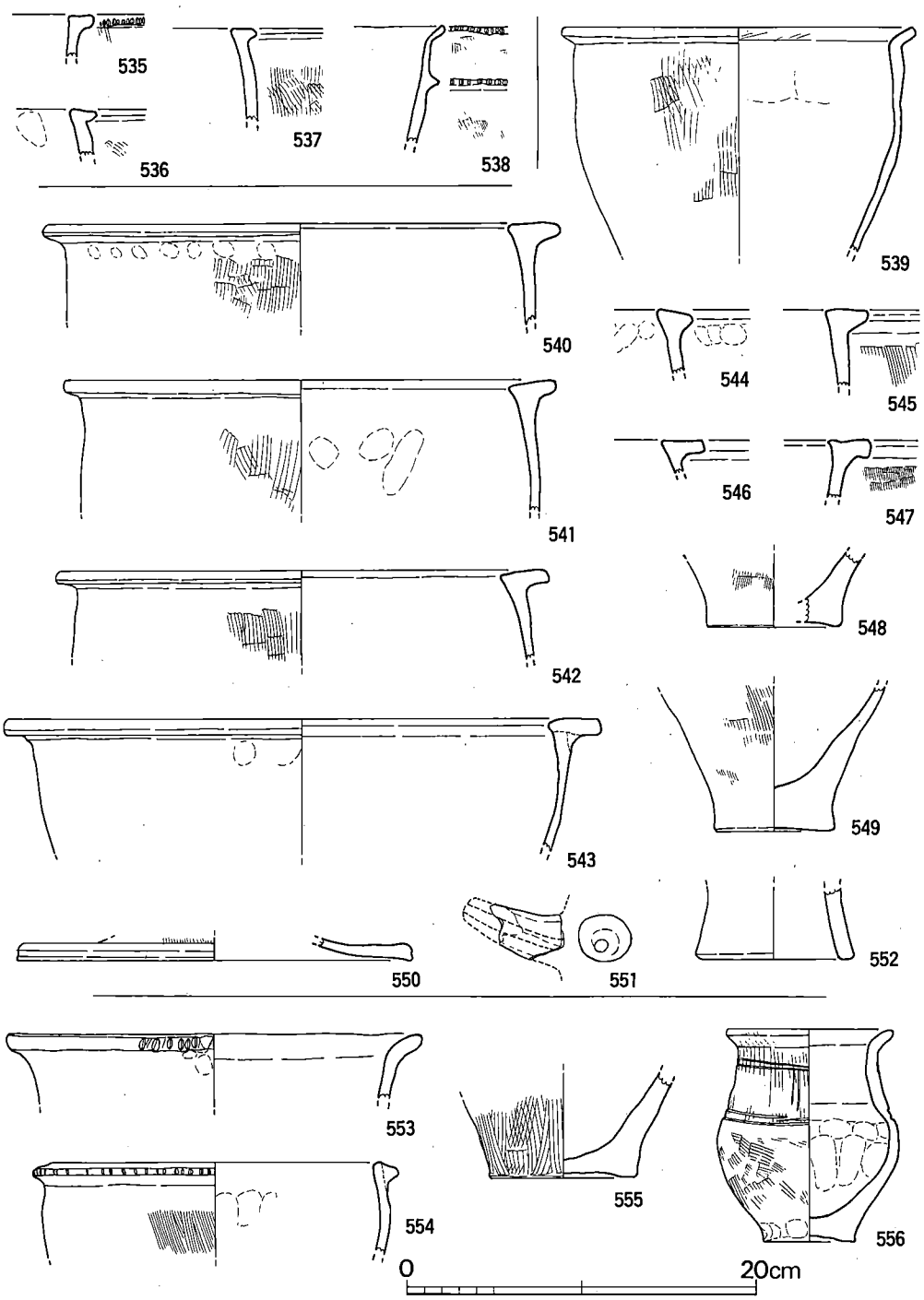
82号貯蔵穴の北側にある。底部平面形は，140×130cmの円形をなし，壁は外に開いて立ち上る。残存する深さは35cmである。遺物は，土器が出土しているのみである。

出土遺物（図版50，第66図）

**甕**（539～549）　539は，口縁部は強く屈曲して外反し，端部は面をなす。口縁内面に，刷




**第 65 図**　82～84号貯蔵穴実測図(1/40)




**第 66 図**　81･83･84号貯蔵穴出土土器実測図(1/4)

毛目調整痕が残る。外面には，荒い刷毛目調整がされる。復原口径20cm。540～547は，口縁外に粘土帯を貼り，逆L字に近い口縁にしたもので，口縁は内傾する。544は，カマボコ形に近い断面をなす。復原口縁内径は，540が23.6cm，541が23.6cm，542が22.6cm，543が28cm。548・549は，平底の底部片である。

**蓋**（550）　裾端部片で，端部は肥厚する。復原裾部径22.5cm。

**器台**（552）　下端部片で，底径9cm。

**注口土器**（551）　本体より剝離した注口部片である。径3×2.5cmの楕円形の断面をなし径6×8mmの孔が通る。

## 84号貯蔵穴（図版29－1・2，第65図）

7号住居跡と，竪穴12の間にある。底部平面形は，128×125cmの不整円形をなし，壁は一部袋状に立ち上る。残存する深さは，65cmである。小形壺（556）が，中央上面に近い所で出土している。

出土遺物（図版44，第66図）

**甕**（553～555）　553は，ゆるやかに外反する口縁で，端部はやや平坦となり，荒い刻目が施される。この土器は，93号貯蔵穴の597と同一個体である。復原口径23.7cm。554は，口縁外に，断面三角形に近い粘土帯を貼り，刻目を施す。復原口径20.9cm。555は，平底の底部である。

**壺**（556）　口縁は強く外反し，頸部はやや内傾し，胴部はあまり脹れない。底部はやや上底気味である。口縁下と，頸部と胴部の境に，2本単位の沈線をめぐらす。器面調整は，壺としては荒い。口径9.55cm，器高12cm。完形品。

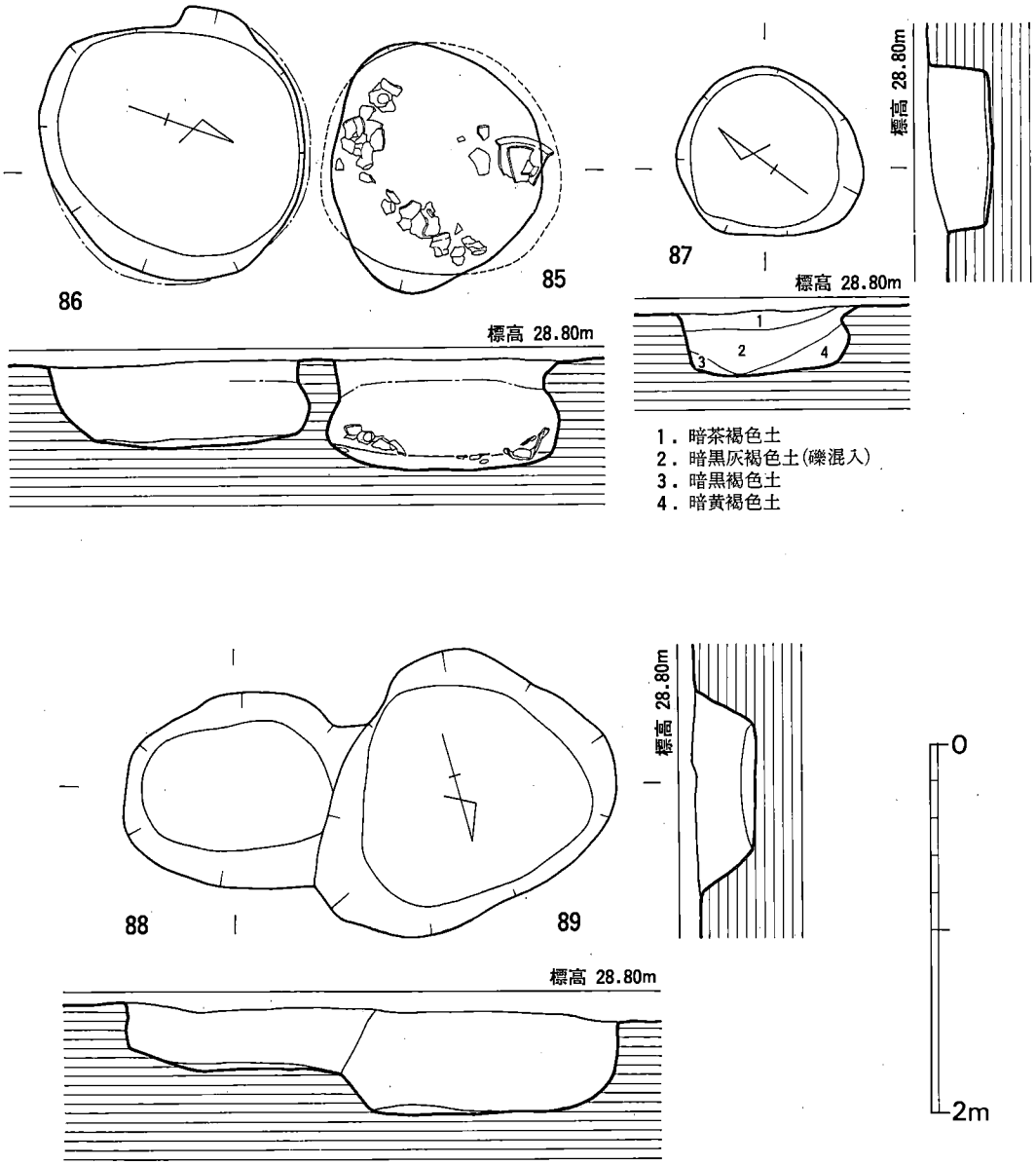
## 85号貯蔵穴（図版30－1，第67図）

6号住居跡の南側，86号貯蔵穴の北側にある。底部平面形は，130×127cmの円形をなし，壁は，袋状に立ち上る。深さは60cmである。土器が床面近くにまとまって出土しており，貯蔵穴廃絶後，それ程時間をおかず土器が廃棄されたものと思われる。

出土遺物（図版44，第68図）

**甕**（557～564）　557～559は如意形口縁をなし，端部に刻目がつけられる。557は，器面外部に，板状工具による調整痕が残る。復原口径22.8cm，器高23.7cm。558・559は，外面に刷毛目調整痕が残る。復原口径は，558が22cm，559が13.7cmである。560～563は，口縁外に粘土帯を貼付したもので，560は口唇部と口縁下凸帯に刻目がなされる。復原口径27cm。561には，口縁下に1条の沈線がめぐる。564は，平底の底部である。

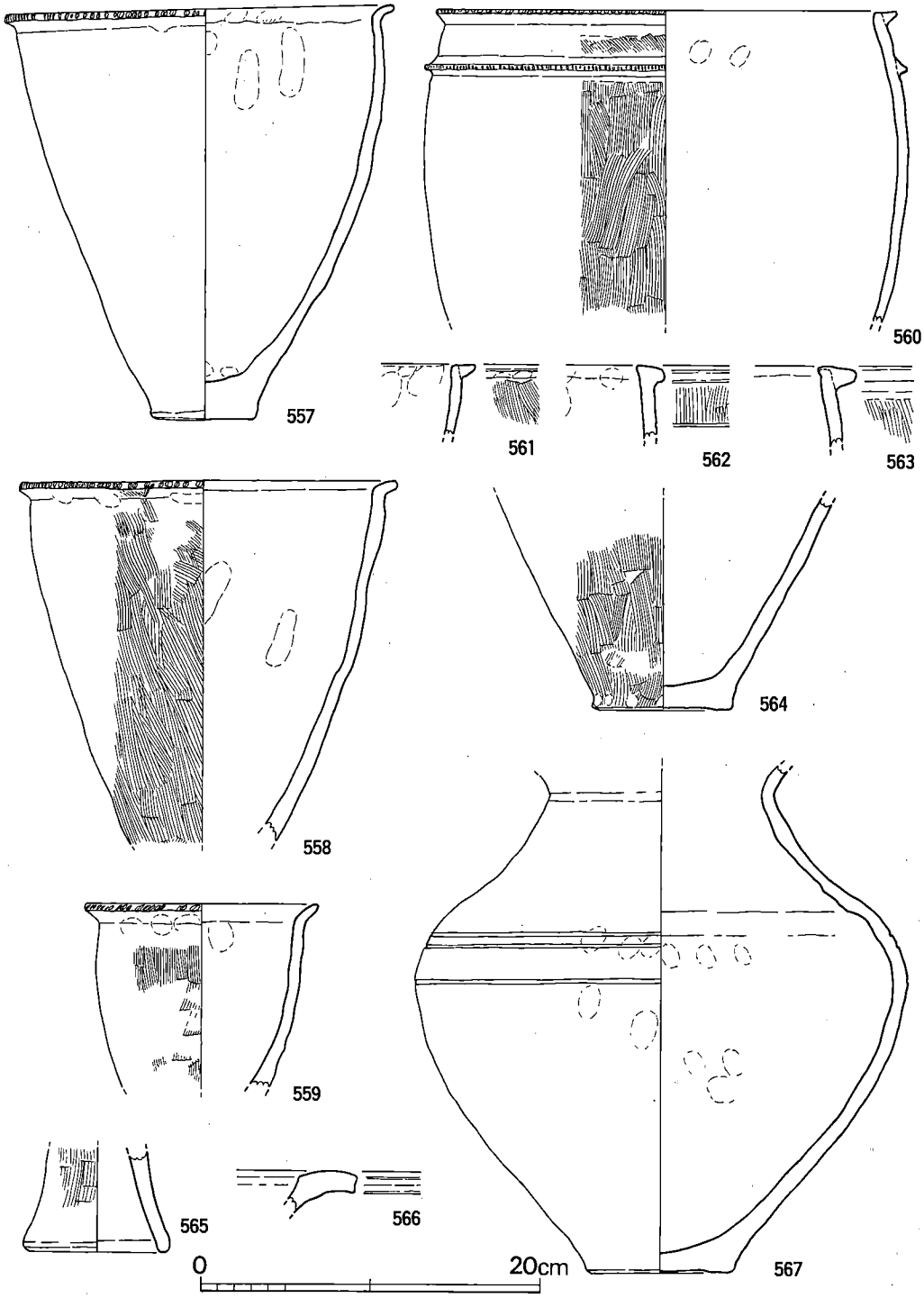
**壺**（566・567）　567は口縁端を欠くが，口縁は短く外反し，頸部は広がり，肩部に2条，胴部最大径に1条の沈線が引かれ，平底の底部につづく。復原頸部径13cm，胴部最大径28.6cm




**第 67 図**　85～89号貯蔵穴実測図(1/40)

底径8.6cm，残存器高30cm。

**器台**（565）　下半部片で，端部は丸まる。外面には刷毛目調整痕が残る。復原底径8.6cm。




**第 68 図**　85号貯蔵穴出土土器実測図(1/4)

### 86号貯蔵穴（第67図）

85号貯蔵穴の南側に接する。底部平面形は，134×117cmの楕円形をなし，壁は袋状に立ち上る。深さ47cm。土器の出土はなく，黒曜石剝片が1点出土しているのみである。

### 87号貯蔵穴（第67図）

86号貯蔵穴の南側に位置する。底部平面形は，83×83cmの円形で，壁は一部袋状となる。残存する深さは，33cmである。埋土は，南側から北側に傾斜して堆積している。出土遺物はない。

### 88号貯蔵穴（図版30－2，第67図）

12号竪穴の南側にあり，89号貯蔵穴に切られ，15号土壙によって一部上面が削られている。底部平面形は，105×70cmの楕円形をなし，壁はほぼ直に立ち上る。残存する深さ33cm。遺物は土器のみである。

出土遺物（図版44，第69図）

**甕**（568～578）　568は，如意形に口縁が外反し，端部に刻目を施し，口縁下に断面三角形の刻目凸帯をめぐらし，平底の底部となる。口径20.9cm，底径7.1cm，器高18.7cm。571は，口縁は強く屈曲して外反する。端部は面をなす。575は，口縁下の刻目のない断面三角形の凸帯である。569・572～574・576は，口縁外に粘土帯を貼付し，逆L字口縁にしたものである。578は，口縁内面に厚い粘土帯を貼付し，口縁を肥厚させた大形の甕の口縁部。570は，くの字に外反する口縁で端部はやや厚くなる。復原口径25.1cm。577は，平底の底部片である。

**壺**（579～581）　579は，肩部に断面M字状の凸帯がめぐる破片，580・581は，鋤先状になる口縁部片。復原口縁内径は，580が20cm，581が23.8cmである。

**蓋**（582）　裾部破片。端部は面をなし，やや凹む。

**器台**（583）　下端部片。端部は丸まる。

### 89号貯蔵穴（図版30－2，第67図）

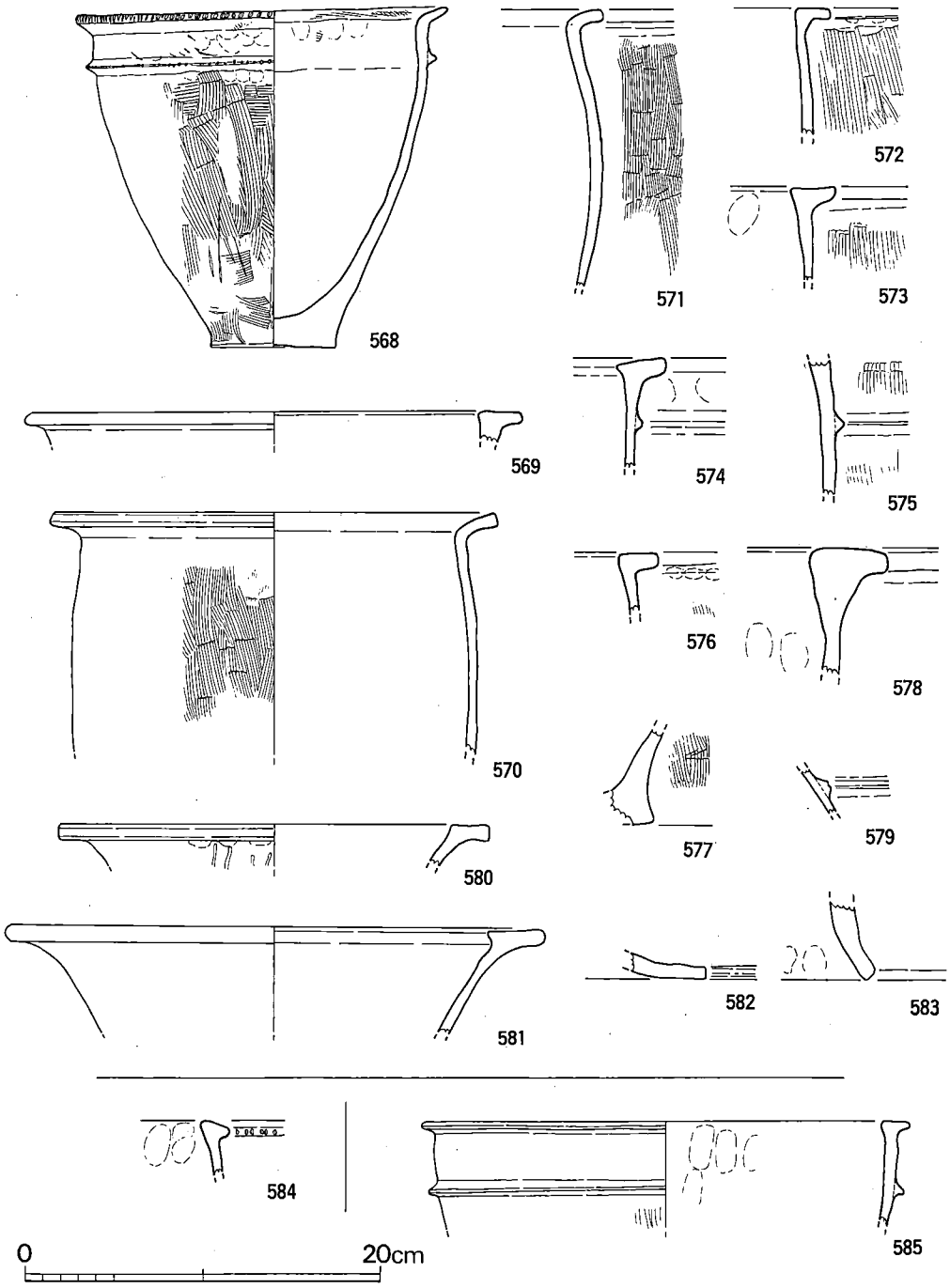
88号貯蔵穴を切る。底部平面形は，123×120cmの不整円形をなし，壁は丸みを持って立ち上る。残存する深さ55cm。遺物は，土器が少量出土している。

出土遺物（第69図）

**甕**（584）　口縁外に粘土帯を貼付し，口縁上面が外下りになり，端部に刻目がある。

### 90号貯蔵穴（図版31－1，第70図）

88・89号貯蔵穴の南側にある。底部平面形は，130×115cmの楕円形で，壁は袋状に立ち上る。




**第 69 図**　88～90号貯蔵穴出土土器実測図(1/4)

深さは，62cm。遺物は，土器が少量出土している。

出土遺物（第69図）

**甕**（585）　口縁外面と，口縁下４cmに断面三角形の粘土帯を貼付する。復原口径27.4cm。

## 91号貯蔵穴（図版31－２，第70図）

12号住居跡の北側にある。底部平面形は，100×80cmの胴張り隅丸長方形をなし，壁は袋状に立ち上る。深さ51cm。埋土はスリ鉢状に堆積する。遺物は，土器と円盤状の蓋が出土している。

出土遺物（図版50－２，第36・71図）

**甕**（586～589）　586～588は口縁外に粘土帯を貼付し，逆Ｌ字状の口縁としたもの。復原口縁内径は586が19.4cm，587が22cm，588が25.8cm。589は上底の部厚い底部である。

**器台**（590）　器高14.95cmの器台で，外面に刷毛目痕が残る。上部に黒斑がみられる。

**円盤状蓋**（第36図11）　8.1×7.8cmの楕円形をなし，中心部がやや盛り上り下面が凹む。長軸両端に，上面から下外方向に向かって径４mmの小孔が穿たれており，下面開孔部外側に紐ずれの痕跡がある。全体を丁寧にヘラ研磨を施す。（木村）

## 92号貯蔵穴（第70図）

91号貯蔵穴の西側にあって，18・19号竪穴の下層から検出された袋状竪穴である。底面形は楕円形を呈し，規模は長径140cm，短径127cm，深さ58cmを測る。

出土遺物（第71図）

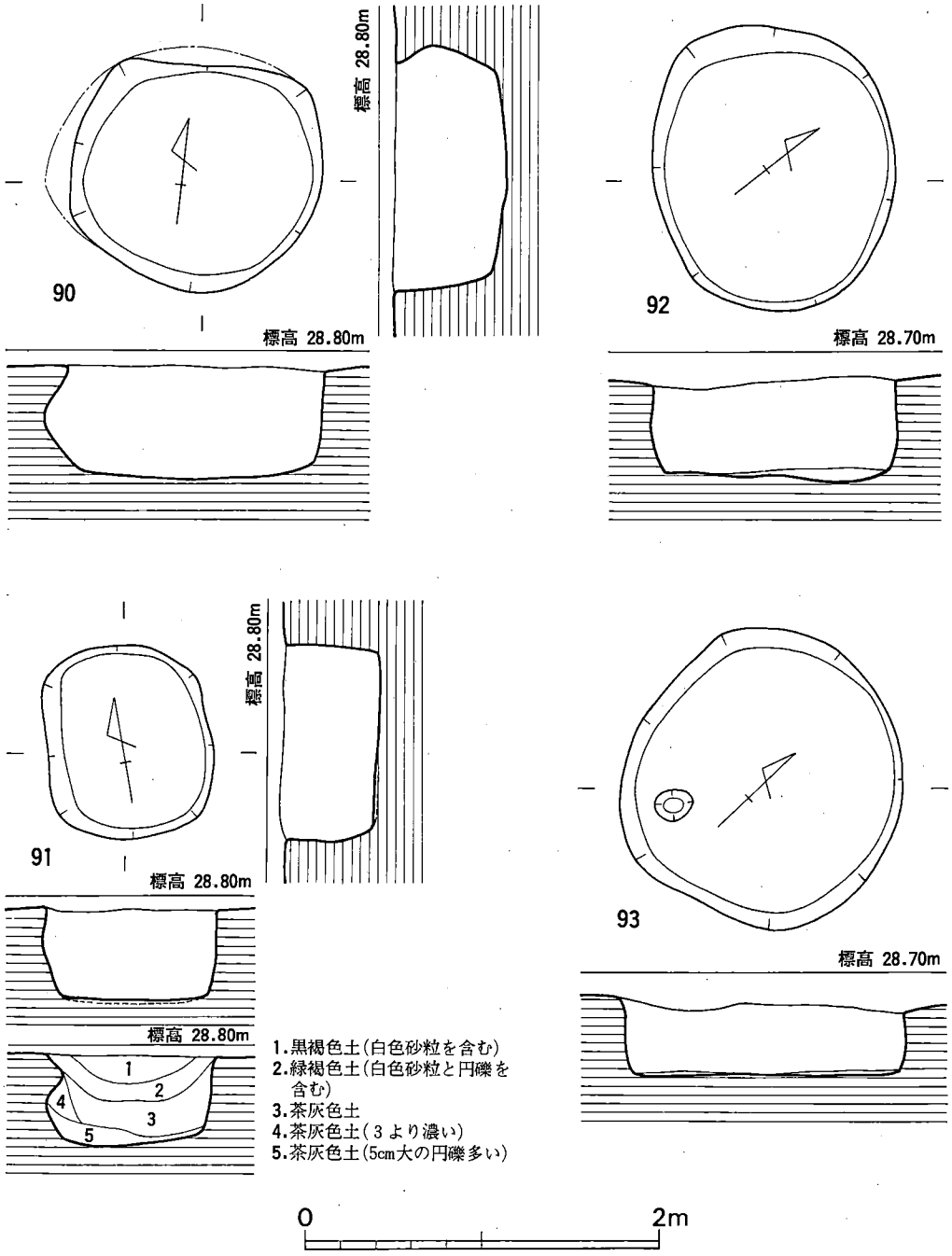
**甕**（591～594）　如意形口縁のもの（591・593）と逆Ｌ字状口縁のもの（594）がある。592は口縁部を欠失しているが591と同様，口縁下に1条の三角凸帯がつく如意形口縁の甕と思われる。胴部外面の調整は592・593が刷毛，内面は591～594ともナデ仕上げで，口縁部はいずれもヨコナデしている。また，593の口縁部内面はさらにヨコヘラ磨きしている。色調は591・594が暗茶褐色，592・593が暗茶灰色で，591・593の外面には煤の付着がみられる。（井上）

## 93号貯蔵穴（図版32－１，第70図）

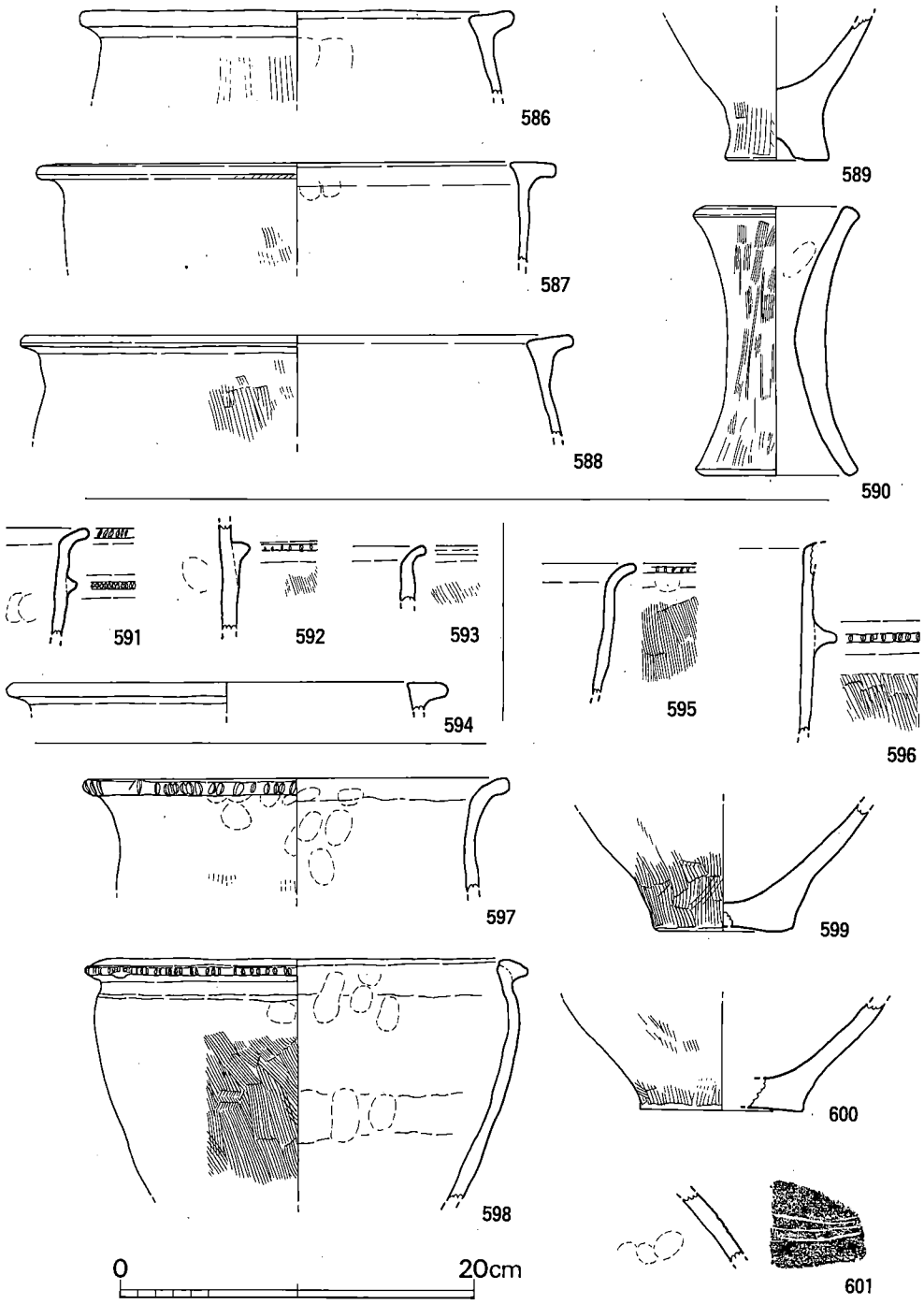
12号住居跡の床面下から検出されたものである。底部平面形は，145×140cmの円形をなし，壁は直に立ち上る。残存する深さ40cm。底面南側に22×18cm，深さ約10cmのピットがある。遺物は，土器と円盤状土器片が出土している。

出土遺物（図版51，第24・71図）

**甕**（595～600）　595は，如意形に外反する口縁端に刻目を施す。596は，口縁外面に貼付されたおそらく刻目のある粘土帯が剝離しており，口縁下に刻目凸帯をめぐらす。597は，84号貯蔵穴の553の土器と同一個体である。口縁は，ゆるやかに外反し，端部は面をなし，荒い刻




**第 70 図**　90～93号貯蔵穴実測図(1/40)




**第 71 図**　91～93号貯蔵穴出土土器実測図(1/4)

目を施す。復原口径24cm。598は，口縁外面に粘土帯を貼付し，刻目を施す。口縁は内傾し胴部はやや脹らむ。復原口径25cm。599・600は，平底の底部である。

壺（601）　3本の沈線をめぐらす肩部の破片である。

**円盤状土器片**（第24図23～25）　いずれも，甕胴部片を加工したものである。23は一部欠損するが，4.4×3.7cmの楕円形で周縁は磨滅する。重さ7.9ｇ。24は，一部欠損するが，5.5×4.5cmの楕円形をなす。重さ16.9ｇ。25は，4.5×4.5cmの不整方形をなし，重さ18.5ｇ。

## 94号貯蔵穴（図版32－２，第72図）

12号住居跡の床面下から検出されたもので，95号貯蔵穴に切らている。底部平面形は140×115cmの，不整楕円形をなし，壁は外に開いて立ち上る。残存している深さは，36cmである。

出土遺物（第73図）

甕（602～606）　602は，口縁は強く屈曲して短く外反する。603・604は，口縁外面に粘土帯を貼付し，逆Ｌ字状の口縁とする。605は，断面三角形になる粘土帯を口縁外に貼付する。復原口径は，602が21.4cm，603が28cmとなる。606は，平底の底部。

壺（607～609）　607は，鋤先の口縁部片，609は，断面Ｍ字状凸帯をめぐらす肩部片，608は底部片である。607の復原口縁内径は，24.6cm。

## 95号貯蔵穴（図版32－２，第72図）

12号住居跡の床面下から検出されたもので，94号貯蔵穴を切っているが，床面の高さは，94号貯蔵穴とほぼ同じである。底部平面形は，134×100cmの不整楕円形をなす。壁は，外に開いて立ち上る。残存する深さ38cm。土器が，南側上面近くでまとまって出土している。

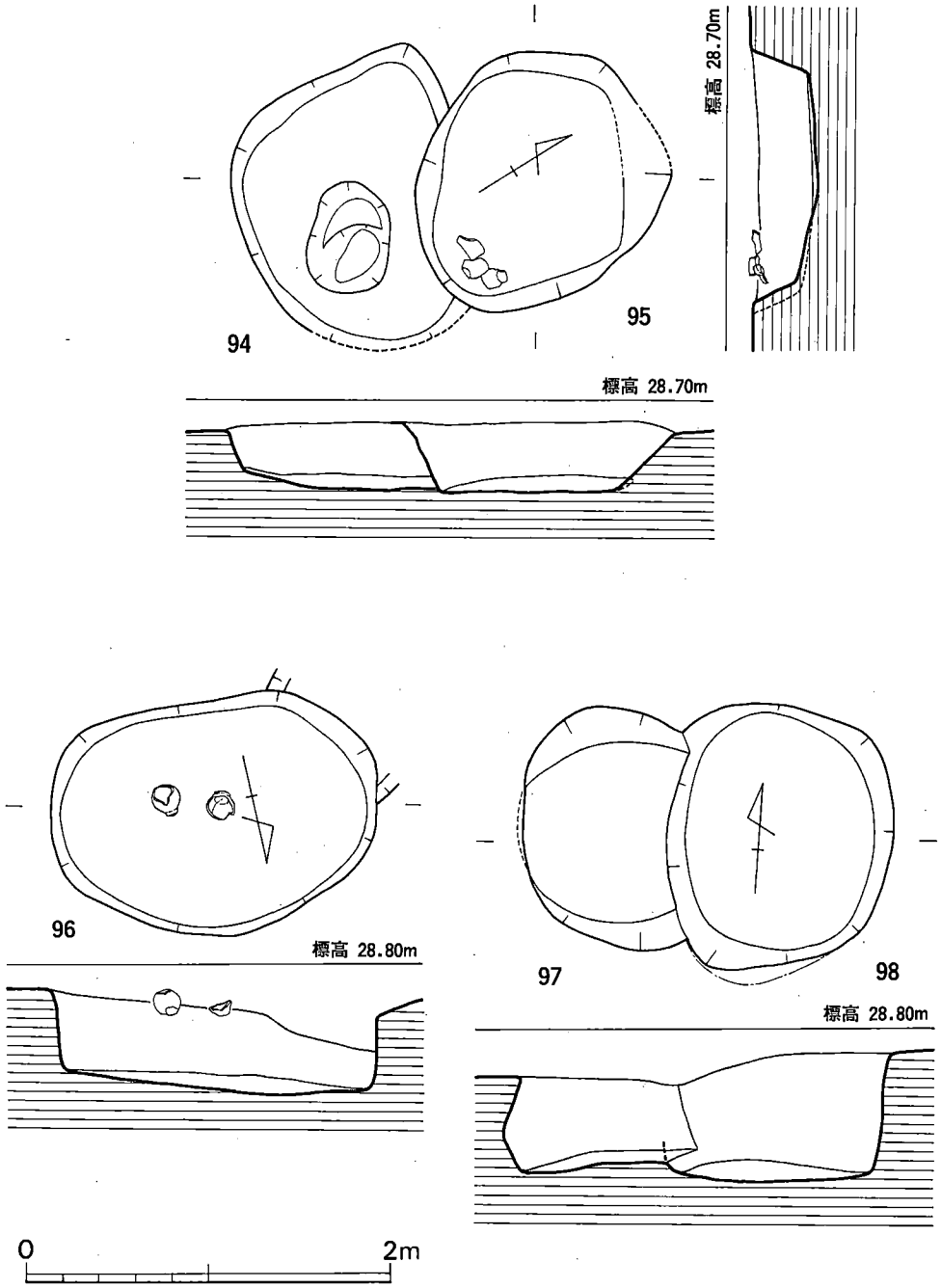
出土遺物（第11・73図）

甕（610～616）　610は，口縁外に断面三角形になる粘土帯を貼付し，口縁上面はやや外下りとする。611～614は，逆Ｌ字状口縁をなし，612は口縁下に断面三角形の凸帯をめぐらす。復原口縁内径は，610が33cm，611が28.6cm，612が36.6cm。615・616は底部片である。

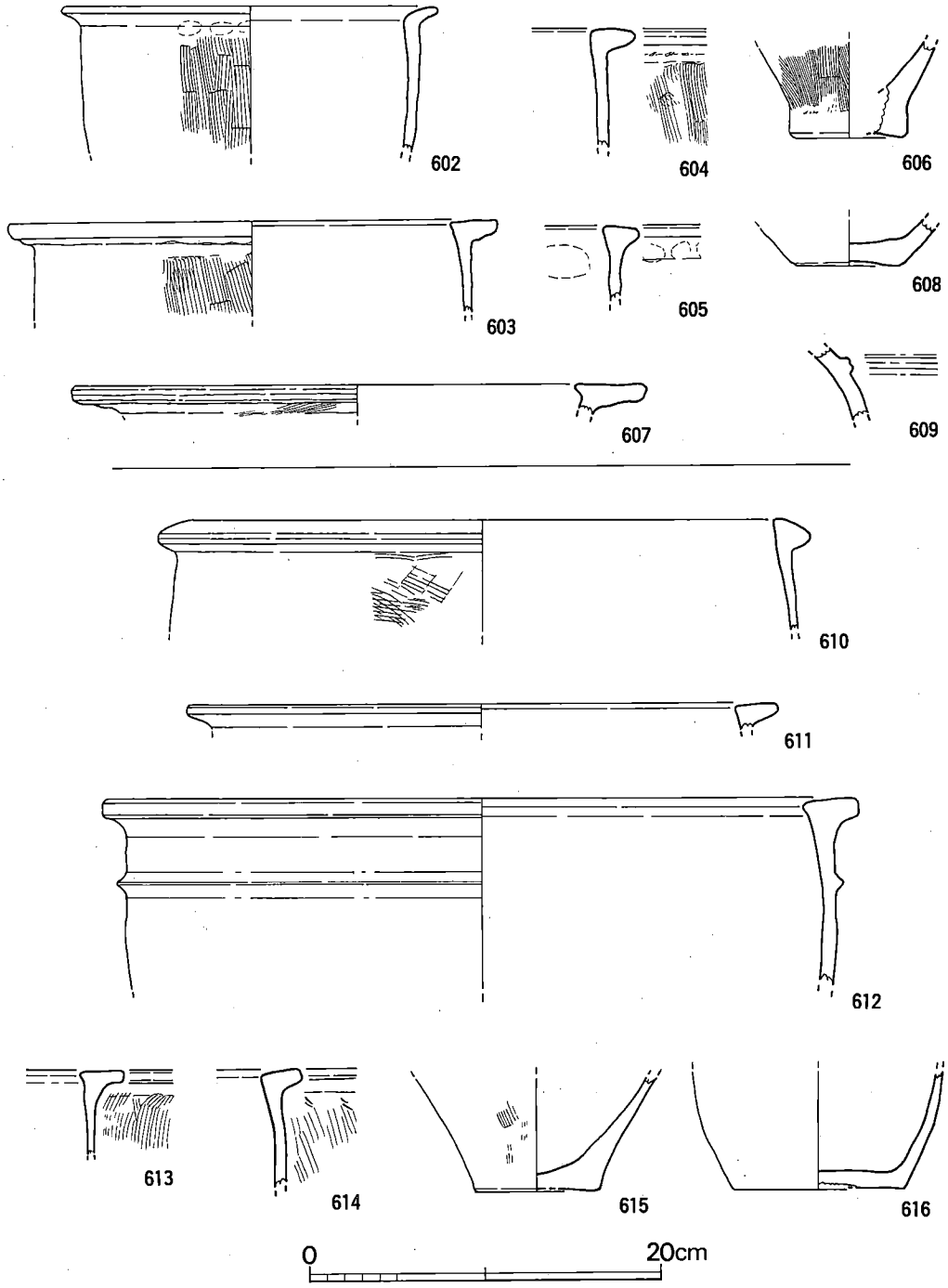
**不明土製品**（第11図44～47）　いずれも，定形をなさない。46を除いて精良な粘土である。45は，何個かの粘土を集めて平坦な面に押し付けた粘土塊である。44は，団子状に丸めたもの，47は，小さく押し潰したものである。

## 96号貯蔵穴（図版33－１，第72図）

12号住居跡の南側に接する。底部平面形は168×117cmの楕円形をなし，壁はやや内傾して立ち上る。残存する深さは，44cm。土器（622・623）が上面付近で出土している。




**第 72 図**　94～98号貯蔵穴実測図(1/40)




**第 73 図**　94･95号貯蔵穴出土土器実測図(1/4)

出土遺物（図版44・45，第74図）

**甕**（617～620）　617・620は，逆L字状口縁をなし，端部に面がある。復原口縁内径は24cm。618・619は，厚手の底部片である。

**鉢**（621・622）　622は，口縁上面が平坦で外に少し張り出す。底部は平底である。口径19.9cm，器高19.4cm。

**無頸壺**（623）　球形の胴部を持ち，底部は小さく高い。口縁外面には，相対する位置に半月状の粘土を貼り，真中に径3.5×5mm，その両側に，径5×7mmの孔を上から下へ貫通させ，把手とする。外面に塗られた赤色顔料の痕跡が残る。

## 97号貯蔵穴（図版33－2，第72図）

98号貯蔵穴に切られ，上面を12号住居跡によって削られている。底面形は（110＋α）×99cmの円形をなし，壁は袋状に立ち上る。残存する深さは51cmである。土器が少量出土している。

出土遺物（第74図）

**甕**（624・625）　624は，口縁が，ゆるやかに外反し，端部に刻みを持ち，口縁下3cmに刻目のない断面三角形の凸帯をめぐらす。625は，口縁が強く屈曲して短く外反し，端部に刻目を施す。

## 98号貯蔵穴（図版33－2，第72図）

97号貯蔵穴を切り，西側一部を12号住居跡によって削られる。底部平面形は，128×104cmの楕円形で，壁はやや外に開いて立ち上る。残存する深さは71cmで，97号貯蔵穴の床面より10cm低い。遺物は，土器が少量出土している。

出土遺物（第74図）

**甕**（626～628）　626は，口縁外に断面三角形の粘土帯をめぐらし，口縁下5cmにも断面三角形の凸帯をめぐらす。101号貯蔵穴の土器640と接合する。628は，平底の底部片である。

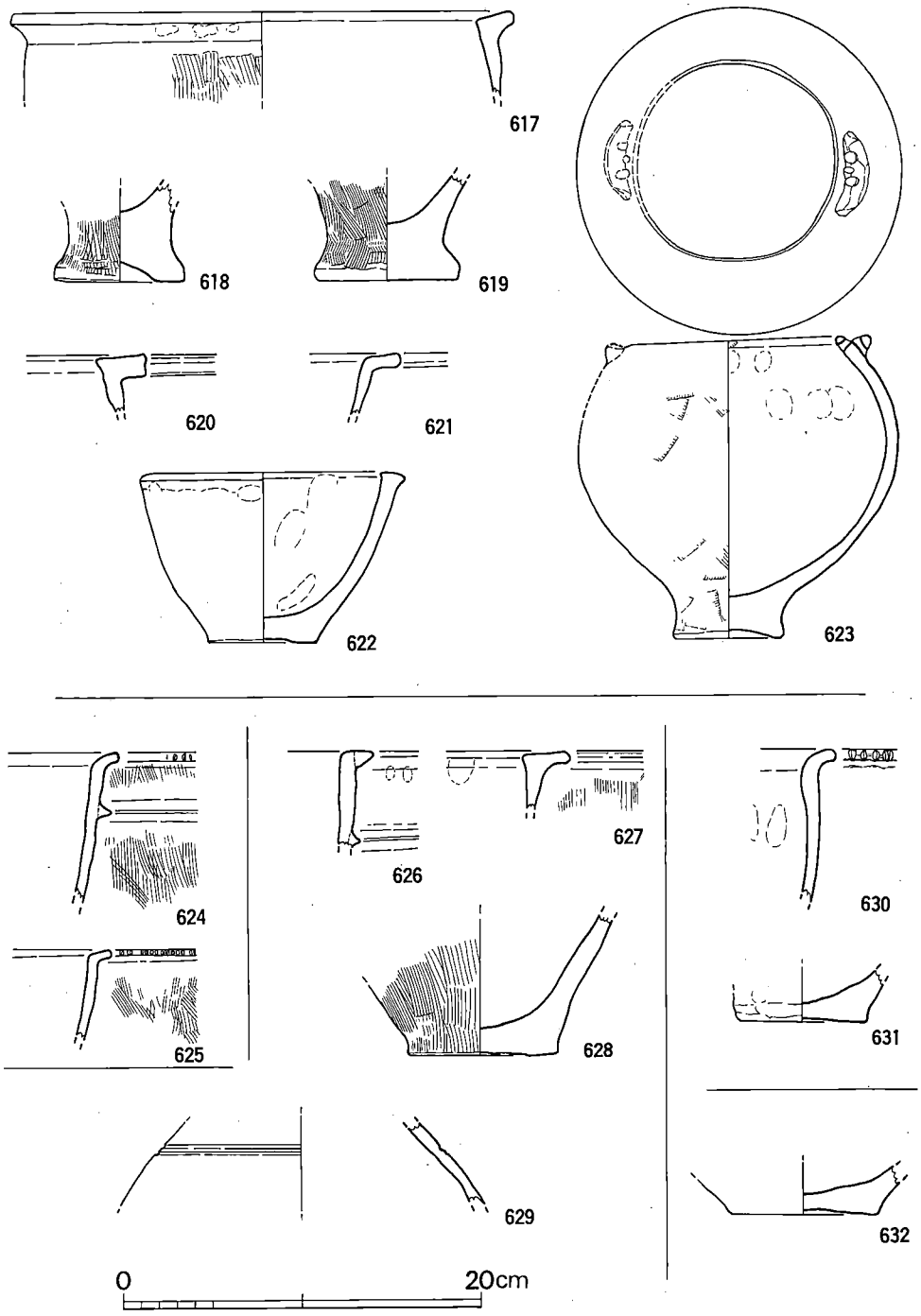
**壺**（629）　頸部と肩部の境に2本の沈線をめぐらす。外面横位のヘラ磨きがされる。復原頸部径17cm。

## 99号貯蔵穴（図版34－1，第75図）

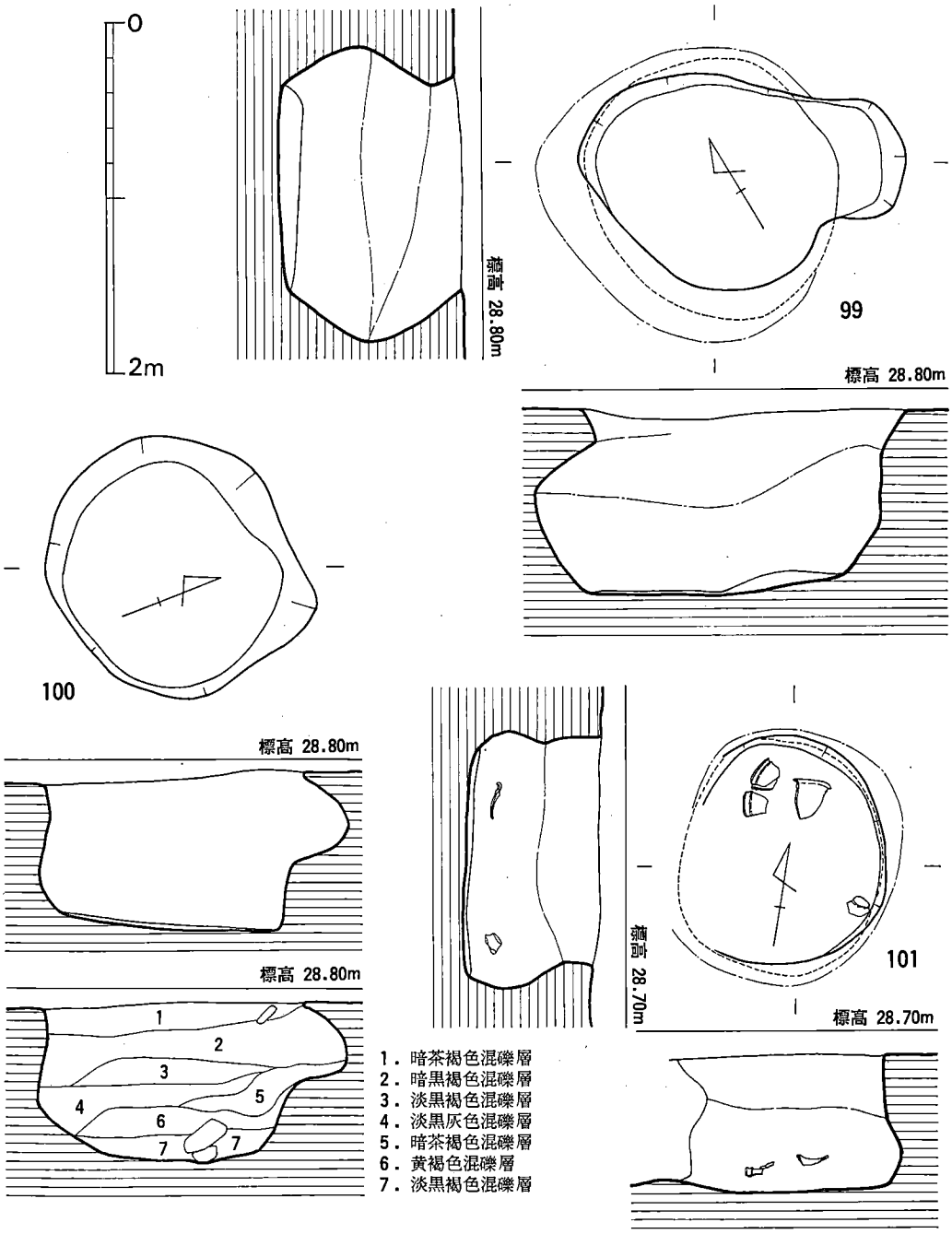
98号貯蔵穴南側にある。底部平面形は，153×135cmの楕円形をなし，壁は袋状に立ち上り，胴部最大径は，197×166cmとなる。上部平面形は崩落のため不整形をなすが，120×127cmの楕円形に近い。深さ105cm。遺物は土器が少量出土している。

出土遺物（第74図）

**甕**（630・631）　630は，短く強く丸まって外反する口縁で端部に刻目がある。631は，平底




**第 74 図**　96～100号貯蔵穴出土土器実測図(1/4)




**第 75 図**　99～101号貯蔵穴実測図(1/40)

の底部片である。

## 100号貯蔵穴（図版34－２，第75図）

98号貯蔵穴の東側，101号貯蔵穴の北側にある。底部平面形は，123×108cmの胴張り隅丸方形をなし，壁は袋状となる。埋土は，水平に近い堆積を示す。遺物は，少量の土器と管状土錘が出土している。

出土遺物（図版50，第36・74図）

**壺**（632）　底部片で，外面ヘラ磨きがされる。底面２ヶ所に籾圧痕がある。

**管状土錘**（図版50－８，第36図８）　中央付近の破片で，復原径２cm，復原孔径５mmの管状をなすが，長さは不明である。

## 101号貯蔵穴（図版35－１・２，第75図）

100号貯蔵穴の南側にあり，103号貯蔵穴によって切られている。底部平面形は，132×115cmの楕円形をなし，壁は袋状になる。深さ79cm。土器が，床面近くでまとまって出土している。

出土遺物（図版45，第76・77図）

**甕**（633～641）　633～635は，如意形口縁をなし，端部に刻目が施され，口縁下に断面三角形の刻目凸帯がめぐる。復原口径は633が23.3cm，634が29.0cm，635が18.1cmである。636は，口縁が短く強く外反し，端部に刻目を持つ。640は，やはり強く外反するが，端部は面をなし，上・下端に細い刻目がある。口縁下５cmに刻目凸帯がある。復原口径は，636が27cm，640が30.9cmである。641・638は，口縁外に粘土帯を貼付し，641は小さく，638は長く突出させている。いずれも口縁下に凸帯をめぐらす。639は，平底の底部である。

**壺**（642）　口縁内面に粘土帯を貼り肥厚させた強く外反した口縁で，頸部はゆるやかに湾曲しながら肩部へ続き，接点に２条の沈線を引く。口縁下端部に刻目をつける。口径33.4cm。

（木村）

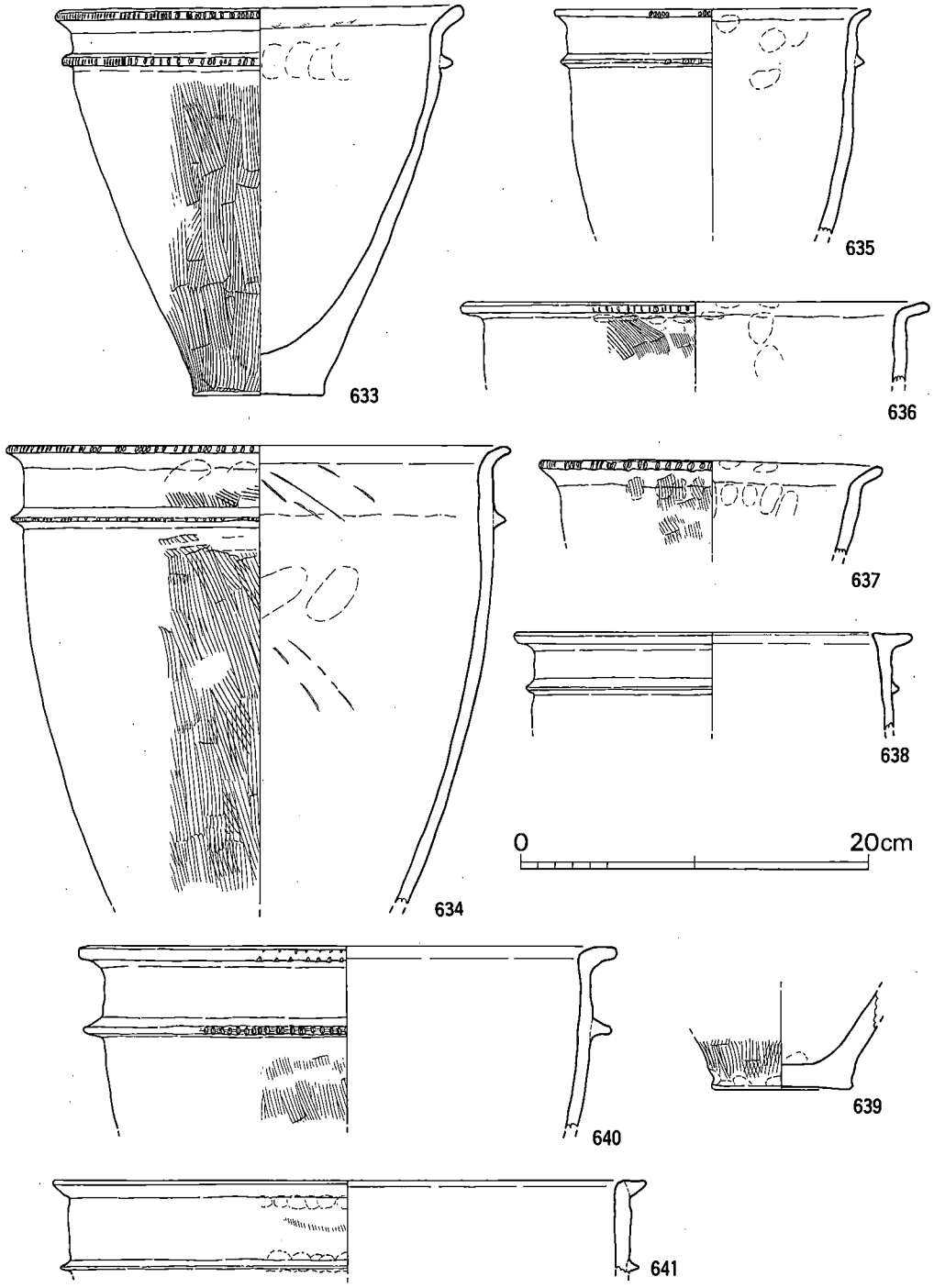
## 102号貯蔵穴（図版35－１，第78図）

101号貯蔵穴の南側にあって，北壁の一部は103号貯蔵穴に切られた袋状竪穴である。底面形は胴張りの隅丸長方形を呈す。規模は長径145cm，短径128cm，深さ72cmを測る。

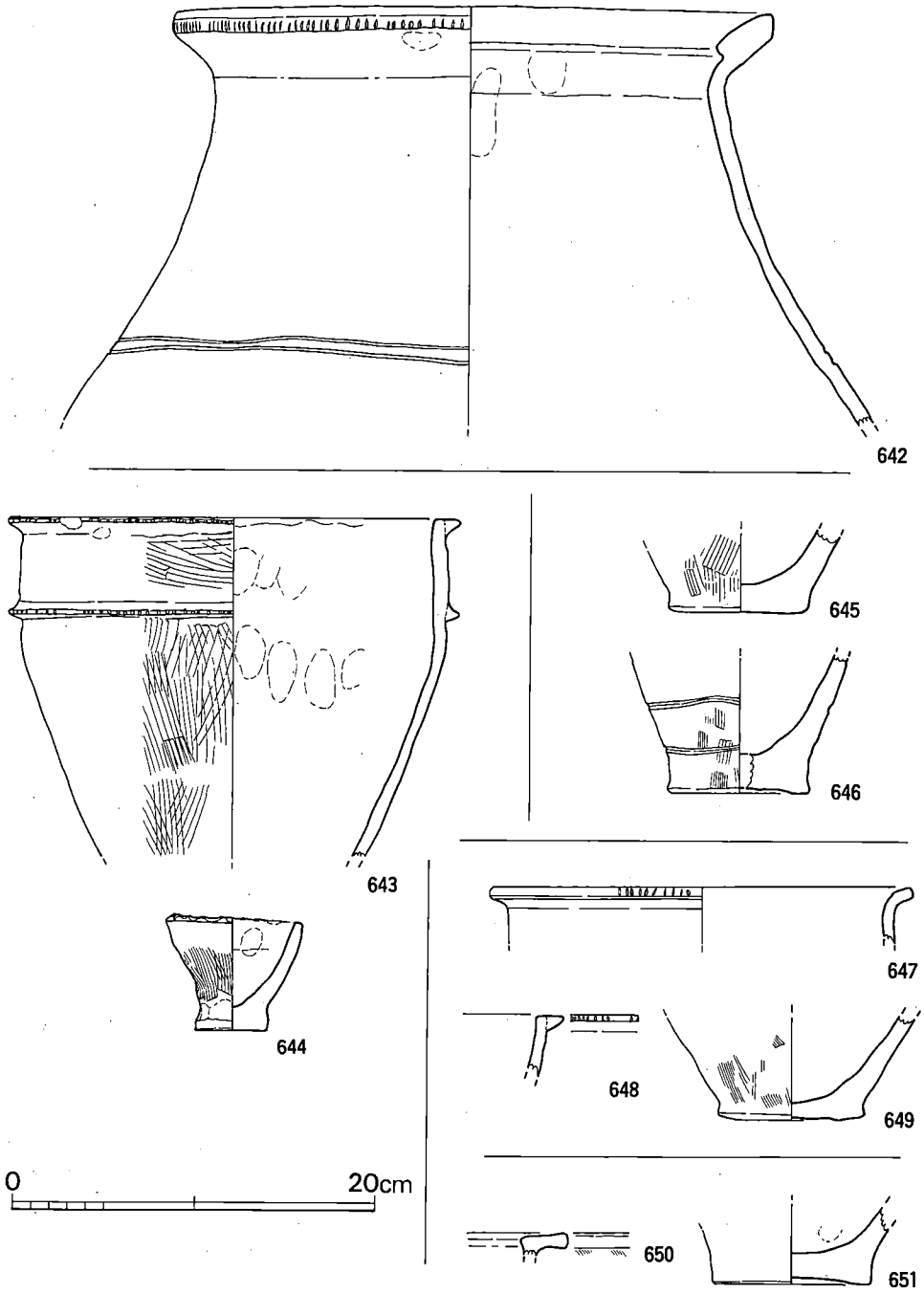
出土遺物（図版45，第77図）

**甕**（643）　口縁端部に三角凸帯がつく甕で，口縁下にも１条の三角凸帯が貼付され，凸帯端部には刻目が施されている。胴部外面は粗い刷毛調整，内面はナデで仕上げている。色調は暗茶色を呈し，焼成も良い。復原口径は27cmを測る。

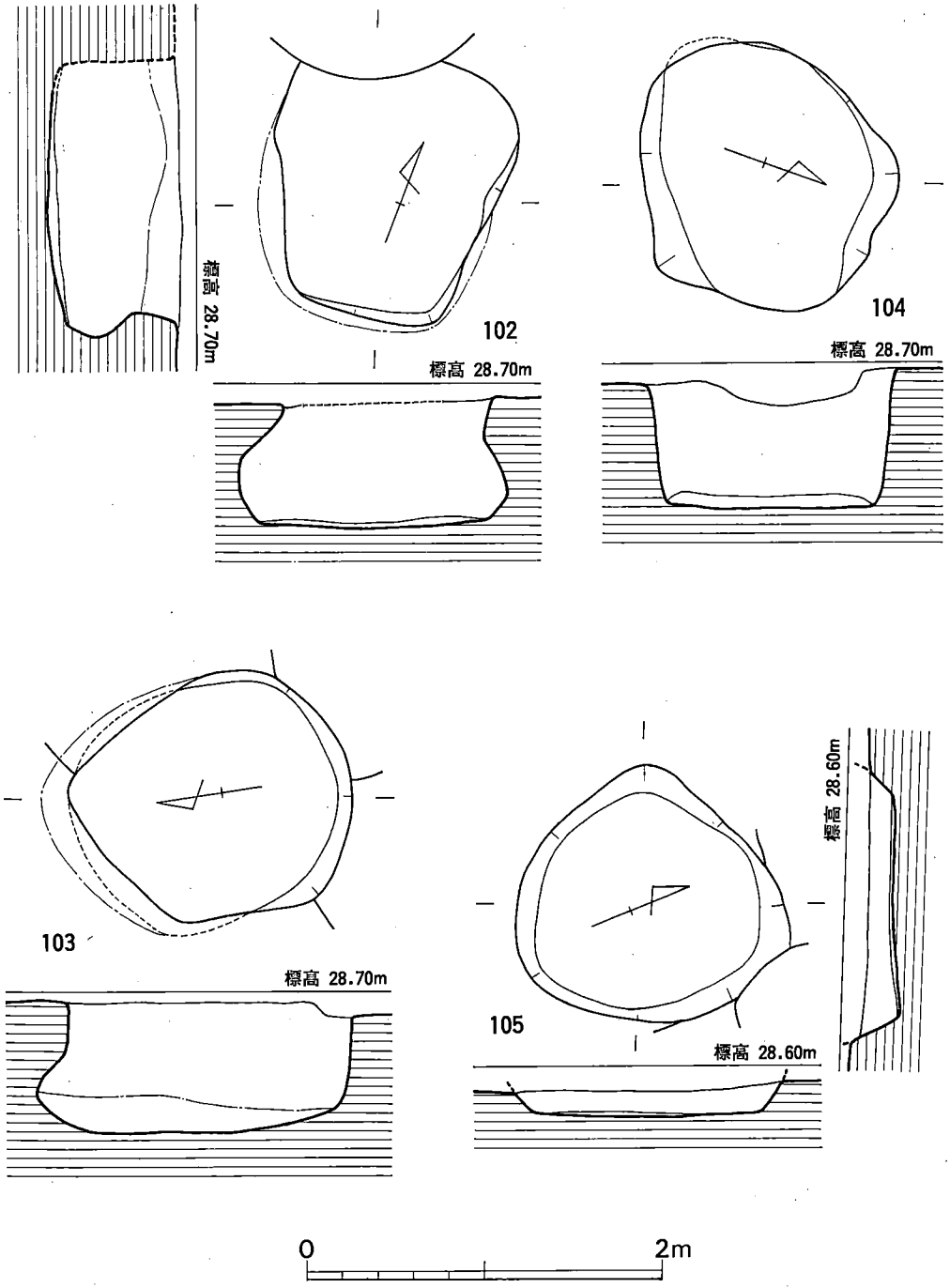
**椀**（644）　口径6.8cm，器高6.1cmを測る小形の椀である。体部外面刷毛の他はナデで仕上




**第 76 図**　101号貯蔵穴出土土器実測図(1/4)




第 77 図　101～105号貯蔵穴出土土器実測図(1/4)




**第 78 図**　102～105号貯蔵穴実測図(1/40)

げていて，口縁端部には刻目が施されている。

### 103号貯蔵穴（図版35－1，第78図）

101・102・104号貯蔵穴を切って作られた竪穴で，壁面は北壁と東壁は袋状をなすものの，南壁は直立気味である。底面形は胴張りの隅丸長方形で，規模は長径148cm，短径133cm，深さ73cmを測る。

出土遺物（第11・77図）

**甕**（645・646）　底部付近の破片資料で，復原底径は645が7.85cm，646が7.75cmを測る。外面の調整は646が刷毛，645は刷毛のあとナデ，内面はナデ仕上げである。646の外面には3条の沈線がめぐる。色調は645が暗褐色，646が淡褐色を呈し，焼成も良い。

**不明土製品**（第11図48～50）　いづれも不定形の棒状の粘土塊である。

### 104号貯蔵穴（第78図）

東壁側を102・103号貯蔵穴で切られた竪穴で，規模は長径163cm，短径113cm，深さ80cmを測る。底面形は不整楕円形で，断面は逆台形状を呈す。

出土遺物（第77図）

**甕**（647～649）　647が如意形口縁，648は口縁端部に三角凸帯を貼付した甕で，いずれも端部に刻目が施されている。647は復原口径23.3cmを測る。色調は647が茶褐色，648が暗茶褐色を呈す。649は底部付近の破片資料で，復原底径8.2cmを測る。外面は刷毛調整のあとナデ，内面はナデて仕上げている。色調は暗茶褐色で，焼成も良好である。

### 105号貯蔵穴（第78図）

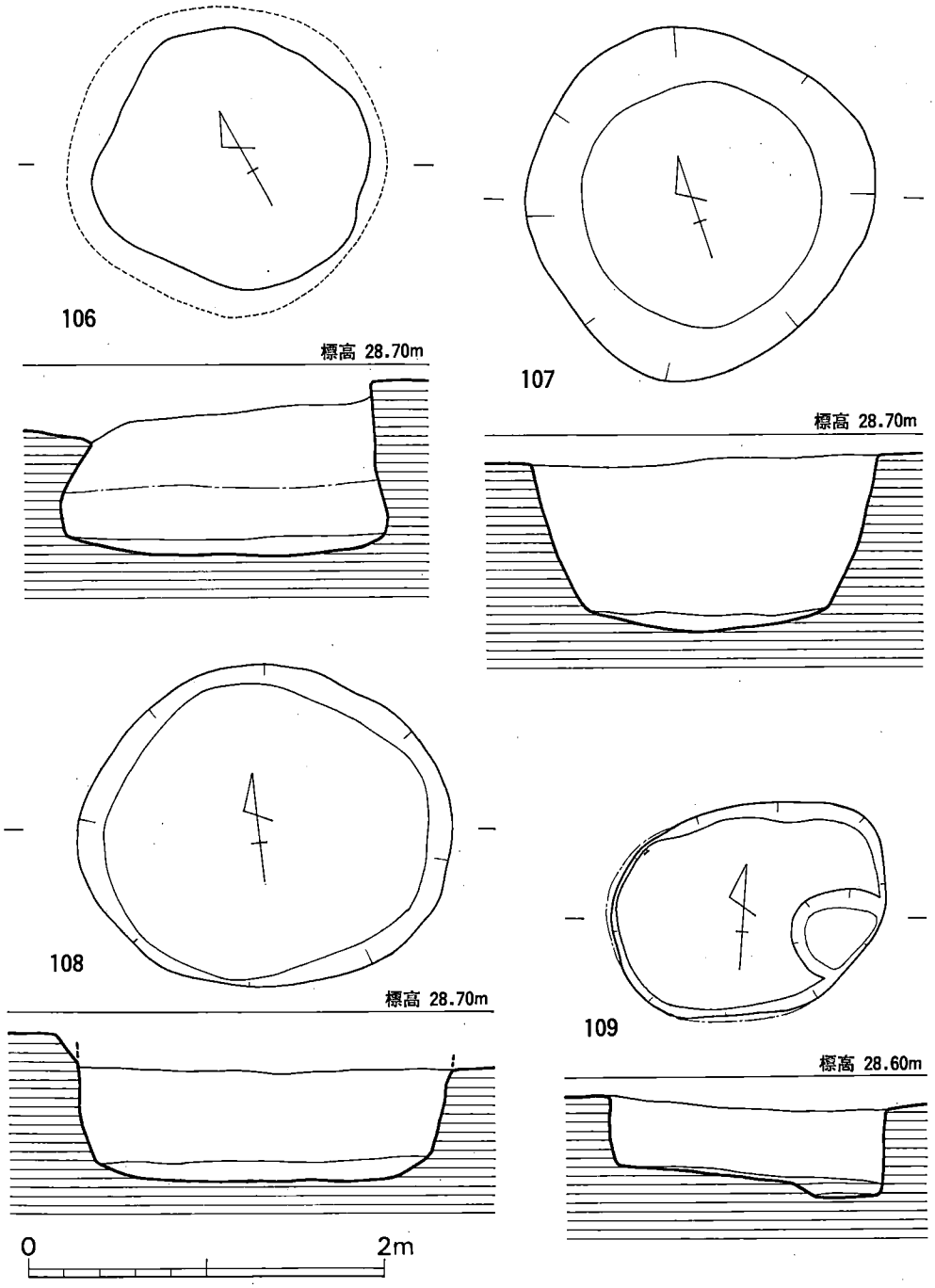
67号貯蔵穴の西側の23号土壙の床面から検出された底面形が不整円形を呈す浅い小形の竪穴である。規模は長径125cm，短径123cm，深さ29cmを測る。

出土遺物（第77図）

**甕**（650・651）　650はＴ字状口縁の小破片，651は凹み底気味の底部資料である。651の外面はヘラ磨き，内面はナデで仕上げていて，底径は8.6cmを測る。色調は650が茶褐色，651が暗褐色を呈し，焼成はいづれも良好である。　（井上）

### 106号貯蔵穴（図版36－1，第79図）

105号貯蔵穴の南側にあり，109号貯蔵穴の北側にある。底部平面形は，175×170cmの円形をなし，壁は袋状になる。上面形は140×135cmの隅丸長方形になる。深さ98cm。遺物は，土器が出土している。

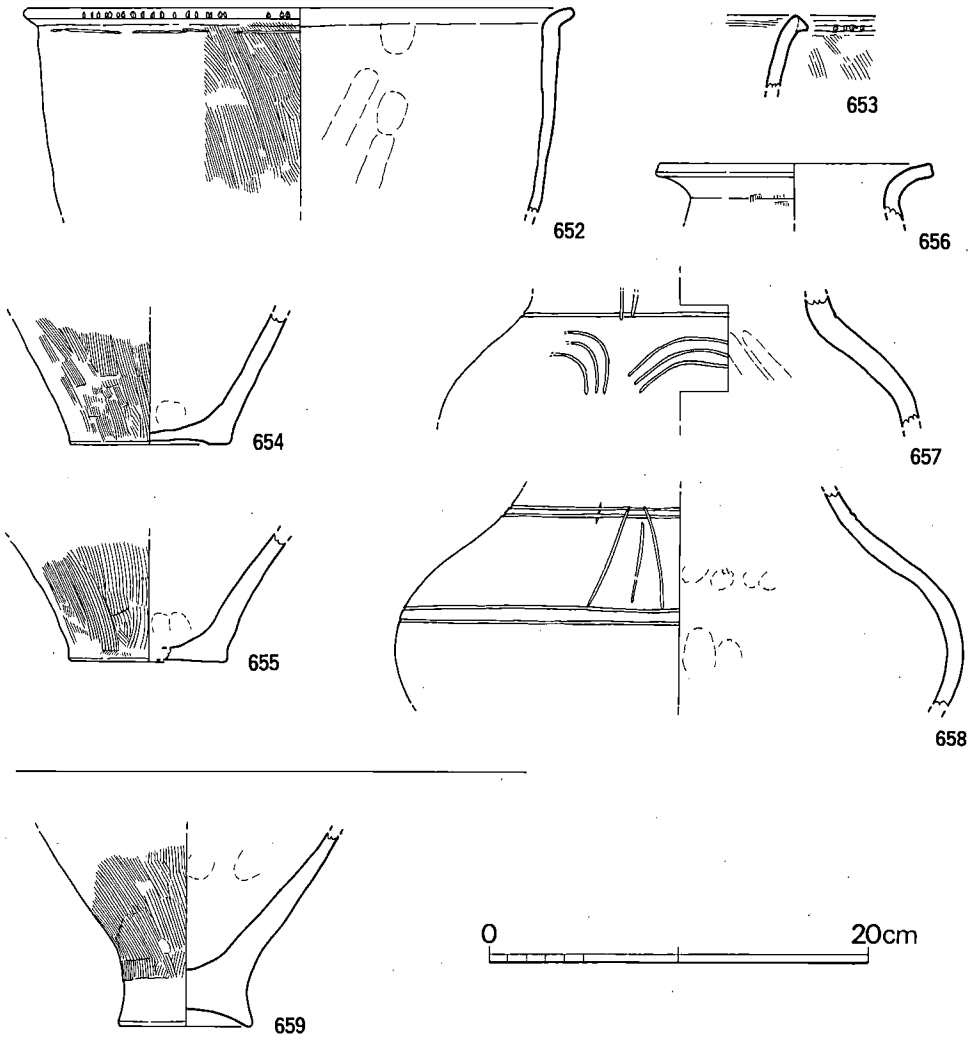



**第 79 図**　106～109号貯蔵穴実測図(1/40)

出土遺物（第80図）

**甕**（652～655）　652は短く外反した口縁で，端部に刻目がある。復原口径29cm。653は外反する口縁で，口唇下端に刻目がある。654・655は底部である。

**壺**（656～658）　656は，口縁が強く短く外反し，端部は平坦である。内面にヘラ磨きがみられる。復原口径14.6cm。657・658は肩部から胴部の破片で，657は頸部に２本単位の縦位沈線をひき，頸部と肩部の境に１条の沈線をめぐらし，肩部には３本単位の連弧文沈線を引く。




**第 80 図**　106･107号貯蔵穴出土土器実測図(1/4)

658は頸部・肩部の境と，胴最大部に２本単位の沈線をめぐらし，肩部に縦位の沈線を引く。復原頸部径は，657が16cm，658が18cmである。

### 107号貯蔵穴（図版36－２，第79図）

108号貯蔵穴の西側にある。底部平面形は135×133cmの円形をなし，壁はやや脹みながら外に開く。深さ94cm。遺物は土器が少量出土している。

出土遺物（第80図）

**甕**（659）　上底で，厚い底部片である。底径7.1cm。　（木村）

### 108号貯蔵穴（図版37－１，第79図）

107号貯蔵穴の南東，13号住居跡床面下から検出された竪穴で，底面形は楕円形をなす。規模は長径183cm，短径162cm，深さ60cmを測る。埋土上層からは壺・甕・高杯等の破片が多数出土した。

出土遺物（第81図）

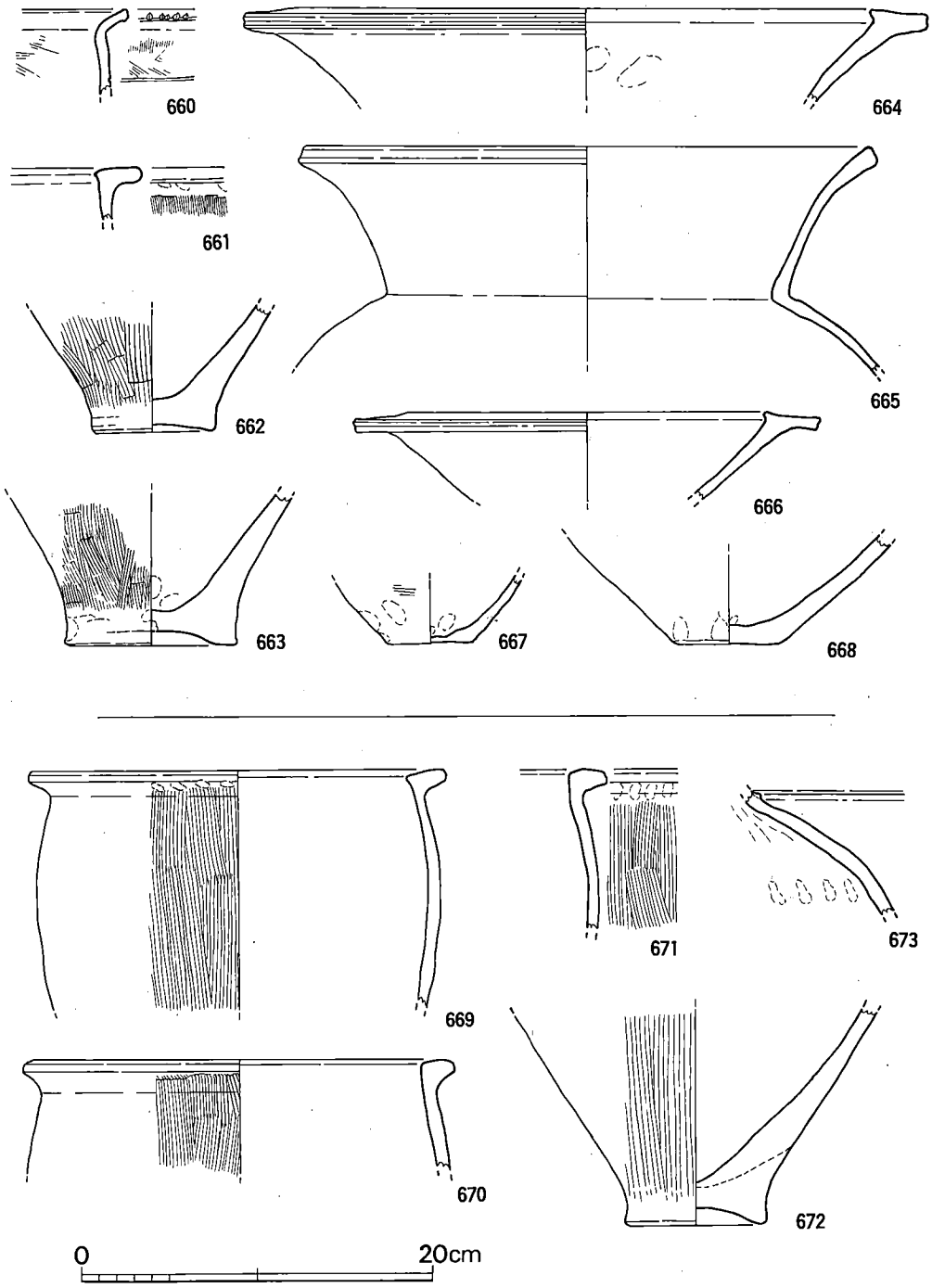
**甕**（660～663）　660は如意形口縁，661はＴ字状口縁の甕の小破片，662・663は底部資料である。660の口縁下には１条の沈線がめぐり，口縁端部には刻目が施されている。胴部外面の調整は，660・661とも刷毛，内面はいづれもナデ，口縁部内外はヨコナデしている。662・663の外面調整は刷毛で，底部付近はさらにヨコナデしている。内面はナデ仕上げで，663の内底部には指頭圧痕がみられる。底径は662が７cm，663が9.8cmを測る。

**壺**（664・665・667・668）　664は鋤先状口縁，665は広口の単口縁の壺で，いづれも破片資料である。復原口径は664が39cm，665が32.2cmを測る。調整は664が頸部内外をナデ，口縁部内外をヨコナデ，664は外面が風化しているため明確ではないが，ナデのあとヘラ磨き，内面はナデ仕上げ，口縁部内外はヨコナデし，内面をさらに粗いヘラ磨きをしている。色調はいづれも肌色で，焼成も良好である。667・668は底部資料で，667は底径５cmの小形壺，668は底径６cmを測る中形壺の底部である。外面の調整は667が刷毛のあとナデ，668はナデ，内面はいづれもナデ仕上げで，667の内底部には指頭圧痕がみられる。

**高杯**（666）　鋤先状口縁の杯部の破片資料で，復原口径は26.6cmを測る。調整は器面の風化が著しいため不明瞭だが，一部残存するところからみれば杯部内外ともヘラ磨きで仕上げたものと思われる。

### 109号貯蔵穴（第79図）

106号貯蔵穴の南側から検出された竪穴で，東壁際床面には浅いピットがある。底面形は楕円形で，規模は長径147cm，短径105cm，深さ37cmを測る。壁面は直立し，断面は箱形を呈す。




**第 81 図**　108･110号貯蔵穴出土土器実測図(1/4)

## 110号貯蔵穴（第82図）

109号貯蔵穴の南側から検出された竪穴で，東壁側は一部未掘である。底面形は円形と思われる。規模は復原長径180cm，短径172cm，深さ47cmを測る。

出土遺物（図版45，第81図）

**甕**（669～672）　669～671は口縁幅の狭い逆Ｌ字状口縁の甕である。調整は胴部外面が刷毛，内面はナデ，口縁部内外はヨコナデで仕上げている。669と671の口縁下には成形時の指頭圧痕が残っている。色調は669が淡黄茶褐色，670が茶褐色，671は黄褐色を呈す。672は胴部下半の破片資料で，底部は凹み底である。調整は胴部外面を粗い刷毛，内面はナデ，底部付近と外底部はナデで仕上げている。色調は淡茶褐色で焼成良好である。

**壺**（673）　頸部下に１条の三角凸帯が付く壺の肩部付近の小破片である。調整は外面がヨコヘラ磨き，内面はナデ仕上げである。色調は淡褐色を呈す。

## 111号貯蔵穴（第82図）

110号貯蔵穴の南西側から検出された小竪穴である。底面形は楕円形で，南壁側にピットがあるが新しい時期のものである。規模は長径134cm，短径103cm，深さ37cmを測り，断面は逆台形状をなしている。埋土中からは甕破片が若干出土した。

## 112号貯蔵穴（第82図）

108号貯蔵穴の南側で，２号住居跡の床面下から検出された竪穴である。南半部が未掘のため，底面形は不明である。規模は東西径155cm，南北径は現存部で70cm，深さ57cmを測る。断面は逆台形状を呈す。遺物は壺・甕・器台等の破片と鉄鉋が出土している。

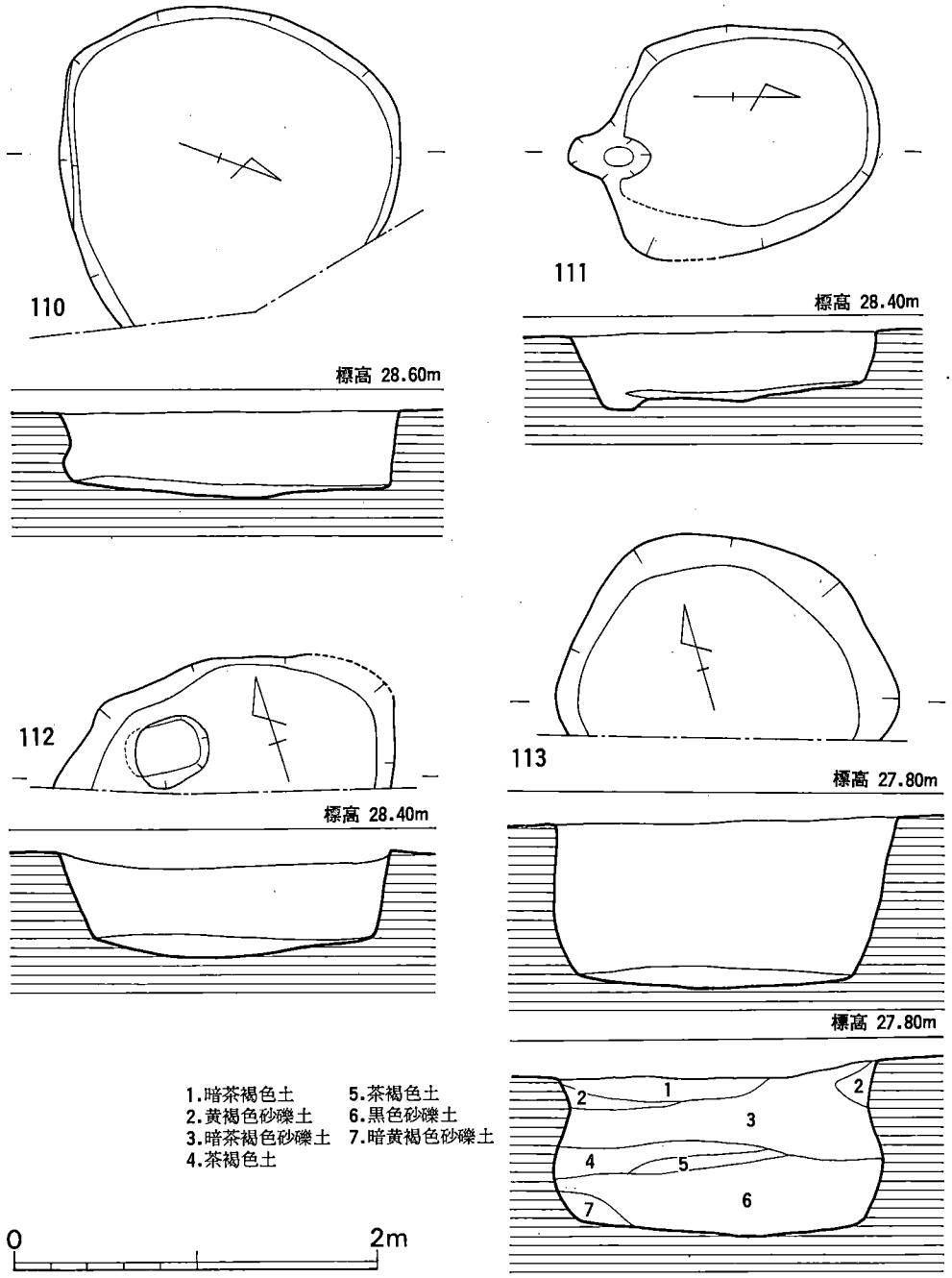
出土遺物（図版53，第52・83図）

**甕**（674・675）　674は逆Ｌ字状口縁甕の小破片で，口縁下に１条の三角凸帯がついている。調整は胴部外面を細かい刷毛，内面はナデ，口縁部内外をヨコナデしている。675は器肉の厚い凹み底で，底径７cmを測る。外面刷毛，内面ナデ調整し，外底部と底部外面はさらにヨコナデして仕上げている。色調は黄褐色を呈す。

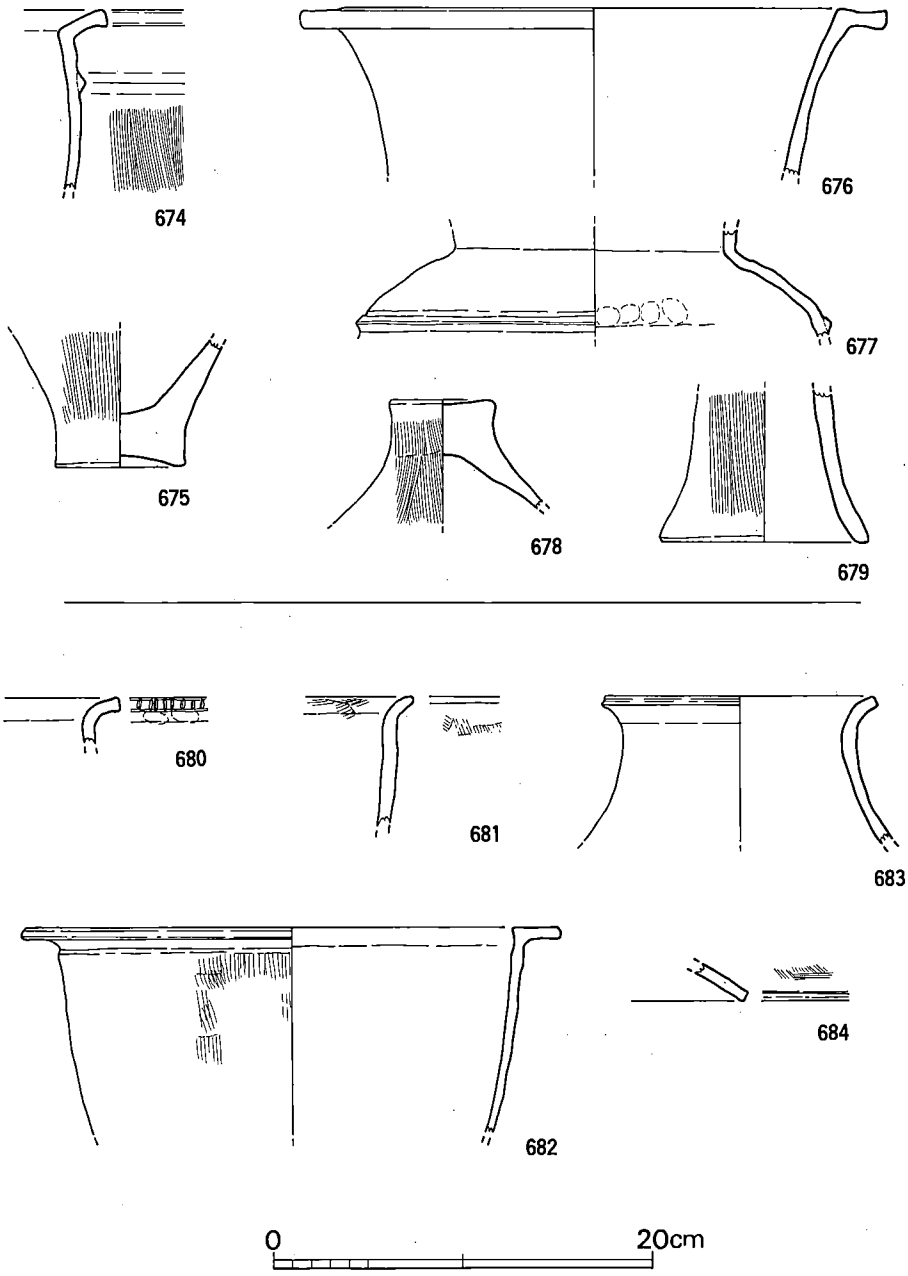
**壺**（676・677）　676は鋤先状口縁壺の口頸部の破片で，復原口径は31.1cmを測る。頸部内外をナデ，口縁部内外はヨコナデで仕上げている。677は肩部に1条の三角凸帯がめぐる肩部付近の破片資料で，外面ヘラ磨き，内面ナデて仕上げている。

**蓋**（678）　鈕部付近の破片で，体部外面は刷毛，内面ナデ，天井部外面とその付近はさらにヨコナデして仕上げている。色調は黄茶褐色を呈し，焼成も良好である。

**器台**（679）　筒形器台の下半部の破片で，裾部径は11cmを測る。体部外面は刷毛，内面ナデ，




**第 82 図**　110～113号貯蔵穴実測図(1/40)




第 83 図　112･113号貯蔵穴出土土器実測図(1/4)

裾部内外はヨコナデしている。色調は淡黄褐色を呈す。

**鉄鏃**（第52図４）　全長5.7cm，中央部幅1.9cm，厚さ0.4cm，基部の幅2.1cmを測る。断面は三日月状を呈す。

## 113号貯蔵穴（図版37－２，第82図）

112号貯蔵穴の南東から検出された袋状竪穴で，南半部は未掘である。規模は東西径153cm，南北は現存部で94cm，深さ95cmを測る。遺物としては壺・甕などの弥生土器が少量と石鏃，鉄製鍬先などが出土している。鉄製鍬先は形態的に新しい時期の混入品かもしれない。

出土遺物（図版53－１，第52・83図）

**甕**（680～682）　680・681は如意形口縁，682はＴ字状口縁の甕破片である。680の口縁端部には刻目が施されている。682は復原口径28.5cmを測り，調整手法は器面の剝落が著しいため不明だが，胴部外面は刷毛，口縁部内外はヨコナデ仕上げと思われる。

**壺**（683）　口頸部付近の破片資料で，復原口径は14.5cmを測る。調整は内外ともヘラ磨きで仕上げていて，色調は暗茶褐色を呈し，焼成も良好である。

**蓋**（684）　裾部の小片で，体部外面刷毛，内面ナデ，裾部内外はヨコナデ調整である。

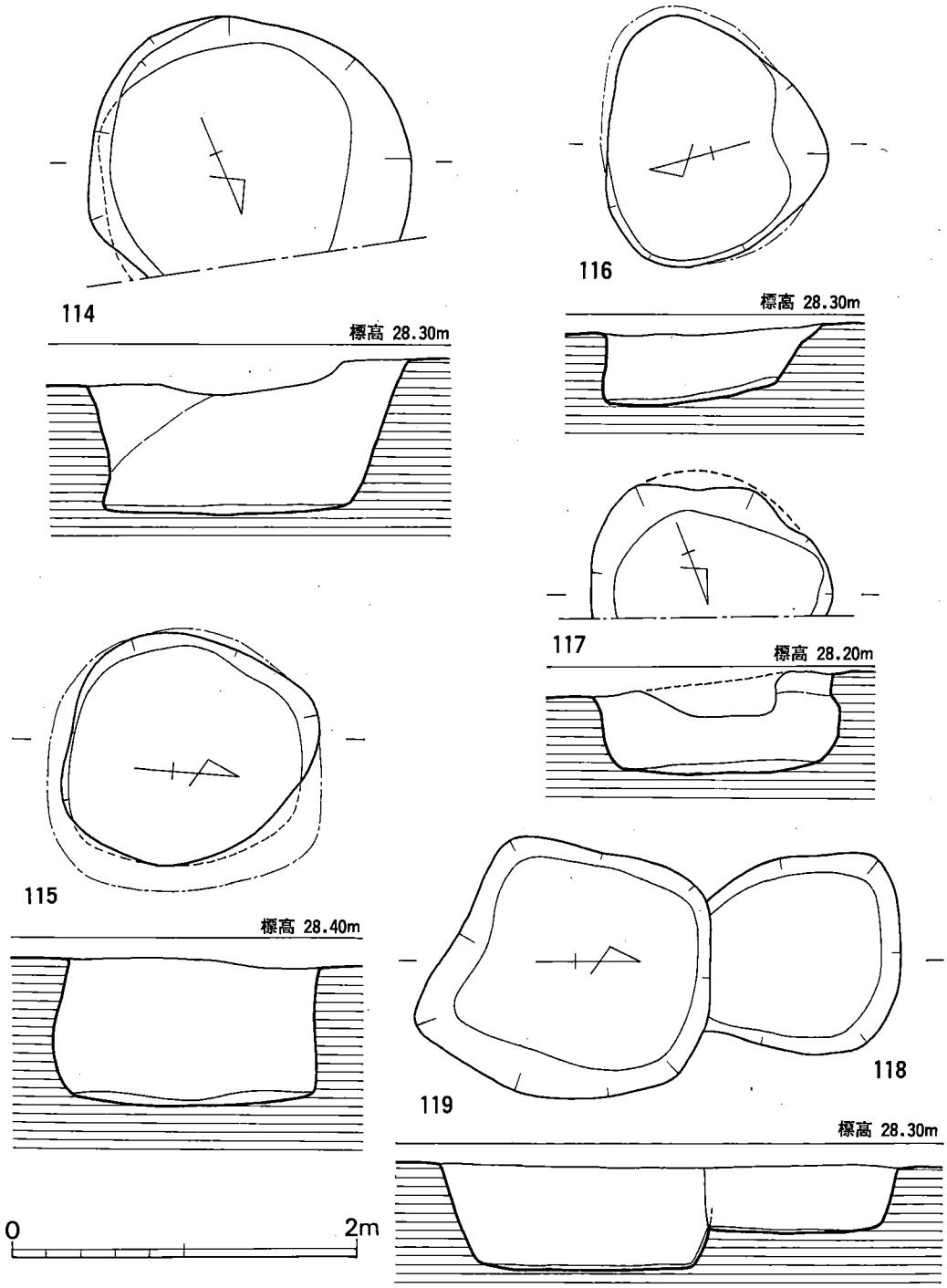
**鉄鍬先**（第52図５）　一方の袋部を欠失した鍬先である。現存刃部長4.8cm，身の高さ5.8cm，袋部上面内法幅１cmを測る。

## 114号貯蔵穴（第84図）

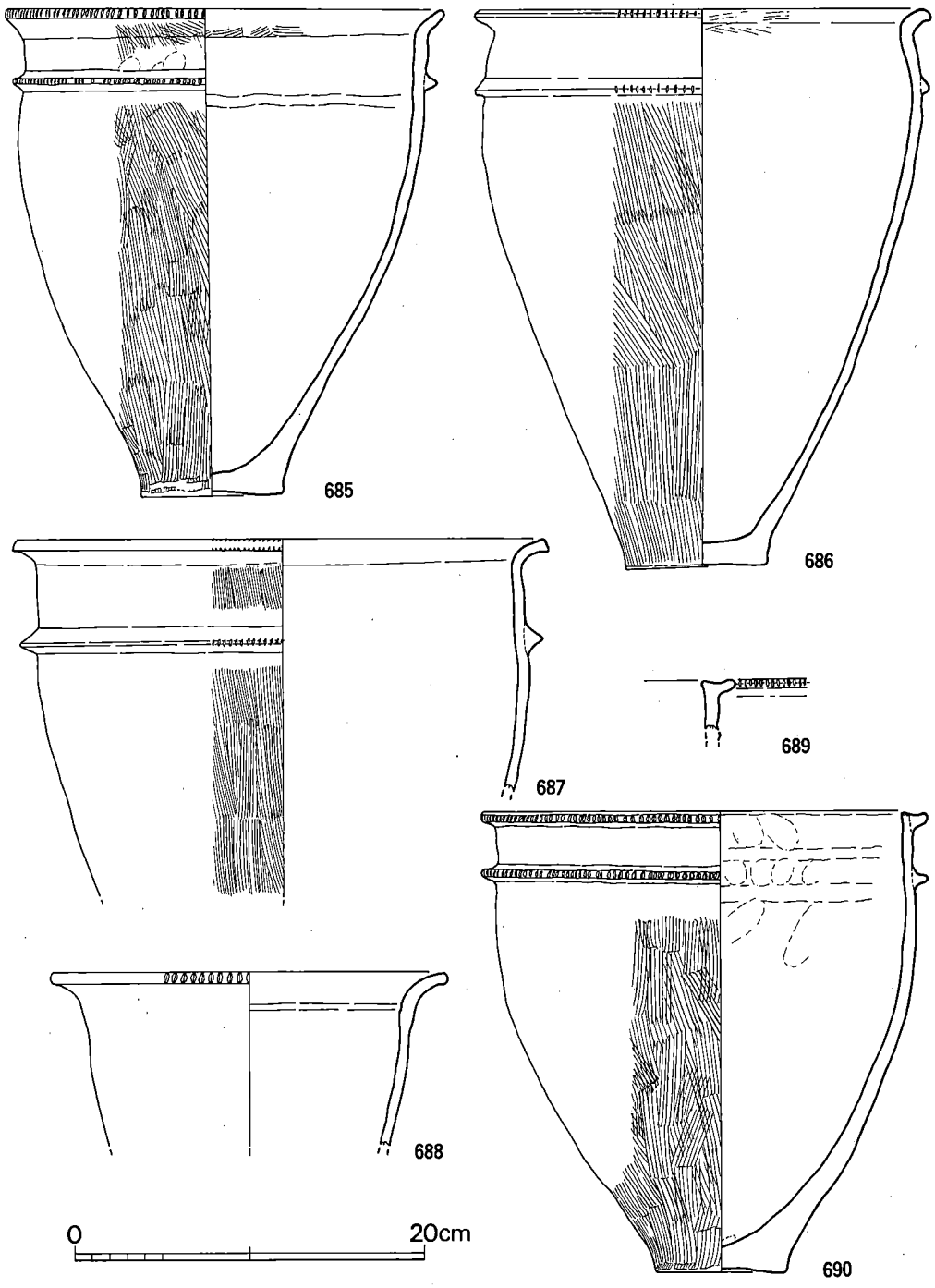
112号貯蔵穴の南側から検出された竪穴で，北壁側は未掘部分を残している。断面は東壁側が袋状をなすが，他は立ち気味に外反している。底面形は不整円形で，規模は東西径145cm，南北復原径145cm，深さ75cmを測る。埋土中からは壺・甕・蓋等の弥生土器が多数出土した。

出土遺物（図版45・46，第85・86図）

**甕**（685～692）　口縁部の形状により３つのタイプに分れる。いわゆる如意形口縁のもの（685～688），口縁端部に三角凸帯をめぐらすもの（689・690），Ｔ字状口縁のもの（691）である。685～687は口縁下に１条の三角凸帯が貼付され，口縁端部とともに刻目が施されている。器面の調整は，胴部外面は688がナデの他は刷毛調整，内面はいづれもナデ，口縁部内外はヨコナデで仕上げている。685と686の口縁部内面には一部刷毛調整を残し，690の口縁部付近内面には指頭圧痕を顕著に残している。ほぼ全形が知られる資料である685・686・690の計測値は，口径は685が25.05cm，686が26cm，690が25.2cm，器高は685が27.7cm，686が31.7cm，690が26.25cmを測る。復原口径は687が30.6cm，688が22.8cm，691が29cmを測る。色調は685・690が暗茶褐色，686が明茶褐色，687・688が茶褐色，691が赤褐色を呈し，焼成も良好である。685～690の胴部外面上半には煤の付着が著しく，下半は二次加熱により赤変したものが多い。692は脚台状を




**第 84 図**　114～119号貯蔵穴実測図(1/40)

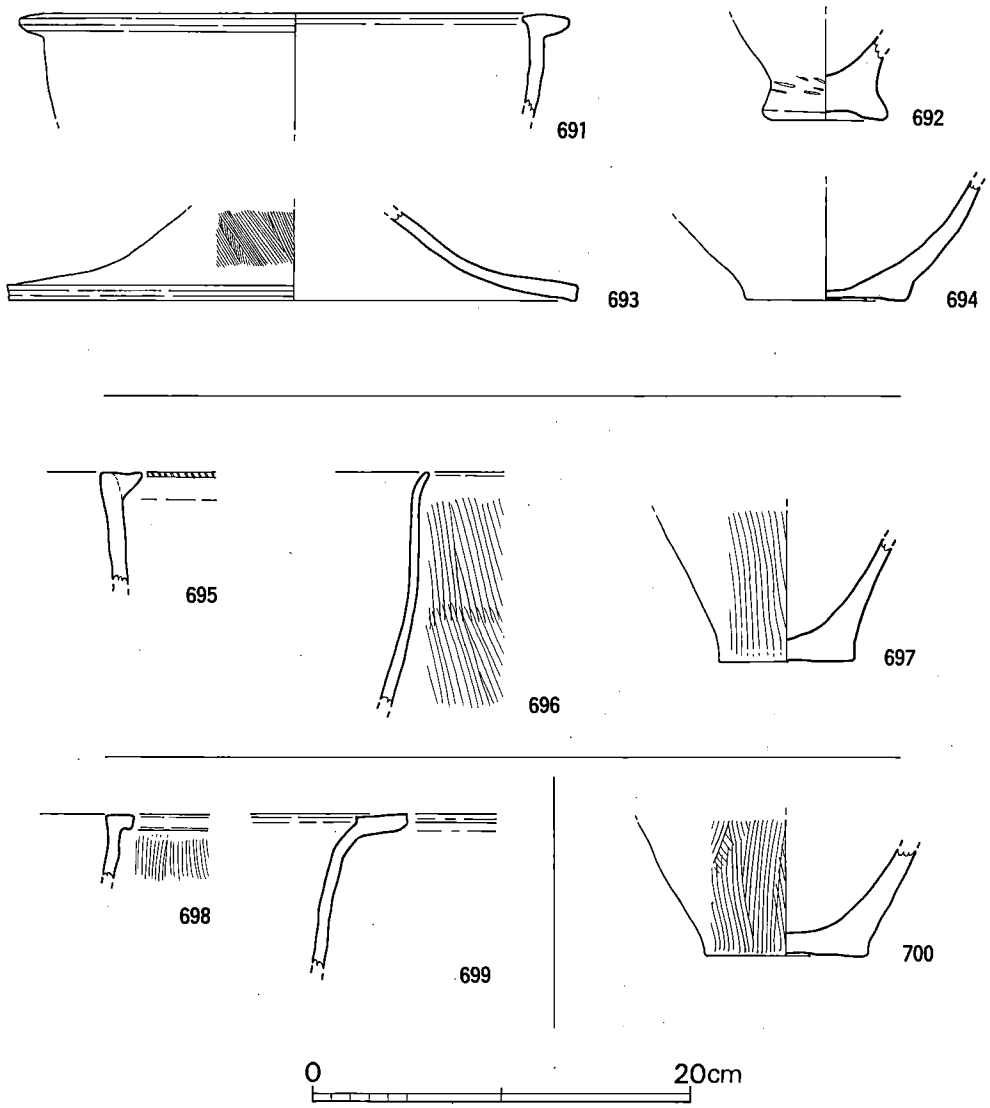



**第 85 図**　114号貯蔵穴出土土器実測図(1/4)

呈す底部資料で，底径6.7cmを測る。内外ともナデ仕上げである。色調は黄褐色を呈す。

**壺**（694）　底部付近の資料で，内面ナデ，外面は風化のため調整手法は不明である。底径は8.5cmを測る。

**蓋**（693）　裾部の破片資料で，体部外面は細かい刷毛，内面はナデ，裾部内外はヨコナデで仕上げている。復原裾部径は30.2cmを測る。色調は淡黄褐色で，焼成も良い。




**第 86 図**　114～117号貯蔵穴出土土器実測図(1/4)

## 115号貯蔵穴（第84図）

114号貯蔵穴の南東側から検出された小形の袋状竪穴で，底面形は不整円形プランを呈す。規模は長径135cm，短径127cm，深さ86cmを測る。

出土遺物（第86図）

甕（695～697）　695は口縁端部に三角凸帯がめぐる甕，696は外反が弱い如意形口縁の甕小破片である。696の胴部外面は粗い刷毛調整，内面はナデ，口縁部内外はヨコナデで仕上げている。697は底部付近の資料で，外面は粗い刷毛，内面と外底部はナデ調整である。696・697の外面には煤の付着がみられる。色調はいづれも茶褐色を呈し，焼成は良好である。

## 116号貯蔵穴（第84図）

115号貯蔵穴の東側から検出された底面形が不整楕円形を呈す小竪穴である。規模は長径137cm，短径97cm，深さ41cmを測る。出土遺物は弥生土器小片が数点出土しただけである。

出土遺物（第86図）

甕（698）　口縁幅の狭い逆Ｌ字状口縁をもつ甕の小片で，胴部外面を刷毛，内面はナデ，口縁部内外はヨコナデで仕上げている。

壺（699）　鋤先状口縁壺の口頸部の小破片で，調整は内外ともヘラ磨きで仕上げた暗茶褐色を呈す焼成が良好な土器である。

## 117号貯蔵穴（第84図）

116号貯蔵穴の東側に近接した小形の袋状竪穴で，北半は未掘である。東西径120cm，現存南北径64cm，深さ50cmを測る。

出土遺物（第86図）

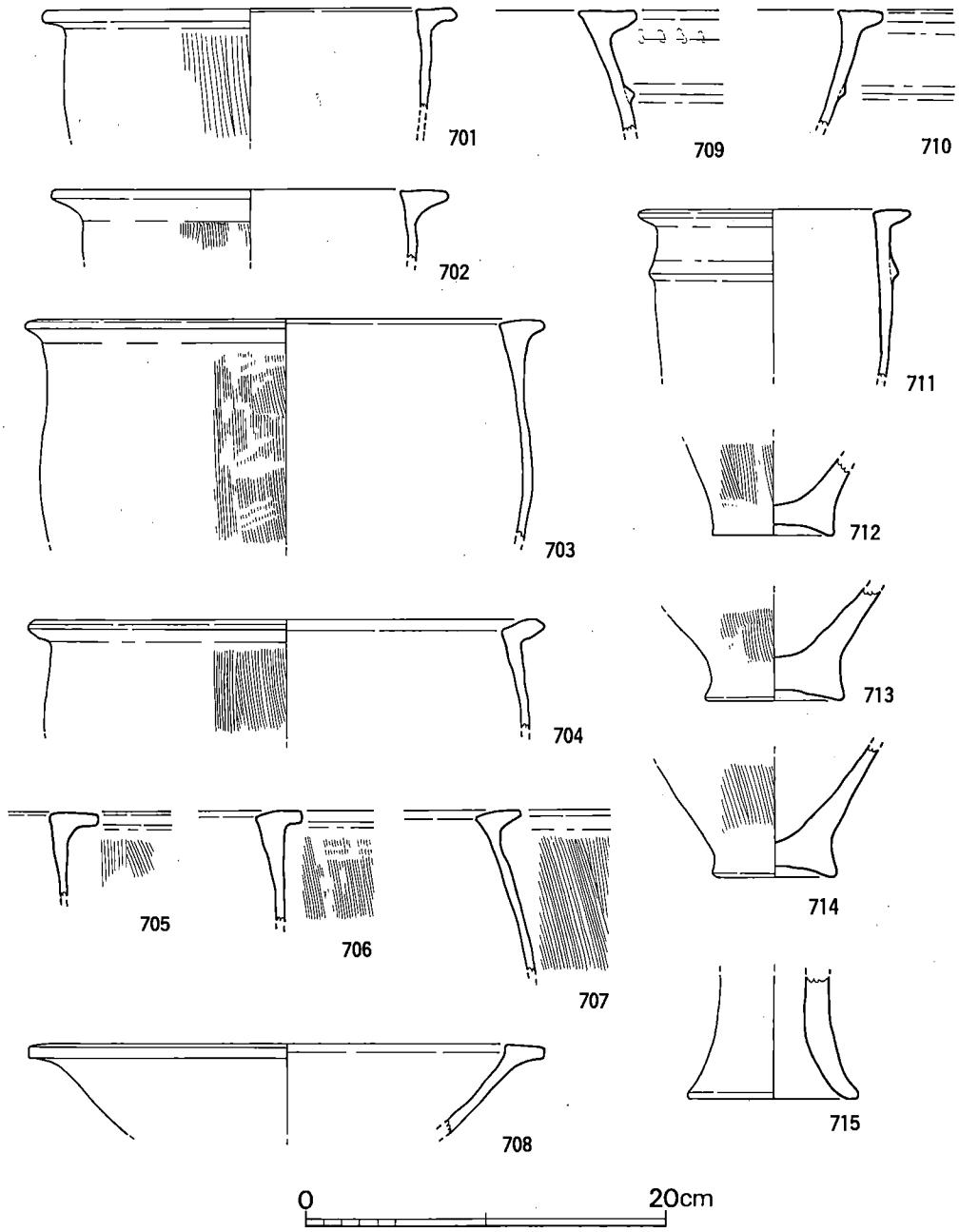
甕（700）　底部付近の資料で，調整は胴部外面が刷毛，内面はナデ，外底部は削り状の擦過痕がみられる。底径は8.7cmを測る。

## 118号貯蔵穴（第84図）

115号貯蔵穴の南にあって，南壁側を119号貯蔵穴に切られた小竪穴である。底面形は不整楕円形を呈し，規模は復原長径110cm，短径96cm，深さ38cmを測る。遺物は甕・鉢・高杯・器台等の弥生土器片が多数出土した。

出土遺物（図版46，第11・87図）

甕（701～707・709～714）　口縁部の形状により２つのタイプに分かれる。逆Ｌ字状口縁のもの（701～706・709・711），Ｔ字状口縁のもの（707・710）である。調整は胴部外面が刷毛，




**第 87 図**　118号貯蔵穴出土土器実測図(1/4)

内面ナデ，口縁部内外はヨコナデ仕上げである。709～711の口縁下には１条の三角凸帯が貼付されている。711は復原口径が15.2cmを測る小形壺である。口径の知りえるものでは，701が23cm，702が22.1cm，703が28.9cm，704が28.8cmを測り，いづれも復原値である。712～714は底部付近の資料で，外底部は凹み底である。調整は外面が刷毛，内面はナデ，外底部と底部外面はヨコナデで仕上げている。

**高杯**（708）　鋤先状口縁の杯部の破片資料で，復原口径は28.8cmを測る。調整は器面が風化しているため不明である。

**器台**（715）　筒状器台の下半部の資料で，裾部径は9.4cmを測り，内外ともナデで仕上げている。色調は茶褐色で，焼成も良い。

**不明土製品**（第11図51）　不整形で扁平な粘土塊で，長径4.3cm，短径3.4cm，厚さ２cmを測る。

## 119号貯蔵穴（第84図）

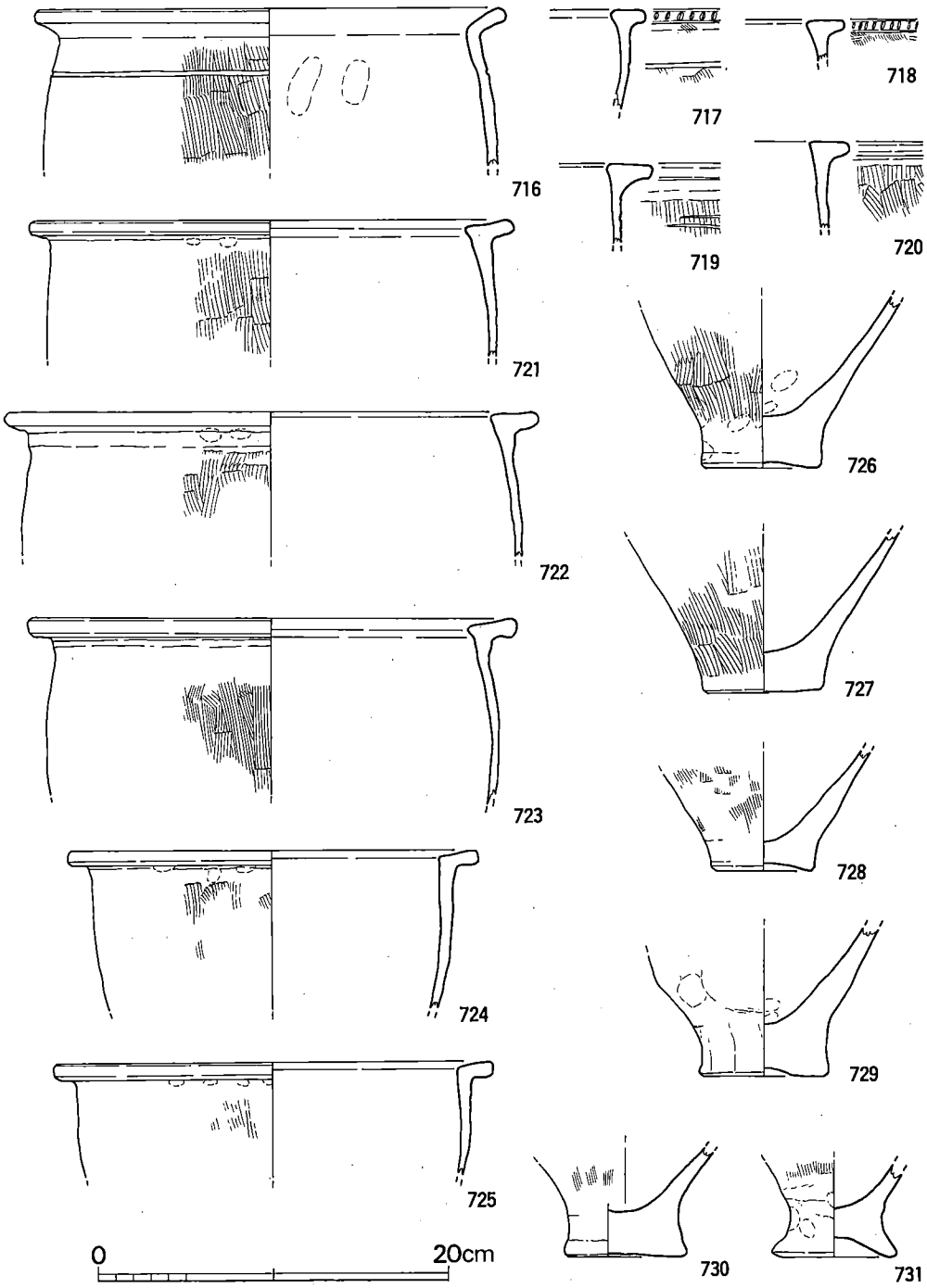
118号貯蔵穴の南壁を切った状態で検出された竪穴である。底面形は隅丸方形で，断面は逆台形状を呈している。規模は長径121cm，短径116cm，深さ60cmを測る。出土遺物としては，壺・甕・蓋・高杯等の弥生土器片が多数出土した。また，用途・性格は不明であるが，飯蛸壺を思わせる土製品が出土している。

出土遺物（図版50－１，第36・88・89図）

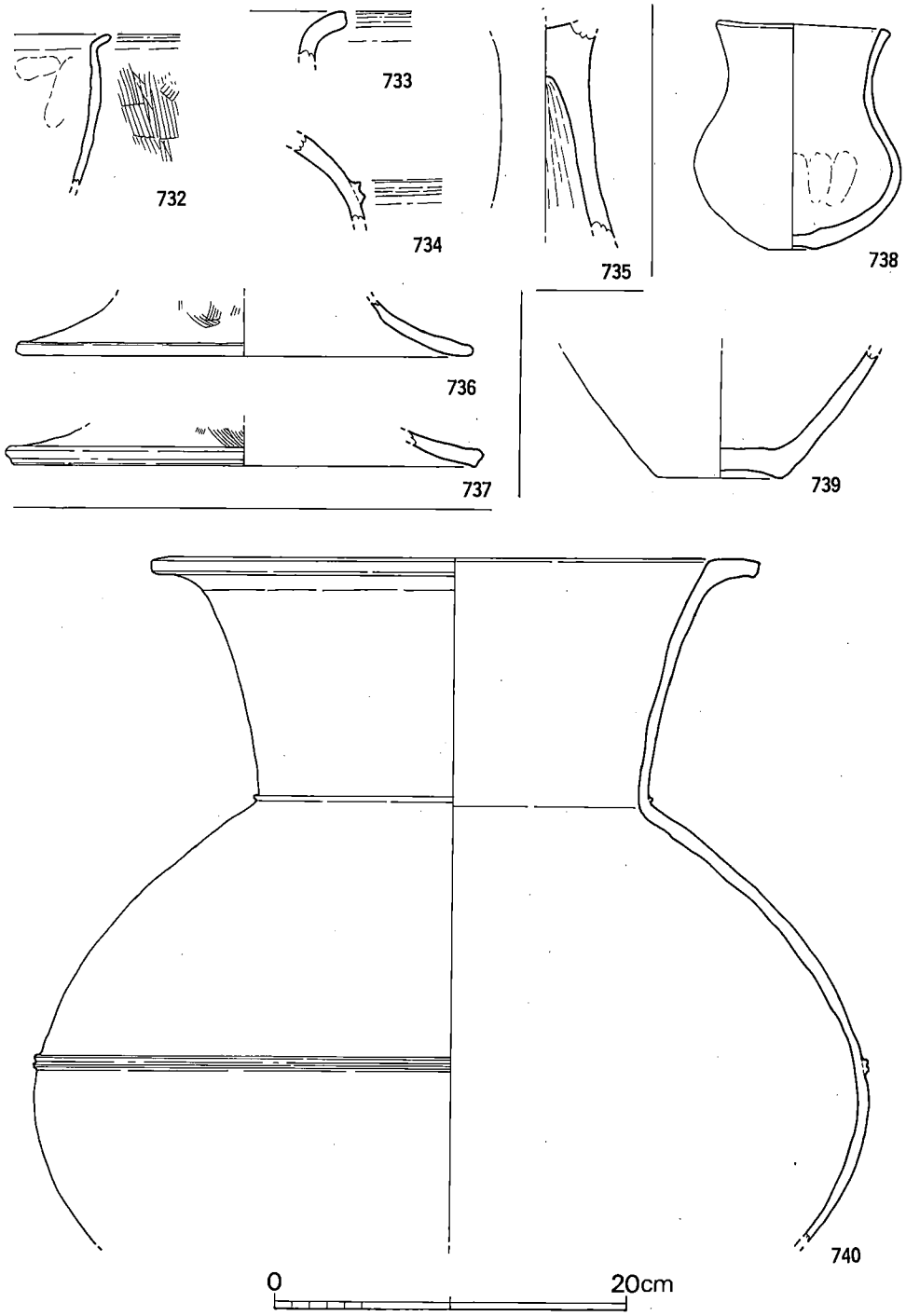
**甕**（716～732）　口縁部の形状により，如意形口縁（716・732），逆Ｌ字状口縁（717～720・722・724・725），Ｔ字状口縁（721・723）の３つのタイプに分けられる。716・717の口縁下には１条，719には２条の沈線がめぐり，718と719の口縁端部には刻目が施されている。調整は，胴部外面が刷毛，内面はナデ，口縁部内外はヨコナデで仕上げている。718の口縁部上面はさらにヘラ磨きしている。721・722・724・725の口縁下には口縁部成形時の指頭圧痕が残っている。いづれも破片資料であるが，復原口径のわかるものは716が27cm，721が27.6cm，722が30.5cm，723が28cm，724が23.4cm，725が25.2cmを測る。726～731は底部付近の資料で，726・727・729・730は底の器肉が厚い底部で，731は脚台状をなす底部である。調整は，729が外面ナデ，728が刷毛のあとナデの他は，全て刷毛調整で，内面はいづれもナデ仕上げである。また，さらに底部外面はヨコナデして仕上げている。底径は726・727が6.9cm，728が5.9cm，729が7.4cm，730・731が7.1cmを測る。色調は726・729・731が橙色で，他は肌色を呈している。

**壺**（733・734）　733は強く外反した単口縁の壺の口縁部小片，734は胴部にＭ字状凸帯がめぐる壺の肩部付近の小破片である。734の外面は丁寧なヨコヘラ磨き，内面はナデで仕上げた焼成良好な作りの良い土器である。

**蓋**（736・737）　裾部付近の破片資料で，体部外面刷毛のあとナデ，内面はナデ，裾部内外




**第 88 図**　119号貯蔵穴出土土器実測図(1/4)




**第 89 図**　119･120号貯蔵穴出土土器実測図(1/4)

はヨコナデしている。736の体部内面の一部に煤の付着がみられる。復原口径は736が26cm，737が27.2cmを測り，色調は736が褐色，737が淡橙色を呈す。

**高杯**（735）　柱状部の資料で，外面を丁寧なタテヘラ磨き，内面はナデて仕上げた淡橙色の焼成良好な高杯である。

**土製品**（第36図５）　丸底で筒状をなす土製品である。口縁端部に２個の小孔が焼成前に，底部付近には焼成後に小孔が１個穿たれている。口径は外径で3.7cm，内径で2.4cm，器高９cmを測る。内外ともナデ調整で仕上げた焼成良好な土製品である。内径が2.4cmと小さいので若干疑問は残るが，形状などからして飯蛸壺の可能性はあるだろう。

## 120号貯蔵穴（第90図）

発掘区南東端部から検出された小形の袋状竪穴で，規模は長径117cm，短径114cm，深さ43cmを測る。底面形は円形を呈し，西壁側の床面にはピットが穿たれている。

出土遺物（図版46・49，第14・24・89図）

**壺**（738～740）　738は扁球形の胴部に立ち気味に外反する短口縁がつく小形壺で，底部は凹み底である。調整は胴部内面をナデ仕上げの他は，ナデ調整のあと全面を丁寧にヨコヘラ磨きで仕上げた黄褐色を呈す焼成良好な作りの良い土器である。復原口径9.9cm，器高12.4～12.7cm，胴部最大径11.8cmを測る。739は底部付近の破片資料で，底部は上げ底である。調整は胴部内外をヘラ磨き，内外底部はナデて仕上げている。復原底径は7.3cmで，色調は暗茶色を呈す。740は鋤先状口縁の大形壺で，復原口径34.3cm，胴部最大径46.8cm，残存器高39cmを測る。頸部下には１条の小さな三角凸帯，胴部にはM字状凸帯がめぐっている。調整は外面を丁寧なヨコヘラ磨き，頸部内面はナデのあとヨコヘラ磨きの仕上げである。胴部内面はナデ調整で，各所に指頭圧痕を残している。色調は乳白色を呈し，胎土・焼成とも良好で，器肉も薄く作りの良い土器である。

**土製品**（第24図26）　土器片を方形に形成途中の土製品で，一部未調整部分を残している。また，中央部の穿孔も途中である。長径5.5cm，短径4.6cm，厚さ0.8cmを測る。

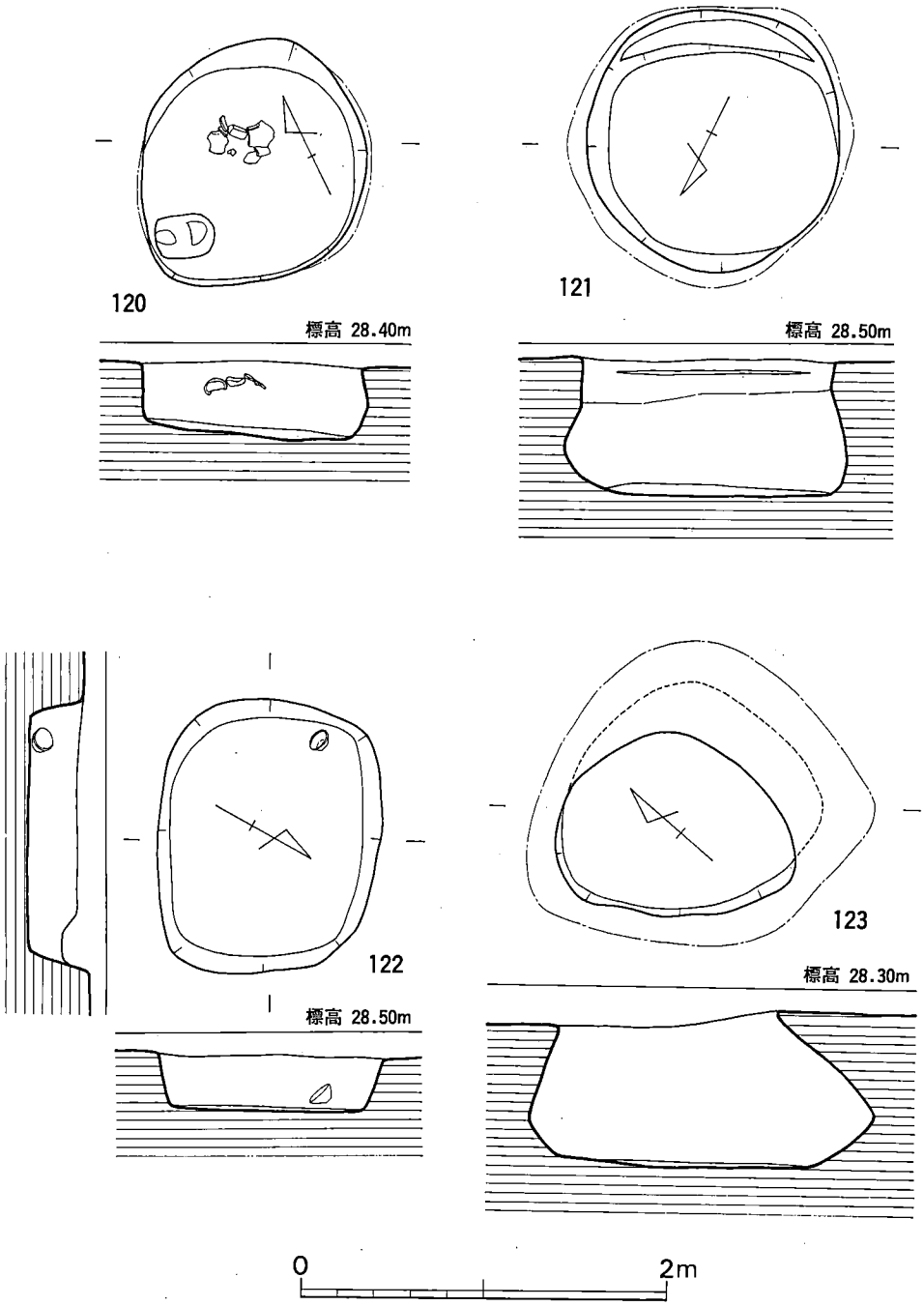
**磨製石鏃**（第14図５）　基部の抉りが小さい二等辺三角形の磨製石鏃で，刃部に刃こぼれがみられる。長さ3.2cm，基部幅２cm，厚さ３mmを測る。石質は粘板岩である。

## 121号貯蔵穴（第90図）

120号貯蔵穴の北側から検出された小形の袋状竪穴である。底面形は楕円形を呈し，南壁側にはテラスがある。埋土中から甕・壺等の弥生土器多数と無文土器片が若干出土した。

出土遺物（図版47・50，第91図）

**甕**（741～749）　口縁部の形状により２つのタイプに分かれる。如意形口縁の甕（741～743・




**第 90 図**　120～123号貯蔵穴実測図(1/40)

745)，逆L字状口縁の甕（744・746）である。741の口縁下には1条の三角凸帯が貼付され，口縁端部とともに刻目が施されている。742・745の口縁端部にも刻目がある。調整は，胴部外面が刷毛，内面はナデ，口縁部内外はヨコナデで仕上げている。741は完形品で，口径は24.3cm，器高25cm，底径7.2cmを測る。他は破片資料で，復原口径は742が17.6cm，743が30.1cm，744が28.1cmを測る。色調は741が赤褐色，742・745・746が暗茶褐色，743が茶褐色，744が黄褐色を呈す。741～743の胴部外面上半には著しい煤の付着がみられ，742は内面にも付着している。747・748は胴部下半，749は底部付近の破片資料である。復原底径は747が7.5cm，748が7cm，749が7.6cmで，748は凹み底である。調整は胴部外面が刷毛，内面はナデ，底部外面を748が指頭によるナデ，749はヨコナデ，外底部は748がナデ仕上げで，747は削り状の擦過のあとナデ調整，749は擦過のままである。747・748の胴部外面には煤が付着している。色調は747・749が暗茶褐色，748は茶褐色を呈し，焼成も良好である。

**壺**（750）　外面を肥厚させた有段状口縁壺の口頸部破片で，復原口径19.2cmを測る。調整は器面の風化が著しく不明である。色調は淡黄褐色を呈す。

**無文土器**（751～753）　いづれも棒状をなす朝鮮系無文土器の剝離した口縁部破片である。752・753の外面には口縁部成形時の指頭圧痕が残っている。色調は751が暗灰色，752が明褐色，753が暗褐色を呈し，胎土・焼成とも良好である。

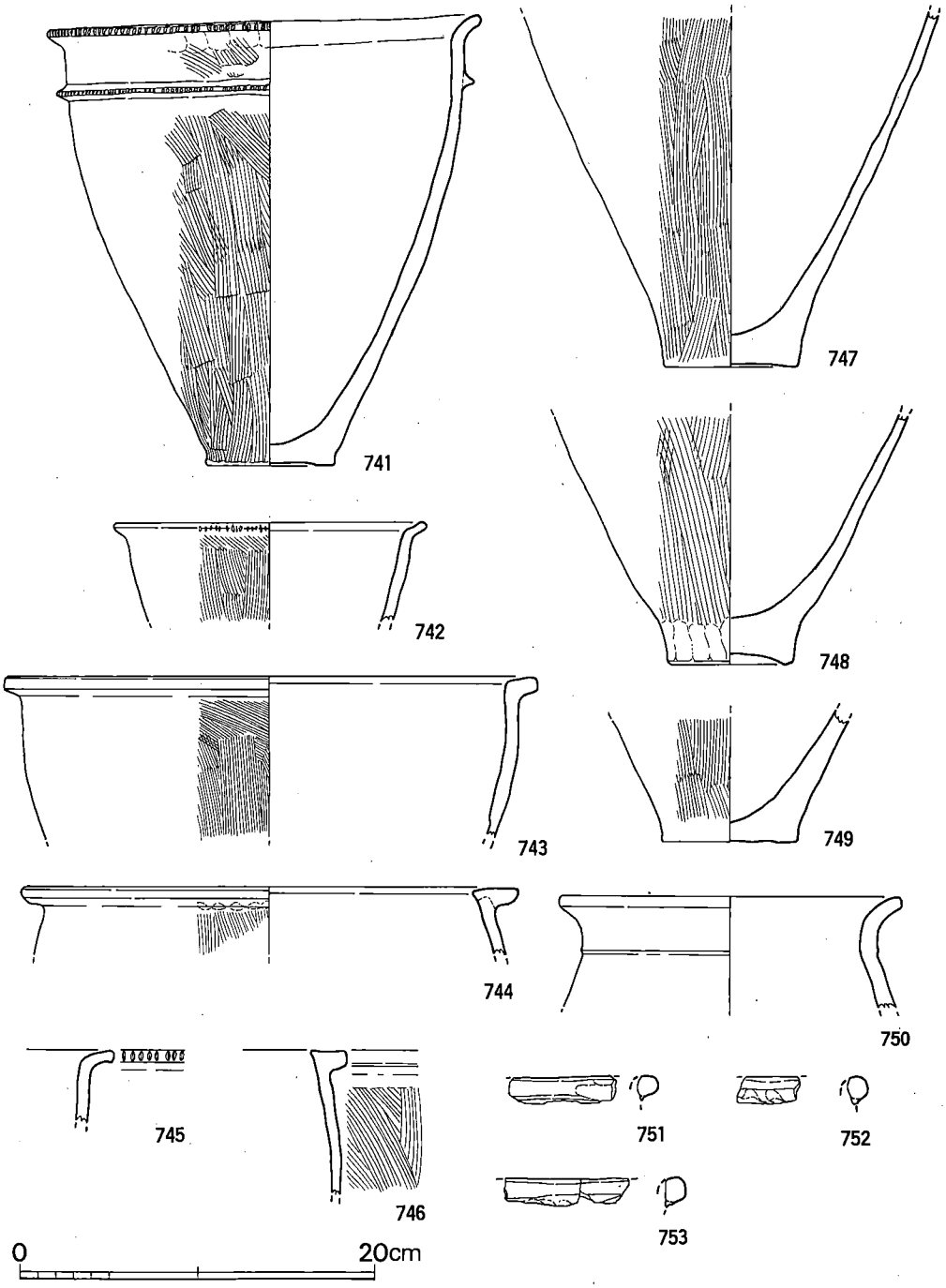
## 122号貯蔵穴（第90図）

121号貯蔵穴の北西から検出された底面形が隅丸長方形を呈す小竪穴である。規模は長径130cm，短径106cm，深さ30cmを測り，断面は逆台形状を呈す。床面からは小形壺をはじめ，壺・甕等の土器片が数点出土した。

出土遺物（図版50，第36・92図）

**甕**（754～758）　754・755は口縁部付近，756～758は底部付近の破片資料である。754は如意形口縁の甕で，口縁下には1条の三角凸帯がめぐっている。口縁と凸帯端部には刻目が施されている。755は逆L字状口縁の甕で，口縁下には凸帯がめぐるものと思われる。756は脚台状をなす底部で，外底は凹み底である。757・758は平底で，復原底径は757が8.8cmを測り，758は10.8cmと大きい底部である。調整は外面が刷毛，内面はナデ，外底部はナデ仕上げのもの(756)と削り状擦過のあとナデで仕上げたもの（757・758）がある。

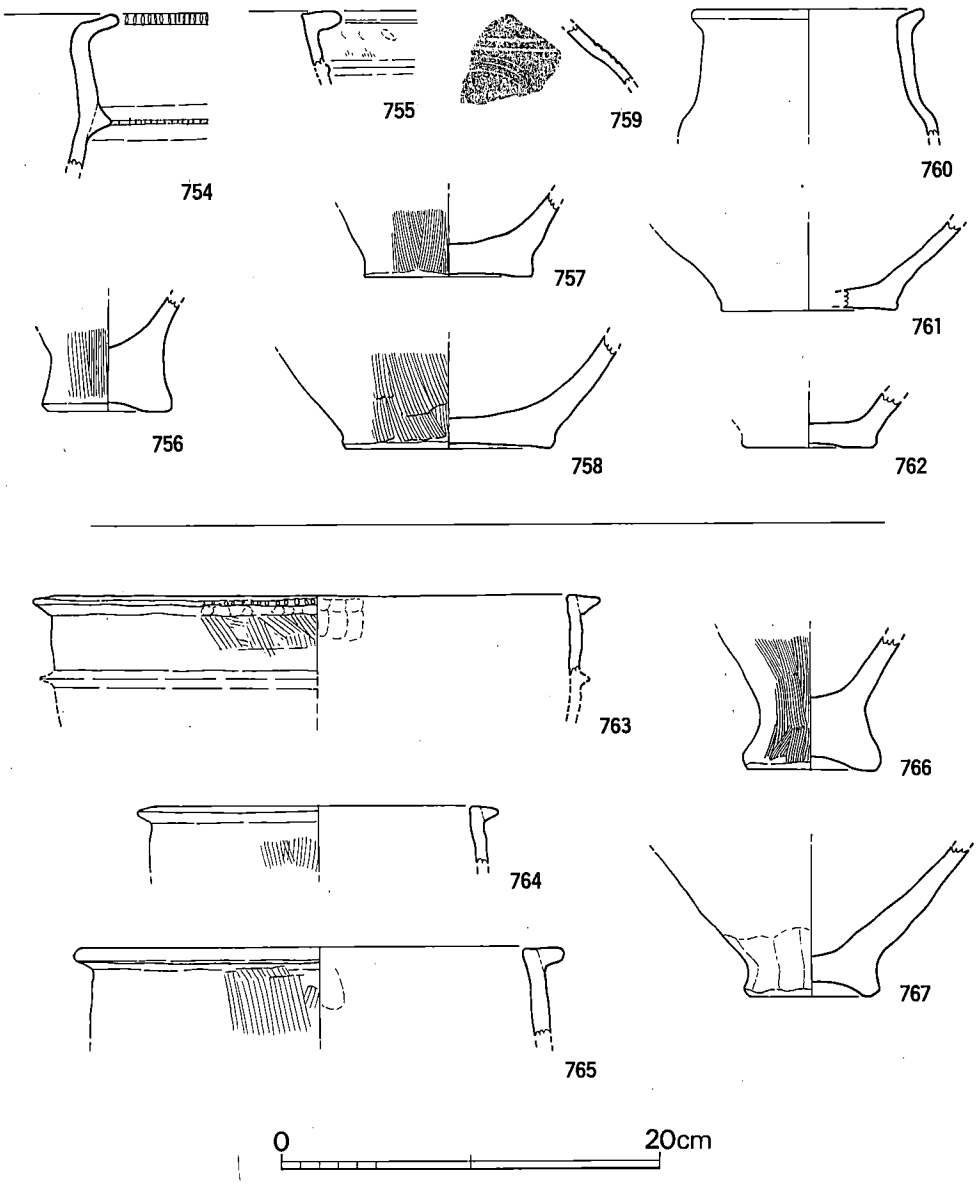
**壺**（759～762）　759は肩部付近の小破片で，2条の平行沈線とその下に三重のヘラ描き弧文がみられる。760は小形壺の口頸部破片で，復原口径12.4cmを測る。調整は頸部外面をヨコヘラ磨き，内面をナデ，口縁部内外はヨコナデで仕上げている。色調は淡茶褐色を呈す。761・762は底部付近の破片で，底径は761が9.3cm，762が7.1cmを測る。調整は761が体部内外をヘラ磨き，762はナデ，外底部は削り状擦過のあとナデた762とヘラ磨きした761がある。色調はい




**第 91 図**　121号貯蔵穴出土土器実測図(1/4)

づれも暗茶褐色で焼成も良好である。

**紡錘車**（第36図３）　土製の紡錘車で，径41.3～41.5㎜，厚さ14.5㎜，重さ32.1ｇを測る。




**第 92 図**　122･123号貯蔵穴出土土器実測図(1/4)

## 123号貯蔵穴（図版39－1，第90図）

190号住居跡の床面下から検出された袋状竪穴である。断面の袋状は，特に東壁側の刳りが強い。底面形は不整円形を呈し，規模は長径132cm，短径124cm，深さ88cmを測る。遺物は少量の弥生土器破片が出土しただけである。

出土遺物（図版50－1，第36・92図）

**甕**（763～767）　763～765は口縁端部に三角凸帯がめぐる甕で，763の口縁下には凸帯が付くタイプと思われる。胴部外面は刷毛，内面はナデ，口縁部内外はヨコナデ調整である。復原口径は763が29.9cm，764が18.1cm，765が25.9cmを測る。色調は763・765が赤褐色，764が暗褐色を呈す。766・767は底部付近の破片である。766は脚台状，767は凹み底の底部である。調整は766が外面刷毛，内外底部ナデ仕上げで，767は内外とも全てナデで仕上げている。

**紡錘車**（第36図4）　径41.8mm，厚さ13mm，重さ29ｇを測る土製紡錘車で，側面には2条の平行沈線がめぐっている。

## 124号貯蔵穴（図版39－1，第93図）

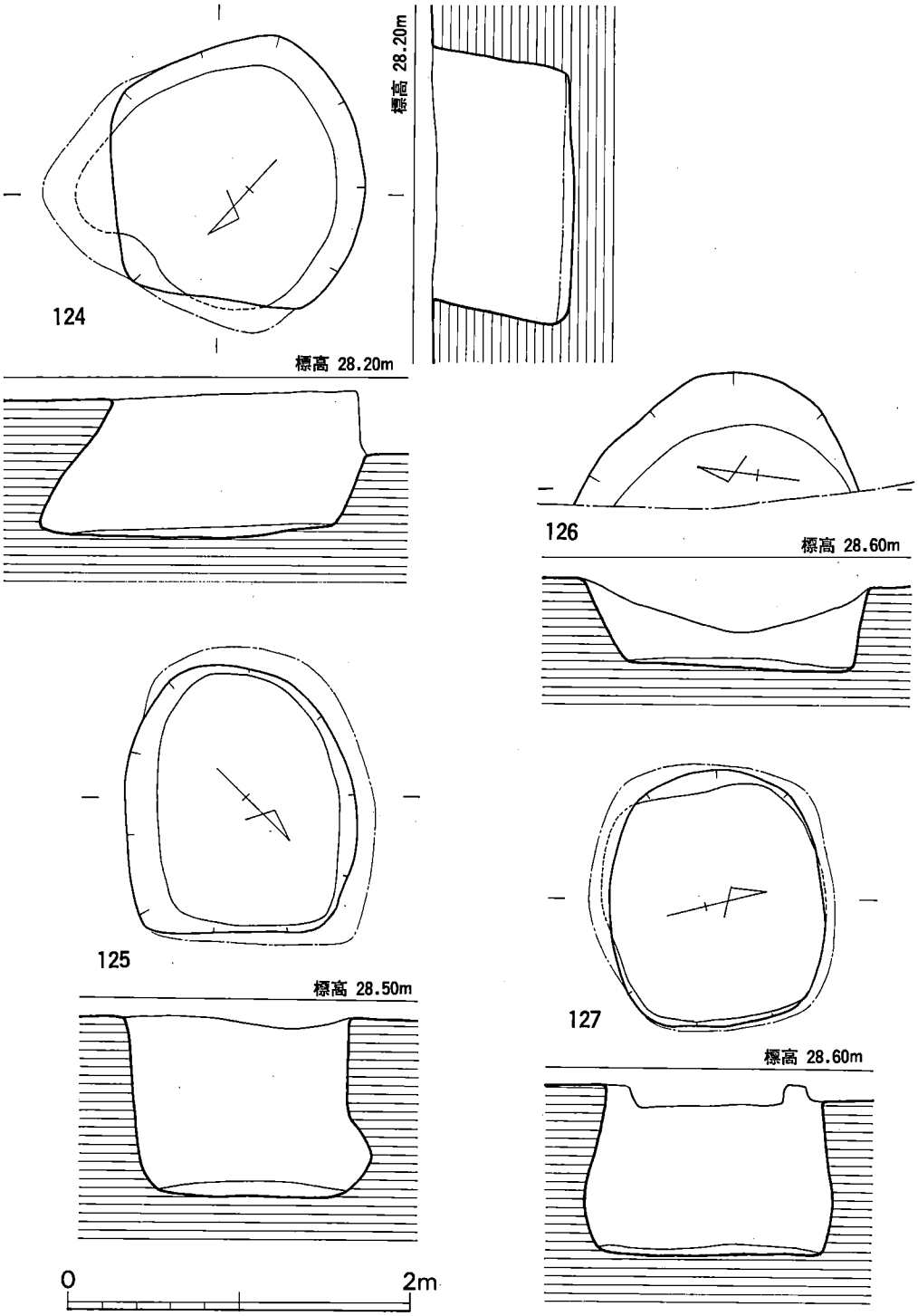
123号と同様，190号住居跡の床面下から検出された袋状竪穴である。北壁と東壁側の刳りは強いが，西壁と南壁は上面の崩壊もあって直立気味に外反している。底面形は不整円形で，規模は長径152cm，短径145cm，深さ80cmを測る。遺物は壺・甕・甑など多数の弥生土器が出土した。

出土遺物（図版47，第94図）

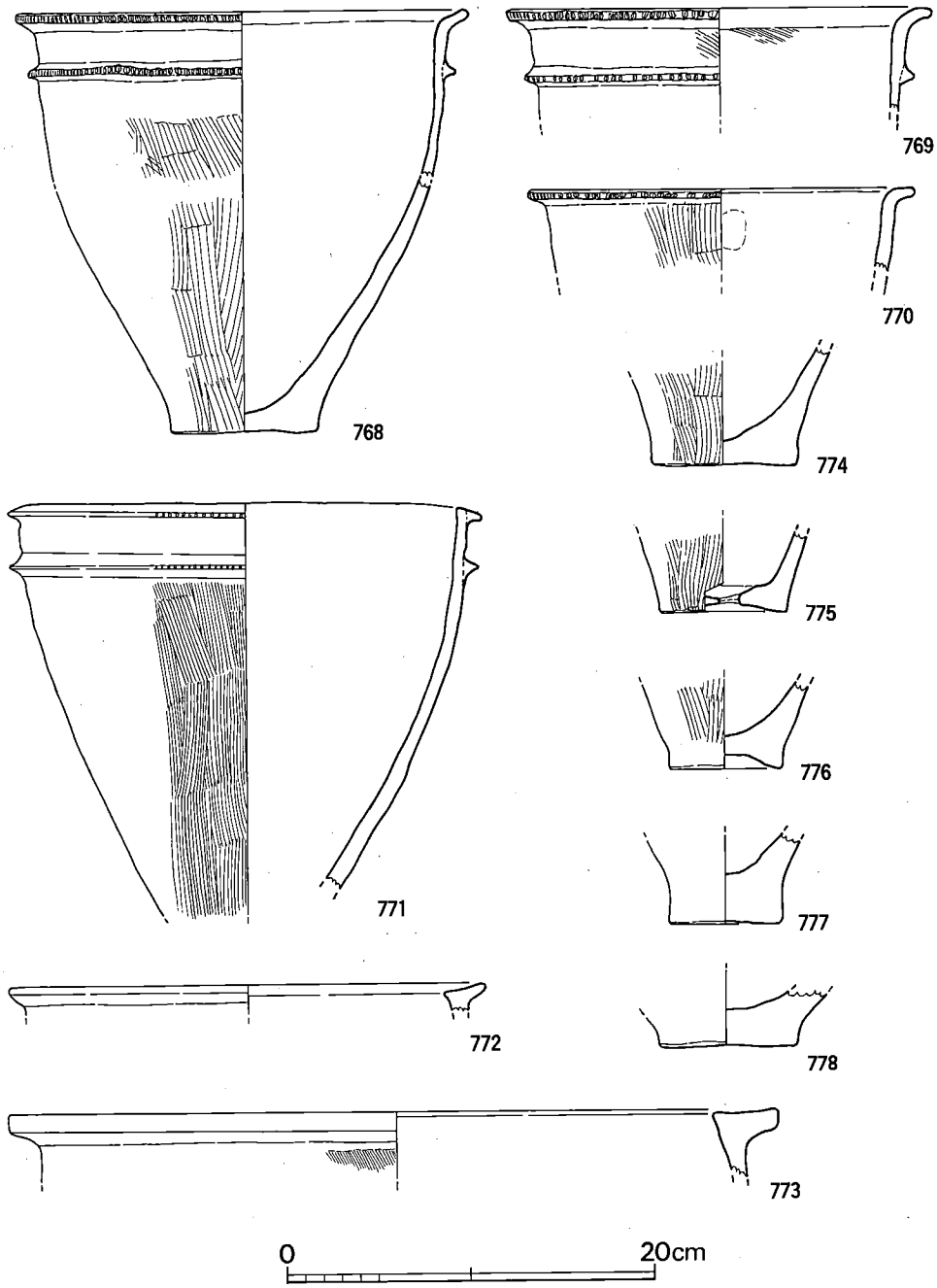
**甕**（768～774・776・777）　口縁部の形状により4タイプに分かれる。768～770のような如意形口縁のもの，771のように口縁端部に三角凸帯をめぐらすもの，772のようにT字状口縁のもの，773のように逆L字状口縁のものなどである。768・769・771は口縁下に1条の三角凸帯が貼付されていて，口縁端部とともに刻目が施されている。調整は胴部外面刷毛，内面ナデ，口縁部内外はヨコナデである。768は復原口径24.5cm，器高22.8cm，底径8cmを測る。773は大形甕で，復原口径は42cmを測る。768・770・771の胴部外面には煤の付着がみられる。色調は768・771が茶褐色，769・773が赤褐色，770が黒褐色，772が淡灰褐色を呈す。774・776・777は底部付近の資料で，776は凹み底である。底径は774が7.9cm，776・777が6.1cmを測る。

**甑**（775）　底部付近の資料で，底部は焼成後に穿孔されている。調整は体部外面刷毛，内面ナデ仕上げである。色調は明褐色で，胎土・焼成とも良好である。

**壺**（778）　底部資料で，内外ともナデで仕上げている。底径は7.6cmを測る。




第 93 図　124～127号貯蔵穴実測図(1/40)




**第 94 図**　124号貯蔵穴出土土器実測図(1/4)

## 125号貯蔵穴（図版39－1，第93図）

124号貯蔵穴の北西に隣接して検出された袋状竪穴である。底面形は胴張りの隅丸長方形を呈し，規模は長径147cm，短径107cm，深さ103cmを測る。遺物は壺・甕等の弥生土器が多数出土した。

出土遺物（図版47・51，第24・95図）

**甕**（779～790）　大きく3タイプがある。如意形口縁の甕（780・781），口縁端部に三角凸帯をめぐらした甕（779・782～785），逆L字状口縁の甕（786）である。780の口縁下には2条の平行沈線，779・783～785の口縁下には1条の三角凸帯がめぐっている。口縁部と凸帯端部にはいづれも刻目が施されている。調整は胴部外面刷毛，内面ナデ，口縁部をヨコナデで仕上げている。779は完形品で，口径26.5cm，器高27.1～29.1cm，底径8cmを測る。口縁部内面には口縁成形時の指頭圧痕が残っている。780～786は破片資料で，復原口径のわかるものとしては782が21cm，783が25.5cm，784が23.5cm，785が30.2cm，786が30cmを測る。779の胴部外面上半には煤の付着がみられる。787～790は底部付近の資料で，底径は787が8.8cm，788が9.6cmと大きく，789は6.6cm，790は7.3cmと小さく底面の器肉が厚い底部である。790は脚台状底部を思わせる。787・788の調整は体部外面が刷毛，内面はナデのあと粗いヘラ磨き，外底部はナデ仕上げである。789と790の調整は外面刷毛，内面と外底部はナデで，底部外面はさらにヨコナデで仕上げている。

**壺**（791）　立ち気味の頸部に強く外反する口縁がつく小形の壺で，復原口径は16.5cmを測る。頸部内面は指ナデのあと部分的にヨコヘラ磨き，口縁部内面から頸部外面はヨコナデ，頸部下端はさらにヨコヘラ磨きをしている。色調は淡橙色を呈し，焼成も良好である。

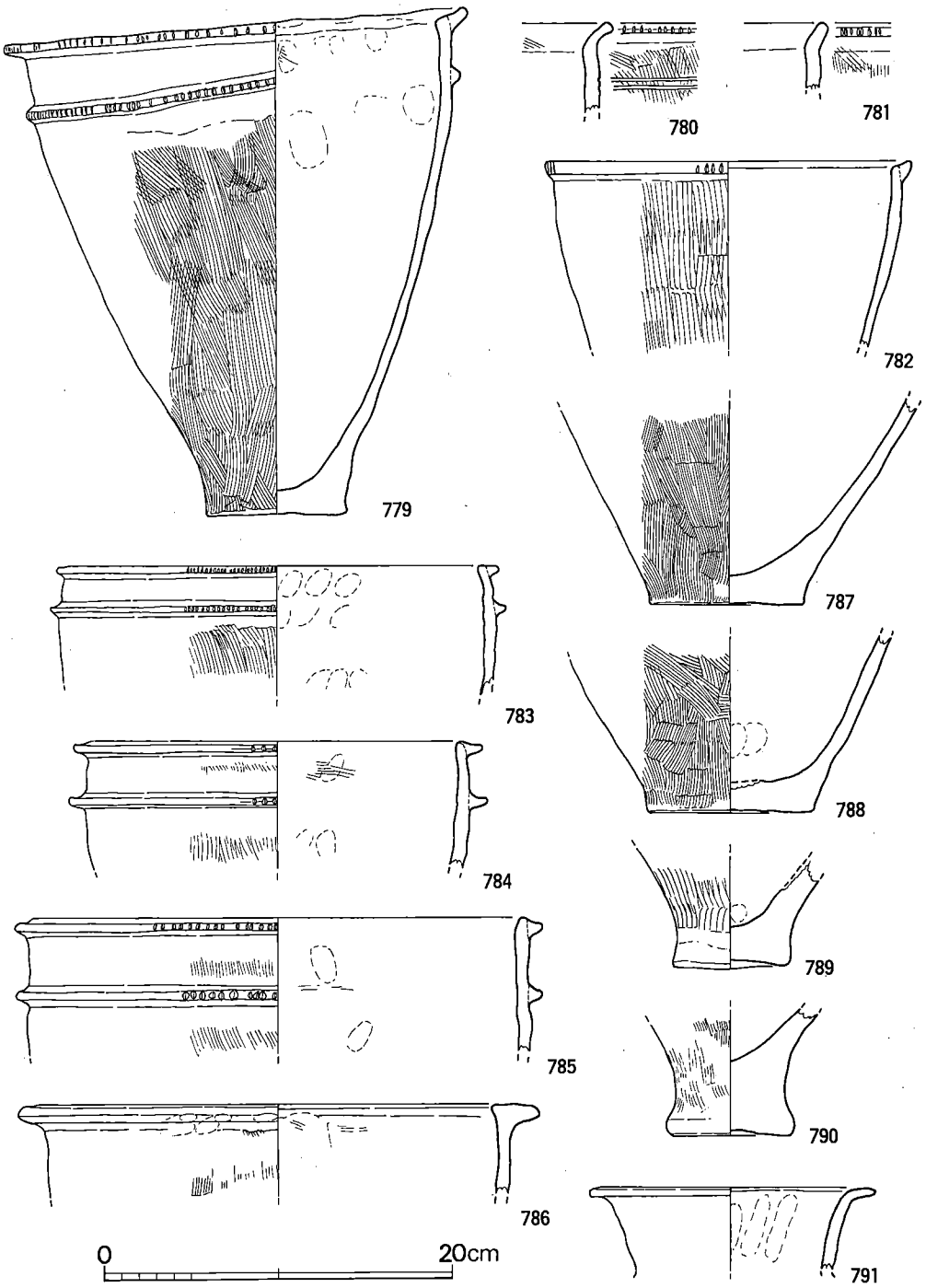
**円盤状土器片**（第24図27・28）　27は左右と上面に小さな抉り部分があり磨滅している。28はほぼ方形に形成された土製品で，左側面と上端部に小さな抉りがある。

## 126号貯蔵穴（第93図）

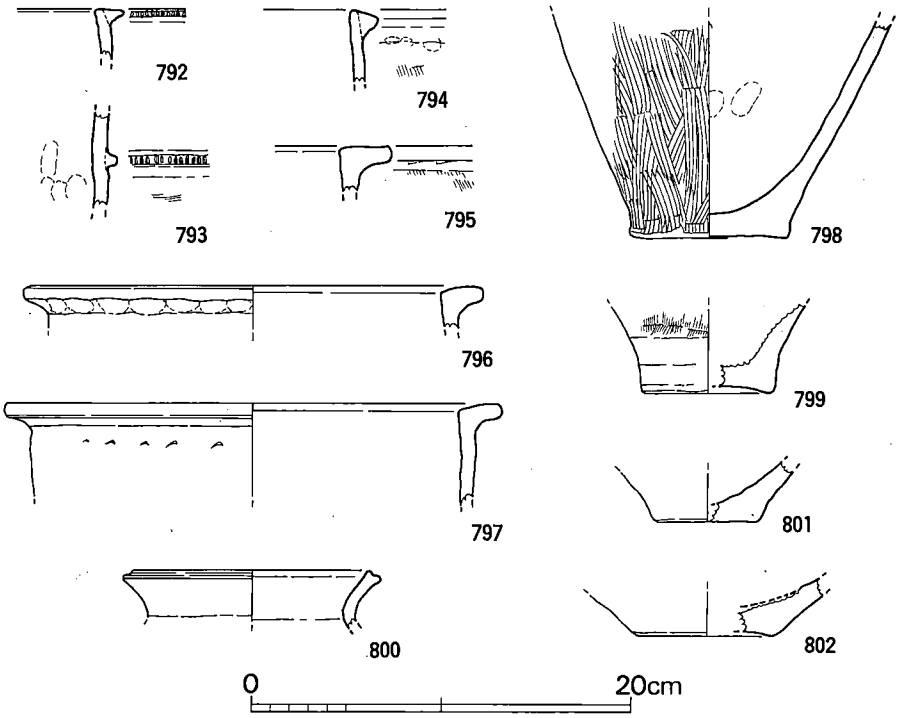
96号貯蔵穴の南西にあって，東壁側の一部を発掘しただけで，その大半は区域外のため未掘の竪穴である。断面は逆台形状で，規模は確認した東西径138cm，深さ54cmを測る。

出土遺物（図版47，第96図）

**甕**（792～799）　792と794は口縁端部に三角凸帯をめぐらす甕で，795～797は逆L字状口縁の甕である。793は口縁下に1条の三角凸帯がめぐる甕の小片で，口縁部は792と同様と思われる。口径のわかるものとしては796が24.3cm，797が26.3cmで，いづれも復原値である。798は胴部下半の資料で，胴部外面は刷毛，内面はナデのあと部分的にヘラ磨きで仕上げている。胴部外面の一部に煤の付着がみられる。色調は肌色を呈し，焼成良好である。底径は8.3cmを測る。




**第 95 図**　125号貯蔵穴出土土器実測図(1/4)




**第 96 図**　126号貯蔵穴出土土器実測図(1/4)

799は底部付近の破片で，復原底径７cmを測る。

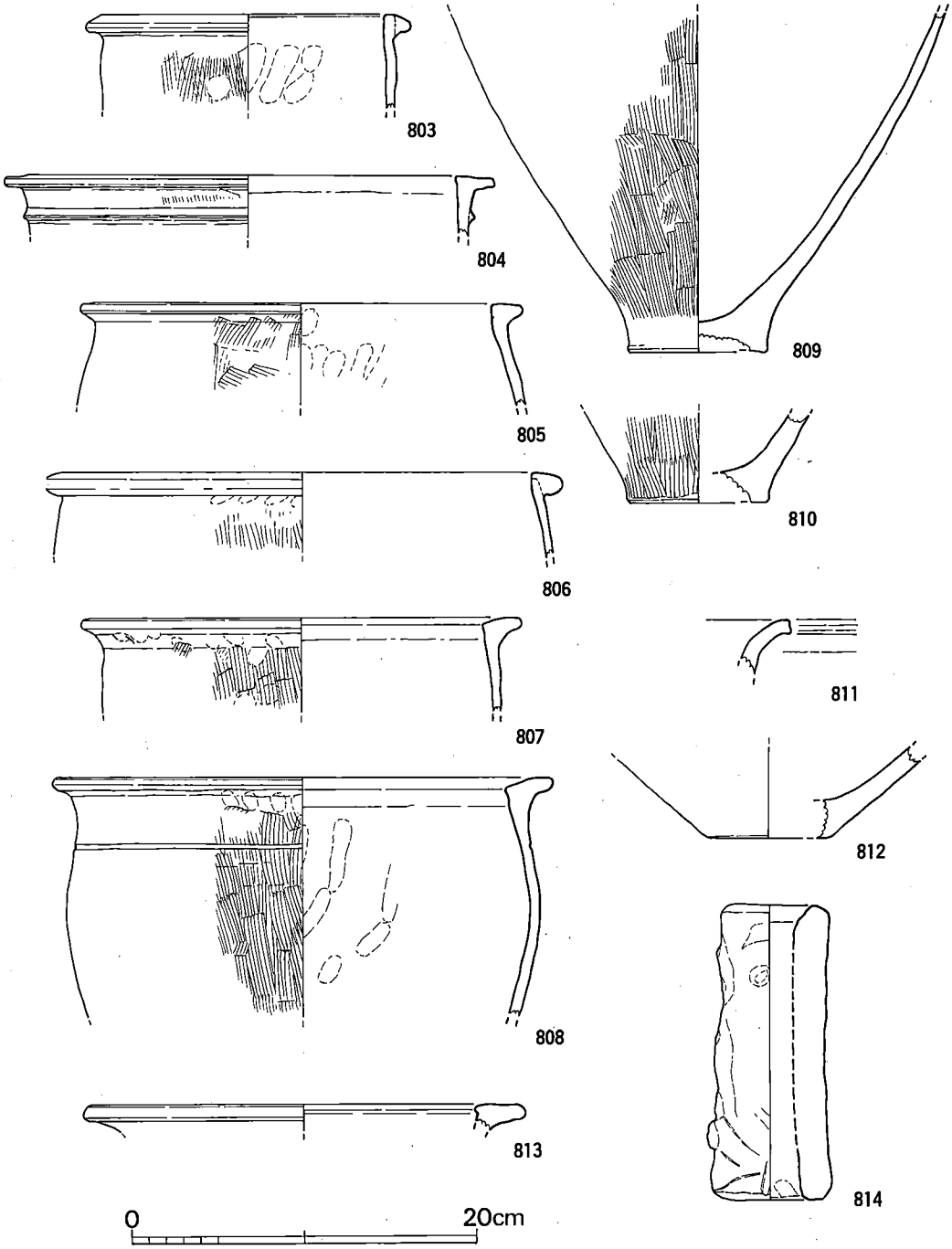
**壺**（800～802）　800はく字状口縁の小形壺で，復原口径は13.7cmを測る。口縁部内外はヨコナデ仕上げで，端部外面は凹線状をなしている。色調は肌色を呈す。801・802は底部破片で，調整は801は内外ともナデのあとヘラ磨き，802は外面ヘラ磨きで仕上げている。外底部は801が削り状の擦過，802はナデ調整である。色調は801が暗茶灰色，802が暗茶灰褐色である。

## 127号貯蔵穴（第93図）

126号貯蔵穴の南側から検出された小形の竪穴で，断面の刳りは弱いが袋状を呈す。底面形は胴張りの隅丸方形で，規模は長径135cm，短径130cm，深さ99cmを測る。遺物は壺・甕・支脚等の土器片が多数出土した。

出土遺物（第97図）

**甕**（803～810）　803・806は口縁端部に三角凸帯をめぐらした甕，804・805・807・808は逆Ｌ字状口縁の甕である。804は口縁下に１条の三角凸帯，808は１条の沈線がめぐっている。胴部外面の調整は刷毛，内面ナデ，口縁部内外はヨコナデで，803・805・808の内面には指頭ナデ圧痕が顕著に残っている。また，口縁下にも成形時の指頭圧痕がみられる。いづれも破片資




**第 97 図**　127号貯蔵穴出土土器実測図(1/4)

料であるが，復原口径は803が18.8cm，804が28.3cm，805が25.6cm，806が29.9cm，807が25.5cm，808が29cmを測る。色調は803・804・806・807が肌色，805が暗茶灰色，808が暗茶灰褐色を呈し，焼成も良好である。809は胴部下半の破片資料で，胴部外面は刷毛調整，内面と外底部はナデで，底部外面はさらにヨコナデして仕上げている。内底部には炭化物の付着がある。810は底部付近の破片で，復原底径は8.1cmを測る。色調は809・810とも暗茶灰色である。

**壺**（811～813）　811・813は口縁部破片で，813は鋤先状口縁の壺である。復原口径は25.5cmを測り，色調は淡い橙色である。812は底部付近の破片で，外面はヘラ磨き，内面はナデて仕上げている。色調は暗灰色で，焼成も良好である。復原底径は７cmである。

**支脚**（814）　器肉の厚い筒状の支脚で，器高17.2cm，上端幅6.2cm，下端幅6.8cmを測る。内外とも指頭ナデにより仕上げた粗雑な土器である。色調は肌色で，焼成良好である。（井上）

## 128号貯蔵穴（図版39－２，第98図）

127号貯蔵穴の東側に位置する。底部平面形114×110cmの不整円形をなし，壁は外に開く。残存する深さ38cm。遺物は少量の土器が出土している。

出土遺物（第99図）

**甕**（815）　口縁外に粘土帯をめぐらし，逆Ｌ字状に近い口縁としたもので，口縁下での剝離が明瞭である。復原口縁内径30cm。

**壺**（816）　外反する頸部から口縁にかけての破片で，端部は面をなし凹線がめぐる。復原口径27.1cm。

## 129号貯蔵穴（図版39－２，第98図）

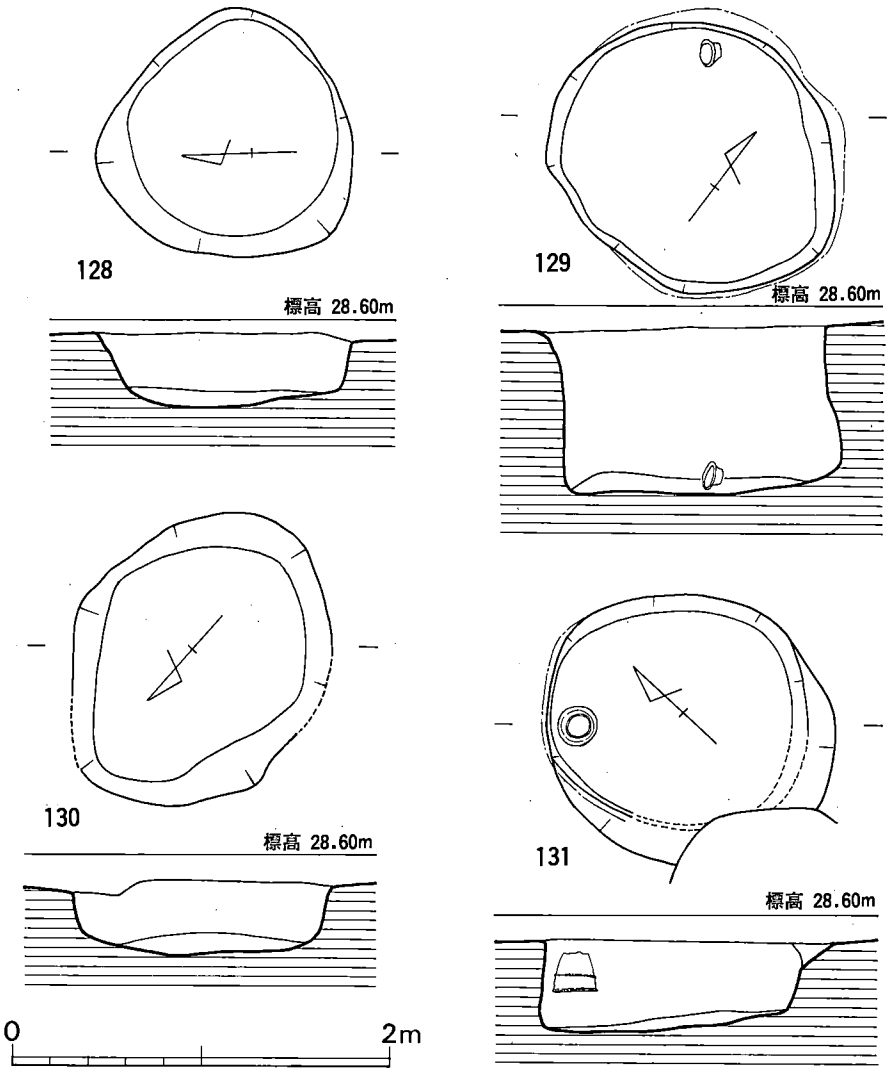
128号貯蔵穴の南側にあり，130号貯蔵穴により切られている。底面形は147×130cmの不整円形をなし，壁は内傾気味に立ち上る。深さ87cm。床面北側に，土器（825）が出土している。

出土遺物（図版47，第99図）

**甕**（817～823）　817・818は，如意形に口縁が外反し，端部に刻目がある。817は，口縁下3.3cmに刻目凸帯をめぐらす。口径24.1cm。820は，口縁外と，口縁下５cmに断面三角形の凸帯を巡らせる。復原口径33.6cm。98号貯蔵穴626，101号貯蔵穴641と極めて類似する。821は，口縁外に断面カマボコ形に粘土帯を巡らせる。復原口径26.9cm。819は，口縁外と口縁下3.5cmに刻目凸帯を巡らす。822・823は底部片で，823は，くびれて高い。

**鉢**（825）　小形の鉢で，口縁はわずかに外反し，歪みがある。口縁下に部分的に１条の沈線を巡らせている。口径13.0cm，器高8.4cm。

**壺**（824）　鋤先状に近い断面の口縁部片で，内外面とも，丁寧に研磨される。



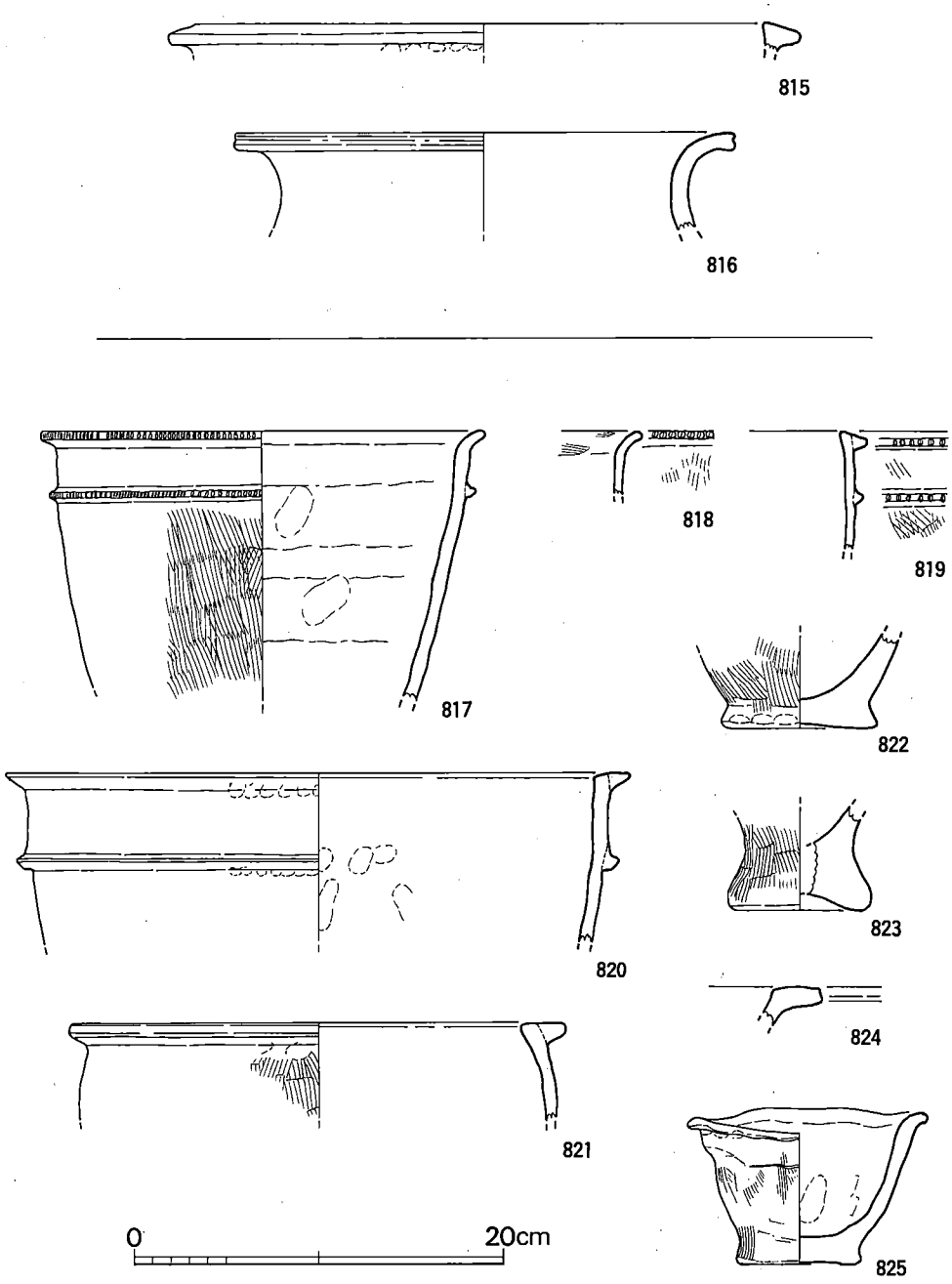

第 98 図　128～131号貯蔵穴実測図(1/40)

## 130号貯蔵穴（図版39－2，第98図）

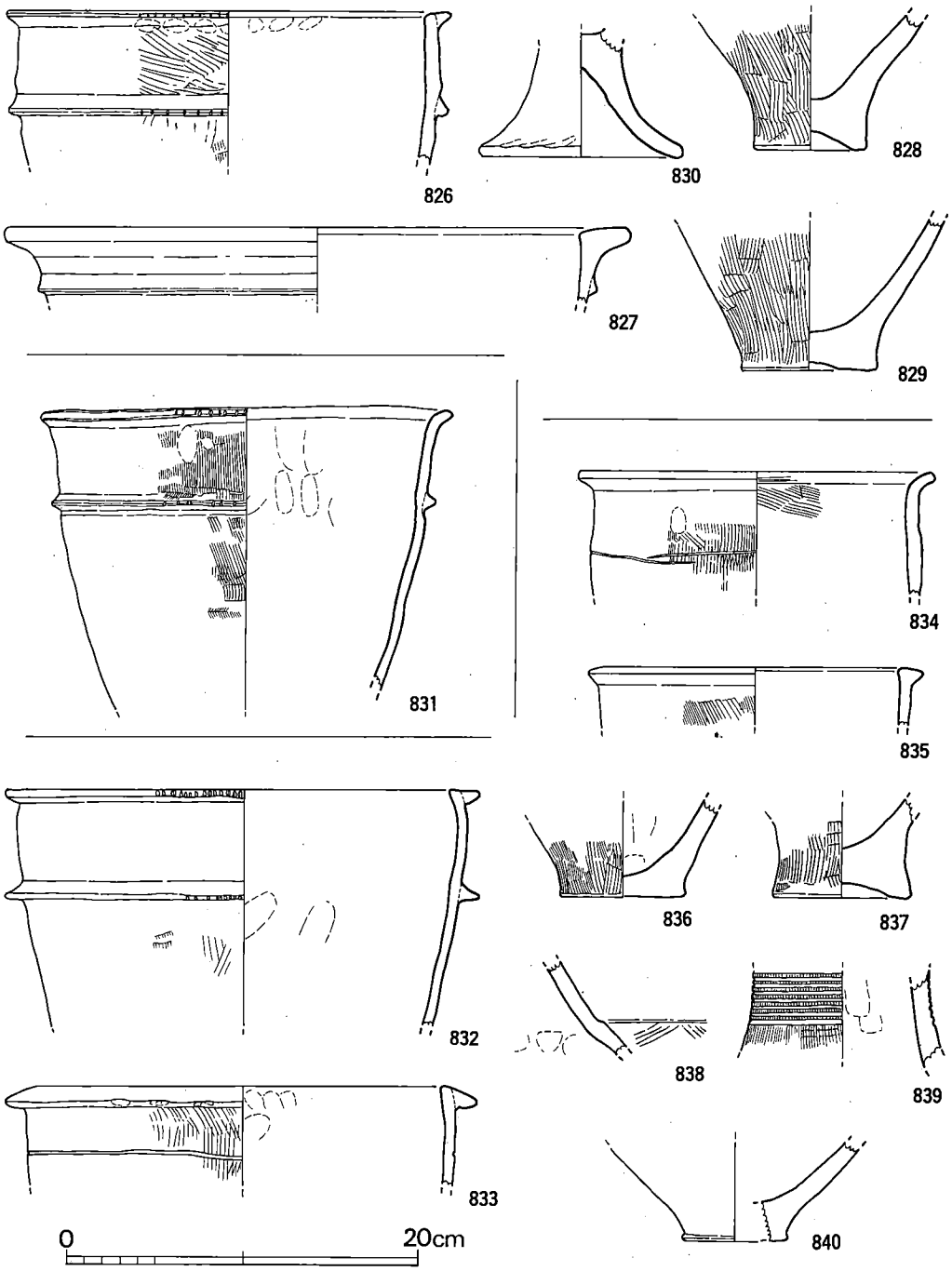
129号貯蔵穴の東側一部を切るが，浅いため，129号の床面までは達していない。底面形は，143×112cmの不整楕円形をなし，壁は外に開き40cmと浅い。遺物は，土器が出土している。

出土遺物（第100図）

**甕**（826～829）　826は，口縁外と口縁下5.5cmに断面三角形の凸帯をめぐらし，間隔のあいた小さな刻目をつける。外に粗い刷毛目が残る。復原口径25.2cm。827は，逆L字状口縁とし口縁直下に，断面三角形の凸帯をめぐらす。復原口縁内径29.8cm。828・829は，やや上底の底




**第 99 図**　128･129号貯蔵穴出土土器実測図(1/4)




**第 100 図**　130～132号貯蔵穴出土土器実測図(1/4)

部である。

**高杯**（830）　脚部片で，裾はハの字状に開く。脚高5.2cm。

## 131号貯蔵穴（図版39－２，第98図）

130号貯蔵穴の南側にあり，132号貯蔵穴に切られる。底部平面形は，127×120cmの円形をなし，壁は内傾して立ち上がる。深さ49cm。底部を欠く甕形土器が１点，床面から20cm程浮いて倒立の状態で出土している。

出土遺物（図版47，第100図）

**甕**（831）　如意形口縁をなし，端部に刻目があり，口縁下５cmに断面三角形の刻目のある凸帯を巡らす。口径23.4cm。残存高16cm。

## 132号貯蔵穴（図版39－２，第101図）

131号貯蔵穴を切る。底部平面形は，97×90cmの円形をなし，壁は袋状で最大径は145×126cmである。深さ73cm。遺物は，土器・サヌカイト製スクレーパー・サヌカイト剥片が出土している。

出土遺物（図版47・49，第14・100図）

**甕**（832～837）　832は，口縁外面と，口縁下６cmに断面三角形の凸帯をめぐらし，端部に刻目をつける。833は，口縁外に下り気味に断面三角形の粘土帯を巡らし，口縁下3.8cmに１条の沈線を巡らす。834は，口縁が短く外反し，口縁下4.5cmに１条の沈線を巡らす。復原口径は，832が27.0cm，833は26.8cm，834は20.2cm，835は18.8cmである。836は平底，837はやや上底の底部片である。

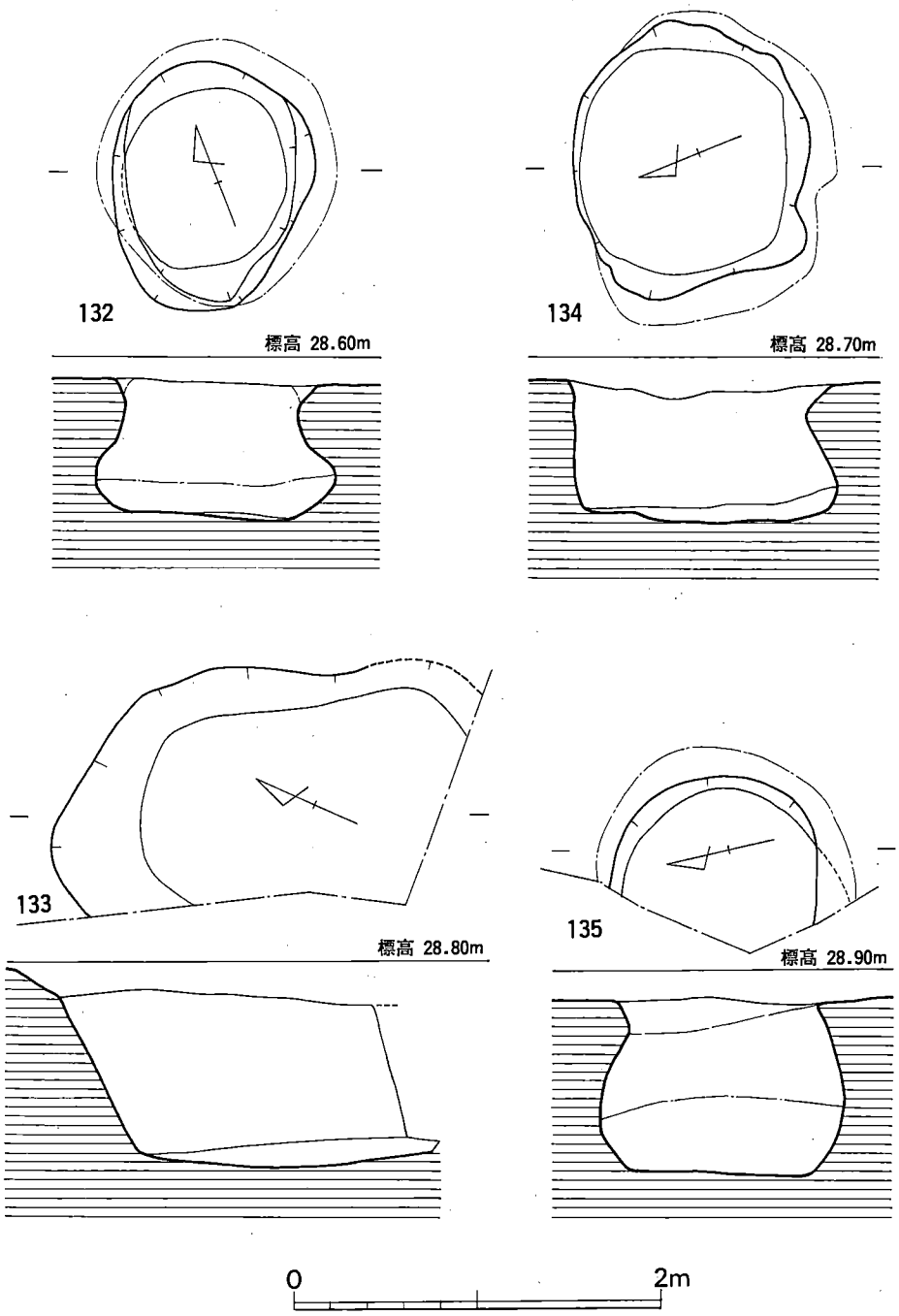
**壺**（838～840）　838は，頸部と肩部の境で段がつけられ，肩部に４本単位の鋸歯文を施す。839は頸部片で，地文に縦位の刷毛目を残し８本以上の沈線を密にめぐらせている。在地の土器ではなく，瀬戸内・豊前地方からの影響が考えられる土器である。840は底部片。

**スクレーパー**（図版49－６，第14図６）　横剥ぎのサヌカイト製で，木葉形をなす。打面と反対側を刃部とし，両側より刃部加工をする。

他に，サヌカイトの横剥ぎ剥片（6.5×3.5cm），縦剥ぎ剥片（５×3.5cm）と，刃部加工痕の認められる小片が出土している。

## 133号貯蔵穴（第101図）

12号住居跡・134号貯蔵穴の南にある。発掘区外に拡がるため全形は不明であるが，発掘部分よりすると，底部平面形は（140）×（115＋α）cmの胴張り隅丸長方形になると思われる。壁は，外に開き，深さは100cmである。遺物は土器が出土している。




**第 101 図**　132～135号貯蔵穴実測図(1/40)

出土遺物（第102図）

**甕**（841～852）　逆Ｌ字状の口縁を持つ。841・842は，口縁下に２条の沈線を巡らす。843～845は，口縁やや内傾し，Ｌ字状口縁の端部は丸まる。846・847は，口縁端は面をなし，口縁下に凸帯の剝離した痕跡がある。復原口縁内径は，841が18.4cm，842が24cm，843が24.8cm，844が24.4cm，845が22.1cm，846が27.6cm，847が27.9cmである。848～852はやや上底気味の底部片。848は，底部中央に焼成後の穿孔がある。

**鉢**（853）　外反する口縁内面に粘土帯を貼付し，鋤先状口縁とする。

**壺**（854・855）　854は，胴部にめぐる凸帯部分，855は底部片である。

**器台**（856）　下半部片で，外面に刷毛目痕が残る。底径10.4cm。

## 134号貯蔵穴（第101図）

16号住居跡の南側に接する。底部平面形は123×113cmの胴張り隅丸方形をなし，壁は袋状となる。深さ73cm。遺物は出土していない。

## 135号貯蔵穴（第101図）

16号住居跡の北側にある。発掘区境のため一部未発掘である。底部平面形は，100×(90＋α)cmで，円形になると思われる。壁は，袋状をなし，深さは95cmである。遺物は，土器と不明土製品・縄文土器片が出土している。

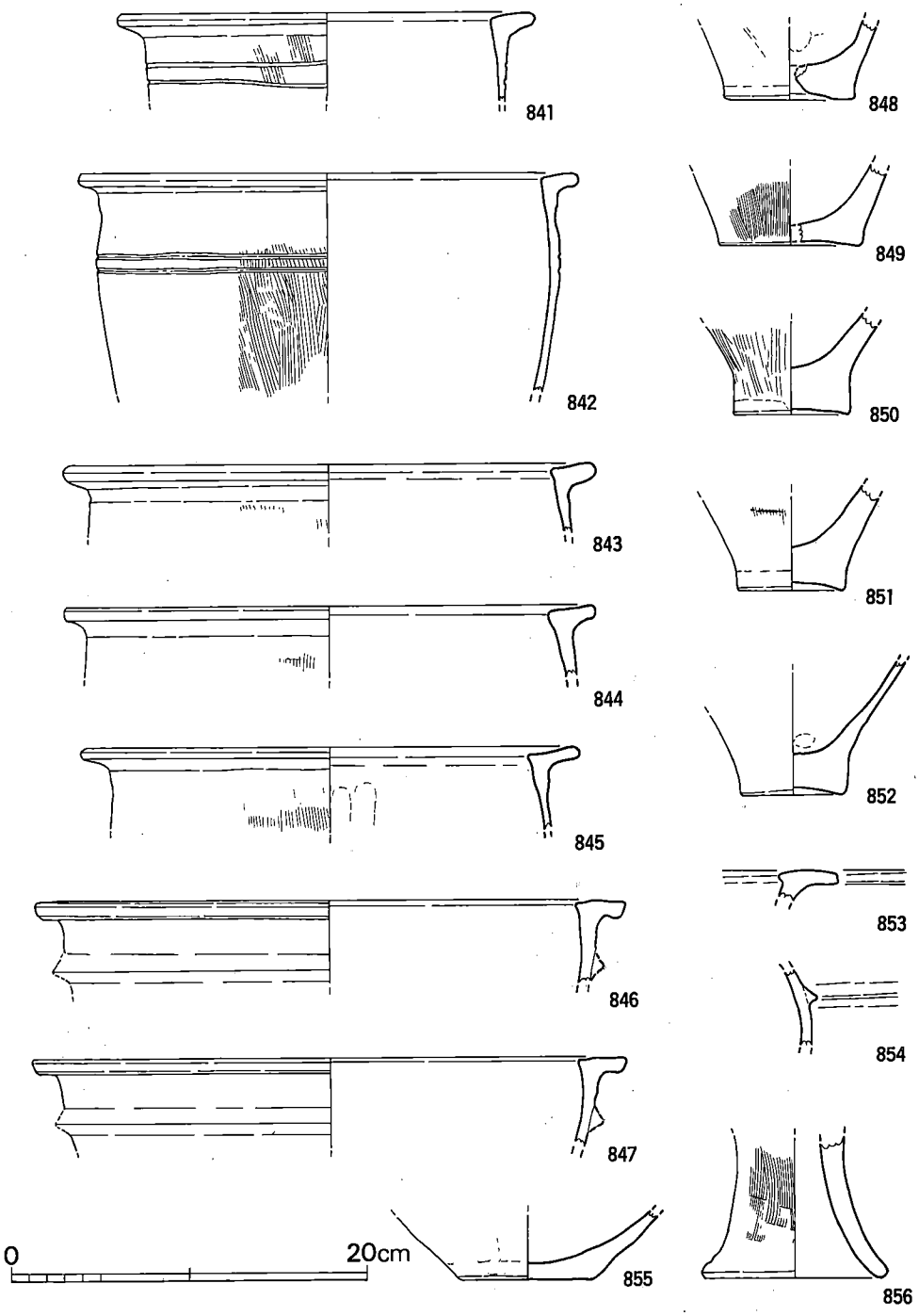
出土遺物（図版48・52，第10・103図）

**甕**（857～865）　857は，わずかに外反する口縁を持ち，外面には縦位の刷毛目痕が残る。858は，口縁外に断面カマボコ状の粘土帯をめぐらす。口縁外に粘土帯を，859は下り気味に，860は上り気味に，861は逆Ｌ字状にめぐらす。復原口縁内径は，858は18cm，859は19cm，860は23cm，861は25.1cmである。862～865は，底部片。

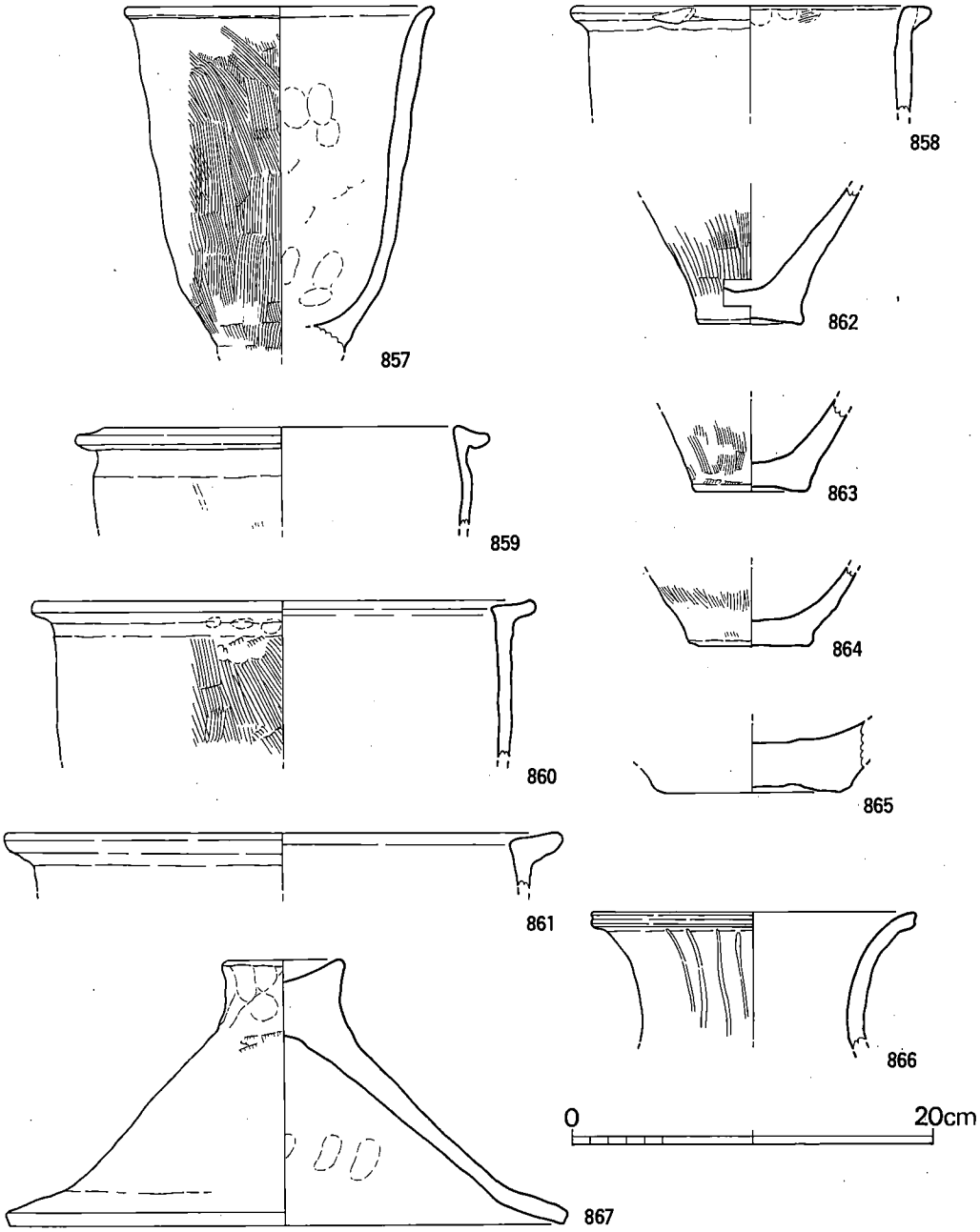
**壺**（866）　外反する口頸部片で，端部は面をなし，凹線が引かれる。１cm間隔の暗文が縦位に施される。

**蓋**（867）　つまみ部上面は凹み，やや括れてから拡がり，裾部でわずかに屈曲する。端部は面をなす。裾部径31.2cm，器高19.7cm。

**不明土製品**（第10図33）　幅４cm，厚さ1.2cmのやや湾曲した板状をなし長さ4.3cmを残し両端を欠損する。凸側には，幅５mmの先の割れた棒状工具で斜位に併行して沈線を引く。凹面には，板状工具での条痕が残る。胎土は，弥生時代前期の土器のものと同じである。橋状把手の一部のようにも見えるが用途不明である。




**第 102 図**　133号貯蔵穴出土土器実測図(1/4)




**第 103 図**　135号貯蔵穴出土土器実測図(1/4)

## 136号貯蔵穴（第104図）

135号貯蔵穴の西側にある。底部平面形は，110×92cmの胴張り隅丸長方形で，壁は袋状をなす。深さ44cm。遺物は出土していない。

## 137号貯蔵穴（第104図）

126号住居跡に東側を切られている。底部平面形は，140×112cmの隅丸長方形をなし，壁は外に開く。深さ56cm。遺物は土器が出土している。

出土遺物（第105図）

**甕**（868～872）　868～870は，口縁外に粘土帯をめぐらしたものであるが，868は断面台形に近く，869・870は逆Ｌ字状となる。868の口縁下に１条の沈線がめぐる。871・872は底部および底部付近破片である。868の復原口縁内径は26cm。

**壺**（873）　873は，鋤先状をなす。復原口縁内径28.8cm。

## 138号貯蔵穴（図版40－１，第104図）

137号貯蔵穴の北側にあり，126号住居跡に接する。底部平面形は，135×126cmの円形をなし，壁は袋状となる。深さは，104cmで上部平面形も円形である。遺物は，床に接して甕形土器と磨製石斧が出土している。

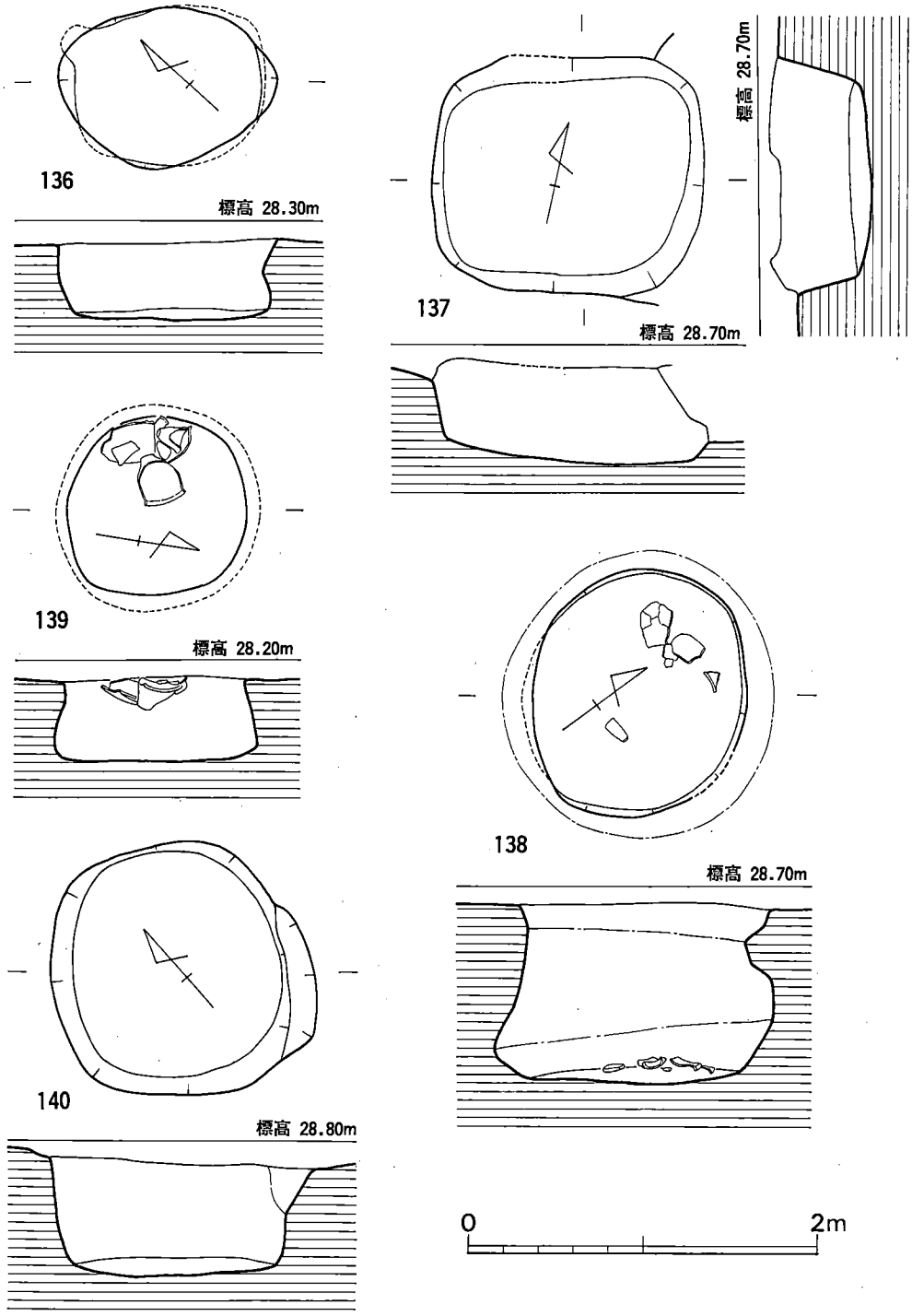
出土遺物（図版49，第27・105図）

**甕**（874～876・878・879）　口縁が，874は如意状に，875は短く強く外反し，端部は丸まり刻目がある。874は口縁下に刻目凸帯，875は１条（？）の沈線が巡る。876は，口唇外に粘土帯を巡らせ，部分的に刻目があり，口縁下３cmに断面三角形の凸帯を巡らす。残存部には刻目は認められない。復原口径は，874が27.0cm，875が29cm，876が26cmである。878・879は平底の底部である。

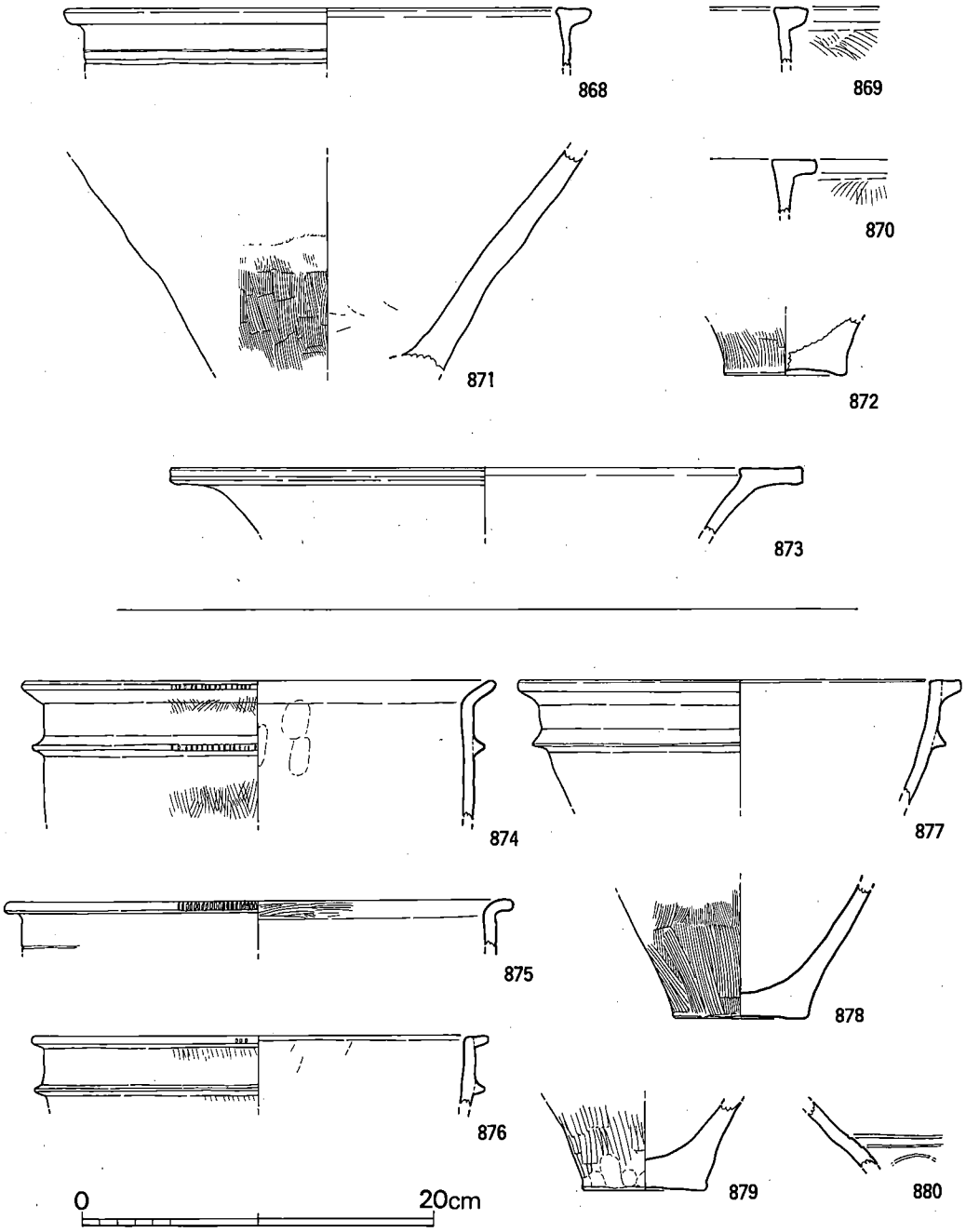
**鉢**（877）　口唇外に断面台形の粘土帯を巡らし，口縁下3.5cmに断面三角形の凸帯を巡らす。外面凸帯より下は粗いヘラ磨き，内面は丁寧なナデ調整が行われている。復原口縁内径11.6cm。

**壺**（880）　頸部から肩部の破片で，境目に２条の沈線，肩部に１本（＋α）の弧文が描かれる。

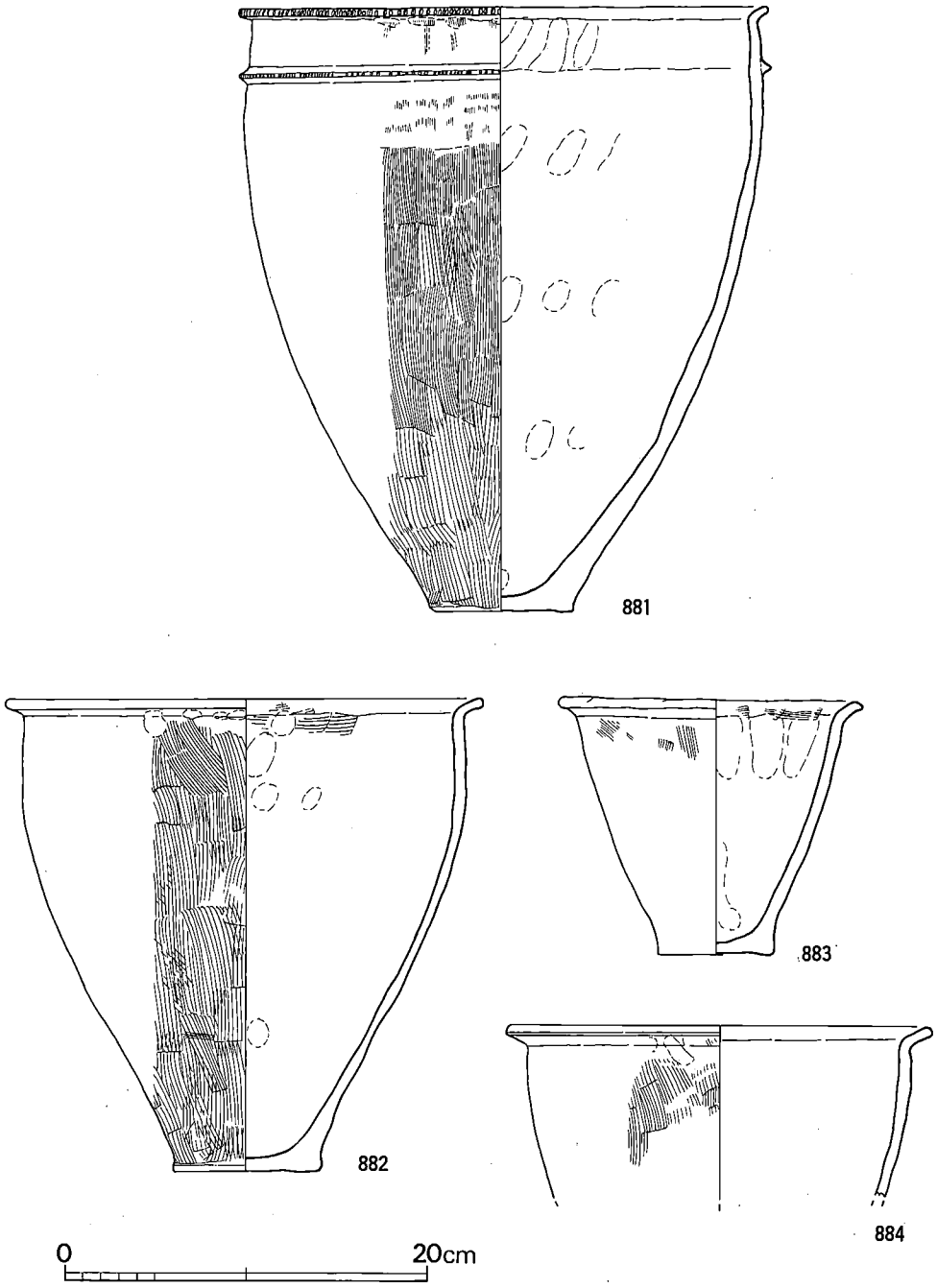
**磨製石斧**（第27図９）　玄武岩製の太形蛤刃石斧で，刃部を欠損する。全体は丁寧に研磨されている。頭部も稜をつくって研磨され，使用の痕跡はない。残存長15.8cm，太さ6.4×4.6cm。所謂今山製とされるものである。




第 104 図　136～140号貯蔵穴実測図(1/40)




第 105 図　137･138号貯蔵穴出土土器実測図(1/4)




**第 106 図**　139号貯蔵穴出土土器実測図(1/4)

## 139号貯蔵穴（図版40－２，第104図）

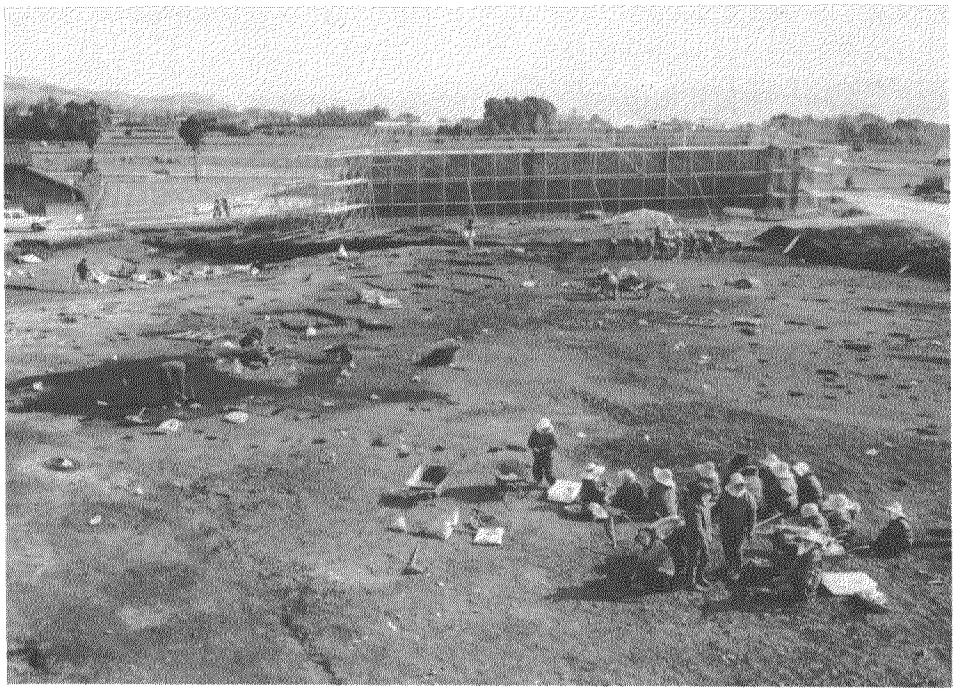
138号貯蔵穴の北側にある。底部平面形は，117×117cmの円形で，壁は内傾する。貯蔵穴最大径は底面にある。深さ49cm。上部平面形は，103×102cmの円形である。上面付近に，甕形土器４個がまとまって出土している。

出土遺物（図版48，第106図）

**甕**（881～884）　いずれも，短く丸味を持って外反する口縁で，平底の底部を持つ。881は，口唇端部に刻目を施し，口縁下3.5cmに刻目凸帯を巡らす。口径29cm，器高33.2cm。882・884は，口縁や形態が類似する。883は，口径26.1cm，器高26.2cm。884は復原口径23.4cm。883は，口径16.7cm，器高14cm。

## 140号貯蔵穴（第104図）

他の貯蔵穴群とは離れて，61号住居跡床面より検出されている。上部平面形は130×120cmの円形で，壁は丸味をおびて開く。深さ66cm。出土遺物はない。　（木村）



**第 107 図**　工事に追われる発掘調査

# Ⅳ おわりに

上の原遺跡は，弥生時代と奈良時代を主体とした濃密な一大集落跡である。今回の報告は，弥生時代前期から中期にわたる貯蔵穴群のみの報告で，本来は貯蔵穴を利用（貯蔵庫としての機能，廃棄壙としての機能）した弥生人達の居住地と合わせて検討すべきであるが，このことについては次回以降に報告したい。

従って，貯蔵穴群のみの報告では一面的な見方しかできないが，貯蔵穴の形態や分布，貯蔵穴の埋没等の特徴，ならびに出土土器の編年的位置付けと円盤状土器片の機能，イイダコ壺形土製品などについて簡単に触れ一応のまとめとしたい。

## 1．貯蔵穴について

### 形　態

今回紹介した遺構全てが，貯蔵穴と断定できるわけではなく，いくつか疑問符つきの遺構があることをはじめにことわっておきたい。

形態をみるのに，断面形，底部平面形，上部平面形の三つの要素が考えられるが，削平や崩落によって上面形の判明しないものが殆どである。したがって貯蔵穴一覧表に示した平面形及び平面規模はいずれも底部平面形である(表１～４)。

まず平面形をみると，円形と楕円形があり，それぞれに胴張り隅丸方形及び，胴張り隅丸長方形が認められるが，明確な方形及び長方形はない。円形が一番多く，71（Ⅰ期27，Ⅱ期24，Ⅲ期12，不明８），胴張り隅丸方形17（Ⅰ期５，Ⅱ期３，Ⅲ期３，不明６）と円形に近いものが，98と全体の70％を占める。楕円形は，27（Ⅰ期８，Ⅱ期８，Ⅲ期７，不明４），胴張り隅丸長方形25（Ⅰ期３，Ⅱ期15，Ⅲ期４，不明３）と，楕円形に近いものが52となっている。時期的に違いが認められるかという点については，Ⅰ期が楕円及び円に近いものが74％を占め多いが，Ⅱ期以降は，Ⅱ期54％，Ⅲ期58％とその率が下がっている。

断面形は，Ａ型壁が外に開く、Ｂ型壁が直になる，Ｃ型壁が袋状になるものがある。Ａ型63（Ⅰ期18，Ⅱ期21，Ⅲ期16，不明８），Ｂ型６（Ⅰ期３，Ⅱ期１，Ⅲ期１，不明１），Ｃ型71（Ⅰ期24，Ⅱ期27，Ⅲ期10，不明10）となる。この断面形は，多分に遺構の保存状態による影響が大きく，比較的浅い例の多い（深さについては後述）Ⅲ期にあっては，Ａ型が比較的多くなっており，残存している深さが20cm程までのものは，袋状になる可能性は十分あると思われる。深さと，断面形との関係をみると，Ａ型は深さ20～39cmの間にピークがあり（23個），Ｃ型は，40～59cm（24個），60～79cm（24個）にピークがあり，39cm以下は１個しかない。この点から

## 表 1 貯蔵穴一覧表①

( )内は復原値

| No | 底面(cm) 平面形 | 長径×短径 | 柱穴 | 断面(cm) 形態 | 深さ | 周壁 柱穴 | 出土遺物 土器 | 鉄器 | 石器・土製品 | 時期 | 備考 | 旧No |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 楕円形 | 155×140 | 無 | A | 23 | | 1～4 | | | Ⅱ | | 1 |
| 2 | 〃 | (200)×175 | 〃 | 〃 | 20 | | 5～15 | | 第10図29 | Ⅲ | | 6 |
| 3 | 〃 | 175×160 | 〃 | 〃 | 96 | | 16～49 | | 第36図9・10<br>第11図35～37 | Ⅱ～Ⅲ | | 3 |
| 4 | 円形 | 87×86 | 〃 | 〃 | 17 | | 50 | | | Ⅲ | | 4 |
| 5 | 〃 | 93×91 | 〃 | 〃 | 48 | | 51～54 | | | Ⅰ | | 5 |
| 6 | 不整楕円形 | 175×138 | 〃 | 〃 | 30 | | 55～58 | | | Ⅱ | テラスあり | 7 |
| 7 | 胴張隅丸長方形 | 150×114 | 〃 | 〃 | 70 | | 59～64 | | 第14図1 | Ⅱ | | 29 |
| 8 | 不整円形 | 96×95 | 〃 | 〃 | 20 | | 65 | | | Ⅰ? | | 25 |
| 9 | 〃 | 125×120 | 〃 | 〃 | 25 | | 66 | | | Ⅰ? | | 24 |
| 10 | 楕円形 | 102×82 | 〃 | 〃 | 23 | | 67 | | | Ⅲ | | 23 |
| 11 | 〃 | 111×85 | 〃 | 〃 | 24 | | 68 | | | Ⅰ? | | 21 |
| 12 | 不整楕円形 | 130×104 | 〃 | 〃 | 56 | | 69・70 | | | Ⅰ | | 22 |
| 13 | 円形 | 185×180 | 〃 | B | 55 | | 71～80 | | | Ⅰ | | 8 |
| 14 | 〃 | 125×124 | 〃 | A | 25 | | 81 | | | Ⅰ? | | 20 |
| 15 | 〃 | 130×120 | 〃 | 〃 | 57 | | 82～83 | | | Ⅰ | 16号に切らている | 18 |
| 16 | 胴張隅丸長方形 | 130×115 | 〃 | C | 67 | | | | | | 15号を切っている | 17 |
| 17 | 不整楕円形 | 155×130 | 〃 | 〃 | 63 | | 84 | | | Ⅰ? | | 14 |
| 18 | 円形 | 150×140 | 〃 | A | 33 | | 85 | | | Ⅰ? | | 16 |
| 19 | 楕円形 | 160×143 | 〃 | 〃 | 42 | | 86 | | | Ⅰ? | 18号に切られている | 15 |
| 20 | 〃 | 112×102 | 〃 | 〃 | 15 | | | | | | | 13 |
| 21 | 〃 | 172×153 | 〃 | B | 82 | | 87～89 | | | Ⅰ | | 9 |
| 22 | 円形 | 130×120 | 〃 | A? | 14 | | | | | | | 11 |
| 23 | 胴張隅丸方形 | 135×131 | 〃 | C | 52 | | 90～93 | | | Ⅲ | | 10 |
| 24 | 円形 | 156×143 | 〃 | A | 11 | | 94 | | | Ⅰ | | 12 |
| 25 | 不整楕円形 | 140×115 | 〃 | 〃 | 30 | | 95～103 | | | Ⅲ | | 138 |
| 26 | 胴張隅丸長方形 | 205×173 | 〃 | 〃 | 110 | | 104～135 | | 第24図12 | Ⅱ | | 77 |
| 27 | 楕円形 | 116×97 | 〃 | 〃 | 116 | | 136～159 | | 第27図10<br>第24図13 | Ⅰ～Ⅲ | | 75 |
| 28 | 不整円形 | 132×123 | 〃 | 〃 | 70 | | 160～176 | | | Ⅰ～Ⅲ | | 76 |
| 29 | 胴張隅丸長方形 | 153×135 | 〃 | 〃 | 85 | | 177～190 | | | Ⅱ～Ⅲ | | 79 |
| 30 | 胴張隅丸方形 | 112×110 | 〃 | 〃 | 69 | | 191～201 | | | Ⅲ | テラスあり | 80 |
| 31 | 円形 | 120×(120) | 〃 | C | 58 | | | | | | 32号に切られている | 99 |
| 32 | 楕円形 | 120×95 | 〃 | 〃 | 70 | | 202～228 | | | Ⅲ | 31号を切っている | 98 |
| 33 | 胴張隅丸方形 | 120×112 | 〃 | A | 72 | | 229～234 | | 第10図30 | Ⅰ～Ⅲ | | 97 |
| 34 | 楕円形 | 147×137 | 〃 | C | 91 | | 235～238 | | | Ⅰ～Ⅲ | | 102 |
| 35 | 不整円形 | 118×108 | 有 | 〃 | 53 | | 239～247 | | 第36図6 | Ⅱ～Ⅲ | | 96 |

## 表 2 貯蔵穴一覧表②

| No | 底面(cm) 平面形 | 長径×短径 | 柱穴 | 断面(cm) 形態 | 深さ | 周壁 柱穴 | 出土遺物 土器 | 鉄器 | 石器・土製品 | 時期 | 備考 | 旧No |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 36 | 楕円形 | 144×127 | 無 | C | 76 | | 248～254 | | 第24図14 | Ⅰ～Ⅲ | | 100 |
| 37 | 〃 | 132×111 | 有 | A | 35 | | 255～263 | | | Ⅱ～Ⅲ | | 47 |
| 38 | 不整円形 | 125×122 | 無 | 〃 | 30 | | 264～267 | | | Ⅲ | | 95 |
| 39 | 胴張隅丸長方形 | 143×120 | 〃 | 〃 | 43 | | 268・269 | | | Ⅰ | | 44 |
| 40 | 〃 | 131×105 | 〃 | 〃 | 70 | | 270～280 | | 第36図1・2<br>第11図38・39 | Ⅱ～Ⅲ | テラスあり | 45 |
| 41 | 不整円形 | 165×160 | 〃 | 〃 | 87 | | 281～285 | | | Ⅲ | | 43 |
| 42 | 楕円形 | 160×138 | 〃 | 〃 | 65 | | 286・287 | | | | | 42 |
| 43 | 円形 | 145×144 | 〃 | C | 52 | | 288 | | 第24図15 | Ⅱ | 44号に切られている | 41 |
| 44 | 楕円形 | 144×112 | 〃 | 〃 | 47 | | 289～306 | | 第27図7 | Ⅲ | 43号・45号を切っている | 10 |
| 45 | 不整円形 | (165)×161 | 〃 | 〃 | 85 | | 307～326 | | 第14図2，第10図31<br>第24図16，第11図40 | Ⅰ～Ⅲ | 44号に切られている | 39 |
| 46 | 楕円形 | 167×143 | 〃 | A | 72 | | 327～330 | | 第11図41 | Ⅰ～Ⅱ | | 46 |
| 47 | 胴張隅丸方形 | 135×130 | 〃 | C | 68 | | 331・332 | | 第27図11 | Ⅰ～Ⅱ | | 59A |
| 48 | | 105×？ | 〃 | 〃 | 57 | | | | | | 49・50号に切られている | 87 |
| 49 | 円形 | 160×150 | 〃 | 〃 | 85 | | 333～339 | | 第11図42 | Ⅱ～Ⅲ | 48号を切っている | 31 |
| 50 | 不整楕円形 | 160×137 | 〃 | 〃 | 90 | | | | | | 48号を切っている | 32 |
| 51 | 円形 | (160)×157 | 〃 | 〃 | 49 | | 340 | | | | 52号に切られている | 38 |
| 52 | 胴張隅丸長方形 | 184×150 | 〃 | 〃 | 60 | | 341～348 | | | Ⅱ | 51号を切っている | 37 |
| 53 | | 128×？ | 〃 | A？ | 40 | | | | | | 54・55号に切られている | 88 |
| 54 | 円形 | 145×145 | 〃 | C | 73 | | 349～366 | | | Ⅰ～Ⅲ | 50号に切られ，53号を切っている | 33 |
| 55 | 〃 | 135×135 | 〃 | 〃 | 63 | | 367～375 | | 第24図17・18 | Ⅱ～Ⅲ | 竪穴3に切られ，53号を切っている | 34 |
| 56 | 楕円形 | 150×132 | 〃 | A | 66 | | 376 | | | | 57号に切られている | 94 |
| 57 | 胴張隅丸方形 | 158×153 | 〃 | C | 72 | | 377～382 | | | Ⅲ？ | 56・58を切っている | 30 |
| 58 | 胴張隅丸長方形 | 210×160 | 〃 | 〃 | 74 | | 383～398 | | 第11図43 | Ⅰ？ | 57号に切られている | 93 |
| 59 | 不整円形 | 120×115 | 有 | A | 28 | | 399 | | | Ⅲ | 61号を切っている | 土33 |
| 60 | 〃 | 140×118 | 無 | C | 83 | | 400～402 | | 第24図19 | | 61号を切っている | 103 |
| 61 | 円形 | 140×130 | 〃 | A | 45 | | 403・404 | | 第24図20 | | 59・60・62号に切られている | 106 |
| 62 | 〃 | 90×88 | 〃 | C | 64 | | 405 | 第52図1 | | Ⅱ | 61号を切っている | 83 |
| 63 | 〃 | 114×110 | 〃 | 〃 | 58 | | 406・407 | | 第10図34 | Ⅲ | | 82 |
| 64 | 胴張隅丸長方形 | 158×127 | 〃 | 〃 | 65 | | 408～410 | | | Ⅲ | | 54 |
| 65 | 隅丸長方形 | 172×160 | 〃 | 〃 | 55 | | 411～424 | | | Ⅱ～Ⅲ | | 89 |
| 66 | 円形 | 135×(130) | 〃 | 〃 | 36 | | 425 | | | Ⅰ | 67号に切られている | 36 |
| 67 | 楕円形 | 178×152 | 〃 | 〃 | 50 | | 426～429 | | | Ⅰ～Ⅲ | | 35 |
| 68 | 円形 | 132×125 | 〃 | A | 55 | | 430～432 | | | Ⅱ | | 90 |
| 69 | 〃 | 125×125 | 有 | C | 78 | | 433～439 | | 第24図21 | Ⅰ | | 91 |
| 70 | 〃 | 145×128 | 無 | 〃 | 98 | | 440 | | | Ⅰ | | 101 |

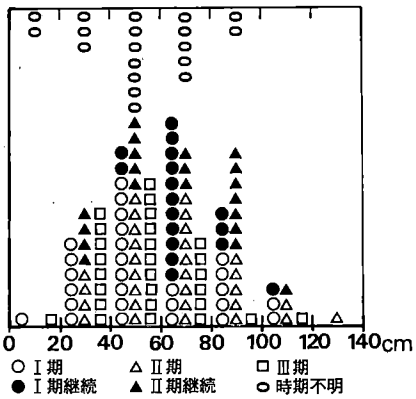
## 表 3 貯蔵穴一覧表③

| No | 底面(cm) | | | 断面(cm) | | 周壁 | 出土遺物 | | | 時期 | 備考 | 旧No |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 平面形 | 長径×短径 | 柱穴 | 形態 | 深さ | 柱穴 | 土器 | 鉄器 | 石器・土製品 | | | |
| 71 | 胴張隅丸長方形 | 150×110 | 無 | C | 83 | | 441～449 | 第52図2・3 | | Ⅱ | 第17図5 | 64 |
| 72 | 円形 | 195×180 | 〃 | 〃 | 103 | | 450～460 | | | Ⅱ～Ⅲ | | 65 |
| 73 | 不整円形 | 135×120 | 〃 | 〃 | 83 | | 461～471 | | | Ⅱ | | 73 |
| 74 | 胴張隅丸方形 | 143×142 | 〃 | 〃 | 64 | | 472～482 | | 第27図8 | Ⅱ | | 48 |
| 75 | 円形 | 153×(140) | 〃 | B | 54 | | 483～490 | | | Ⅲ | 74号を切っている(?) | 49 |
| 76 | 楕円形 | (170)×107 | 〃 | C | 56 | | 491～494 | | 第14図3 | Ⅱ | 75号に切られている | 50 |
| 77 | 胴張隅丸長方形 | 111×92 | 〃 | A | 56 | | 495～503 | | 第24図22 | Ⅱ～Ⅲ | | 51 |
| 78 | 不整円形 | 155×143 | 〃 | C | 64 | | 504～515 | | | Ⅱ～Ⅲ | 70号に切られている | 52 |
| 79 | 楕円形 | 176×145 | 〃 | 〃 | 123 | | 516～521 | | | Ⅱ | 78・80号に切られている | 59B |
| 80 | 円形 | (140)×130 | 〃 | 〃 | 50 | | 522～534 | | 第27図12 | Ⅲ | 79号を切っている。 | 53 |
| 81 | 楕円形 | 145×125 | 〃 | 〃 | 51 | | 535～538 | | | Ⅱ | | 60 |
| 82 | 胴張隅丸長方形 | 155×140 | 〃 | 〃 | 50 | | | | | | | 112 |
| 83 | 円形 | 140×130 | 〃 | A | 35 | | 539～552 | | | Ⅲ | | 72 |
| 84 | 不整円形 | 128×125 | 〃 | C | 65 | | 553～556 | | | Ⅰ | | 84 |
| 85 | 円形 | 130×127 | 〃 | 〃 | 60 | | 557～567 | | | Ⅰ～Ⅲ | | 67 |
| 86 | 楕円形 | 134×117 | 〃 | 〃 | 47 | | | | | | | 66 |
| 87 | 円形 | 83×83 | 〃 | A | 33 | | | | | | | 74 |
| 88 | 楕円形 | 105×70 | 〃 | 〃 | 33 | | 568～583 | | | Ⅱ～Ⅲ | 89号に切られている | 68 |
| 89 | 不整円形 | 123×120 | 〃 | 〃 | 55 | | 584 | | | Ⅱ? | 88号を切っている | 69 |
| 90 | 楕円形 | 130×115 | 〃 | C | 62 | | 585 | | | Ⅱ? | | 70 |
| 91 | 胴張隅丸長方形 | 100×80 | 〃 | 〃 | 51 | | 586～590 | | 第36図11 | Ⅲ | | 71 |
| 92 | 楕円形 | 140×127 | 〃 | 〃 | 58 | | 591～594 | | | Ⅱ | | 113 |
| 93 | 円形 | 145×140 | 有 | 〃 | 40 | | 595～601 | | 第24図23・24・25 | Ⅱ | | 108 |
| 94 | 不整楕円形 | 140×115 | 〃 | A | 36 | | 602～609 | | | Ⅱ～Ⅲ | 95号に切られている | 110 |
| 95 | 〃 | 134×100 | 無 | 〃 | 38 | | 610～616 | | 第10図32<br>第11図44～47 | Ⅱ～Ⅲ | 94号を切っている | 109 |
| 96 | 楕円形 | 168×117 | 〃 | B | 44 | | 617～623 | | | Ⅱ | | 111 |
| 97 | 円形 | (110)×99 | 〃 | C | 51 | | 624・625 | | | Ⅰ? | 98号に切られている | 107 |
| 98 | 楕円形 | 128×104 | 〃 | A | 71 | | 626～629 | | | Ⅱ～Ⅲ | 97号を切っている | 105 |
| 99 | 〃 | 153×135 | 〃 | C | 105 | | 630・631 | | | Ⅰ | | 61 |
| 100 | 胴張隅丸方形 | 123×108 | 〃 | 〃 | 90 | | 632 | | 第36図8 | | | 58 |
| 101 | 楕円形 | 132×115 | 〃 | 〃 | 79 | | 633～642 | | | Ⅰ～Ⅱ | 103号に切られている | 57 |
| 102 | 胴張隅丸長方形 | 145×128 | 〃 | 〃 | 72 | | 643・644 | | | Ⅱ | 103号に切られ，104号を切っている | 55 |
| 103 | 〃 | 148×133 | 〃 | 〃 | 73 | | 645・646 | | 第11図48～50 | Ⅱ? | 101・102・104号を切っている | 56 |
| 104 | 不整楕円形 | 163×113 | 〃 | A | 80 | | 647～649 | | | Ⅰ | 102・103号に切られている | 92 |
| 105 | 不整円形 | 125×123 | 〃 | 〃 | 29 | | 650・651 | | | Ⅲ | | 62 |

## 表 4 貯蔵穴一覧表④

| No | 底面(cm) 平面形 | 長径×短径 | 柱穴 | 断面(cm) 形態 | 深さ | 周壁 柱穴 | 出土遺物 土器 | 鉄器 | 石器・土製品 | 時期 | 備考 | 旧No |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 106 | 円形 | 175×170 | 無 | C | 98 | | 652～658 | | | Ⅰ | | 81 |
| 107 | 〃 | 135×133 | 〃 | A | 94 | | 659 | | | Ⅱ | | 63 |
| 108 | 楕円形 | 183×162 | 〃 | 〃 | 60 | | 660～668 | | | Ⅲ | | 85 |
| 109 | 〃 | 147×105 | 有 | B | 37 | | | | | | | 129 |
| 110 | 円形 | (180)×172 | 無 | 〃 | 47 | | 669～673 | | | Ⅱ | | 130 |
| 111 | 楕円形 | 134×103 | 有 | A | 37 | | | | | | | 145 |
| 112 | 不整円形? | 155×(140) | 〃 | 〃 | 57 | | 674～679 | 第52図4 | | Ⅲ | 半分未掘 | 104 |
| 113 | 円形 | 153×(150) | 無 | C | 95 | | 680～684 | 第52図5 | 第14図4 | Ⅰ～Ⅲ | | 28 |
| 114 | 不整円形 | 145×(145) | 〃 | A | 75 | | 685～694 | | | Ⅰ～Ⅱ | | 139 |
| 115 | 〃 | 135×127 | 〃 | C | 86 | | 695～697 | | | Ⅰ | | 131 |
| 116 | 不整楕円形 | 137×97 | 〃 | A | 41 | | 698・699 | | | Ⅱ～Ⅲ | | 132 |
| 117 | 〃? | 120×(90) | 〃 | C | 50 | | 700 | | | Ⅰ? | 半分未掘 | 133 |
| 118 | 〃 | (110)×96 | 〃 | A | 38 | | 701～715 | | 第11図51 | Ⅲ | 119号に切られている | 142 |
| 119 | 隅丸方形 | 121×116 | 〃 | 〃 | 60 | | 716～737 | | 第36図5 | Ⅲ | 118号を切っている | 143 |
| 120 | 円形 | 117×114 | 有 | C | 43 | | 738～740 | | 第14図5<br>第24図26 | Ⅲ | | 137 |
| 121 | 楕円形 | 125×110 | 無 | 〃 | 73 | | 741～753 | | | Ⅰ～Ⅱ | テラスあり | 136 |
| 122 | 隅丸長方形 | 130×106 | 〃 | A | 30 | | 754～762 | | 第36図3 | Ⅱ | | 135 |
| 123 | 不整円形 | 132×124 | 〃 | C | 88 | | 763～767 | | 第36図4 | Ⅱ | | 141 |
| 124 | 〃 | 152×145 | 〃 | 〃 | 80 | | 768～778 | | | Ⅱ～Ⅲ | | 140 |
| 125 | 隅丸長方形 | 147×107 | 〃 | 〃 | 103 | | 779～791 | | 第24図27・28 | Ⅱ | | 134 |
| 126 | | (54+α)×(50+α) | | A? | 54 | | 792～802 | | | Ⅱ | 大半未掘 | 121 |
| 127 | 胴張隅丸方形 | 135×130 | 〃 | C | 99 | | 803～814 | | | Ⅱ～Ⅲ | | 123 |
| 128 | 不整円形 | 114×110 | 〃 | A | 38 | | 815・816 | | | Ⅱ | | 124 |
| 129 | 不整楕円形 | 147×130 | 〃 | C | 87 | | 817～825 | | | Ⅱ | 130号に切られている | 126 |
| 130 | 〃 | 143×112 | 〃 | A | 40 | | 826～830 | | | Ⅱ～Ⅲ | 129号を切っている | 125 |
| 131 | 円形 | 127×120 | 〃 | C | 49 | | 831 | | | Ⅰ | 132号に切られている | 127 |
| 132 | 〃 | 97×90 | 〃 | 〃 | 73 | | 832～840 | | 第14図6 | Ⅱ | 131号を切っている | 128 |
| 133 | 胴張隅丸長方形 | (140)×115+α | 〃 | A | 100 | | 841～856 | | | Ⅲ | | 119 |
| 134 | 胴張隅丸方形 | 123×113 | 〃 | C | 73 | | | | | | | 120 |
| 135 | 円形? | 100×91+α | 〃 | 〃 | 95 | | 857～867 | | 第10図33 | Ⅱ～Ⅲ | 半分未掘 | 114 |
| 136 | 胴張隅丸長方形 | 110×92 | 〃 | 〃 | 44 | | | | | | | 84 |
| 137 | 隅丸長方形 | 140×112 | 〃 | A | 56 | | 868～873 | | | Ⅲ | | 118 |
| 138 | 円形 | 135×126 | 〃 | C | 104 | | 874～880 | | 第27図9 | Ⅰ | | 117 |
| 139 | 円形 | 117×117 | 〃 | 〃 | 49 | | 881～884 | | | Ⅰ | | 116 |
| 140 | 〃 | 130×120 | 〃 | A | 66 | | | | | | | 115 |

しても，A型は浅いもの（残存状態が悪いもの）に多いことがいえ，A型のなかには，本来C型に属していた可能性のあるものが多いと考えられる。以上の点を考慮した上で，現状での比率をみると，Ⅰ期・Ⅱ期・時期不明とも，袋状のもの（C型）が50％をこえており，Ⅲ期のみ，A型が59％となっているが，前述のように，このうちの多くがC型の可能性があると考えられる。したがって，本遺跡の貯蔵穴の多くは，袋状（C型）を呈していたと思われる。




**第 108 図**　時期別貯蔵穴深度度数表

次に貯蔵穴の深さであるが，これもいままで述べてきたように，削平等の影響を強く受けていると思われる。一応それを無視してみてみると，深さ20cm毎の階級毎にその数を示すと，第108図のようになる。40～59cmが36，60～79cmが30とピークになり，一番深いものが123cmとなる。時期によって差が認められるかについては，Ⅰ期が，60～79cmに14個とピークがあり，Ⅱ期は，40～59cmに14個とピークがある。Ⅲ期は若干少なくなるものの40～59cmに10個とピークが認められる。全体的な傾向としては，徐々に浅くなることがいえるが，これも，時間の経過とともに表土層が堆積して行く点と，削平との関係を考慮する必要があり，一概に浅くなるとばかりはいえない。したがって時期的に古いⅠ期に多い60～79＋αcmが標準的な深さといえる。又，平面的に時期を無視して深さをみると，貯蔵穴群の中心部分に，80cm以上の深いものが集中し，その周辺に，60cm以下のものが多い傾向にある。理由は判明しないが，おそらく，貯蔵穴の多い所（集中部分）をさけて，後の住居が作られている結果とも考えられ，貯蔵穴の一部は比較的長い間，凹地として残っていたことも考えられる。Ⅰ～Ⅲ期までの遺物が認められる貯蔵穴が，中心部に多く，また比較的深いものに（60～79cm－6個，80～99cm－2個，100～119cm－1個，40～59cm－1個）多いことも，それを裏づけているのかもしれない。

**分　布**

貯蔵穴群は，前述のように，全体としては遺跡東部に群をなしている。時期的にみると，Ⅰ期が，東側に，Ⅱ期が中央から西側，Ⅲ期が中央に多いようにみえるが，全体としては混在しているといえる。全体をみると，さらにいくつかの小群に分かれるが，各群とも各時期を含んでおり，各まとまりの中で，断続的に貯蔵穴が作られ，廃絶され，各遺物が廃棄されたことをうかがわせる。それぞれの群が，それぞれ一定の集団に属することを想像されるが，判断はできない。

**貯蔵穴の埋没**

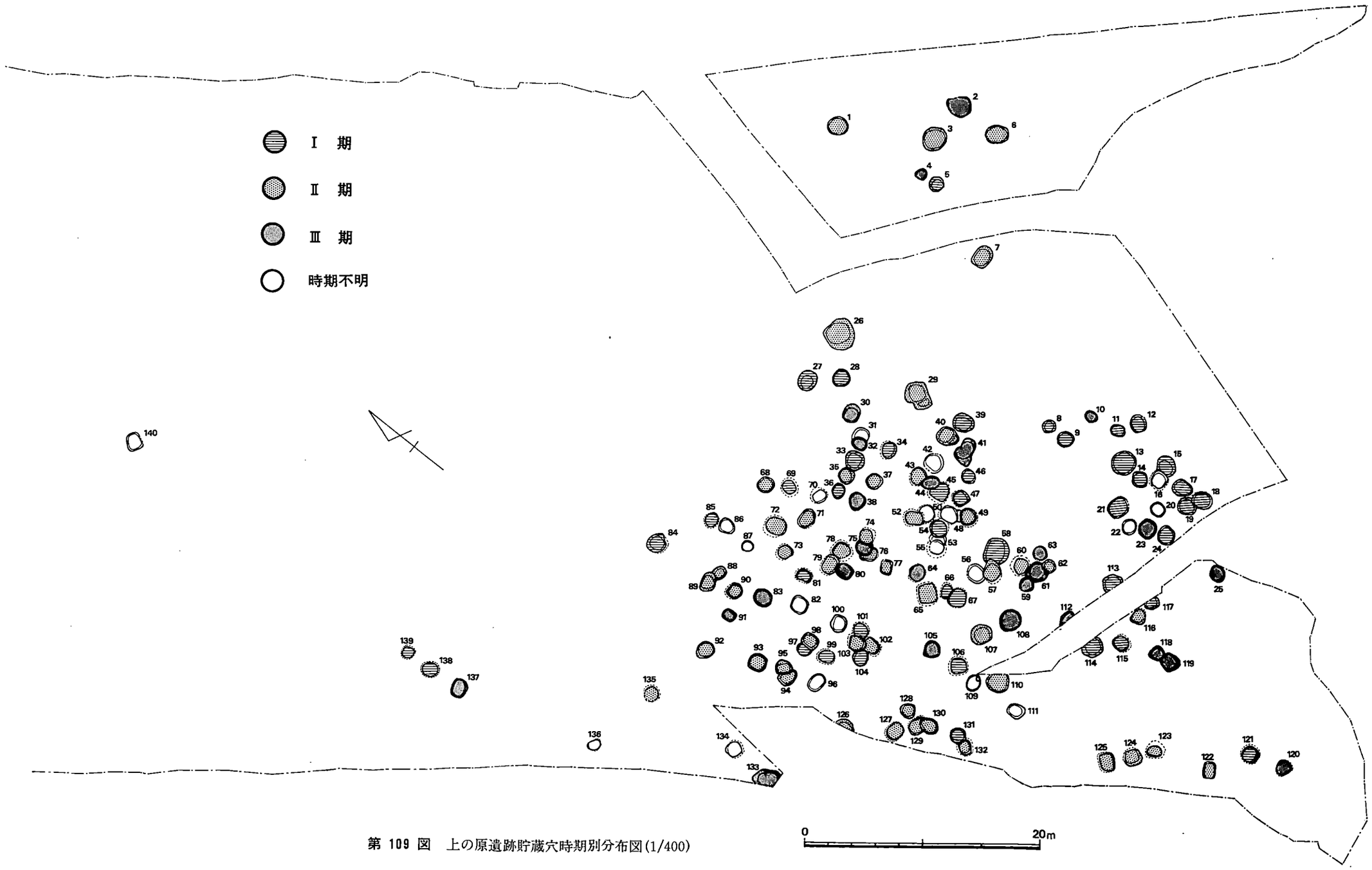
本遺跡の貯蔵穴で，埋土の堆積状態の記録されているものは少なく，16ヶ所であるが，水平に近い堆積を示すもの（Ⅰ）８ヶ所，スリ鉢状堆積を示すもの（Ⅱ）８ヶ所である。Ⅰ期の断面形態はＡ型が２個，Ｂ型が１個，Ｃ型が５個と，袋状をなすものが多く，Ⅱ期は，Ａ型が４個，Ｂ型が１個，Ｃ型が３個と，壁の外に開くものが多い。Ａ型でⅡの堆積を示すのは自然の堆積といえるが，Ｃ型で，Ⅰの堆積を示すものは，ある程度人為的に埋められた可能性があると考えられよう。本来，２ｍ近い深さがあり，口が狭い袋状をなす貯蔵穴は，自然堆積にしても，人為的に埋めたにしても，底面近くは，中央が盛り上がった堆積状況を示すものが，他の遺跡では認められるが，本遺跡では認められず，深さが150cmを超えるものがなかったことを示しているのであろうか。

遺物の出土状態の記録されている貯蔵穴は，25ヶ所と少ないが，それよりすると，完形に近いかあるいは，ある程度の大きさを持っている土器片が，(イ)床面上または，上10cm以下のもの，(ロ)中位にあるもの，(ハ)上面付近にあるものが認められ，それぞれ(a)中央にあるもの，(b)壁際にあるものがある。(イ)11例のうち(a)２，(b)９，(ロ)９例のうち(a)２，(b)５，(ハ)４例のうち(a)２，(b)２となっている。(イ)・(ロ)で，(b)壁際に出土する例が多いのは，先の堆積土からの推定に反して，堆積土中央が盛り上がっており，壁際に転落した事を示していると思われる。(ロ)で(a)と(b)が等しいのは，転落の余地がなく，当然である。

各期にわたって遺物が包含されていた貯蔵穴についてみると，その貯蔵穴で古い時期の土器が(イ)の堆積を示す貯蔵穴は，廃絶後あまり時を経ずして廃棄が行われ，28・54・85号貯蔵穴のようにⅠ～Ⅱの各期の土器が混入するものがある。初期のものが(ロ)や(ハ)の堆積を示す，84号や72号の場合，それまでの埋没が比較的早かったことをうかがわせ，(ハ)の72号の場合，Ⅲ期の遺物は，切合った後の時代の遺構による混入が十分考えられる。

遺物の出土状況の記録されている貯蔵穴で，明確に，使用されていた状況で廃絶したと思われるものはなく，おそらくは廃絶後そう間をおかず，人為的に，又は自然に埋没したものと思われる。

遺物の中に，異なった貯蔵穴より出土した土器が接合する例があり，同時期に凹地として存在し，廃棄壙として利用されたことを示している。84号貯蔵穴（Ⅰ～Ⅱ期）土器553と，約12ｍ離れた93号貯蔵穴（Ⅱ期）土器597，98号貯蔵穴（Ⅱ期）土器626と，約３ｍ離れた101号貯蔵穴（Ⅰ～Ⅱ期）土器641の2例が接合資料で，また33号貯蔵穴（Ⅰ～Ⅲ期）土器229は，５ｍ離れた71号貯蔵穴（Ⅱ期）土器449はきわめて類似している。以上の事は，84号と，93号の場合，84号がⅠ期より埋没が初まりⅡ期の段階で，84・93号とも同時に廃棄壙として利用された事を示し，98・101号の場合も同様にⅡ期に，又おそらく33・71号の場合もⅡ期に同時に廃棄壙として利用されていた事を示している。しかし，意図的に別々に廃棄されたものなのか，偶然で




第 109 図　上の原遺跡貯蔵穴時期別分布図(1/400)

あるのかは，判断できない。ただ先に述べた，小群内で別々に廃棄されているのは，98・101号の組合せだけで，他は隣接した小群にわたっていることは，意図的なものを少々感じさせるにとどまる。 (木村)

## 2．貯蔵穴出土の土器群について

甘木・朝倉地方における弥生時代遺跡の調査例は多いが，弥生前期から中期にわたる調査例は意外と少ないのが現状である。従って，この時期の土器編年は整備できていない。しかし，近年の九州横断道関係の発掘調査で，その間の遺跡が調査され，良好な一括資料を得ることができた。

今回の上の原遺跡の貯蔵穴から出土した土器群は，この甘木・朝倉地方における弥生前期から中期の土器群の変遷過程を知る上で貴重な資料である。ここでは，この地域の当該期の土器群の変遷を，いまだ欠落した器種も多く不充分ではあるが，周辺遺跡の資料も一部加えて，一応の整理をしておきたい。

なお，上の原遺跡の貯蔵穴出土の土器群には，良好な一括資料もあるものの，その大半は復次的な投棄による時期差のある土器群が混在した資料であったため，資料の抽出に苦慮した。従って，良好な一括資料を基本に，さらに，個別貯蔵穴出土の完形品ないしは完形品に近い資料をもとに共存資料の抽出を行った。

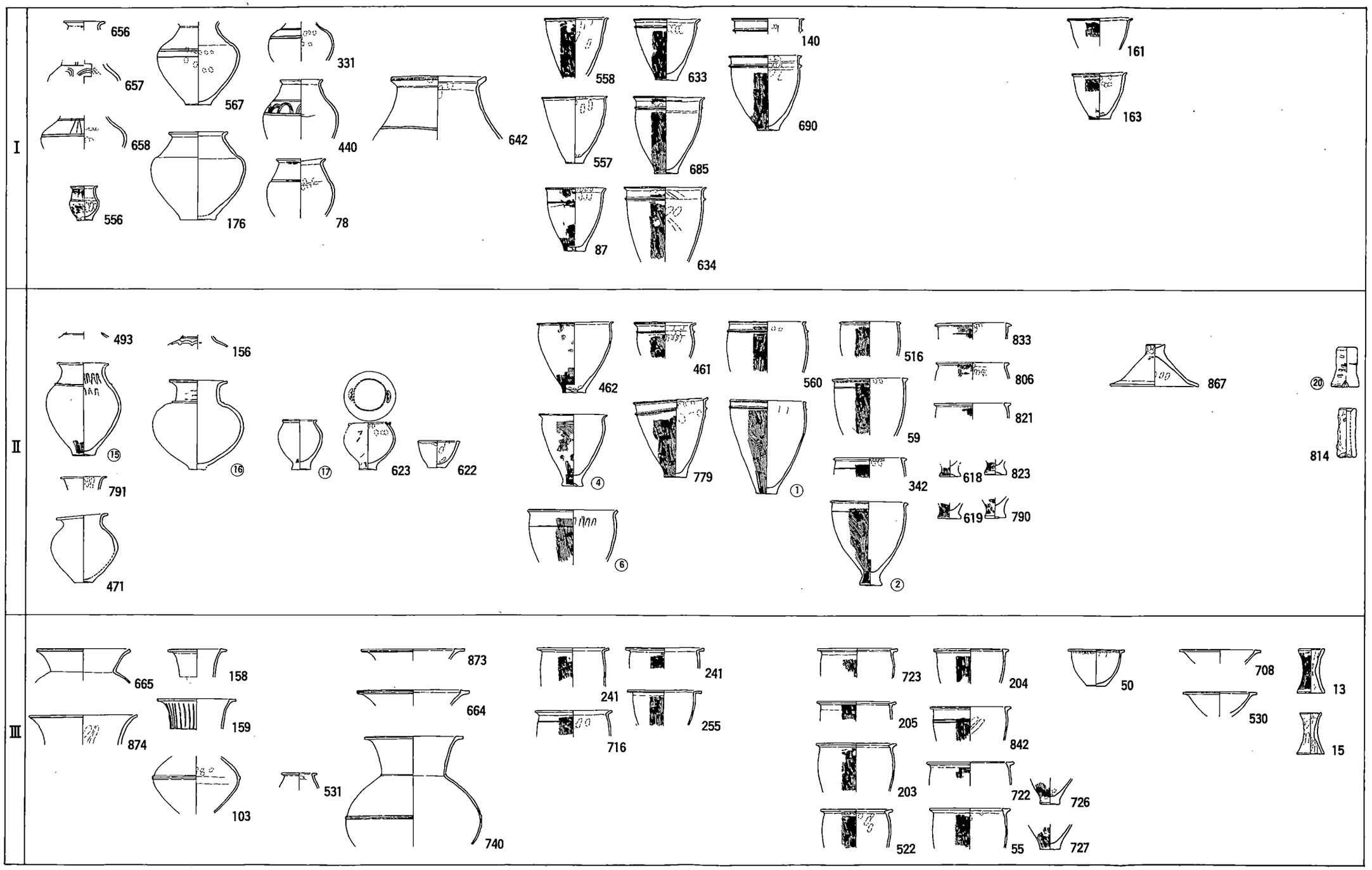
次に，各期毎の土器群の特徴と変遷を明らかにしよう。主に，壺と甕の形態的特徴とその変遷を中心に説明をする。

**上の原Ⅰ期**　この時期の良好な一括資料は，28号・85号・101号・106号・114号貯蔵穴出土の土器群である。壺には小形・中形・大形がある。いずれも球形ないしは扁球形の胴部に内傾の強い頸部がつき，外面に有段状の稜を残す口縁部がつく壺である。肩部にも，前期の壺の特徴である肩部の屈折稜の名残りである沈線が1条から数条めぐっている。また，肩部には平行沈線文や半円弧文等の文様が施されたものも多い。調整は，外面が丁寧なヨコヘラ磨きで仕上げ，内面はヘラ磨きしたものとナデのものがあり，いずれも胎土は精良で焼成も良好な作りの良い土器である。大形壺である642は内傾する頸部に強く外反する口縁部がつく壺で，口縁部は肥厚させている。口縁端部外面に刻目を施し，肩部には2条の沈線がめぐる。前期末の大形壺の基本的特徴である。甕は口縁部の形状により三つのタイプがある。如意形口縁のもの(557・558)，如意形口縁下に1条の三角凸帯をめぐらすもの（633・634・685)，口縁端部と口縁下に1条の三角凸帯を貼付したもので，いわゆる亀ノ甲タイプといわれる甕（140・690）である。いずれも口縁端部と凸帯端部に刻目を施している。また，87のように如意形口縁下に沈線をめぐらすものもある。この時期の如意形口縁は，Ⅱ期の甕に比べ口縁部の外反が弱く短かいのが特徴といえる。亀ノ甲タイプの甕も口縁部は，Ⅱ期の甕が内傾気味であるのに対して直立ないし

は外傾気味という小差が指摘できるようである。調整は，胴部外面を刷毛，内面をナデ，口縁部内外はヨコナデで仕上げたものが多い。557のように胴部内外ともナデて仕上げた珍しい甕もある。底部はいずれも平底で，Ⅱ期の甕に比べ大きいといえる。

**上の原Ⅱ期**　この時期の一括資料としては，73号・96号・110号・123号・125号・127号・132号・135号貯蔵穴出土の土器群である。また，甘木市西原遺跡では，この時期の良好な一括資料が貯蔵穴から多数出土している。この時期の基準資料として，2号と5号貯蔵穴出土の土器群を採用する。器種としては，壺・甕・蓋・支脚等がある。壺には小形と中形があり，493や⑮のようにⅠ期の頸部が内傾する壺の系譜をひく壺で，頸部下に1条の三角凸帯がめぐる土器である。156・⑯は扁球形の胴部に直立気味の頸部がつき，口縁部は強く外反する壺で，しばしば頸部下に1条の三角凸帯をめぐらすのを特徴とし，この時期の特徴的な土器である。471・791は広口の小形壺で，Ⅲ期の広口小形壺につづく土器と思われる。623・⑰は，いわゆる無頸壺といわれる小形の土器である。623の口縁端部には2個対の小さな把手がつき，それぞれ2個の穴が穿孔されている。小形の蓋（第36図10）等の紐通し穴とセットをなす土器である。甕にはⅠ期からの系譜を引く三つのタイプと，この時期から出現する口縁端部に太目の三角凸帯を貼付し，しばしば口縁下に1条の沈線をめぐらす甕である（59・342・516・618・619・790・806・821・823・833・②）。口縁部は若干，内湾気味で胴部が緩やかに張り，底部は脚台状ないしは器肉の厚い高台状の底部を特徴とする（618・619・790・823）。この時期の典型的な甕である。この種の甕の中でも，806・821・833のように口縁端部の三角凸帯がより太目となり，Ⅲ期に出現する逆L字状やT字状口縁とした甕（55・203～205・522・722・723・842）の祖型ともなる甕がすでに出現しはじめるのもこの時期の特徴である。如意形口縁の甕は，Ⅰ期のものに比べ，口縁部の外反が強く長目のものが多くなる（462・④・⑥・461・779）。また，亀ノ甲タイプの甕はⅠ期のものに比べ，口縁部が内湾する傾向がみられる（560・①）。調整手法は，胴部外面を刷毛，内面をナデ，口縁部内外はヨコナデで仕上げるのが一般的である。

**上の原Ⅲ期**　この時期の一括資料としては，3号・27号（上層出土資料）・32号・80号・108号・118号・119号・133号貯蔵穴出土の土器群がある。器種としては壺・甕・鉢・高杯・器台などと豊富である。壺には小形・中形・大形があり，口縁部の形状で大きく二つのタイプに分かれる。単口縁の広口壺（665・874），鋤先状口縁の広口壺（158・159・664・740・873），無頸の広口小形壺（531）などがある。胴部はいずれも扁球形（103・740）で，鋤先状口縁壺の胴部には1条から2条のM字状凸帯がめぐるのが一般である。調整手法は，外面を丁寧なヨコヘラ磨きで仕上げ，内面は頸部付近まで丁寧にヘラ磨きしたものやナデて仕上げたものなどがあるが，いずれも作りの良い土器である。また，159の頸部外面にみられるようなヘラによる暗文を施したものもある。甕には，如意形口縁の系譜をひいたく字状口縁の甕（570・716・241・255）と，逆L字状ないしはT字状口縁をなす甕（55・203～205・522・722・723・842）




第 110 図　貯蔵穴出土の弥生土器変遷図(1/12)

番号は挿図の土器番号と同じ、①の番号は西原遺跡の土器番号である。

があり，如意形口縁の甕が消長する時期である。逆L字状ないしはT字状口縁の甕は，祖型となるⅡ期の甕（806・821・833）の口縁部がさらに拡大されたものである。口縁部の作りも，三角凸帯を横付けしたⅡ期の甕とは異なり，上端にのせて口縁部を作る手法を基本的にとっている。従って口縁部内面端部のヨコナデによるつまみ出しが目立つようになる甕を特徴とする。底部の形状もⅠ・Ⅱ期のものに比べ，底部付近のしまりが強く底径の小さいものに変化している。また，Ⅱ期の外方にはり出した脚台状を思わせる底部（618・619・790・823）は，この時期は殆ど姿を消してしまう。しかし，底部の器肉は全体として厚いものが多い。鉢（50）・高杯（530・708）とも鋤先状口縁を有す土器で，この時期の特徴を示している。器台（13・15）は筒状のもので，調整は外面を刷毛で仕上げたもの（13）と，内外ともナデて仕上げたもの（15）がある。この時期の器台は上下の開きが大差ないのが特徴でもある。

以上，上の原遺跡の貯蔵穴から出土した土器群も大きく三時期に区分した。これらを従来の弥生土器編年に対比するとすれば，Ⅰ期は前期末，Ⅱ期は中期初頭，Ⅲ期は中期前葉にほぼ比定できるであろう。

（井上）

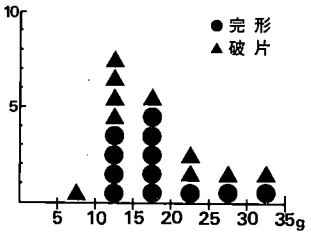
## 3．円盤状土器片について

円盤状土器片として取上げた遺物は，通常“メンコ”といわれている遺物に近い。しかし，メンコのように周囲を研磨した個体はなく，多くは周囲を打欠いて成形したままであり，若干周囲が磨消している個体があるだけである。本例のような遺物は，本来各遺跡で出土していると思われるが，報告された例は少ない。報告された一列である島根県西川津遺跡（註1）では，53個を集成している。大きさは，径3～7㎝前後の範囲にあり，5㎝前後の遺物が多い。重量は5～60ｇ程までの範囲にあり，20～25ｇの間が一番多いが，平均重量は27.6ｇである。報告者は，これらを土器片利用の紡錘車未製品として報告をしている。また同様の例を“メンコ”として報告している例（註2）も形態をさしているだけで，用途を示すと，推定しているわけではない。

| | 大きさ | 重量(g) | 出土位置 | 備考 | 図版番号 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | (4.3+α)×3.6 | 13.95 | 貯 26 | 一部欠 カメ | 12 |
| 2 | 4.5×4.1 | 14.55 | 貯 27 | ツボ | 13 |
| 3 | 5.0×4.4 | 21.4 | 貯 36 | カメ | 14 |
| 4 | 3.9×3.4 | 10.05 | 貯 43 | ツボ | 15 |
| 5 | 4.8×3.8 | 13.6 | 貯 45 | カメ | 16 |
| 6 | 5.1×4.0 | 16.0 | 貯 54 | カメ | 17 |
| 7 | 3.8×3.7 | 13.2 | 貯 55 | 抉り有り カメ | 18 |
| 8 | 4.2×3.4 | 11.35 | 貯 60 | 一部欠 カメ | 19 |
| 9 | 5.2×4.9 | 23.6 | 貯 61 | 一部欠 カメ | 20 |
| 10 | 5.0×4.5 | 32.8 | 貯 69 | カメ | 21 |
| 11 | 4.0×4.0 | 16.4 | 貯 77 | カメ | 22 |
| 12 | 4.4×3.5 | 7.9 | 貯 93 | 一部欠 カメ | 23 |
| 13 | (5.2+α)×4.7 | 16.9 | 貯 93 | 一部欠 カメ | 24 |
| 14 | 4.9×4.8 | 18.5 | 貯 93 | カメ | 25 |
| 15 | (5.5+α)×4.5 | 24.6 | 貯 120 | 紡錘車未製品(?) ツボ | 26 |
| 16 | 5.0×4.3 | 19.55 | 貯 125 | カメ | 27 |
| 17 | 4.8×4.7 | 29.4 | 貯 125 | 抉り有り カメ | 28 |
| 18 | (4.8+α)×4.1 | 13.5 | 貯 32 | 一部欠 ツボ (土器223) | 図ナシ |
| 19 | (4.3+α)×4.7 | 24.8 | 貯51・52 | 一部欠 ツボ | 〃 |
| 20 | 4.1×3.8 | 13.1 | 貯 122 | 一部欠 カメ | 〃 |
| 21 | 6.6×5.5 | 32.4 | 貯 124 | 一部欠 カメ | 〃 |
| 22 | (5.0+α)×5.3 | 26.0 | 貯 138 | 一部欠 ツボ (土器880) | 〃 |
| 23 | 5.6×4.1 | 15.6 | 土壙 (旧40号貯) | カメ | 〃 |

**表 5** 円盤状土器片計測表

さて，本遺跡例は，表５，第111図に示したように，大きさは４～５㎝台が殆どで，重量は10～30ｇ台にあり15ｇ前後（10～20ｇの間）が一番多い。成形は各貯蔵穴で解説したように，一方向から細く打欠き調整したものが多く，また両面より加工した個体もある。周縁を意図的に研磨したものはなく，磨滅が認められるものも多い。使用している土器片は，甕形土器の胴部破片が多いが，外反する口縁部を利用したもの，壺形土器の肩部や頸部を利用したものもあり，かならずしも平坦に近い部位を利用しているわけではない。このことは，西川津遺跡で考えられたのと同じ紡錘車未製品とするには，躊躇をおぼえさせる。とはいっても，第24図26は，コウ打により穿孔をはじめており，紡錘車の未製品といえないこともない。また，あきらかに紡錘車として，つくられた製品（第36図１～４）は，それぞれ20.85ｇ，16.8ｇ，32.1ｇ，29.0ｇと近い重量を示すことも重要である。ただ，紡錘車未製品とするには，残存する長辺が整っている点が気になる。それでは紡錘車未製品以外に考えられる用途は何かということになる。形・重量で最も類似しているものは，縄文時代の土器片錘である。そういう目でみると，第24図13，18，21，27，28など紐かけ用の抉りとしても良い打欠きが認められ，特に18の抉りは，打欠きでなく擦り切りである。また13・16などは沈線を長軸と取り入れており，表５の18，22も，壺肩部の沈線を取り入れている。



第 111 図　円盤状土器片重量分布度数表

ちなみに縄文時代の土器片錘の重量は，九州にはその出土例がきわめて少ないので渡辺誠氏の著書（注３）よりみると，10～20ｇ台が一番多いということである。また同じく漁網錘である切目石錘は，20ｇ台が最も多いとしている。上の原例は，前述のように10～20ｇが一番多く，重量的には，問題は少なく，形態的には明確な切目はつけられてはいないものの，類似は指摘できる。

九州では，縄文時代の土器片錘も，切目石錘も殆ど類例がないが，切目石錘とほぼ同じ重量を示す，打欠き石錘（註４）が主に河川沿いの内陸部遺跡で出土している。短軸・長軸は，４～５㎝が多く，重量も30ｇ以下が多い。上の原遺跡の土器片は，大きさ・重量とも類似しているといえる。

上の原遺跡より，管状土錘も出土しており（第36図６～８），いずれも欠損品で本来の重量は不明であるが，おそらく30ｇ台の中形品であると思われる。管状土錘には，100ｇを超す大形品，30ｇ台の中形品，10ｇ前後台の小形品がある。上の原遺跡の土器片は，中形品と小形品の中間の重量を示しているといえる。

遺跡の東側には，荷原川が流れ，筑後川に合流している。遺跡からは，筑後川まで直線距離にして３㎞程である。もし，以上の遺物を土器片錘と仮定しても，河川で投網に使用するとすれば，おそらくすぐ割れて使用できなくなり，用をなさず，他の網の形態を考えなければなら

ない。

円盤状土器片が，以上の点からだけではただちに土器片錘であると断定することには無理があるが，ここでは，その可能性があるという点を指摘するに留める。　　（木村）

註1　内田律雄，1989「土製品」朝酌川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書Ⅴ（海崎地区3），p.90～93。島根。

2　富永直樹，1988「塚畑遺跡の調査」安武地区遺跡群Ⅰ（久留米市文化財調査報告書56）久留米。

3　渡辺　誠，1973「縄文時代の漁業」（雄山閣）

4　小池史哲。1977「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告」第4集，福岡。

## 4．イイダコ壺形土製品

119号貯蔵穴より出土した，イイダコ壺形土製品については，遺物の項で触れているが，再度簡単に記述しておく。大きさは外形が，長さ9.1cm，口縁径3.8cmの円筒形をなし，一方が丸く塞がる。壁は，7.5～9.5mmと厚く，内径は，口径2.4×2.2cm，深さ8.1cmと小さい。口縁下3mmに，147°の角度をなして，外面より内側に2個の穿孔が行われている。さらに，一方の孔の下方6.5cmに，おそらく焼成後と思われる径7mmの孔があけられている。底部の一部を欠くが，重量は，94.35gである。以上がタコ壺形土製品の概要である。

本土製品の用途は，なんであるか決手になるものはない。単なる容器として考えても，底部付近の穿孔は，それに疑問を感じさせるし，小形でありながら，ミニチュア土器，模造土器というわけでもない。形態的に一番似ているのが，表題にもつかった，陥穽漁具としてのイイダコ壺である。

考古学的遺物としてのイイダコ壺は，通常弥生時代中期中葉に，コップ形で口縁下に孔を有するものが大阪湾から播磨灘沿岸にかけて出現し，弥生時代終末になって九州北部に拡がるとされている（註1）。大きさは，口径5～6cm，器高9～10cm程度であるとされる。

以上のような特徴は，本土製品と比較すると形態は類似するものの，遺物の時期，大きさに違いのあることを示している。即ち，本土製品は，同じ貯蔵穴内より出土している土器よりすれば，中期初頭あるいは中期前半であり，西口陽一氏が（註2），イイダコ壺としている，山口県下関市綾羅木郷遺跡出土の前期の側面に4孔をあけた陶埴を別にすれば，最も古い例となってしまう。また大きさにしても，小形のもので内径4cm，深さ8cmとすると，内径2.4×2.2cmでは，通常の半分にもみたないことになる。現在イイダコ壺に使用されるアカガイにしても通常殻幅7cm，殻高6cm，殻長11.5cm程であり，サルボウなどはややそれを下まわり，タマキガイは，殻幅2cm，殻高4.5cm，殻長5cmとやや小さい。またアカニシにしても，殻口径は5cm以

上ある。土製のものとして「日本水産捕採誌（下）」（註３）の飯鮪壺に記載されている，播磨地方例は，高さ３寸５分（10.6cm），口径１寸３分（3.9cm），胴最大部径２寸４分（7.3cm）とされている。口径は本例に一番近い例といえるが，やはり本例を上まわっている。

イイダコは，通常全長20cm，胴長４cm程で，胴幅２～３cm程である。もし，本土製品をイイダコ壺と考えた場合，小形のイイダコであれば一匹分がもぐり込む空間はあるといえる。したがって，積極的に本土製品を評価すれば，イイダコ壺と考えることも可能である。しかし，道具類，特に漁撈具は，その対象物によって，形態，大きさはかなり限定されており，特異な形，大きさは出現しにくいものであることも事実であり，また本遺跡が，遺跡南側を流れる筑後川が流入する有明海から40km以上の距離にあり，イイダコ壺による雑漁撈を日常的活動として行っていたとも考えにくい位置にあることもまた事実である。

本製品を，漁撈具として評価した場合，他に考えられるのは，河川の小形魚類を対象とした陥穽具としての，ウケ・ドウの類，または，以前イイダコ壺に関して考えられた事のある「ズミ」（土錘）の一種とも考えられるが，いずれも積極的に評価するだけの根拠はない。

本土製品は底部付近に穿孔があり，単なる容器とは考えられないものの，イイダコ壺としても，形態の類似と小形のイイダコ程度であれば，捕獲可能であるとはいえるものの断定するだけの根拠はない。しかも，時期，海からの距離，平均的な大きさなど否定材料も多い。したがって，結論としては，用途不明土製品とする以外ないが，積極的に評価すれば，イイダコ壺などの漁穽具としての可能性が高いといえる。（木村）

註１　和田晴吾，1988「漁撈」弥生文化の研究５，153～161頁。東京。

２　西口陽一，1989「大阪・イイダコ壺」考古学研究36－１，25～48頁。岡山。

３　農商務省水産局，1910「日本水産捕採誌」。東京。

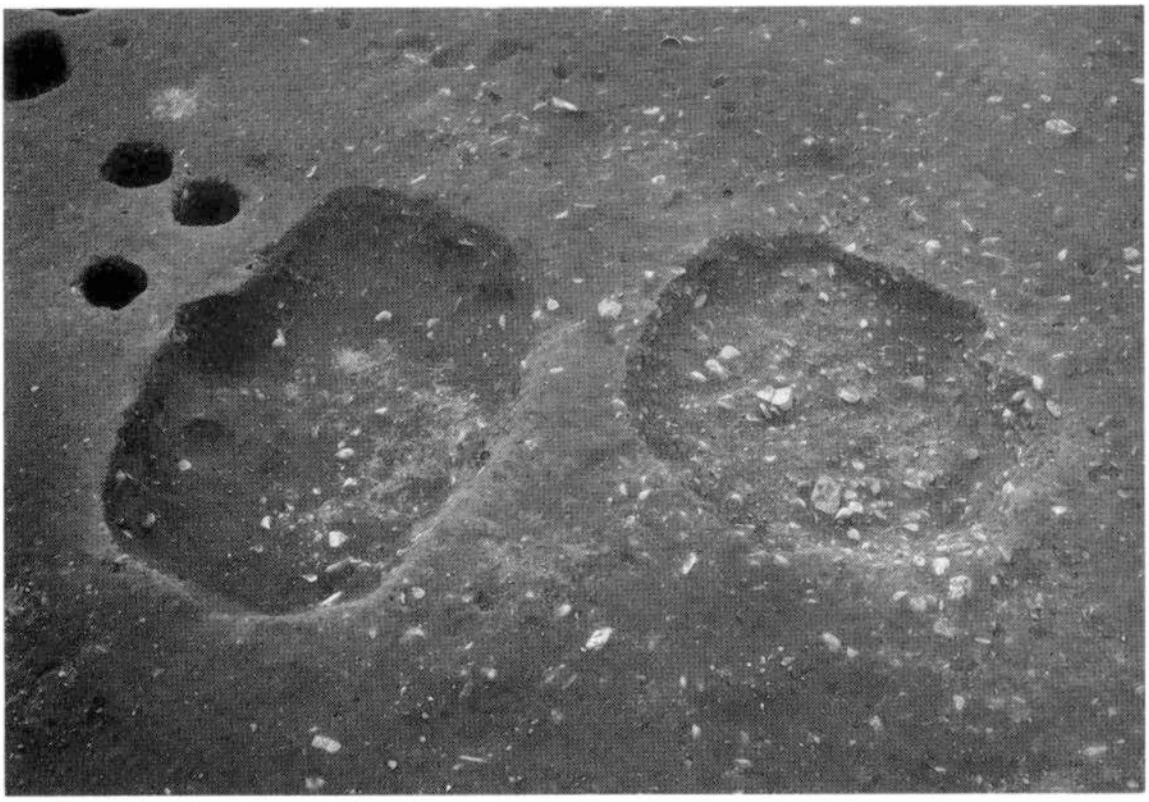
# 図　　版

1　上の原遺跡周辺航空写真

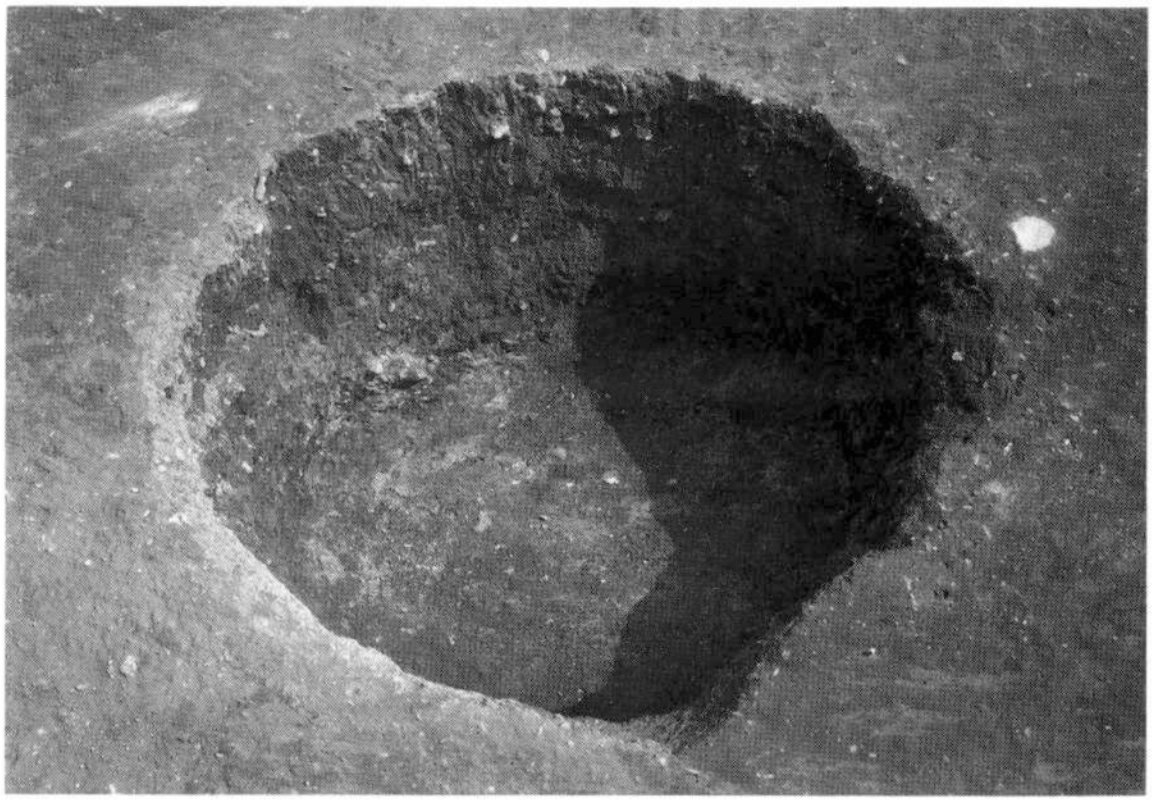
2　上の原遺跡貯蔵穴群全景気球写真

図版 2

1　1～6号貯蔵穴群全景（北西から）



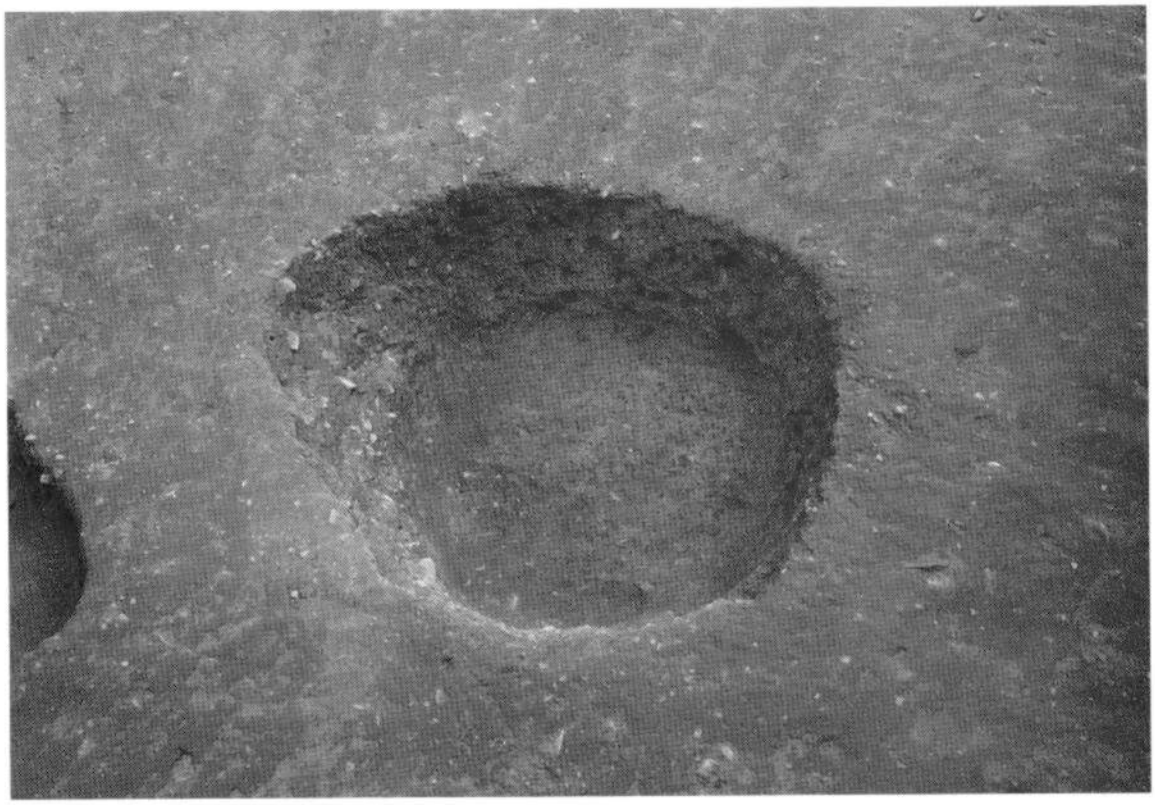
2　1号貯蔵穴（右）・土壙（北から）



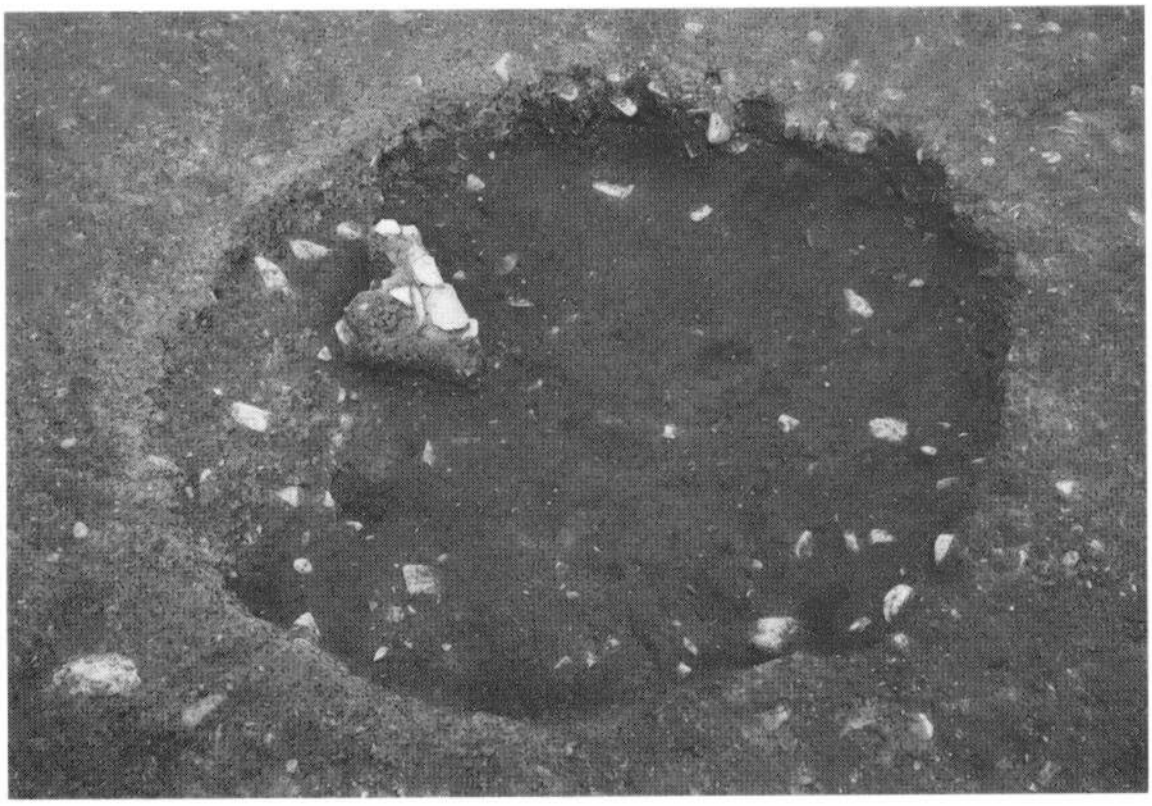
1　3号貯蔵穴（南西から）

2　4号貯蔵穴（南西から）

図版 4



1　5号貯蔵穴（南西から）

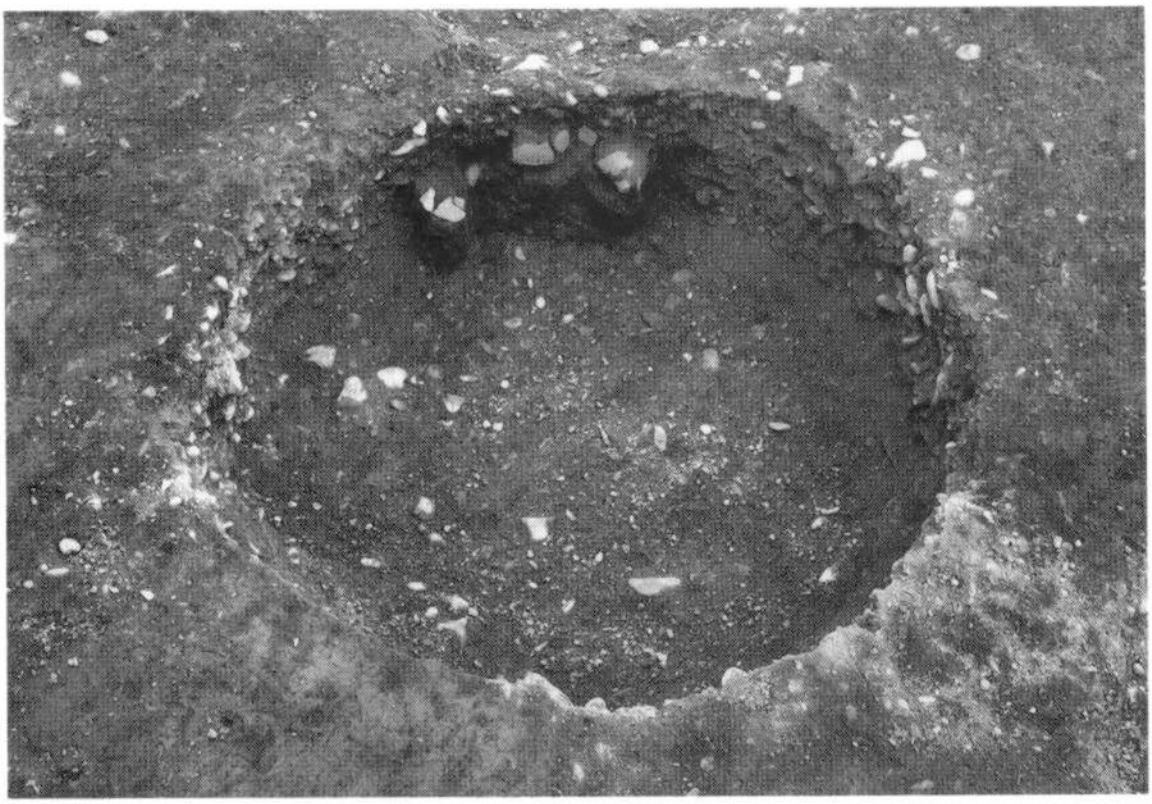


2　6号貯蔵穴（南西から）

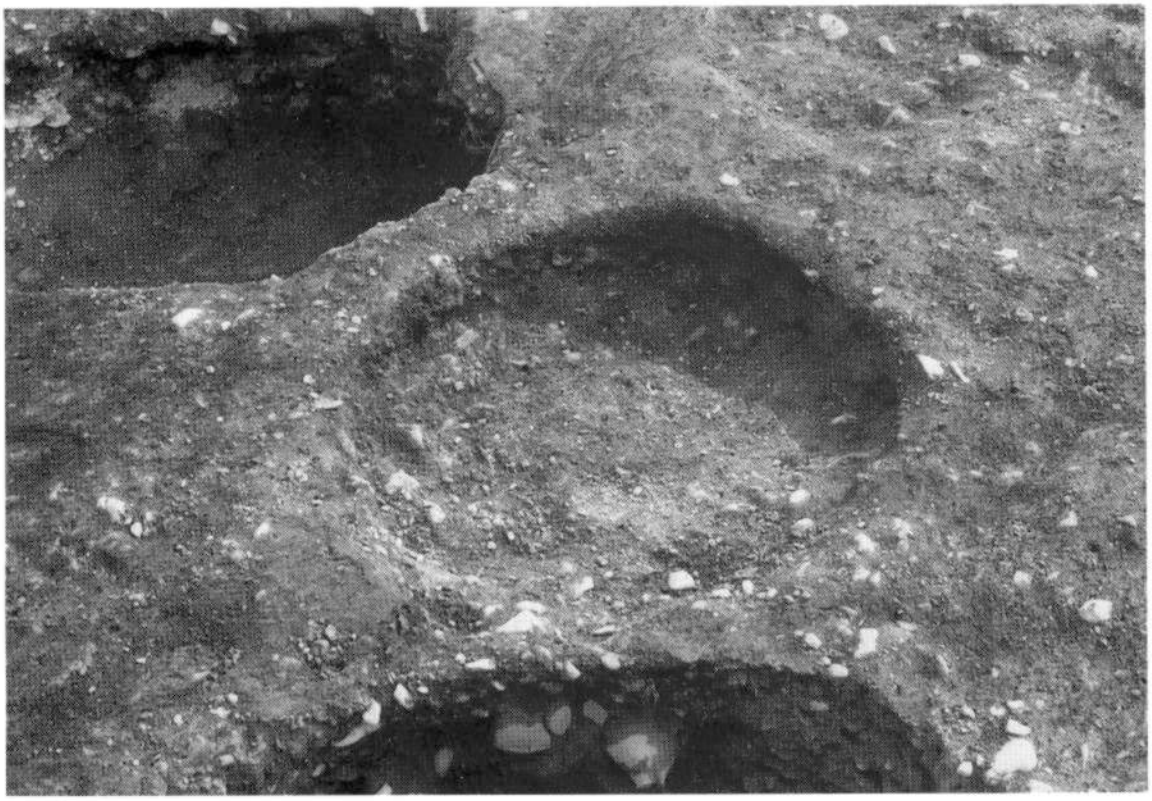
1　8～24号貯蔵穴群全景（北から）

2　13～20号貯蔵穴群（北から）

図版 6



1　13号貯蔵穴（北から）



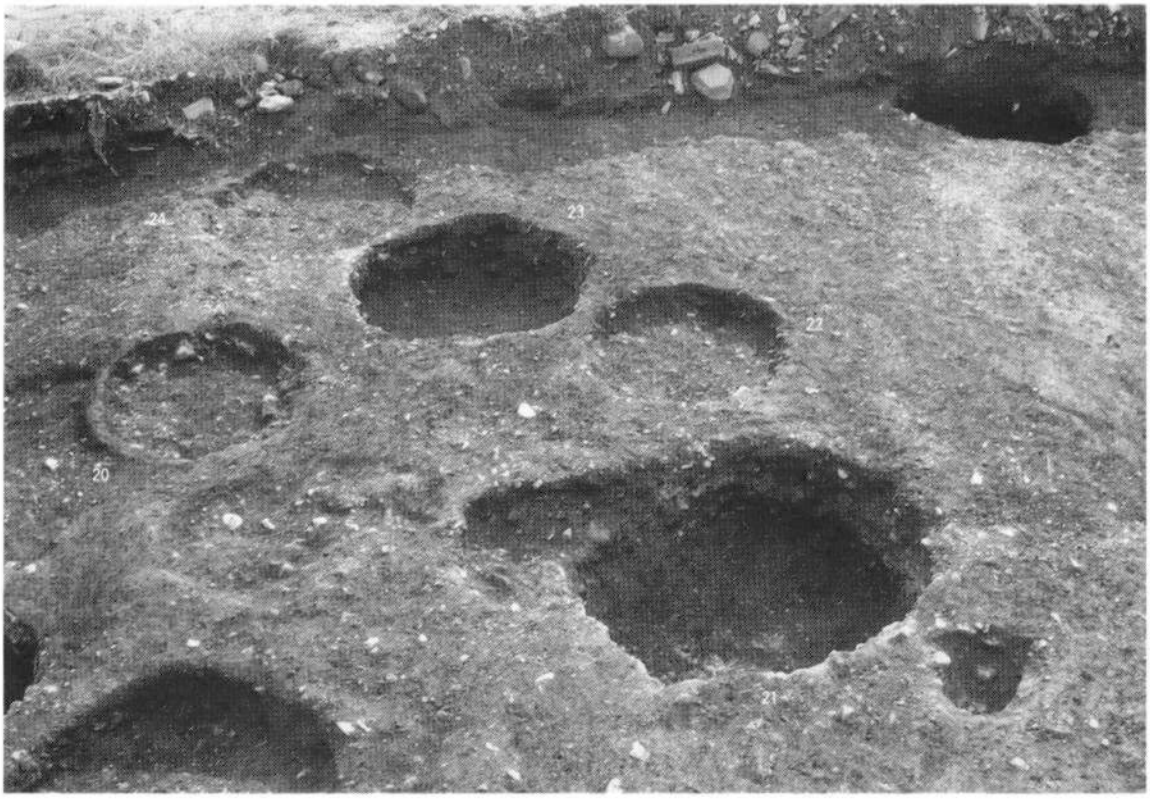
2　14号貯蔵穴（北から）

1　17号貯蔵穴（東から）

2　14～20号貯蔵穴群（北から）

図版 8

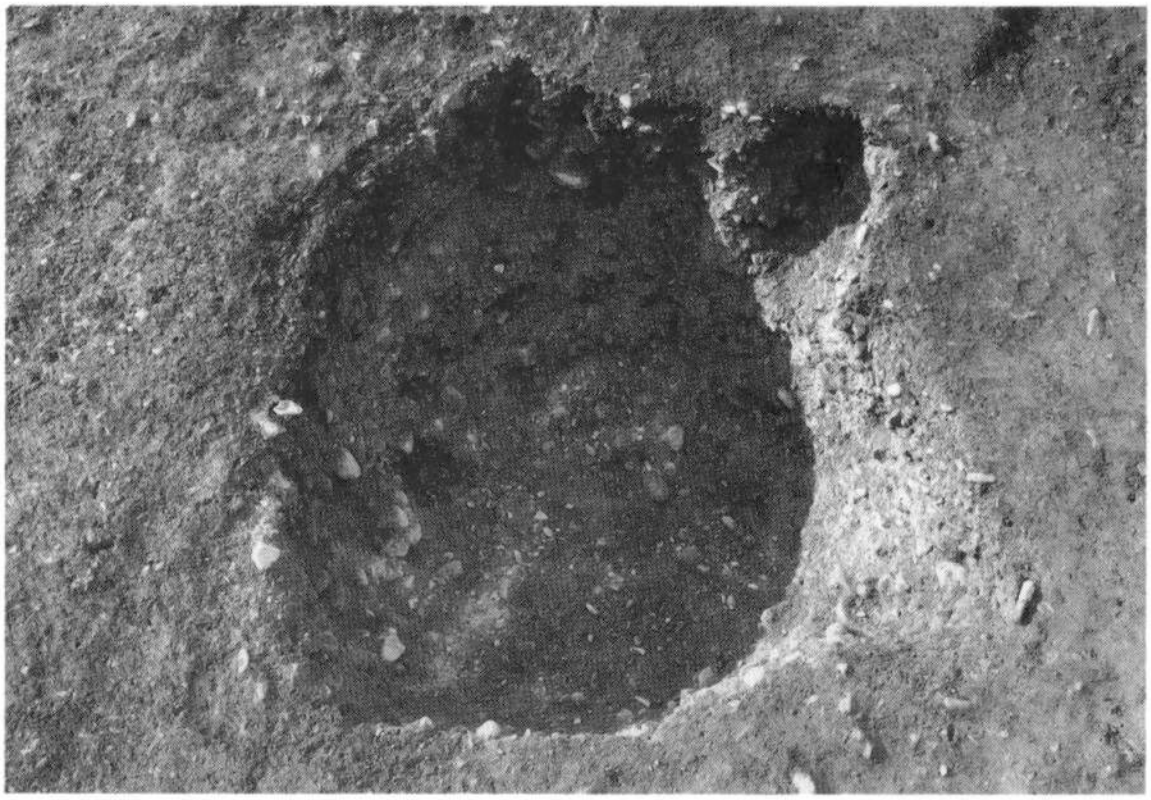
1　19号貯蔵穴（東から）



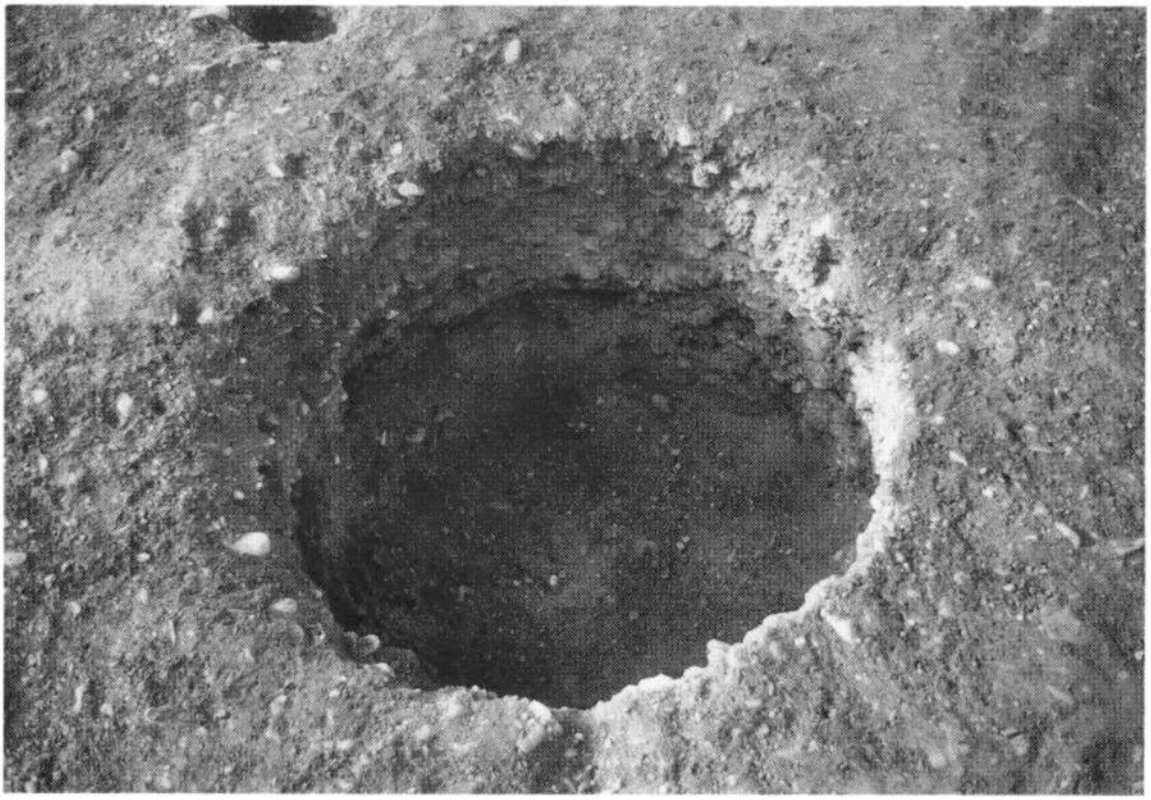

2　20～24号貯蔵穴群（北東から）

1　21号貯蔵穴（西から）

2　22～24号貯蔵穴群（北から）



1　26号貯蔵穴（北から）



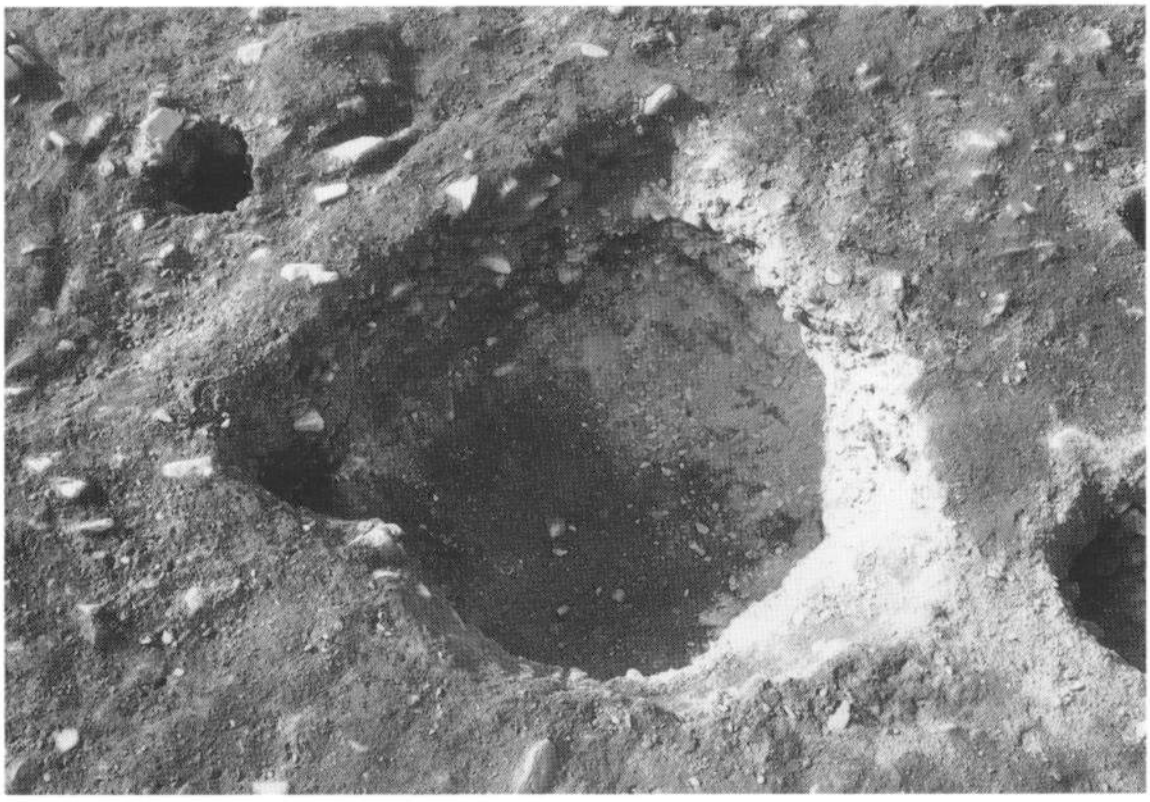
2　27号貯蔵穴（北から）

1　28号貯蔵穴（南東から）

2　28号貯蔵穴内土器出土状態（北から）

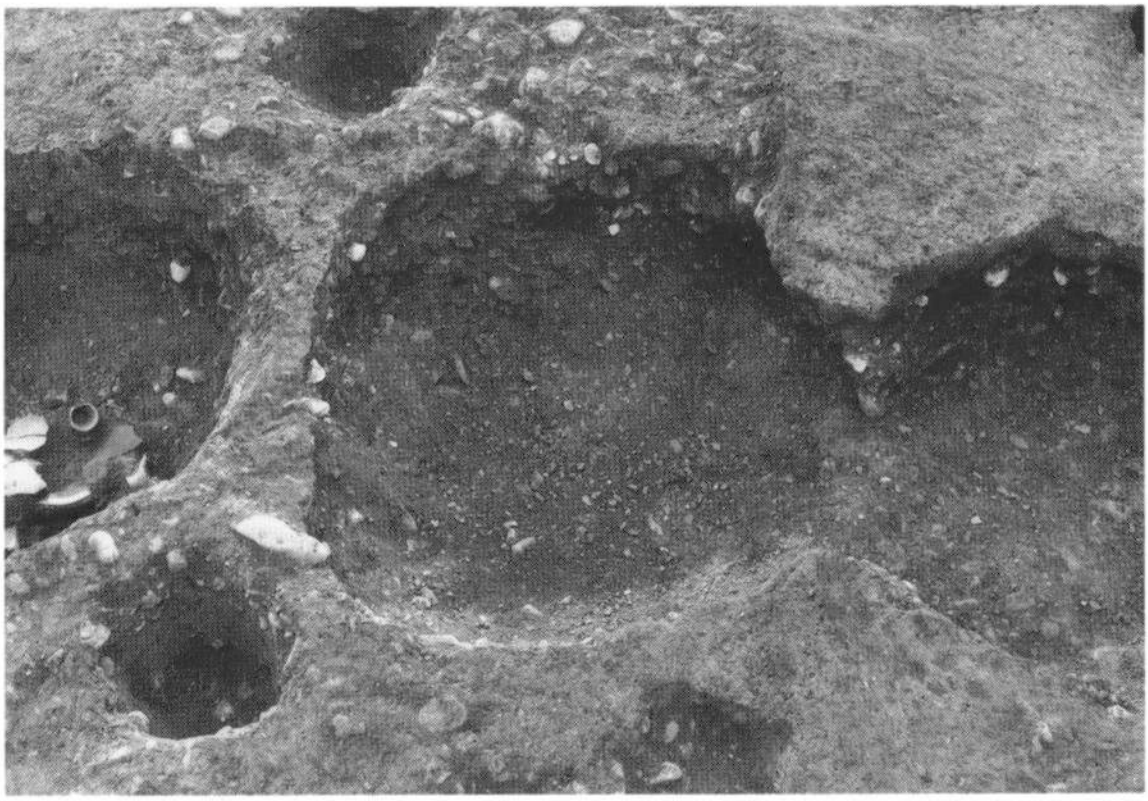
図版 12

1　29号貯蔵穴（北から）



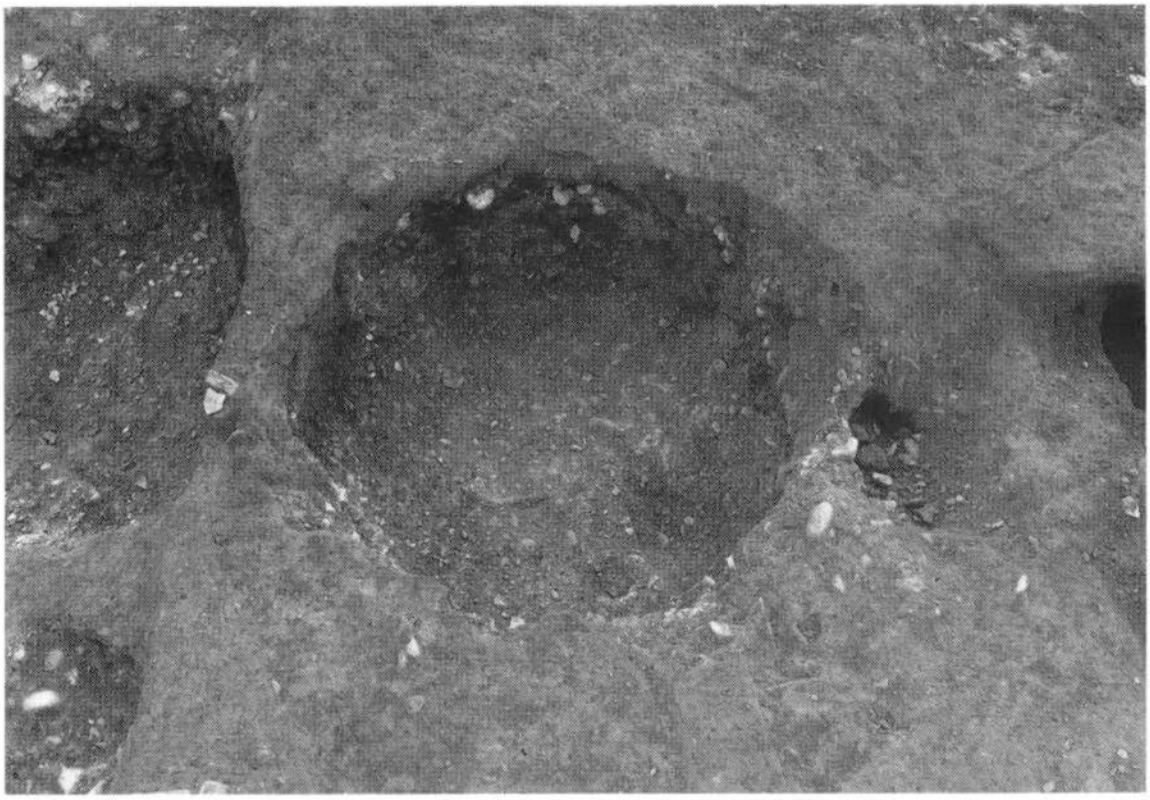
2　30号貯蔵穴（南から）

1　31・32号貯蔵穴（北から）

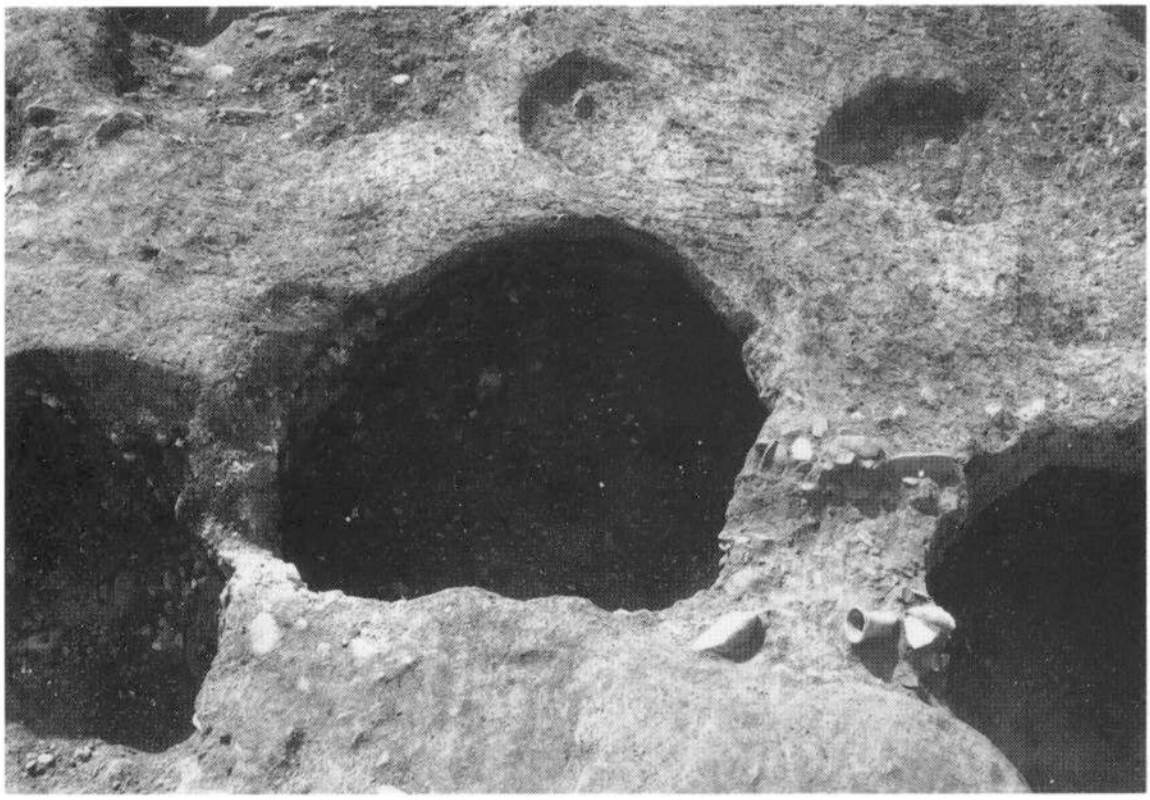


2　33号貯蔵穴（北から）

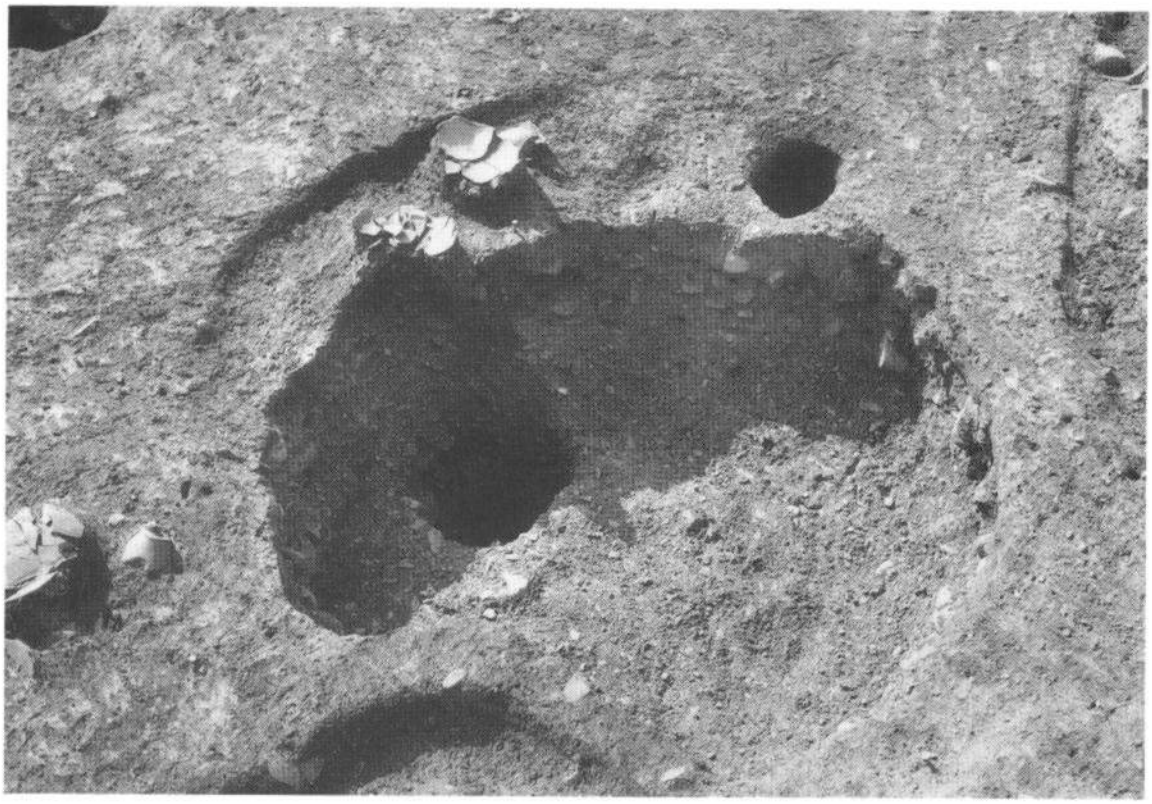
図版 14



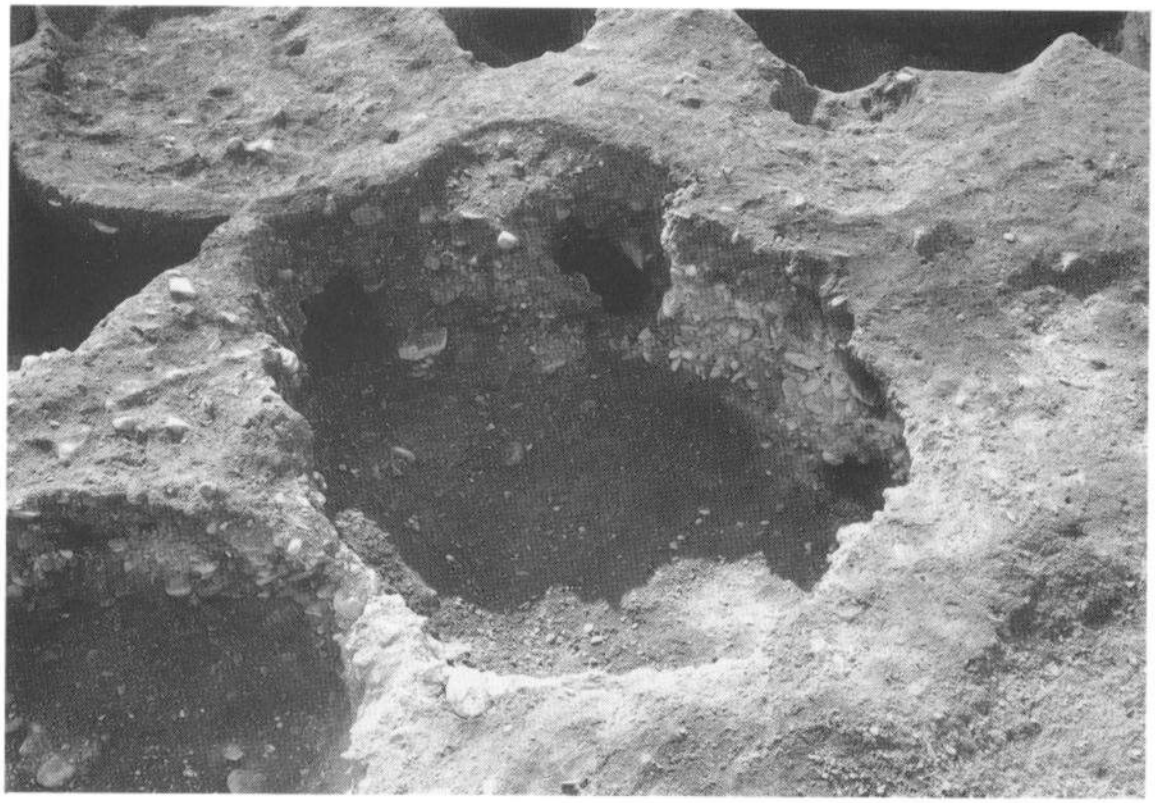
1　35号貯蔵穴（南から）



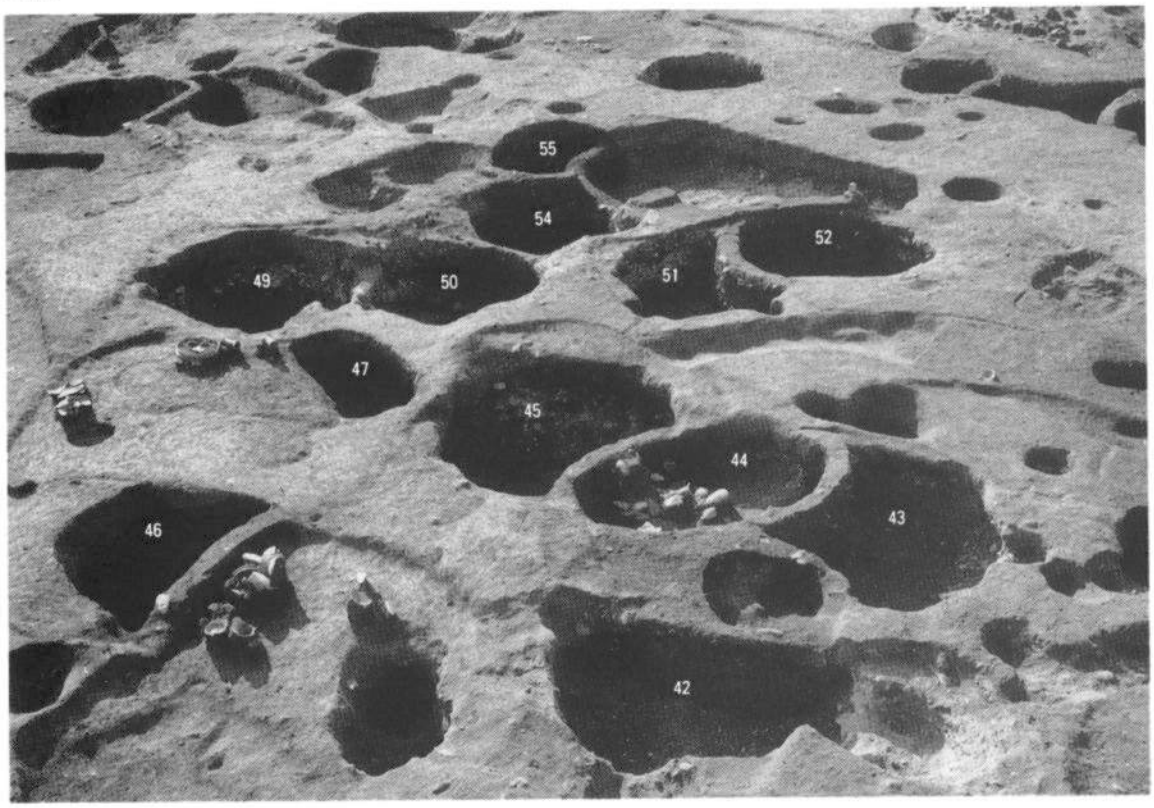
2　36号貯蔵穴（北から）



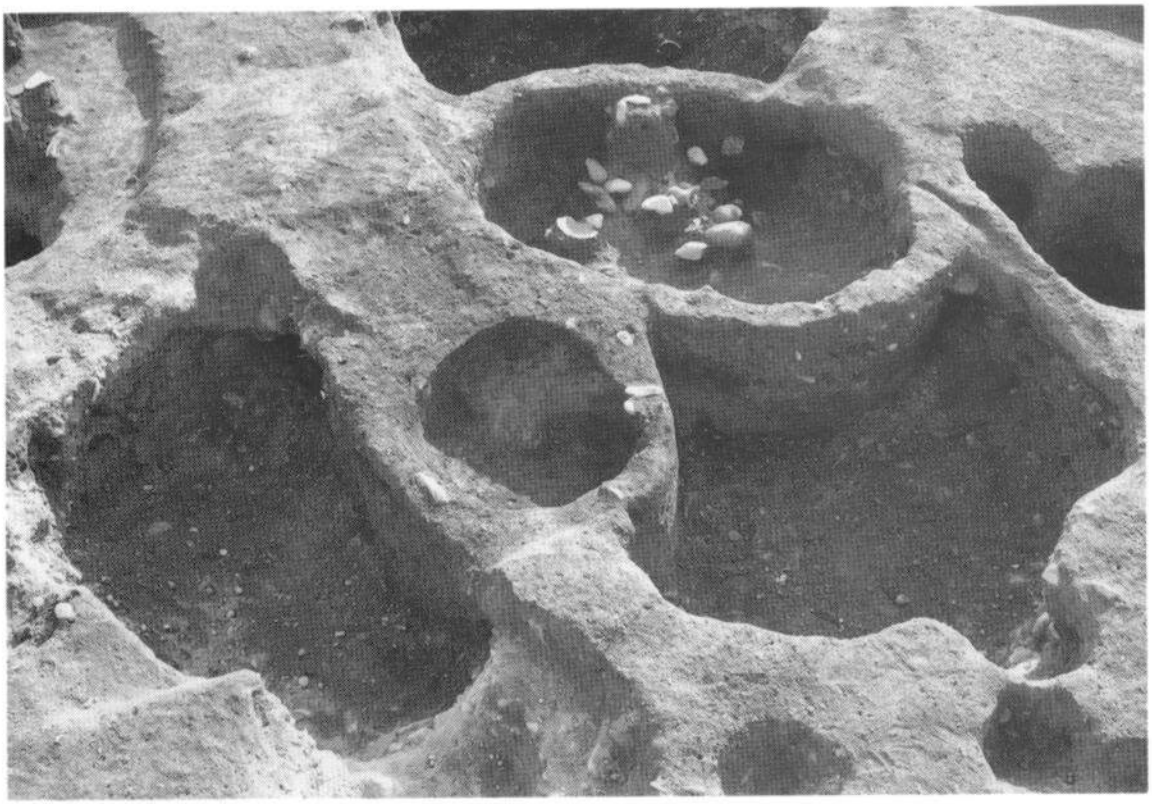
1　37号貯蔵穴（東から）



2　40号貯蔵穴（北東から）

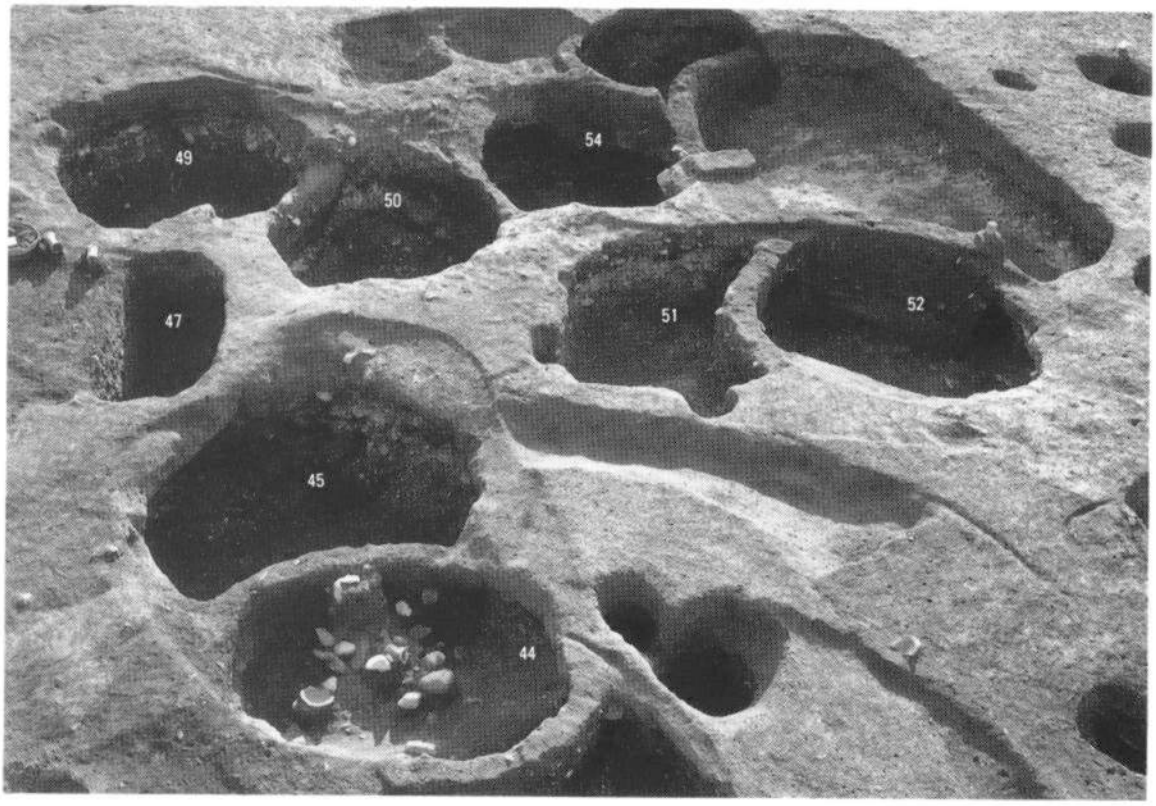



1　42～55号貯蔵穴群（北東から）



2　42～44号貯蔵穴群（北から）

1　44号貯蔵穴（北東から）




2　44～55号貯蔵穴群（北東から）

図版 18

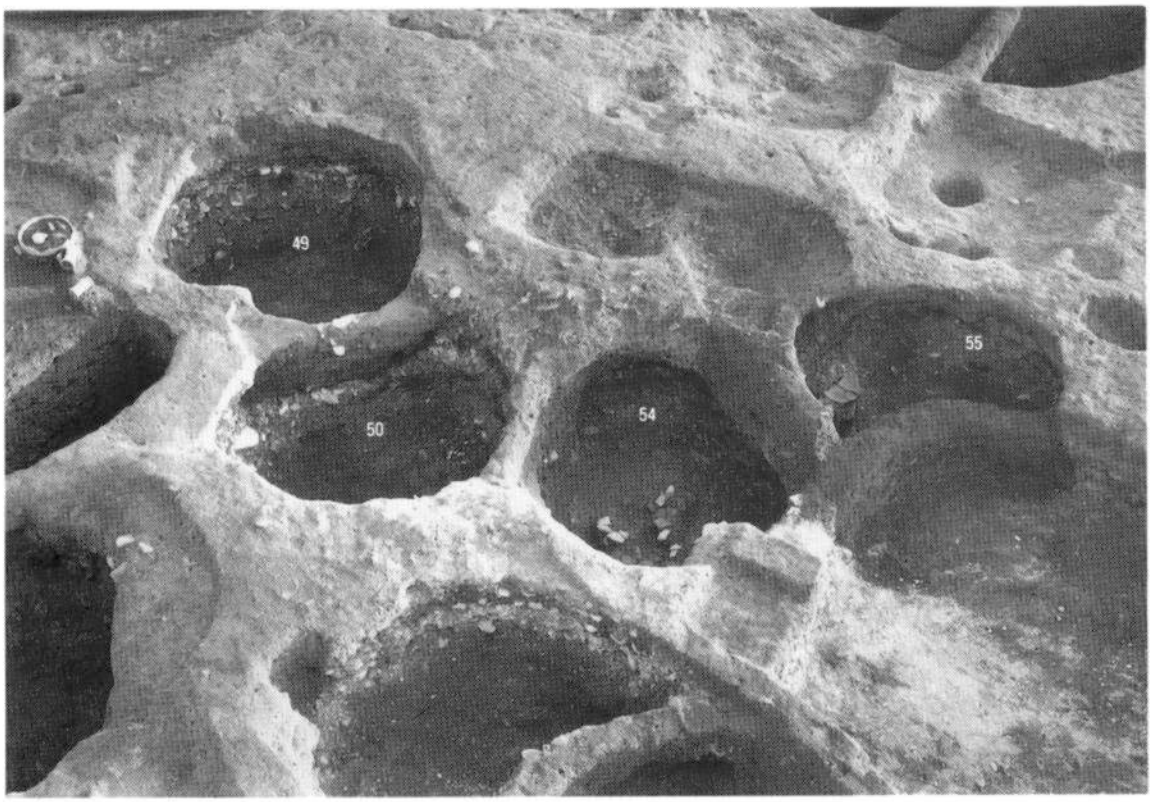
1　46号貯蔵穴（東から）

2　47号貯蔵穴（東から）

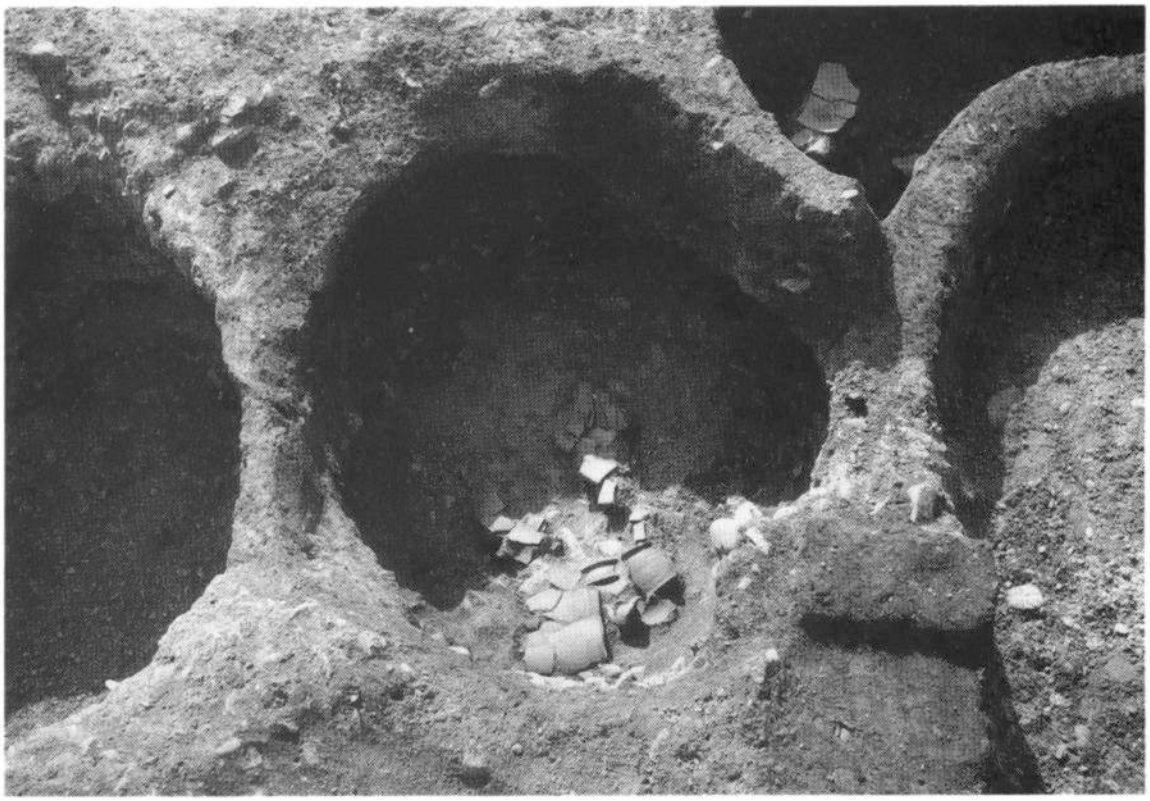
1　49・50号貯蔵穴（北東から）

2　51・52・54号貯蔵穴群（北東から）

1　51・52号貯蔵穴（北から）



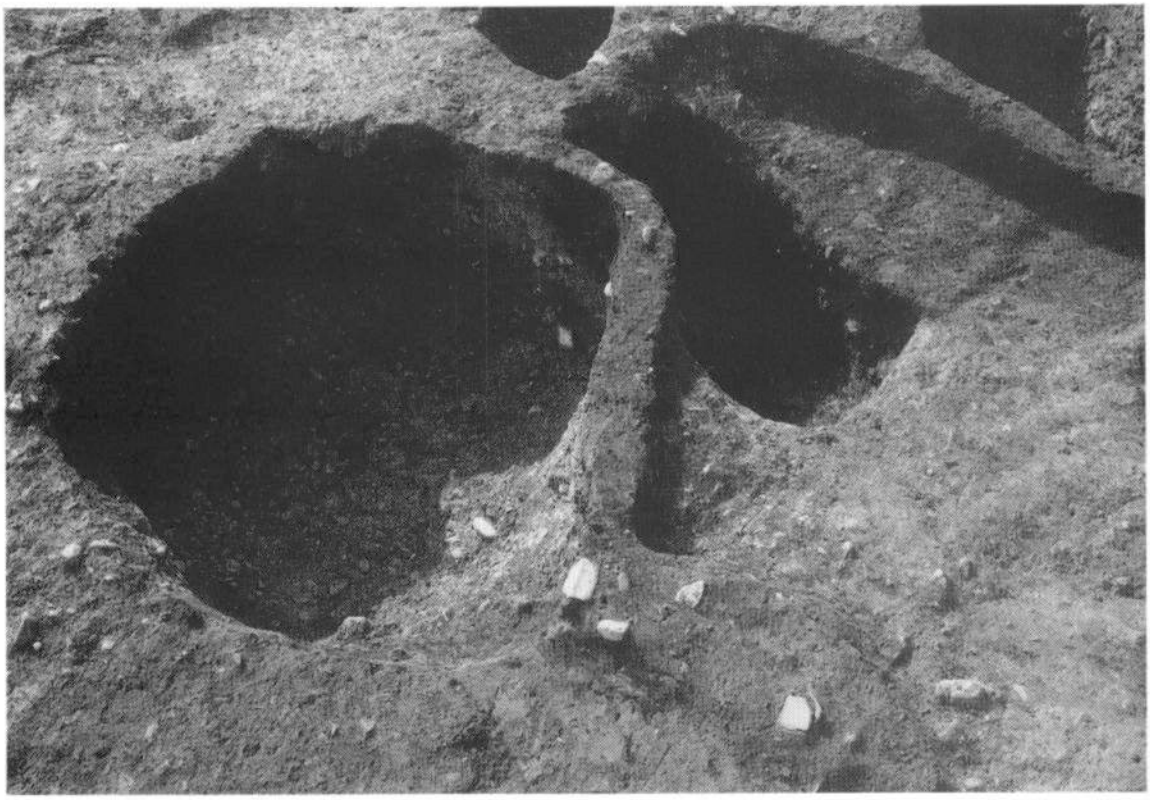

2　49～51・54・55号貯蔵穴群（北から）



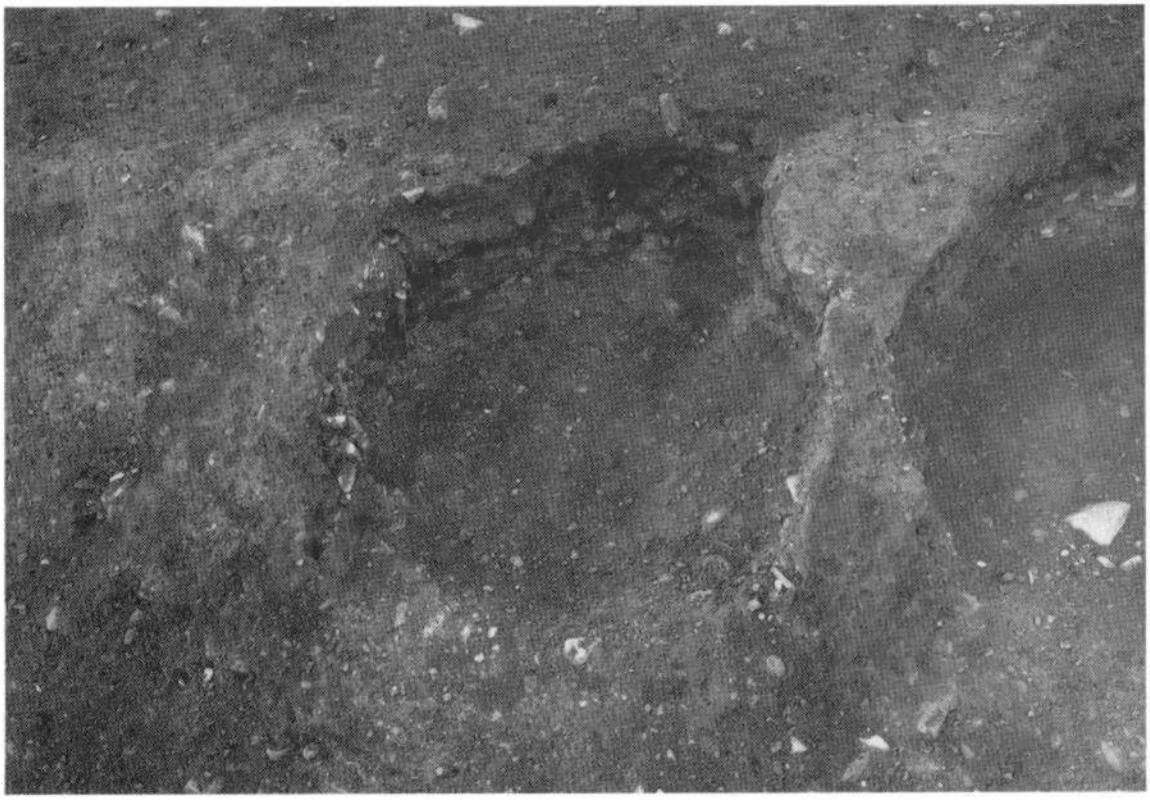
1　54号貯蔵穴（北から）

2　50～57号貯蔵穴群（北から）

図版 22



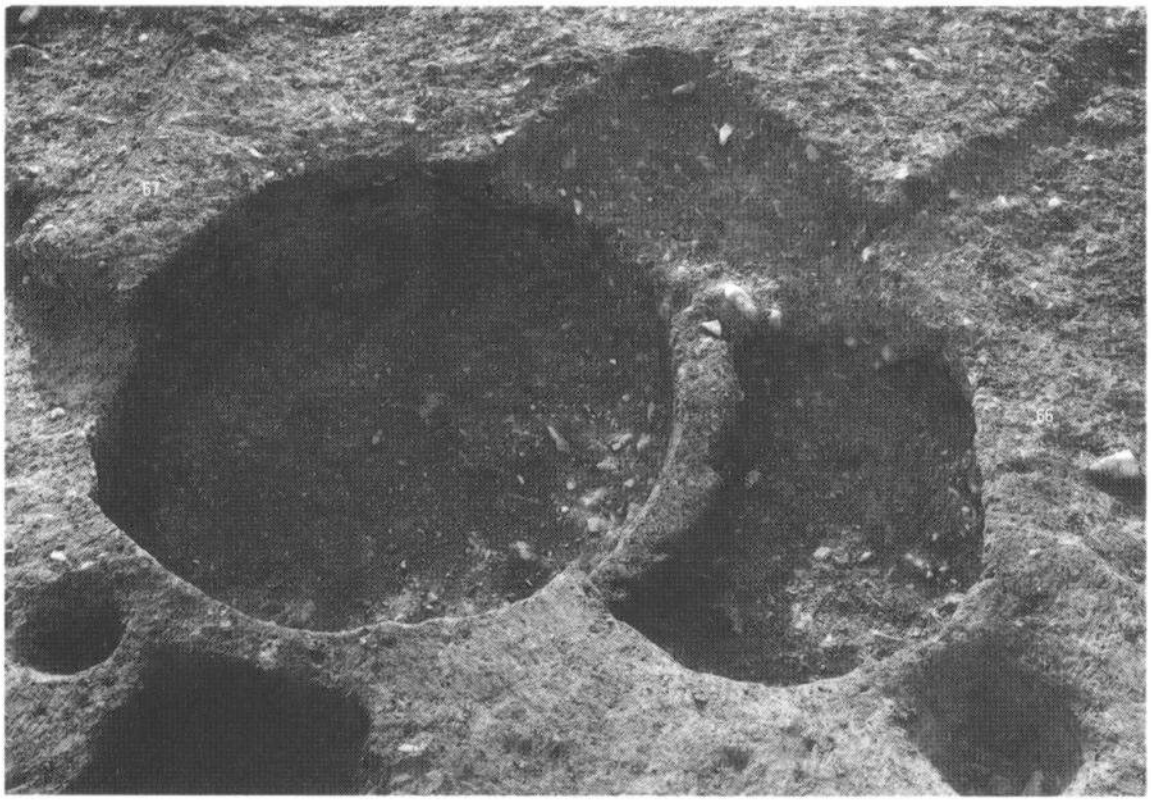
1　56・57号貯蔵穴（北東から）



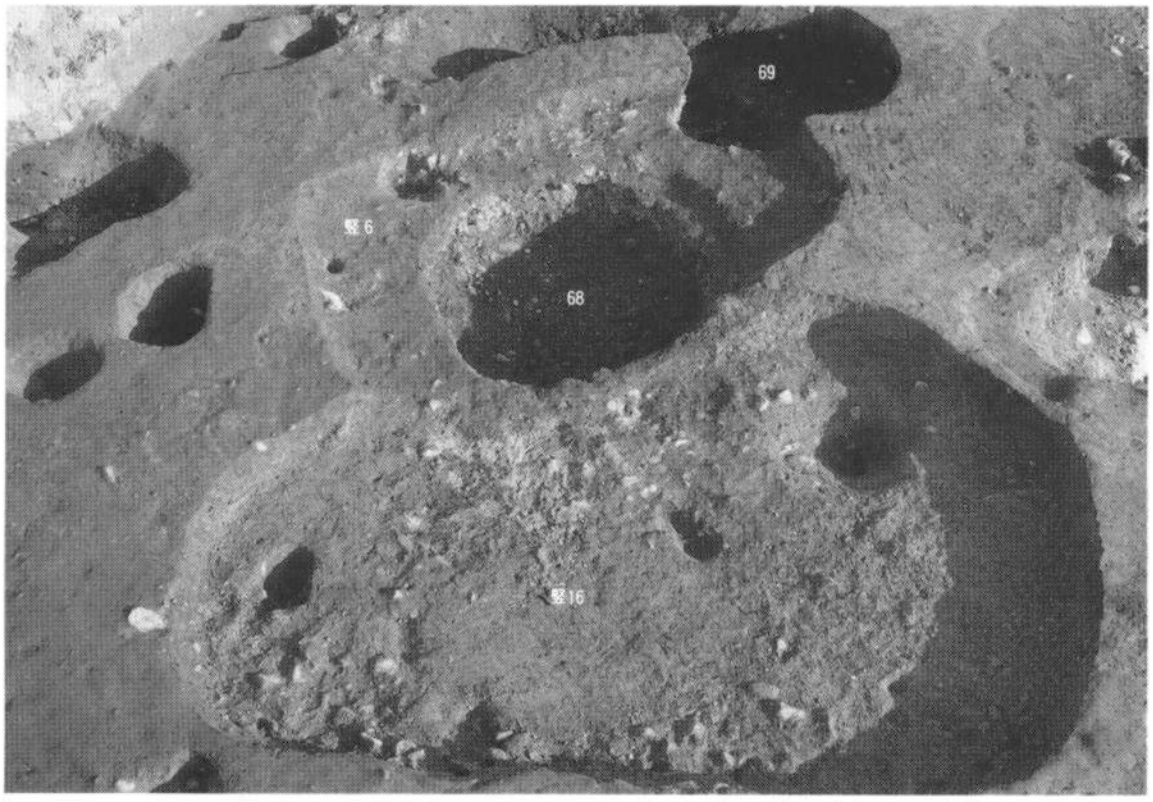
2　62号貯蔵穴（東から）

1　63号貯蔵穴（東から）

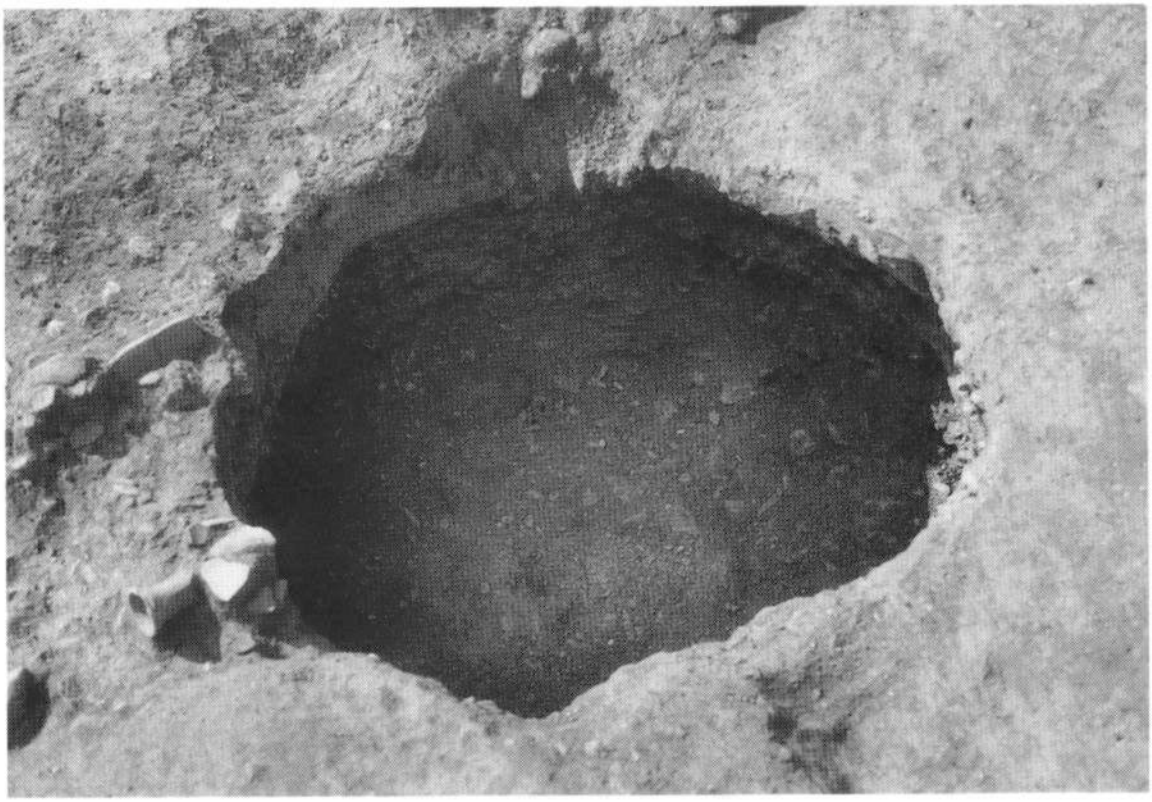
2　65号貯蔵穴（北から）



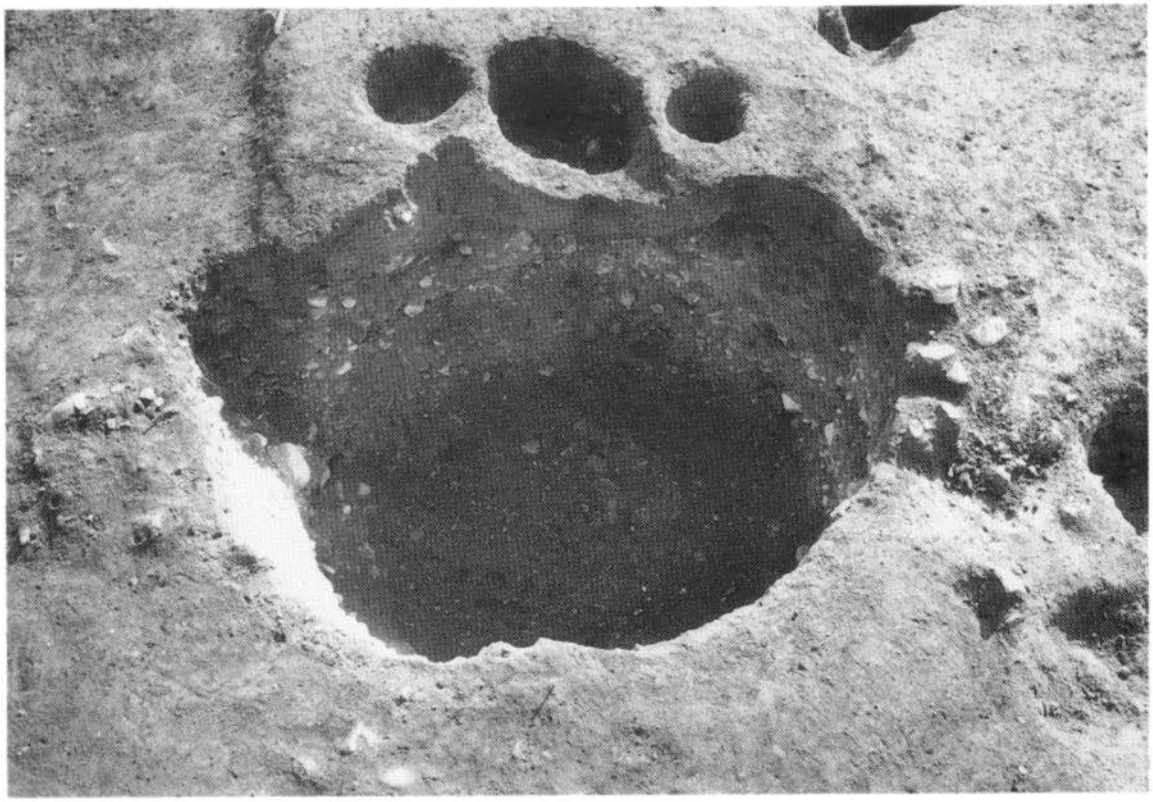

1　66・67号貯蔵穴（東から）



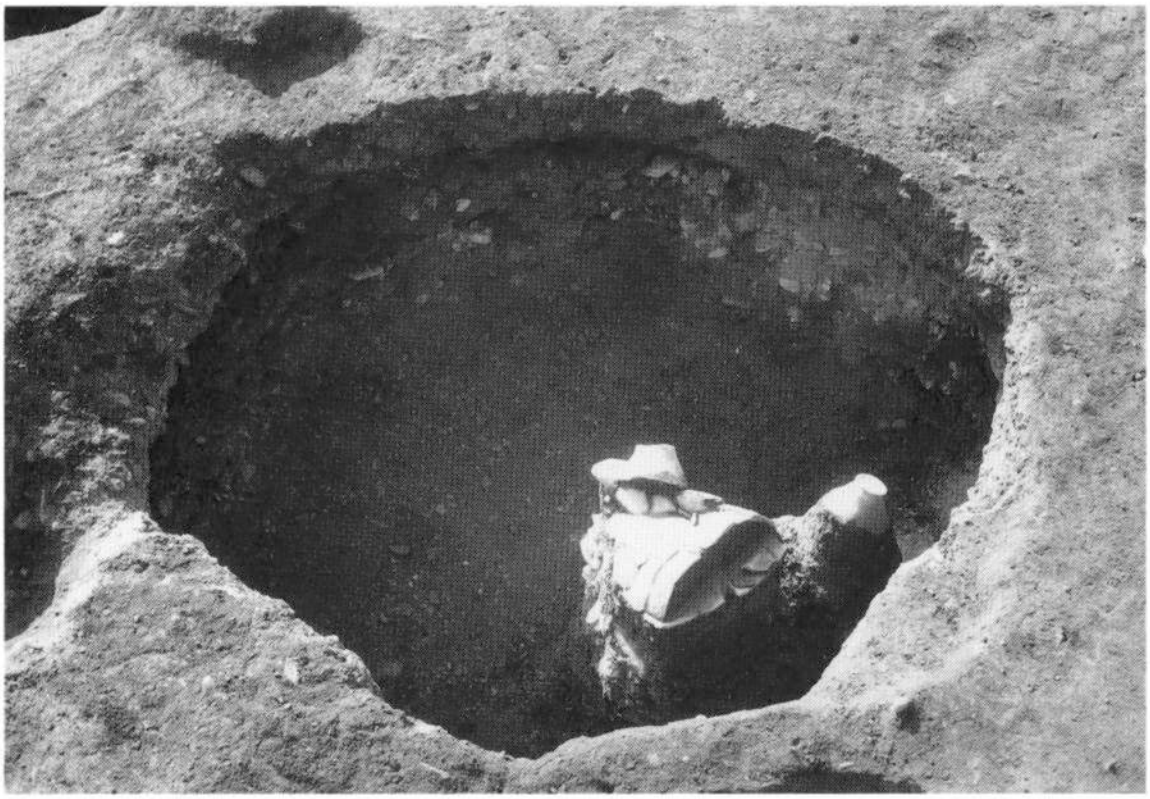

2　68・69号貯蔵穴と6・16号竪穴（西から）



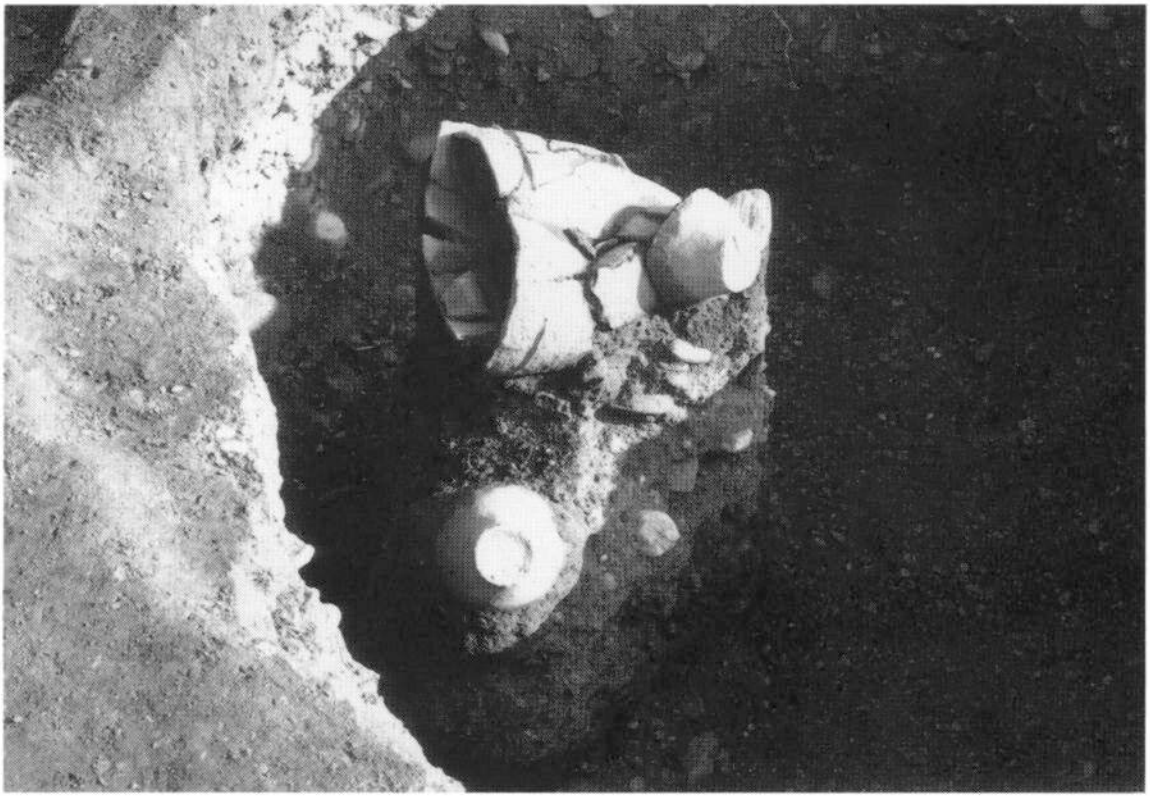
1　70号貯蔵穴（北から）



2　71号貯蔵穴（北から）

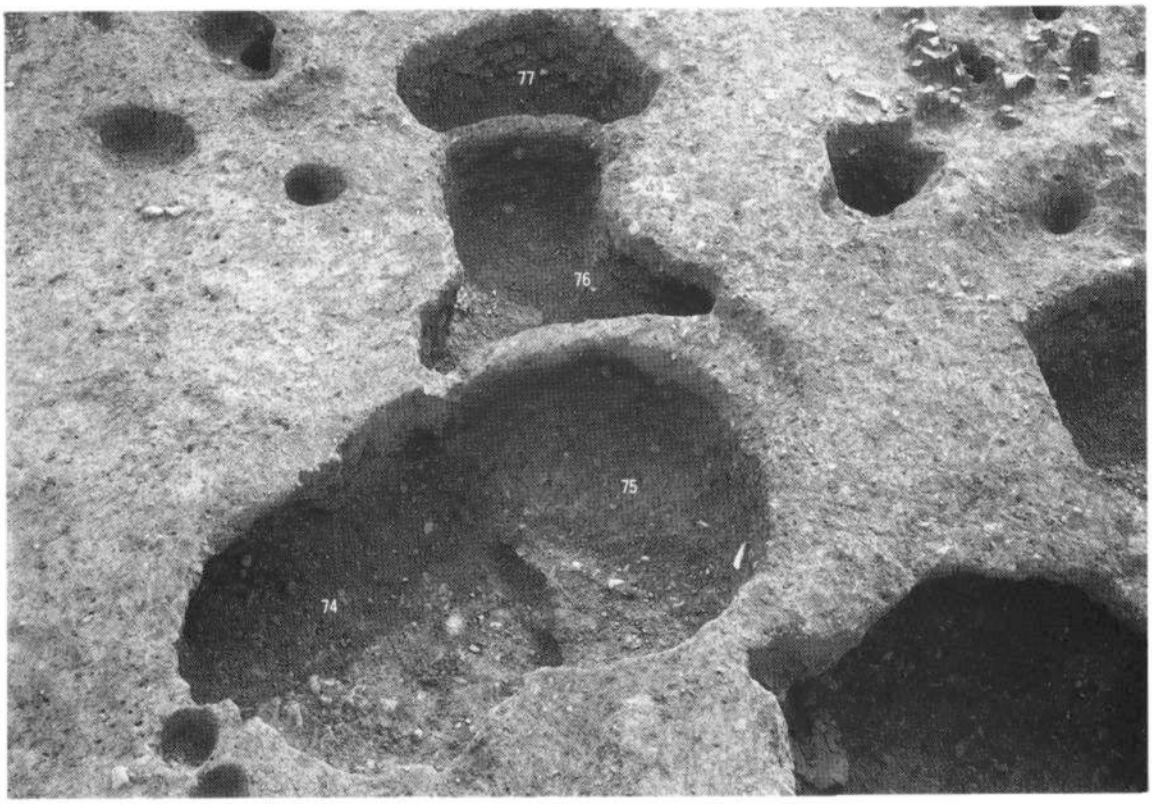


1　72号貯蔵穴（北東から）

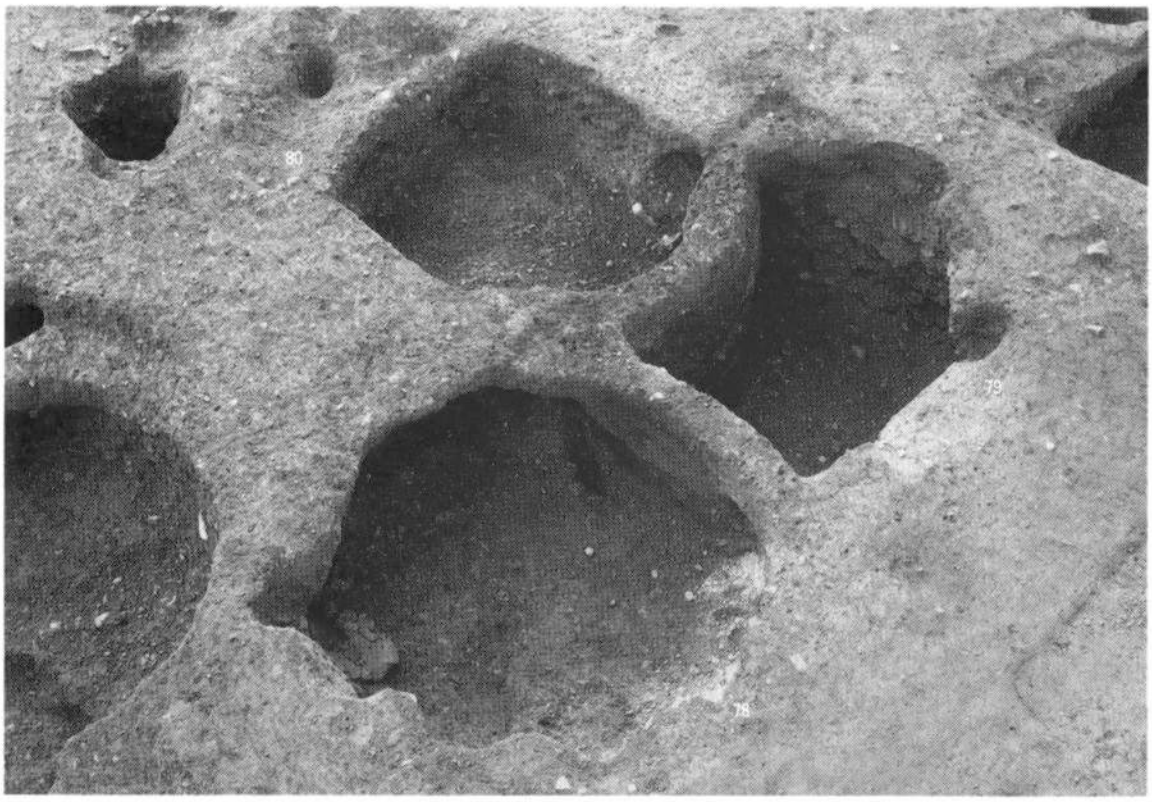


2　72号貯蔵穴内土器出土状態（西から）

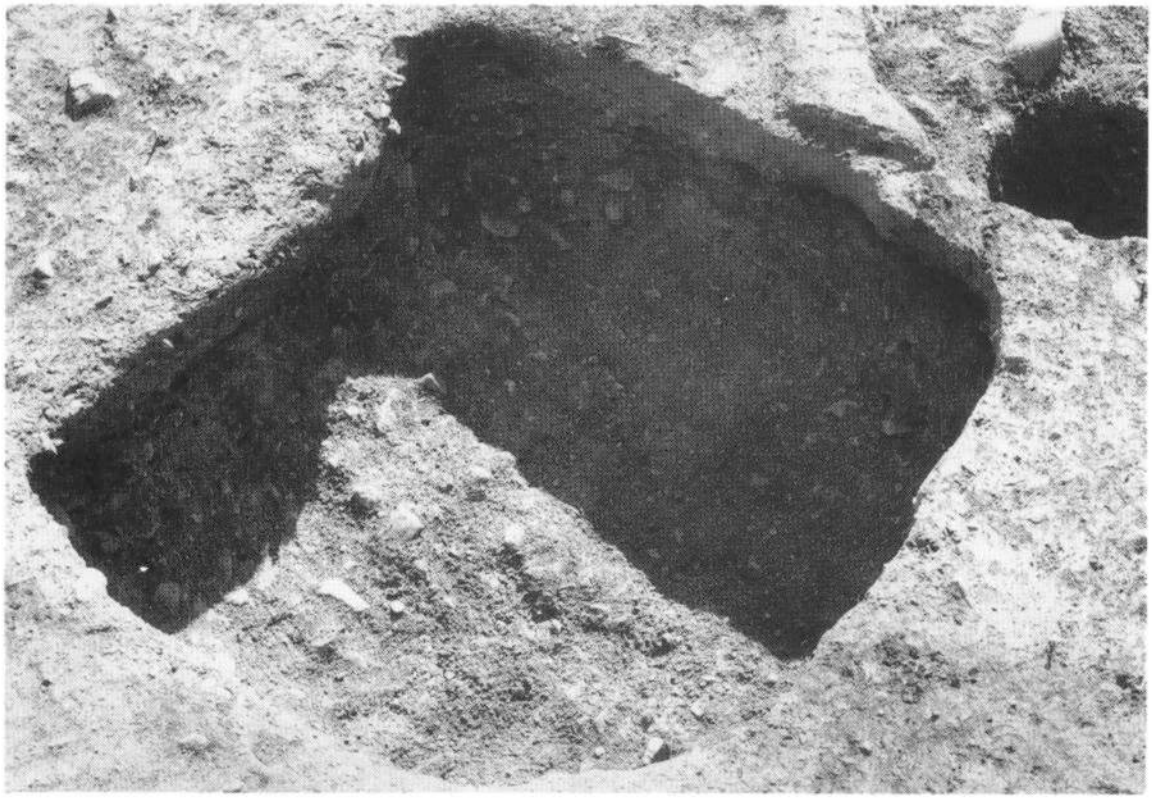
1　73号貯蔵穴（北から）



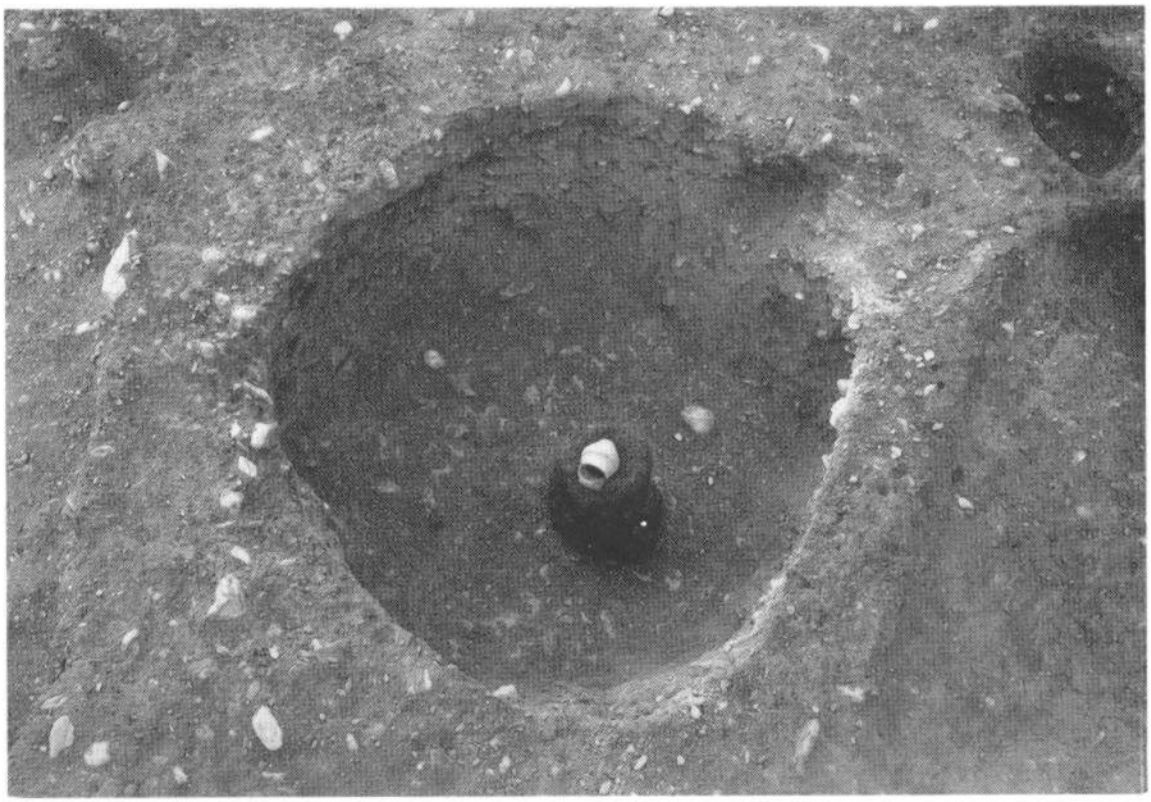

2　74～77号貯蔵穴群（北から）



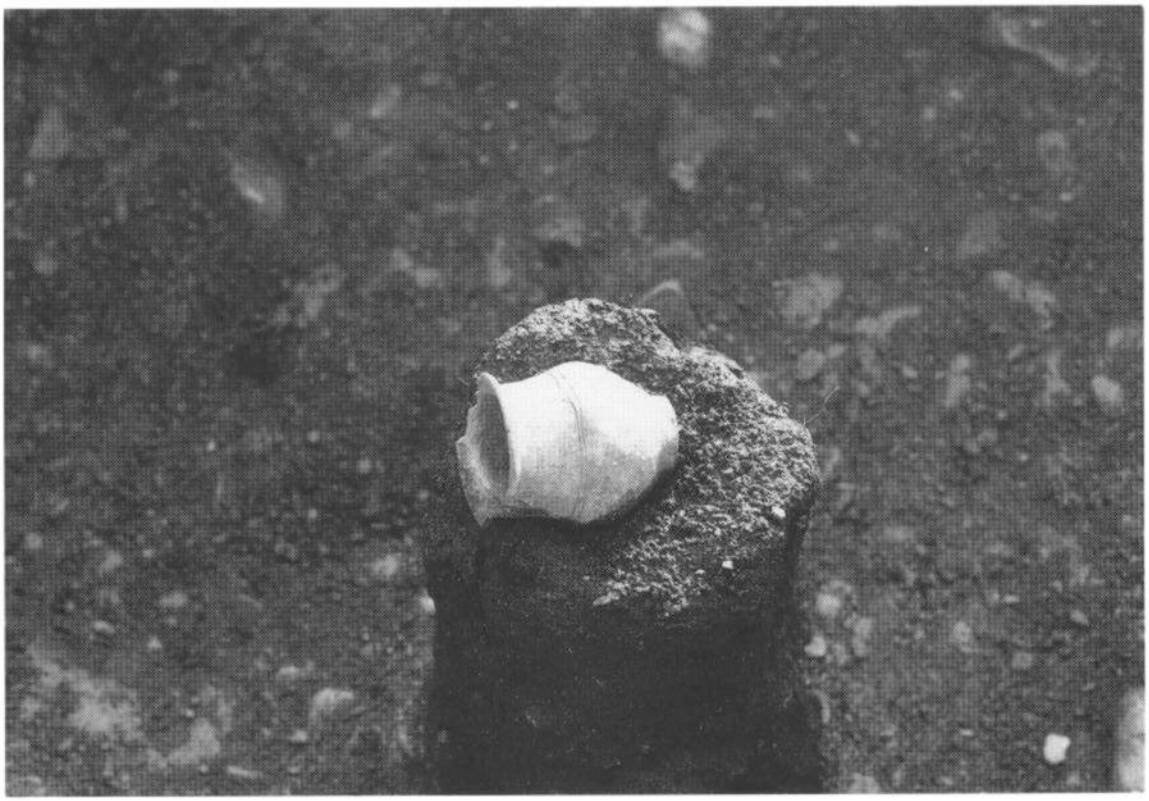

1　78～80号貯蔵穴群（北東から）



2　81号貯蔵穴（北東から）

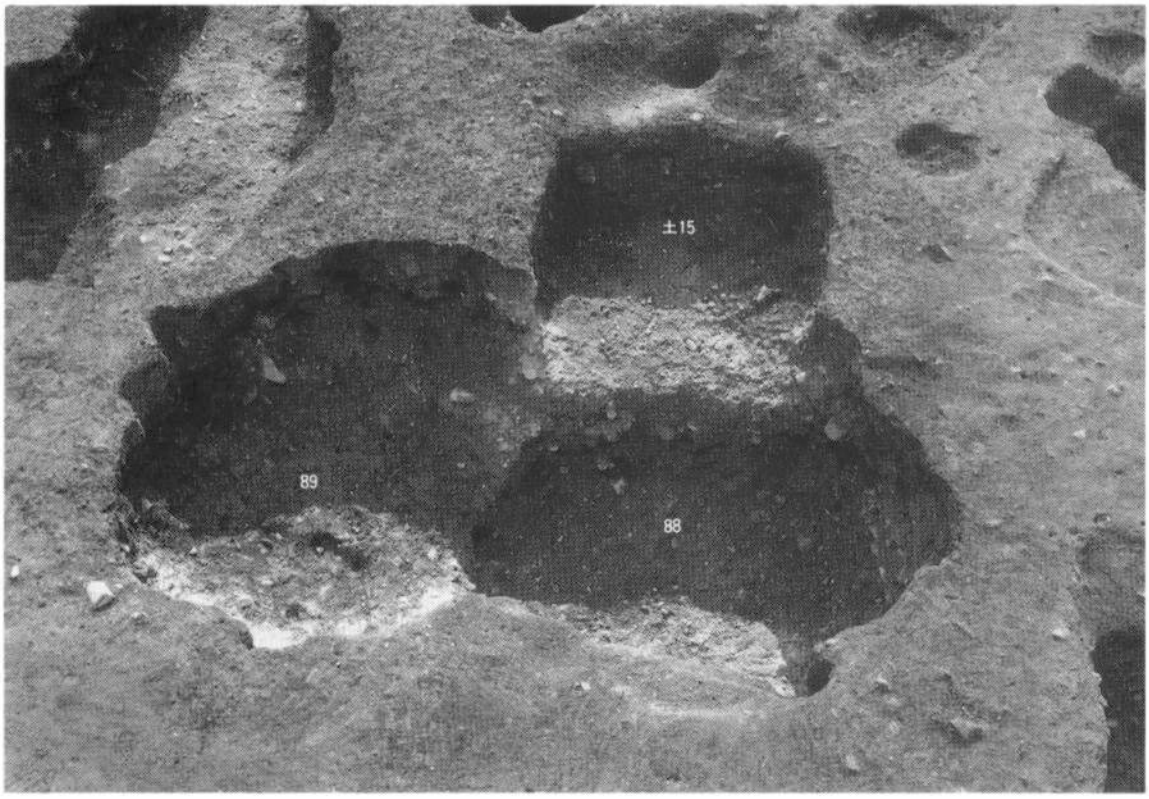


1　84号貯蔵穴（東から）



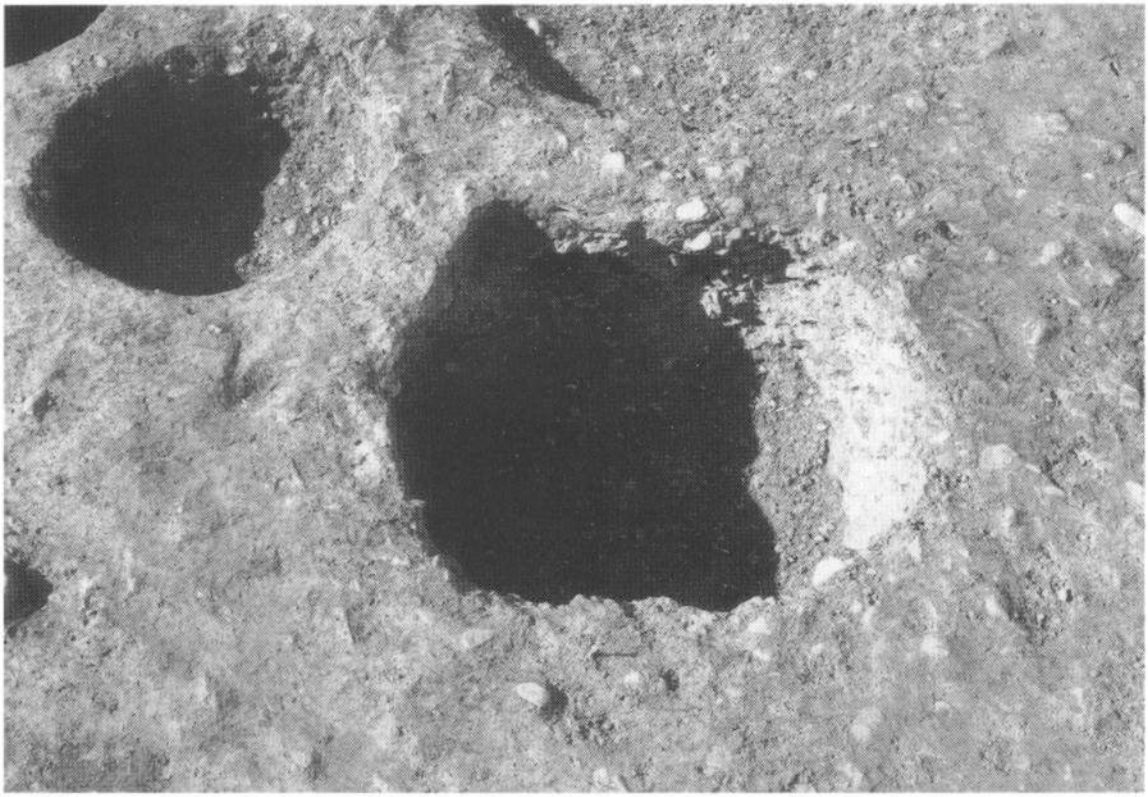
2　84号貯蔵穴内土器出土状態（北から）

1　85号貯蔵穴（北西から）

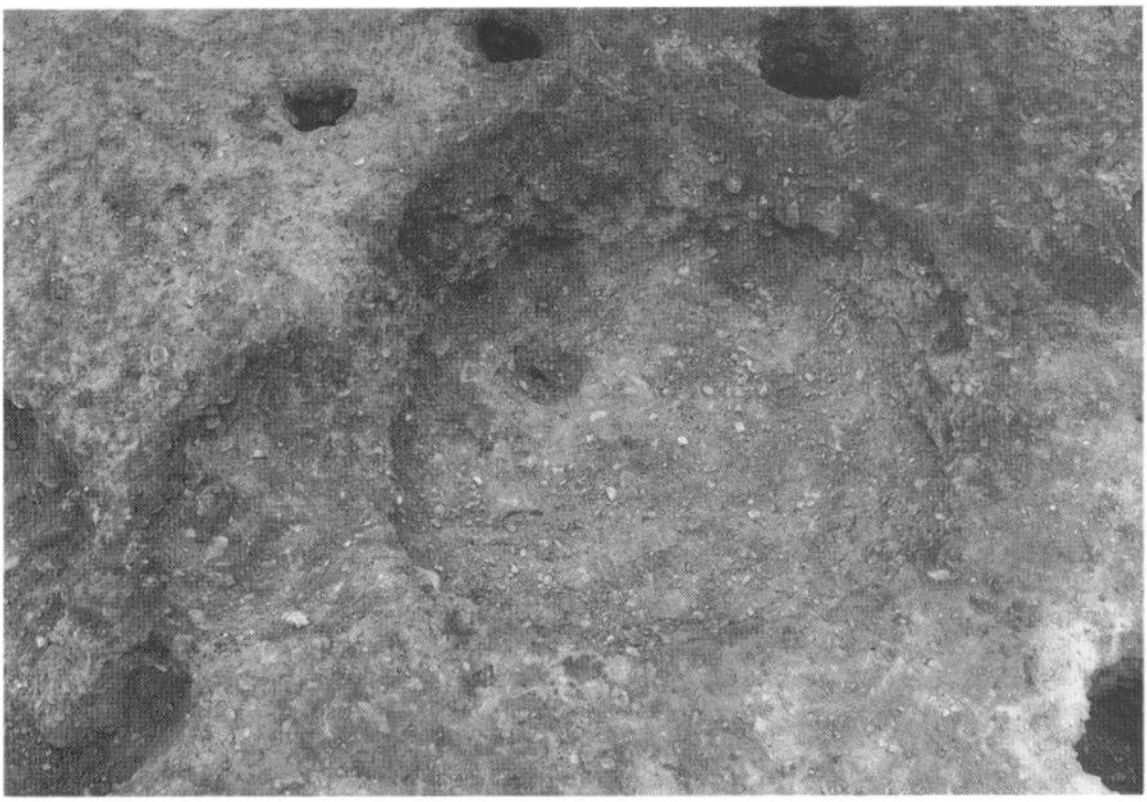



2　88・89号貯蔵穴・15号土壙（南から）

1　90号貯蔵穴（東から）



2　91号貯蔵穴（東から）

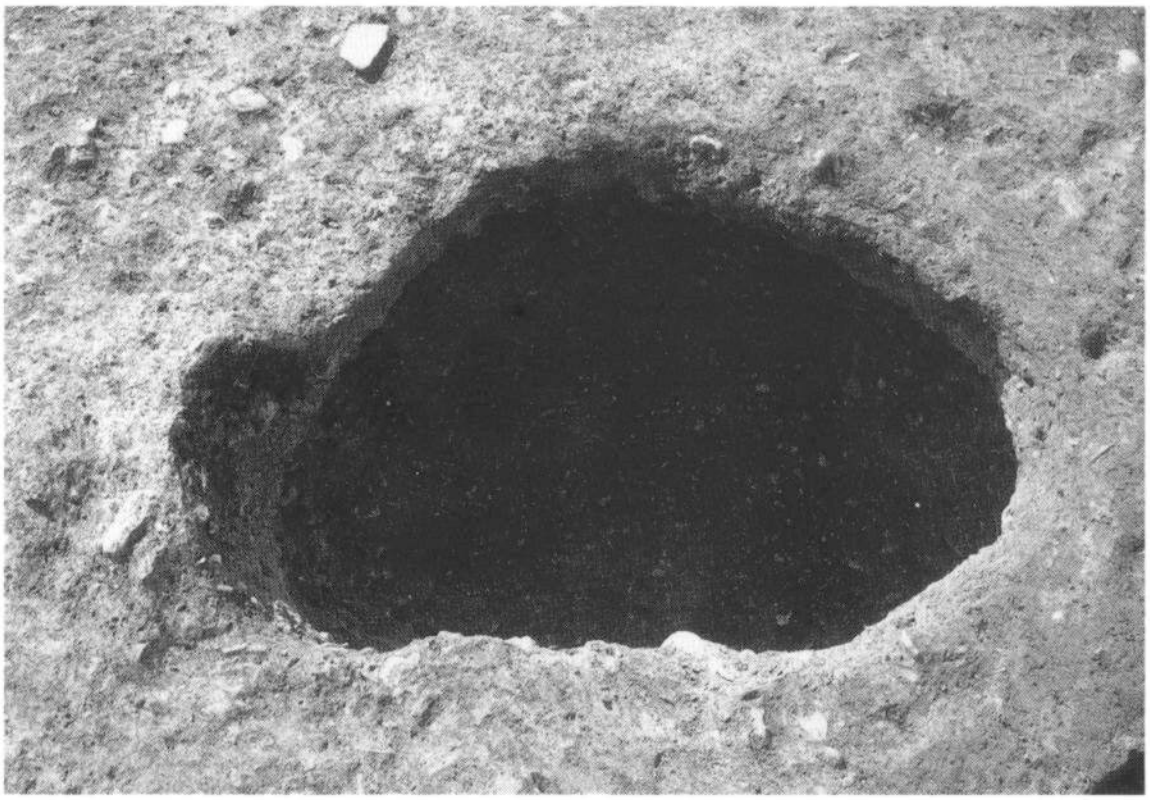


1　93号貯蔵穴（東から）

2　94・95号貯蔵穴（北から）

1　96号貯蔵穴（北から）

2　97・98号貯蔵穴（北から）

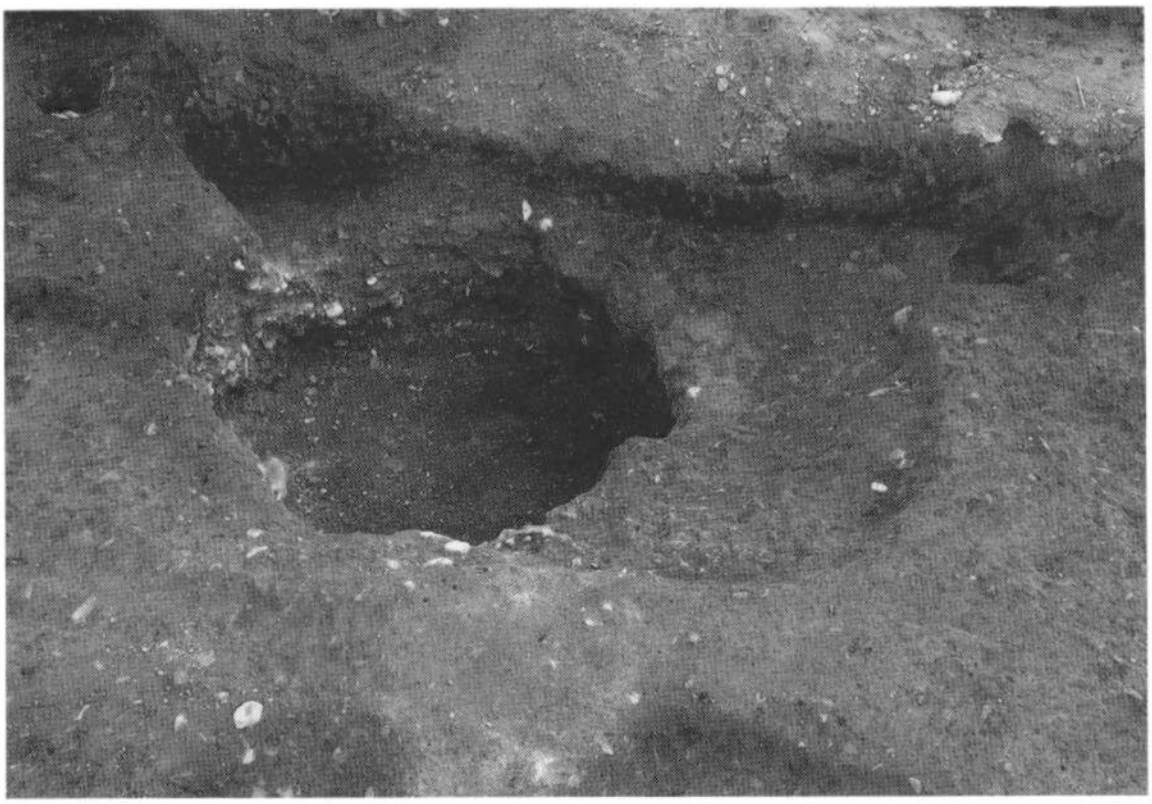


1　99号貯蔵穴（北から）

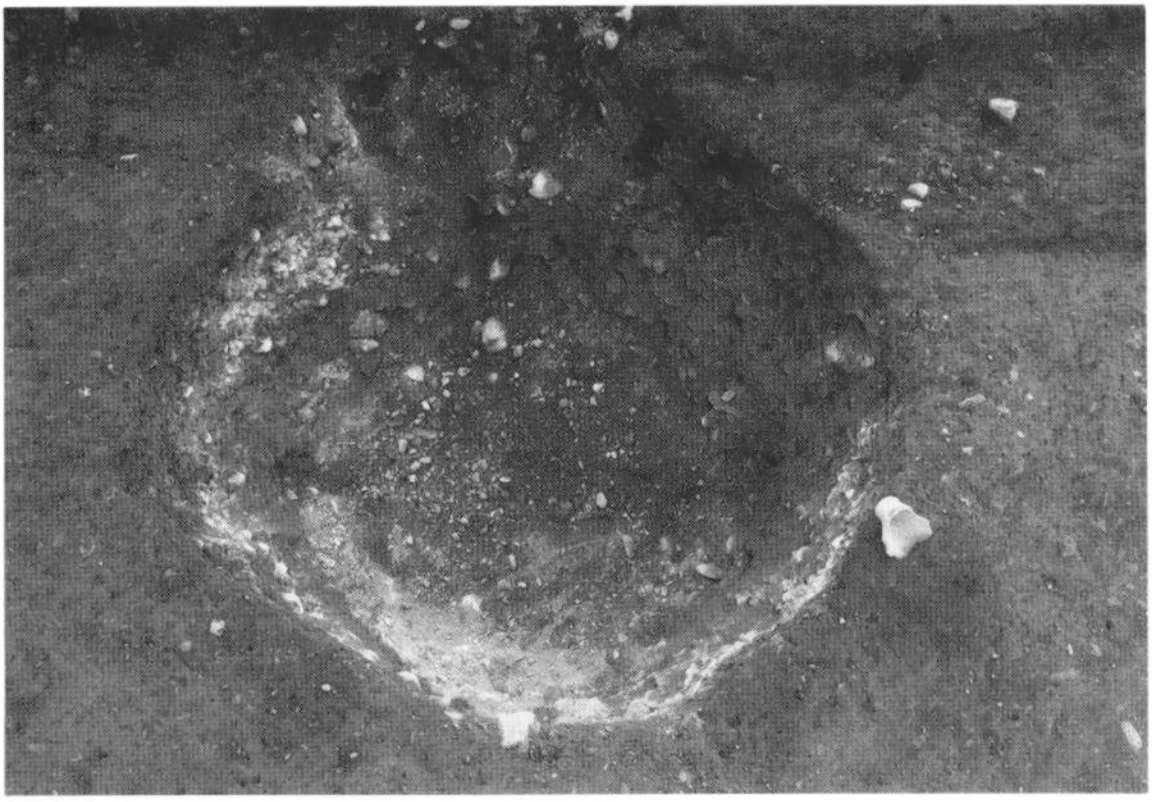
2　100号貯蔵穴（東から）

1　101～104号貯蔵穴群（東から）

2　101号貯蔵穴（南から）



1　106号貯蔵穴（北東から）



2　107号貯蔵穴（北東から）

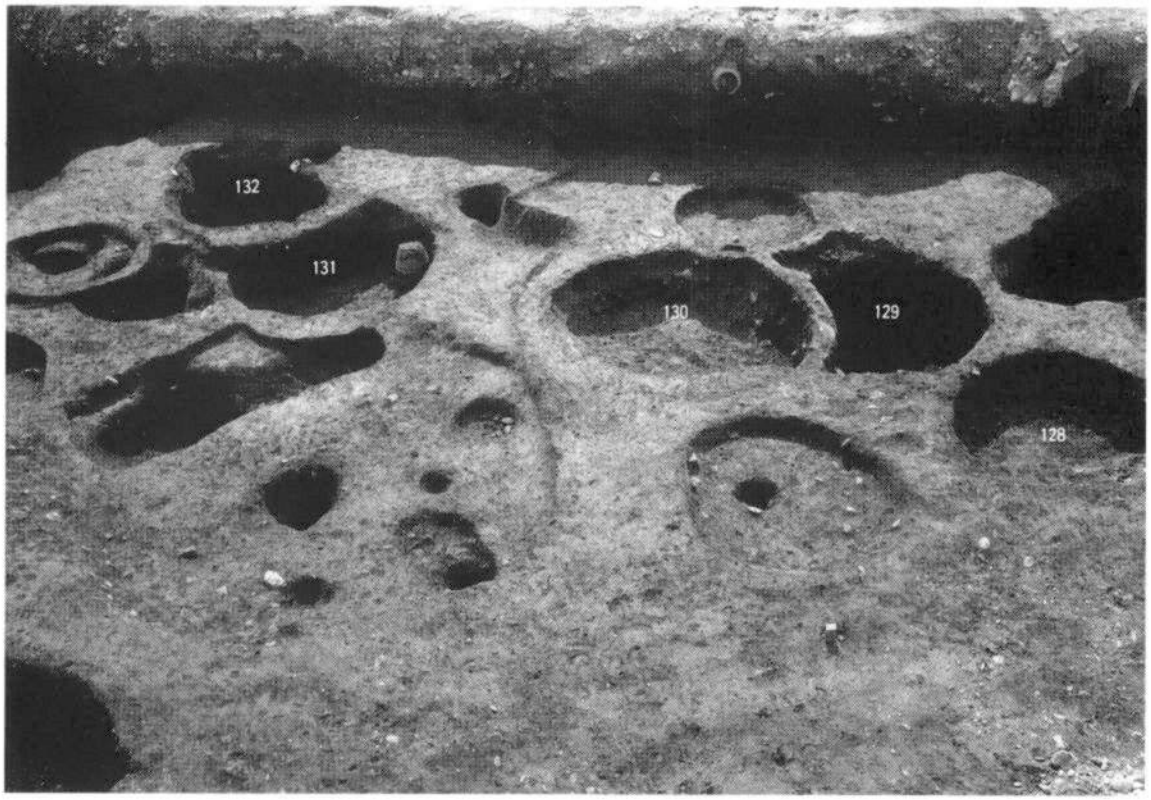
1　108号貯蔵穴（北から）

2　113号貯蔵穴（北から）

図版 38

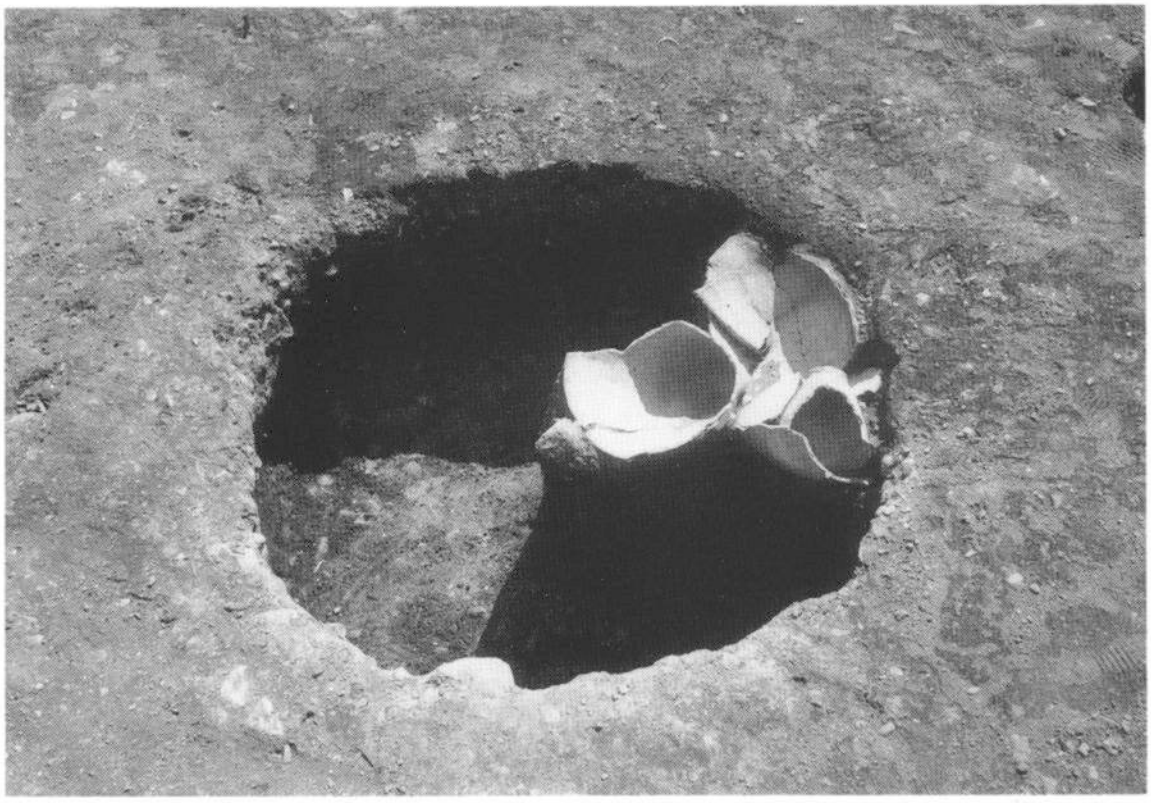
110～133号貯蔵穴群全景（北西から）

1　123～125号貯蔵穴群と190号住居跡（東から）




2　128～132号貯蔵穴群（北東から）

1　138号貯蔵穴（南から）



2　139号貯蔵穴（北から）

13

14

15

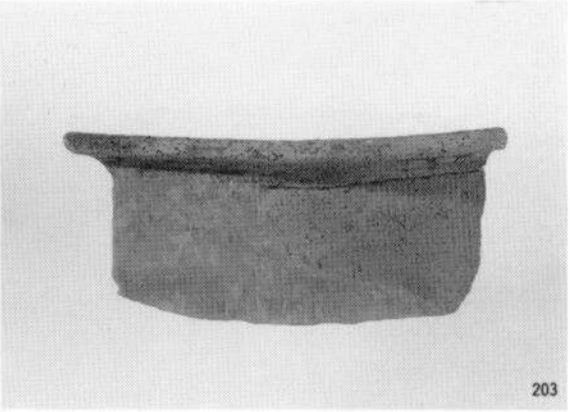
50

87

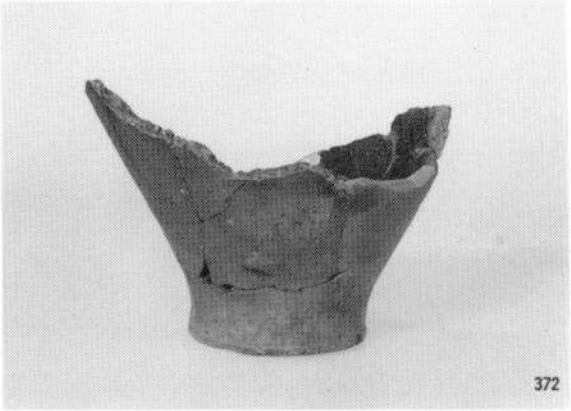
161

163

176


203

貯蔵穴出土土器(1)



貯蔵穴出土土器(2)

462

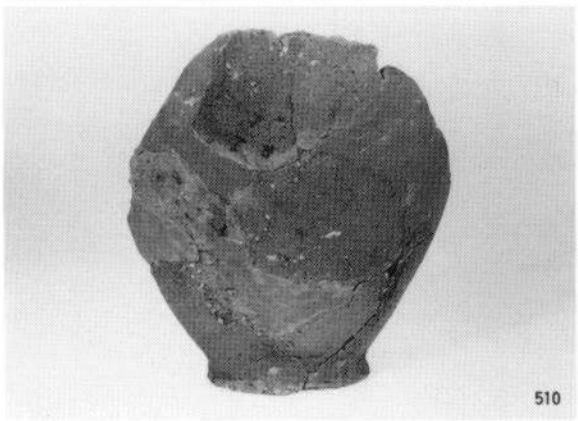
471

472

504

505

509


510

530

貯蔵穴出土土器3)

556

567

557

568

558

598

559

622

623

644

633

665

634

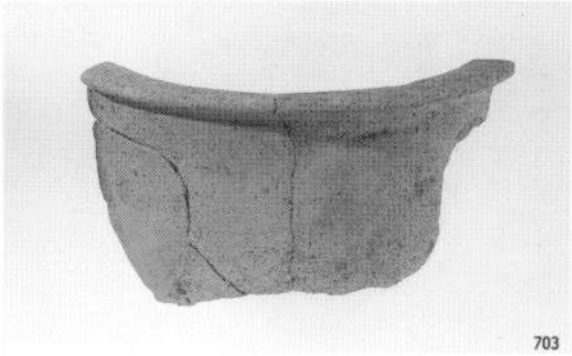
669

642

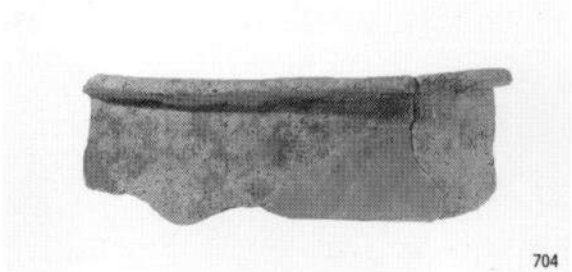
685

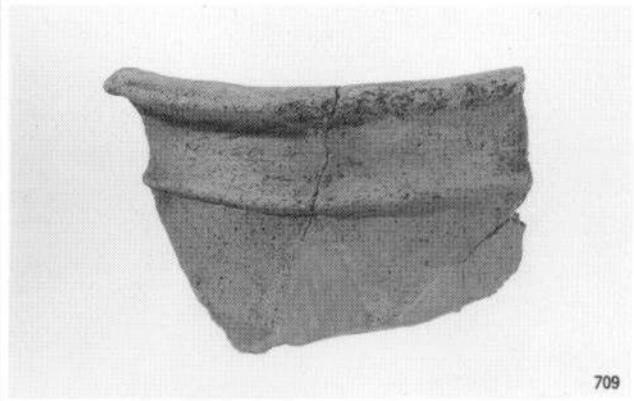
貯蔵穴出土土器5)

687


703

686


704


709

690

738

740

貯蔵穴出土土器(6)

741

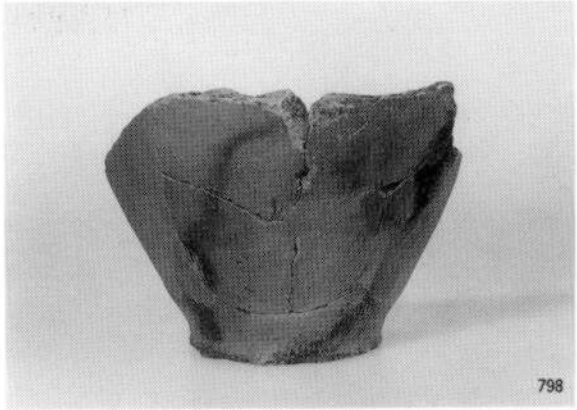
817

771

825

779

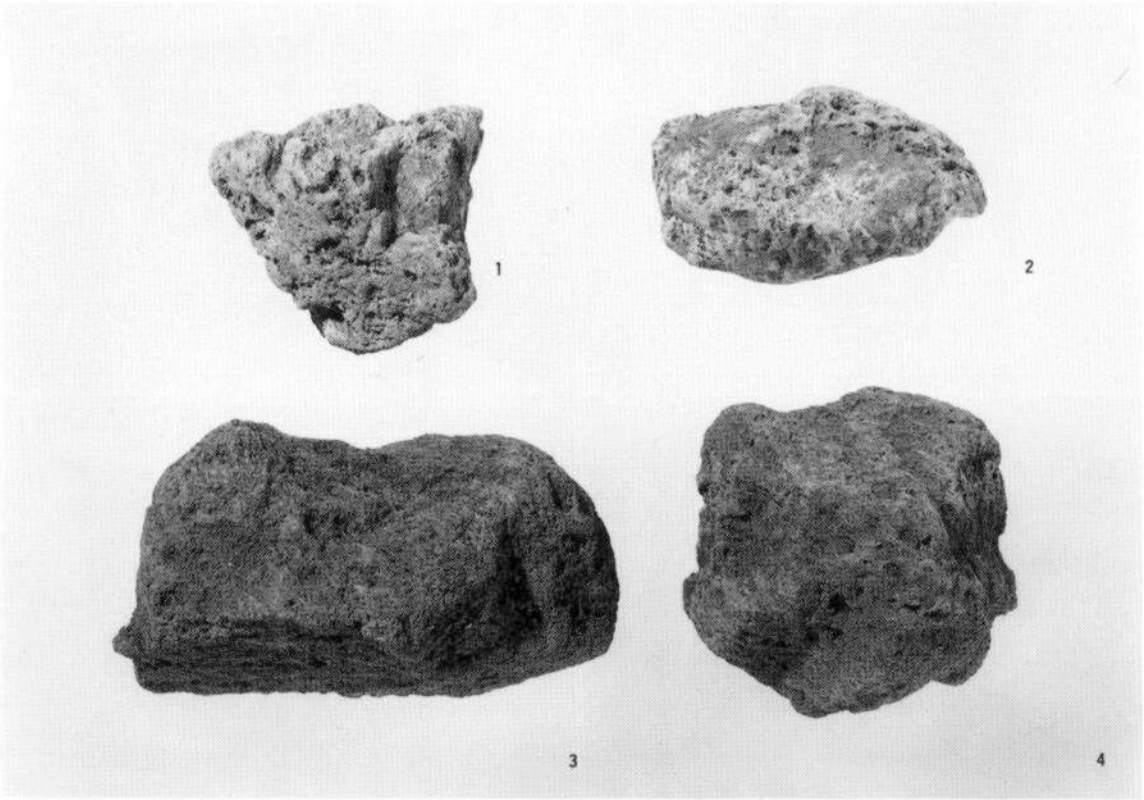
831


798

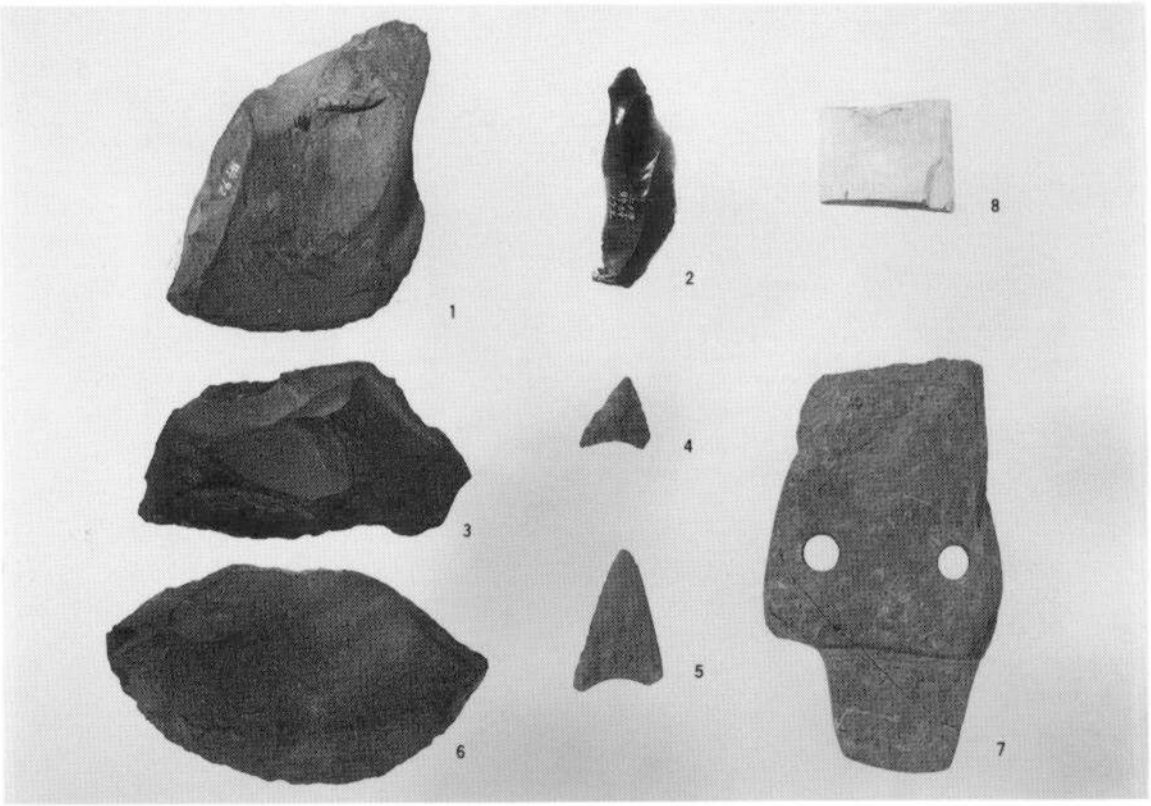
832

貯蔵穴出土土器(7)

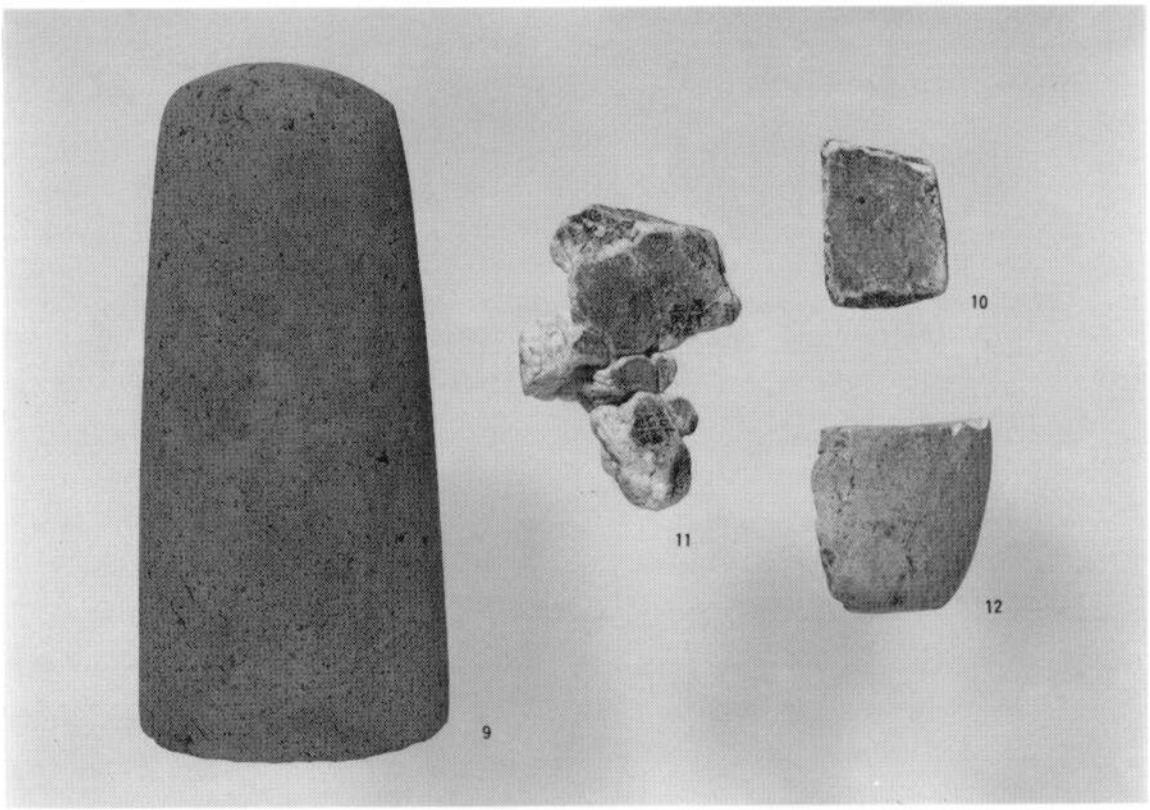
1　貯蔵穴出土土器(8)



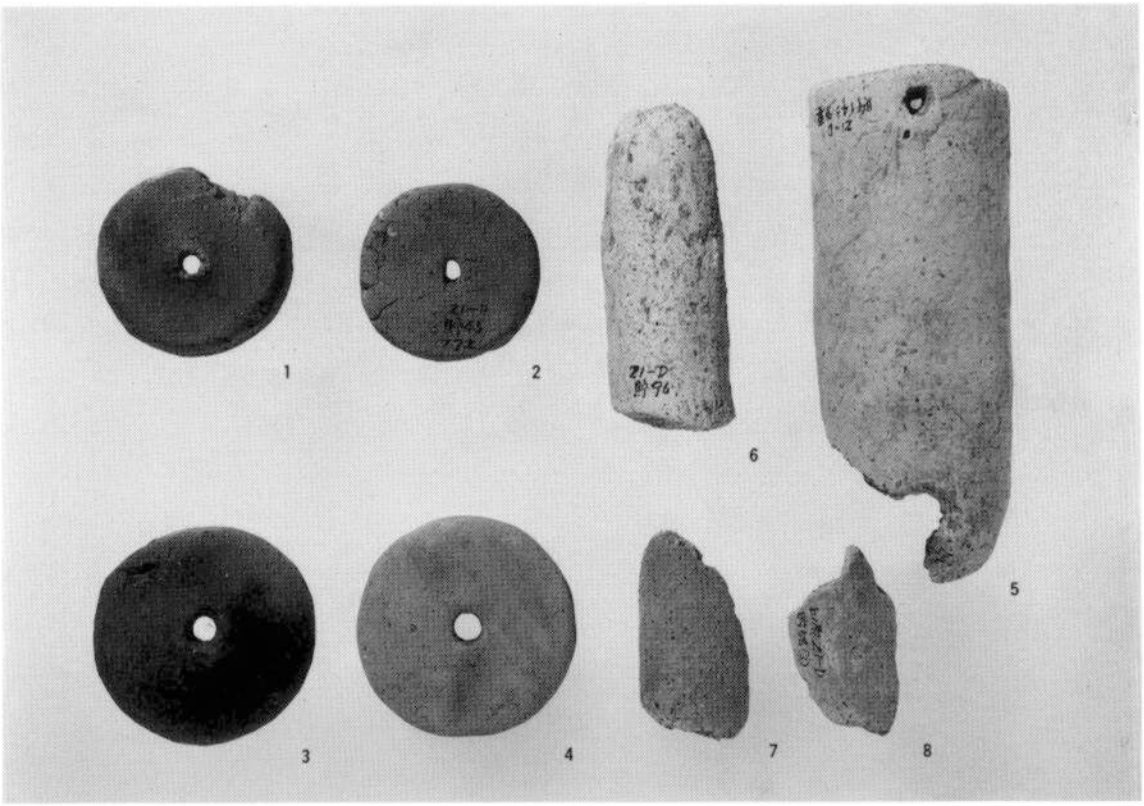

2　貯蔵穴出土軽石



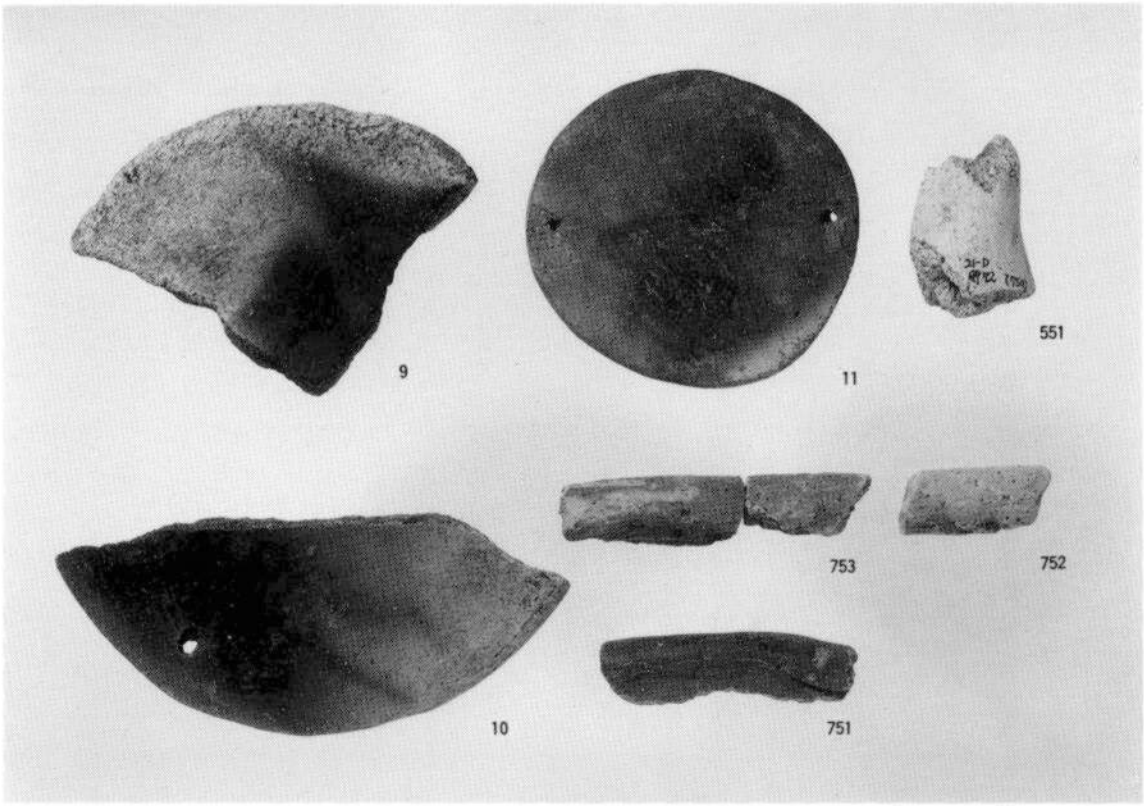

1　貯蔵穴出土石器(1)



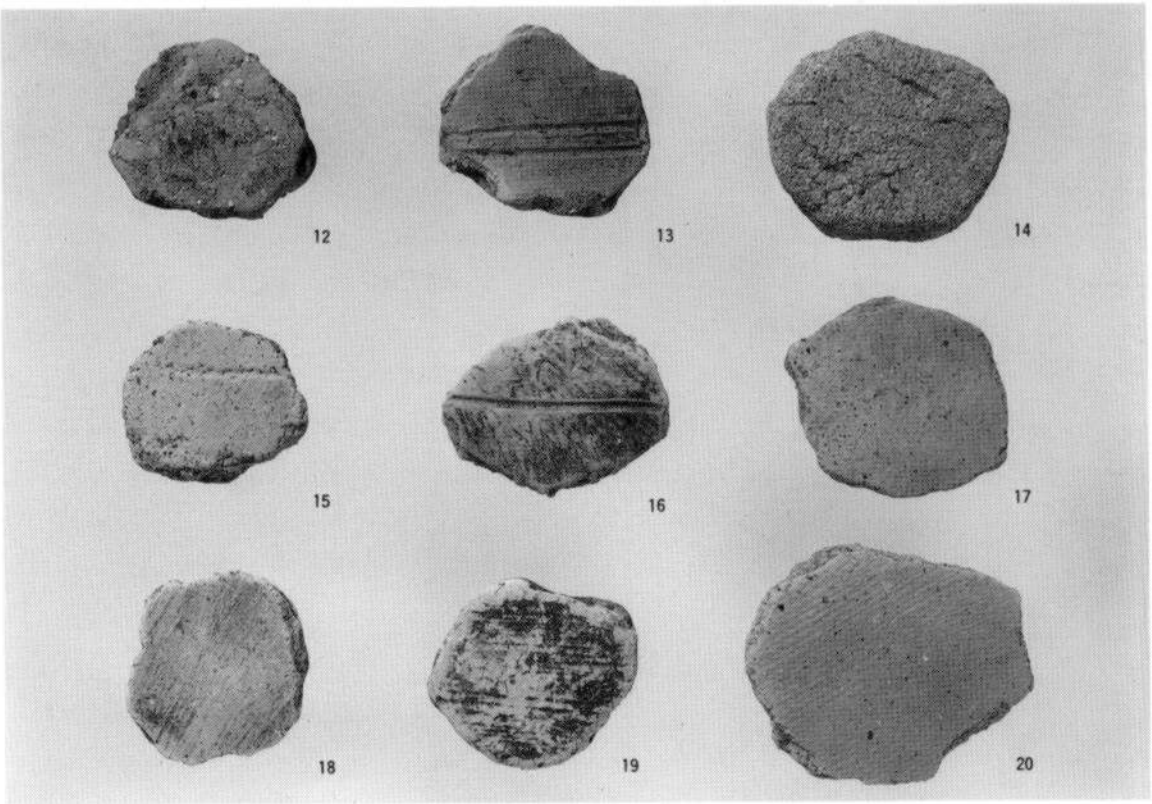

2　貯蔵穴出土石器(2)



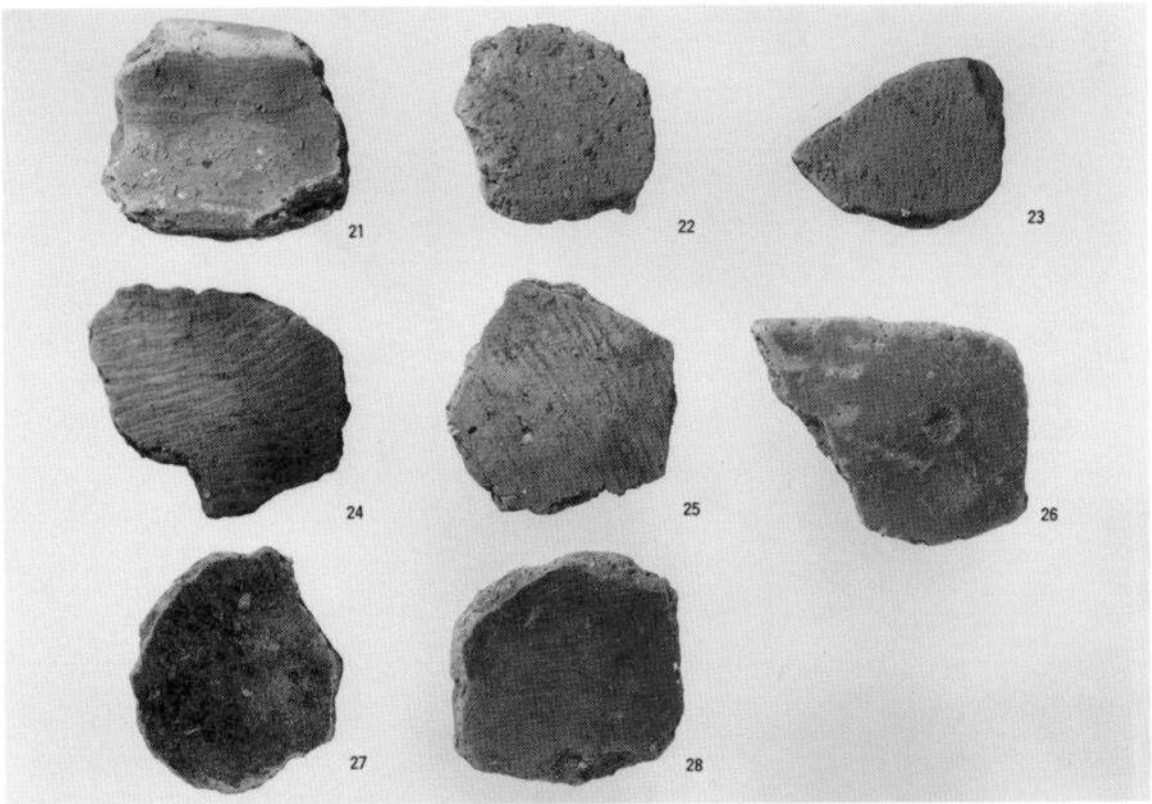

1　貯蔵穴出土土製品(1)



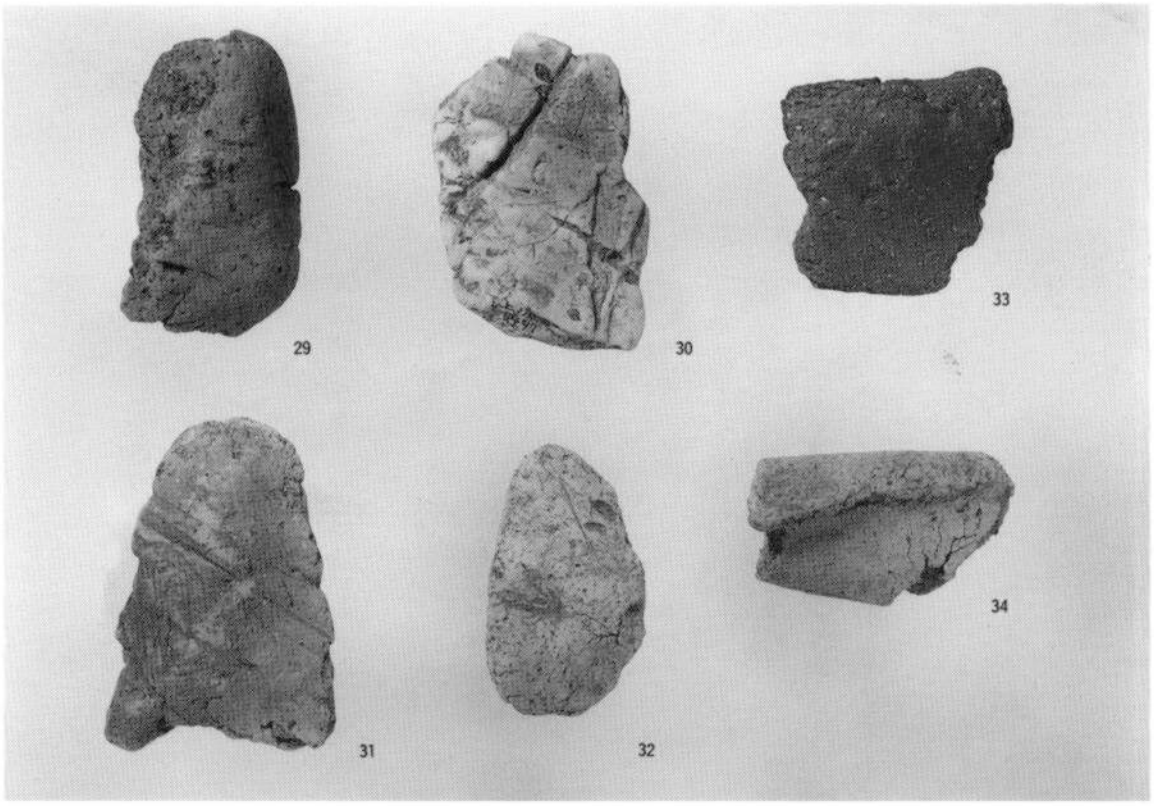

2　貯蔵穴出土土器(9)



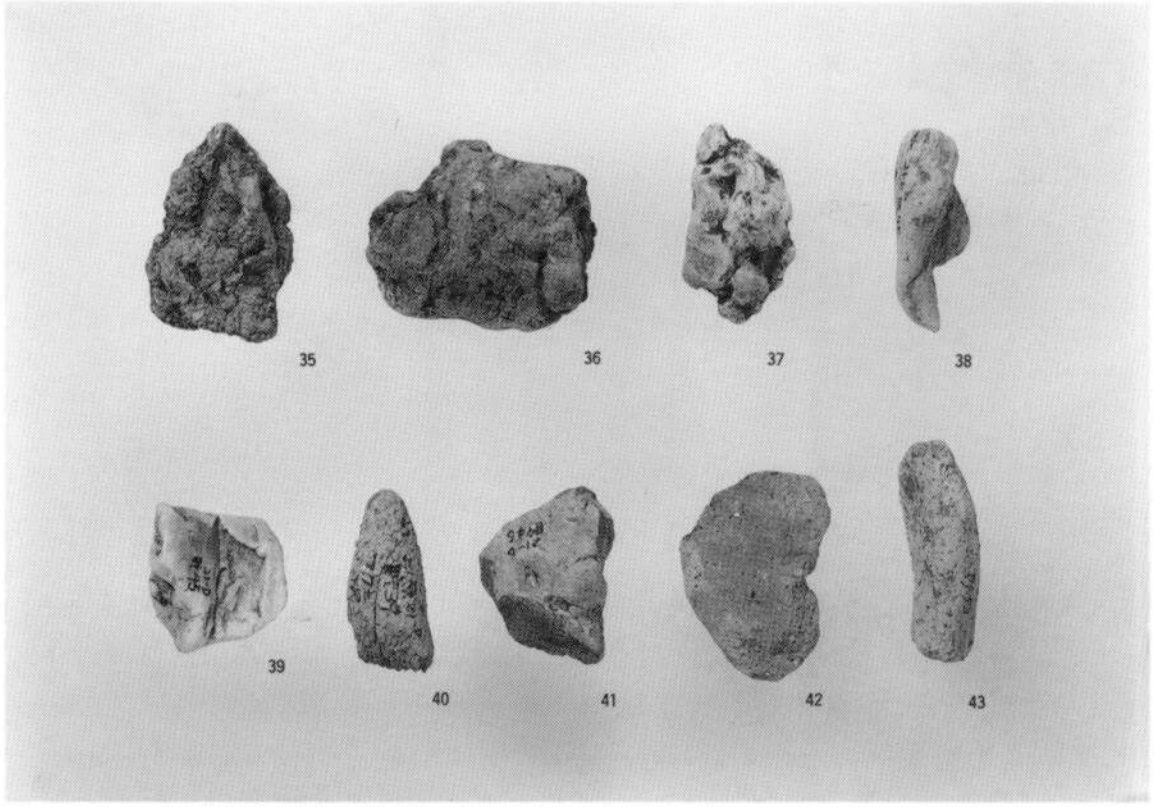

1　貯蔵穴出土土製品(2)



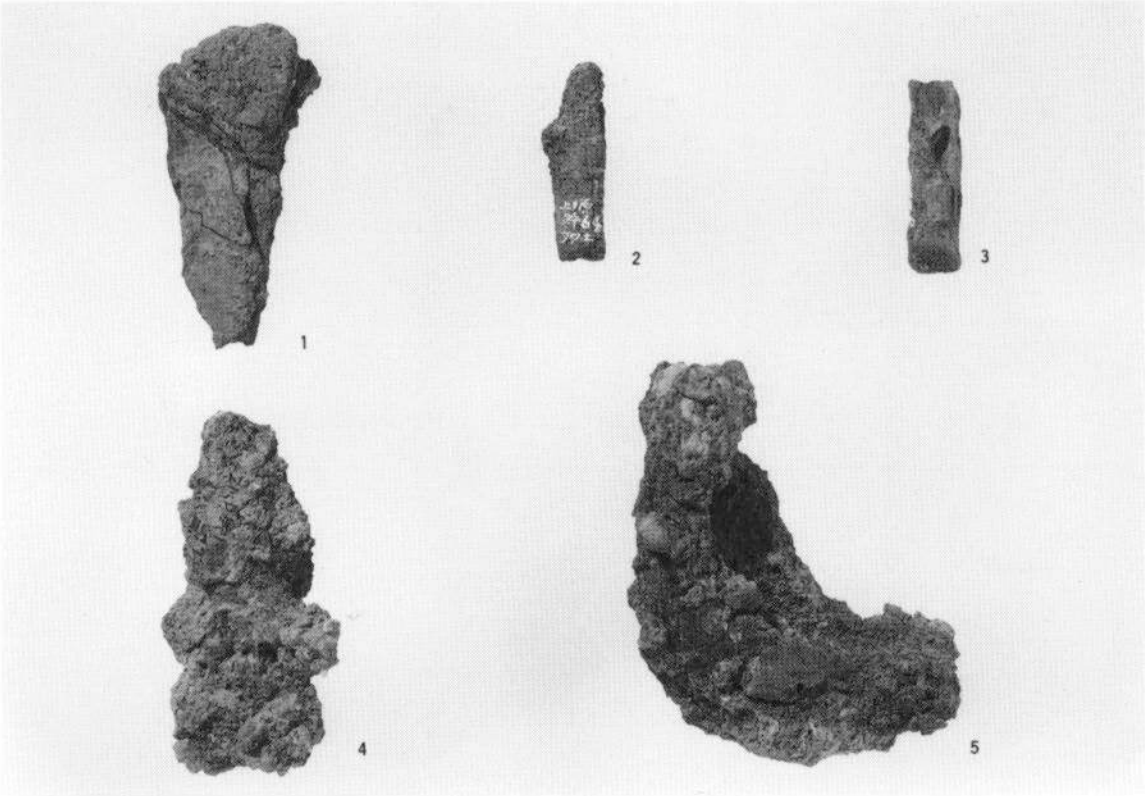

2　貯蔵穴出土土製品(3)



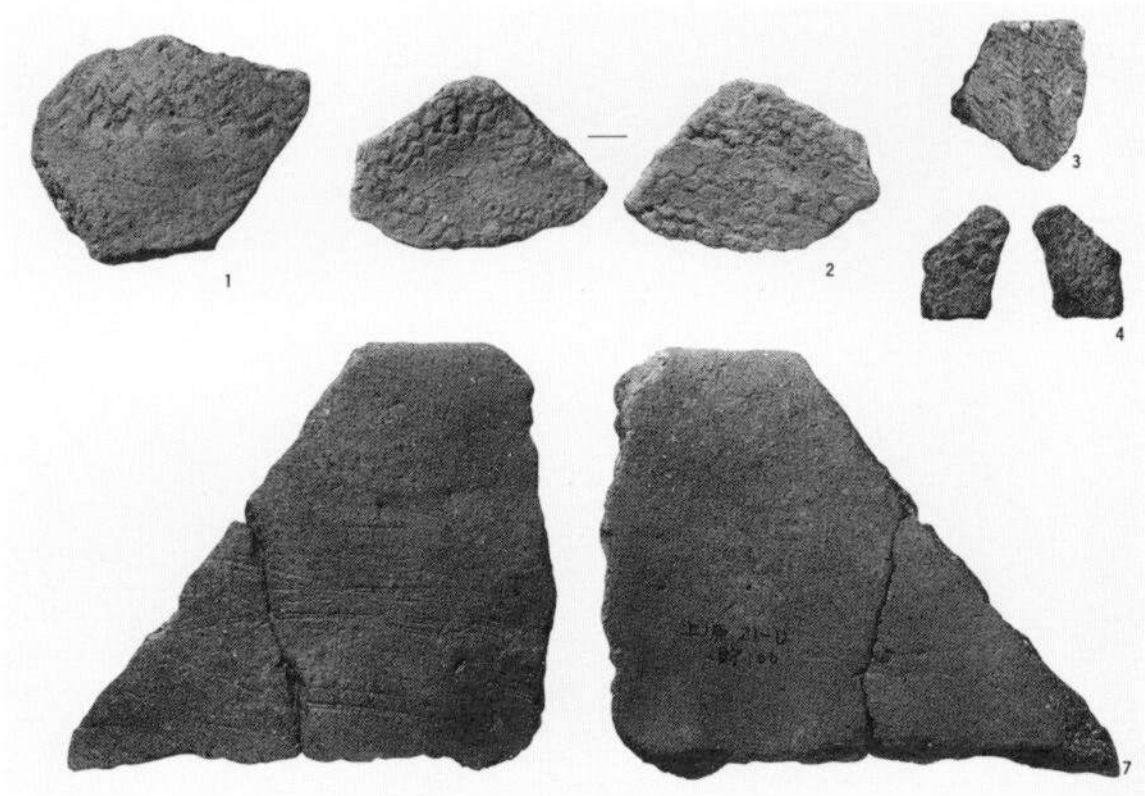

1　貯蔵穴出土土製品(4)




2　貯蔵穴出土土製品(5)




1　貯蔵穴出土鉄器




2　縄文土器

| 福岡県行政資料 | |
|---|---|
| 分類番号<br>ＪＨ | 所属コード<br>２１３３０５１ |
| 登録年度<br>2 | 登録番号<br>6 |

**九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告**—18—

平成２年３月31日

発行　福岡県教育委員会

福岡市博多区東公園７番７号

印刷　正光印刷株式会社

福岡市西区周船寺３丁目28-1

# 九州横断自動車道関係
# 埋蔵文化財調査報告書

—18—

付　　図

1 9 9 0

福 岡 県 教 育 委 員 会

付　図　上の原遺跡遺構配置図(1/200)